

<sup>め</sup>女 <sup>いけ</sup>池 <sup>い</sup>遺 <sup>せき</sup>跡 II

(A 地 点 の 調 査)

2004

埼玉県児玉町遺跡調査会



女堀川中流域の様子（1984年頃）



女池遺跡 A 地点周辺航空写真（1995年頃）



第11号住居跡（縄文時代後期）



第13号土壇及び出土遺物（縄文時代後期）



第 9 号住居跡（古墳時代後期）



第 1 号竪穴状遺構（古墳時代後期）

## 序

埼玉県北部に位置する児玉町は、南北方向が最長約14.5km、東西方向が最長約7kmの概ね南北に細長い形をしています。この町域の南側半分は、上武山地から連なる標高530mの陣見山や549mの不動山をはじめとする山々が占め、北側半分はこの山地から延びる児玉丘陵や松久丘陵と、女堀川の両側に沿って帯状に広がる水田部を主体とした穀倉地帯の沖積低地が開けています。

このように、背後に豊富な山林資源をもち、前面には肥沃な沖積低地を有する豊かな自然環境の中で、当地には太古の昔より多くの人々が定住や移住を繰り返しながら風土に適応した生活を営んでいたようで、その先人たちの生活の痕跡でもある埋蔵文化財は、現在までのところ町内で300箇所以上もの包蔵地が確認されています。この先人たちの様々な生活の様子を知るためには、古文書や絵図などの当時の事を直接的あるいは間接的に記録した資料も重要ですが、これらの資料で現在まで残っているものは極めて少ないため、有史以前はもちろんのこと有史以後の時代においても、今も地中に埋もれて残っている埋蔵文化財の調査に期待されるところが極めて大きいのです。しかしながらこの埋蔵文化財は、土地に刻まれた文化財であるため、一度破壊してしまうと二度と元に戻すことができません。そのため、やむを得ず破壊しなければならない場合には、事前に発掘調査を実施して記録をとり、現代に生きる我々だけでなく、我々の子孫でもある後世の人々のためにも、その記録を残し伝えていかなければならないのです。

本書は、平成7年にアパート建設に伴う事前の記録保存を目的として発掘調査を実施した児玉町大字吉田林に所在する女池遺跡A地点の調査の成果を記したものです。調査地点からは縄文時代後期と古墳時代後期の竪穴式住居跡など当時の村の一部を構成する多くの遺構と遺物が検出されましたが、特に縄文時代の敷石住居跡や古墳時代の細長い工房的な住居跡などは、当地域では類例が非常に少なく、貴重な発見として注目されています。

最後に発掘調査から本書刊行にあたり、郷土の文化財保護に対して深いご理解と多大なご協力を賜りました池田儀平次氏と池田稔氏をはじめ、ご教示やご尽力をいただいた関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成16年3月10日

児玉町遺跡調査会  
会長 雉岡 茂

## 例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字吉田林字女池97番地1に所在する女池遺跡A地点の発掘調査報告書である。
2. 女池遺跡の発掘調査報告書は、すでに児玉町教育委員会によって、B地点とD地点の報告書(恋河内2001)が刊行されている。そのため、本報告書は女池遺跡の第2冊目の報告書となるため、『女池遺跡II』とした。
3. 発掘調査は、アパート建設に伴う事前の記録保存を目的として実施したもので、調査期間は平成7年6月12日～9月14日の約3ヶ月である。
4. 発掘調査は、児玉町遺跡調査会が実施し、その調査担当には恋河内昭彦があたった。
5. 発掘調査から本書刊行に要した経費は、すべて委託者が負担した。
6. 本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。
7. 出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。  
A－法量、B－成形、C－整形・調整手法、D－胎土、E－色調、F－残存度、G－出土層位、H－備考
8. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1・2万5千分の1、児玉町役場発行の2千5百分の1である。
9. 本書の第5図と第6図中に記載したXY座標の数値は、測量法の改正に伴って世界測地系の新座標に変換した数値で、括弧内の数値は発掘調査当時の日本測地系による旧座標値である。
10. 抄録中の北緯と東経の数値は、発掘調査当時の日本測地系による旧座標値を世界測地系に変換したものである。
11. 本書に掲載した写真は、遺構を恋河内が、遺物は主に増田久江が撮影した。
12. 発掘調査及び本書刊行のための整理作業には下記の者が参加した。  
青木 フク、朝川 マツ、飯島 満江、磐上 クラ、内田 ナカ、生形 サト、梅沢トモ子、小賀野フジ、久米とし子、小島 森平、鈴木 利一、桜沢マツエ、関根喜久子、関根 トヨ、関根 ヨシ、戸沢ミチ子、中 よし江、中島 トミ、中里 広子、野本キクエ、野本ミチ子、本田 トラ、増田 久江、山田 松枝、渡辺 裕子、
13. 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の方々や機関からご教示やご協力を賜った。記して感謝いたします。  
赤熊 浩一、荒川 正夫、池田儀平次、池田 稔、伊丹 徹、岩瀬 譲、太田 博之、小川 卓也、金子 彰男、加部 二生、小林 修、小林 康幸、昆 彭生、坂本 和俊、篠崎 潔、須田 英一、外尾 常人、瀧瀬 芳之、田村 誠、富田 和夫、中沢 良一、長瀧 歳康、中村 倉司、坂野 和信、福田 聖、堀口 幸則、増田 一裕、町田奈緒子、松本 完、丸山 修、矢内 勲、山本 靖、  
埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、早稲田大学本庄考古資料館、

# 目 次

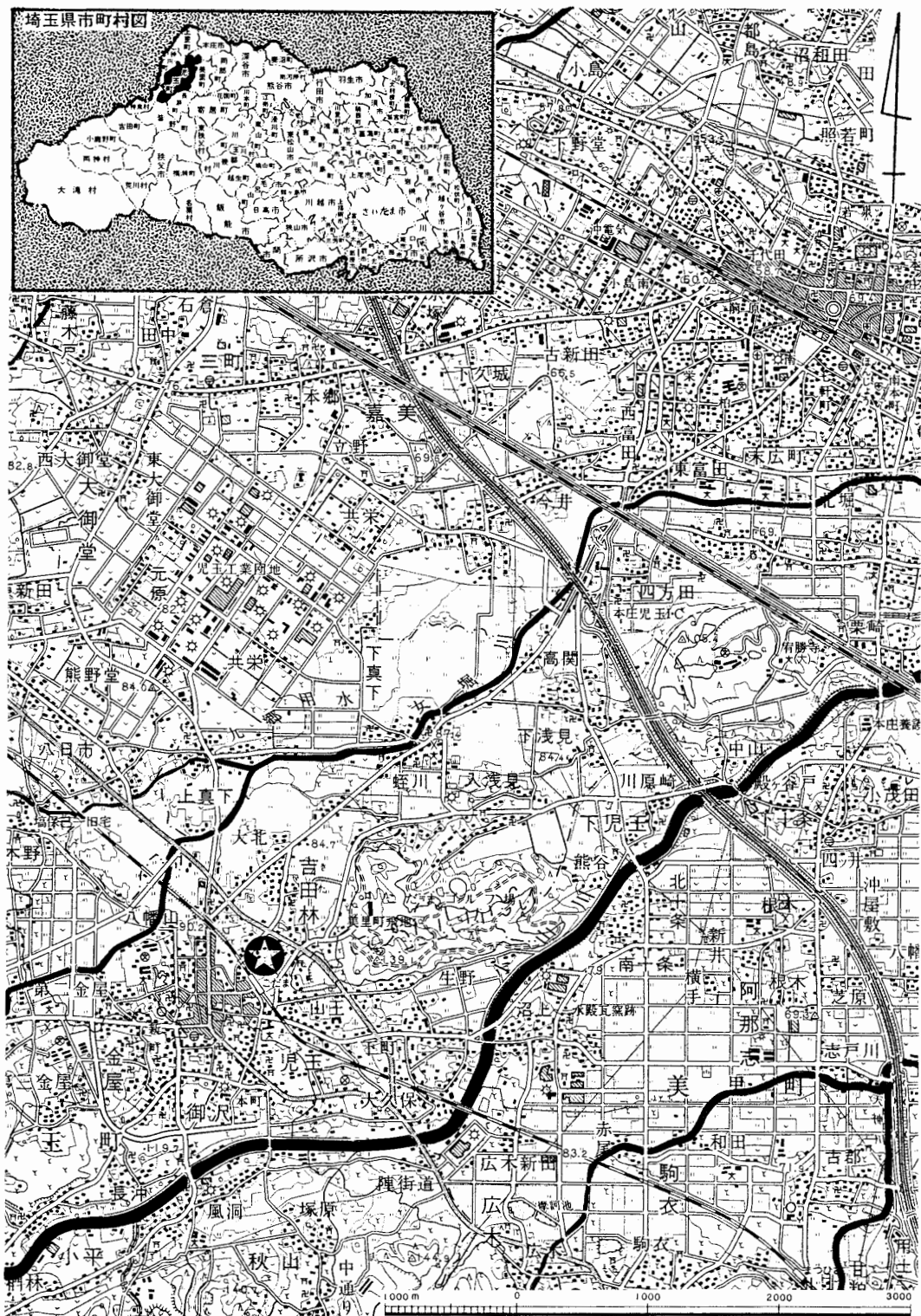
序

例 言

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章	遺跡の概要	7
第Ⅳ章	検出された遺構と遺物	9
	1. 竪穴式住居跡	9
	2. 掘立柱建物跡	54
	3. 井戸跡	60
	4. 窯状遺構	63
	5. 竪穴状遺構	65
	6. 土 壙	70
	7. 溝 跡	91
	8. ピット出土遺物	99
第Ⅴ章	ま と め —古墳時代後期の遺物と遺構—	101
	1. 出土土器の様相	101
	2. 小形坏について	108
	3. 集 落 の 様 相	115
《参考文献》		116

写真図版





第1図 女池遺跡位置図

## I. 発掘調査に至る経緯

平成6年8月19日、児玉町大字吉田林字女池97番地の1に、共同住宅（アパート）の建設を計画している池田儀平次氏より、同開発予定地内の埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会に照会があった。

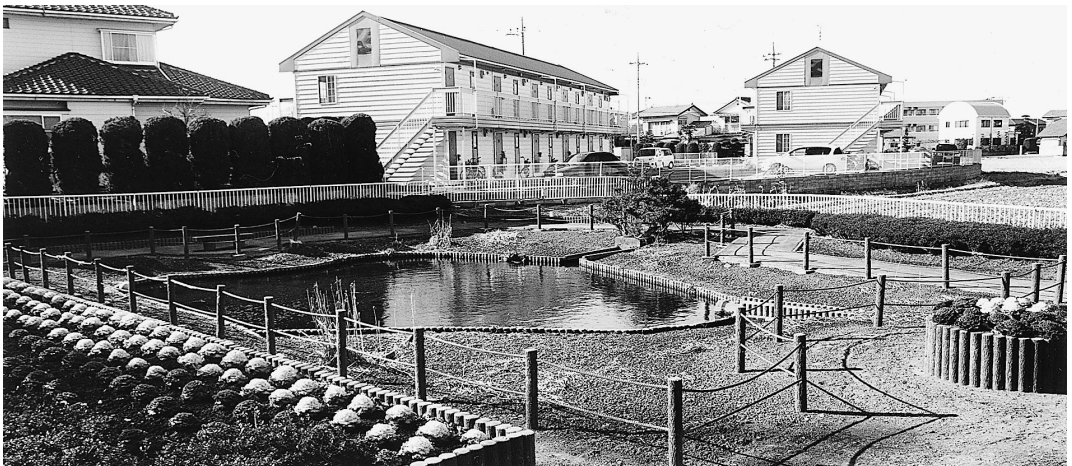
児玉町教育委員会では、照会のあった開発予定地を児玉町の『遺跡分布地図』と照合したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地であるNo54-121遺跡（条里遺跡）の範囲内に位置し、かつNo54-305遺跡（女池遺跡）の隣接地であったため、埋蔵文化財の所在確認については、試掘調査を実施して明確にする必要がある旨を回答した。

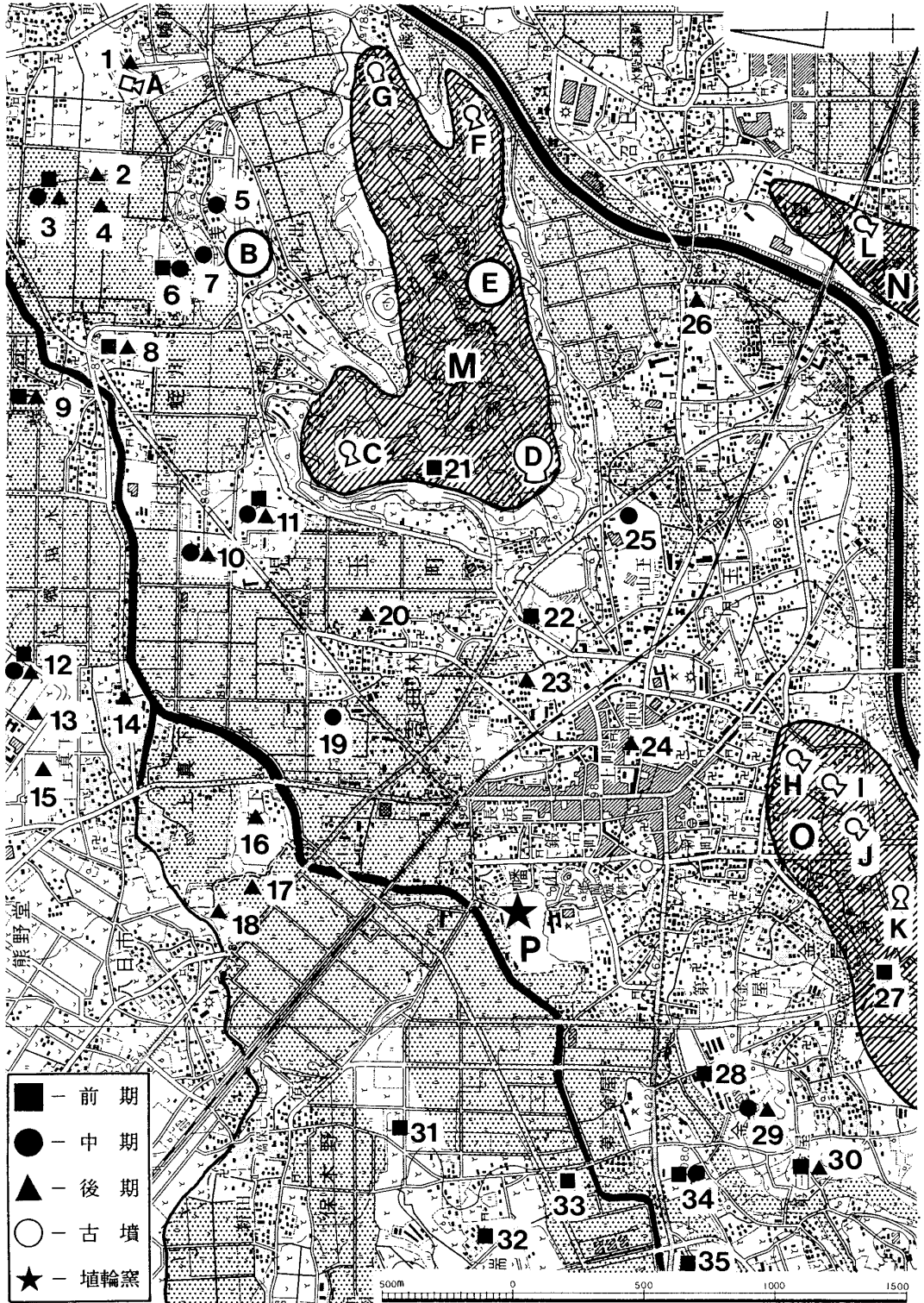
その後、日程の調整を行って8月25日に同地の試掘調査を実施したところ、予定地内のほぼ全域から、縄文時代後期と古墳時代後期の竪穴式住居跡をはじめとする多くの遺構が確認され、同時代の集落跡であるNo54-305遺跡（女池遺跡）が、同予定地内まで広がっていることが明らかになった。この結果、開発予定地は「埋蔵文化財の所在が確認されたところから現状で保存することが望ましい。やむを得ず現状変更工事を実施する場合は、事前に町教育委員会とその保存の措置について協議し、文化財保護法第57条の2の規定により埋蔵文化財発掘届を提出すること」などを、9月21日付け児教社第151号によって回答した。

そして、池田氏と町教育委員会との間で開発予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、共同住宅（アパート）の建設予定のため、現状で保存することが極めて困難であることから、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになった。

発掘調査の実施にあたっては、池田氏と児玉町遺跡調査会との間で、平成7年6月8日に発掘調査に関する委託契約を締結し、同6月12日から現地での発掘調査が実施された。

発掘調査に関わる届出は、平成7年5月8日に児玉町遺跡調査会会長より、「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、同じく池田氏より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出されている。なお、埼玉県教育委員会からは、平成7年6月23日付け教文第2-55号によって発掘調査の指示通知があった。





第2図 周辺の古墳時代遺跡

## Ⅱ. 遺跡の地理的・歴史的環境 —本遺跡周辺の古墳時代遺跡を中心に—

本遺跡は、JR八高線の児玉駅から北側へ約200m離れた標高91m前後を測る低台地の縁辺部に位置している。南西側には町の南側半分を占める上武山地から、八王子—高崎構造線を境にして、北東方向に幾筋も細長く半島状に伸びる児玉丘陵があり、北東側にはその児玉丘陵から分断されて独立した生野山(139m)・鷺山(84m)・大久保山(112m)の残丘が列状に並んでいる。北側には、児玉丘陵と上武山地の境付近より流れ出る女堀川によって形成された沖積低地が開けており、それに向かって細長く伸びる幾つもの小規模な開析谷が低台地内に入り込んでいる。

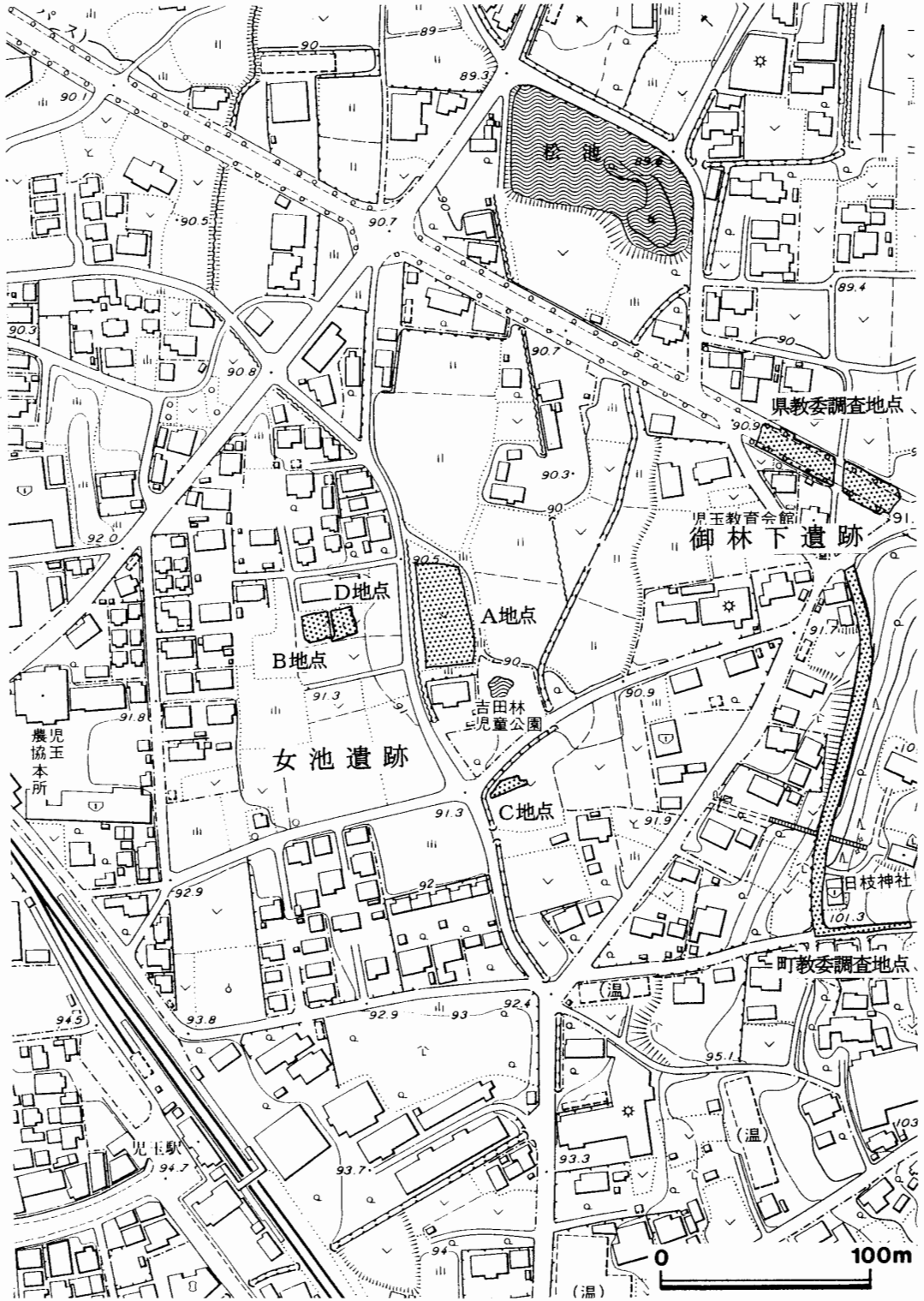
1.	鷺山	南境
2.	浅見	北境
3.	浅見	境
4.	東田	敷
5.	新屋	敷
6.	日延	延
7.	城の	内庭
8.	共和	小学校校庭
9.	左	口
10.	辻	堂
11.	南	道
12.	塚	島
13.	新	宮
14.	上真	下東
15.	辻	内
16.	金	奈
17.	反	町
18.	八荒	神
19.	高	縄
20.	宮	田
21.	生	山
22.	御	林
23.	女	下
24.	仲	池
25.	清	ノ
26.	大	久
27.	長	久
28.	金	池
29.	倉	林
30.	念	仏
31.	十	二
32.	田	中
33.	田	南
34.	枇	杷
35.	塩	下
A.	鷺山	古墳
B.	金鑽	神社古墳
C.	生野山	銚子塚古墳
D.	物見	塚古墳
E.	生野山	將軍塚古墳
F.	生野山	16号墳
G.	熊谷	後1号墳
H.	長沖	31号墳
I.	長沖	32号墳
J.	長沖	25号墳
K.	長沖	79号墳
L.	広木	大町40号墳
M.	生野山	古墳群
N.	広木	大町古墳群
O.	長沖	古墳群
P.	八幡山	埴輪窯跡

立した生野山(139m)・鷺山(84m)・大久保山(112m)の残丘が列状に並んでいる。北側には、児玉丘陵と上武山地の境付近より流れ出る女堀川によって形成された沖積低地が開けており、それに向かって細長く伸びる幾つもの小規模な開析谷が低台地内に入り込んでいる。

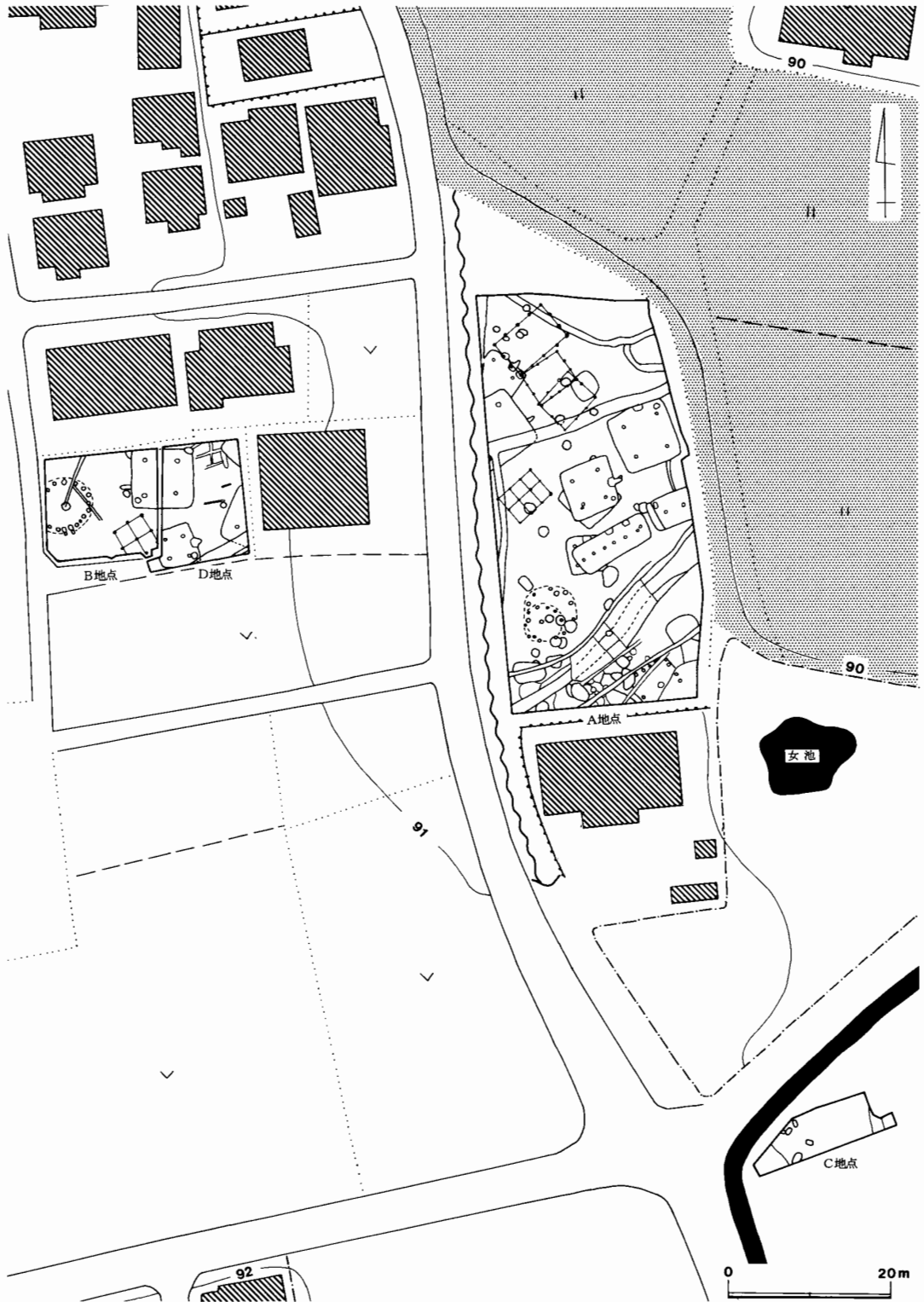
本遺跡が立地する場所は、この女堀川流域の中流域西端付近にあたる。中流域には、北西側の本庄台地縁辺部、低地内の自然堤防や微高地上、南東側の生野山や大久保山などの残丘列上やその斜面下の低台地上を主体に、多くの遺跡が存在している(第2図)。これらの遺跡は、丘陵部を主体とする上流域の遺跡に比べて、概して弥生時代以前の遺跡は少なく、古墳時代前期以降になって低地内への集落の進出が顕著になり、遺跡数が急激に増加する特徴が認められる。

本遺跡周辺の中流域西端付近は、その南側に現在の市街地が広がっているため、古代以前の遺跡の分布については、やや不明確な部分が多い。現在までのところ、古墳時代前期の遺跡は、残丘上の生野山遺跡で小規模な集落と方形周溝墓が検出され、残丘下の低台地上の南街道遺跡(恋河内1996)や御林下遺跡で該期の土器が少量出土しているだけである。中期は、低台地上に比較的規模の大きな集落と推測される辻堂・南街道遺跡が形成され、その東側の微高地上に立地する高縄田遺跡(恋河内1995)では、小規模な集落に接して幅3m深さ1mの直線的な水路が掘られており、本遺跡の周辺でも低地内の開発が積極的に行われていたことが窺える。後期は、前葉段階に低地内に宮田遺跡(恋河内1996)が形成されるが、中葉以降になると本遺跡や辻堂遺跡・南街道遺跡・金佐奈遺跡(徳山1997・98、徳山・大熊1998・99)・反町遺跡(金子1995)・八荒神南遺跡(金子1995)・上真下東遺跡・仲町遺跡などが低地内やその周辺に展開して集落数が増加する。その後、金佐奈遺跡のように7世紀後半以降も継続して営まれる集落も一部に見られるが、低地内に立地する集落の多くは7世紀中頃には廃絶されて、沖積低地を取り囲むようにその縁辺部に移動する現象が見られ、集落の地域的な再編成が行われるようである。

この中流域の残丘上には、前期には前方後方墳の鷺山古墳(坂本1986)、中期には大形円墳の金鑽神社古墳(佐藤1986)、後期には前方後円墳の生野山銚子塚古墳(金子他1975)といった墳丘規模が60m級の首長墓が築造されるが、後期以降になると小円墳が多く作られ群集墳化するようになる。



第3図 女池遺跡調査地点位置図



第4図 女池遺跡A~D地点位置図



第5図 女池遺跡A地点全体図

### Ⅲ. 遺 跡 の 概 要

女池遺跡は、縄文時代中期末～後期前葉と古墳時代後期の集落跡や、中世前半頃の屋敷地を主体とする複合遺跡で、児玉丘陵と生野山残丘の間に広がる標高91m前後の低台地上に立地している。この低台地内には、小規模な開析谷が複雑に入り込み、それらの小支谷の湧水を集めた灌漑用の小さな溜池も以前は複数存在していたが、現在は市街地の拡大によって周辺の宅地化が進行し、それに伴う小規模な造成や埋め立て等による地形の人為的な平坦化が進み、本遺跡周辺の旧地形もかなり不明瞭な状況になりつつある。

本遺跡は、個人宅造やアパート建設に伴って、現在までのところA～D地点の4地点が発掘調査されている(第4図)。この4地点のうち、A・B・Dの3地点は、本遺跡が立地する低台地の北端付近にあたり、溜池の女池がある小支谷を挟んで、東側の御林下遺跡(駒宮1977、利根川1998)と対峙した位置関係にある。各地点とも調査面積が比較的小規模であるため、本遺跡の規模や内容などその具体的な様相については、未だ十分に把握できない状況であるが、これらの4地点からは総数で竪穴式住居跡19軒・掘立柱建物跡5棟・竪穴状遺構1基・窯状遺構3基・井戸跡4基・土壇41基・溝跡22条などの縄文時代から中世にわたる多くの遺構が検出されている。

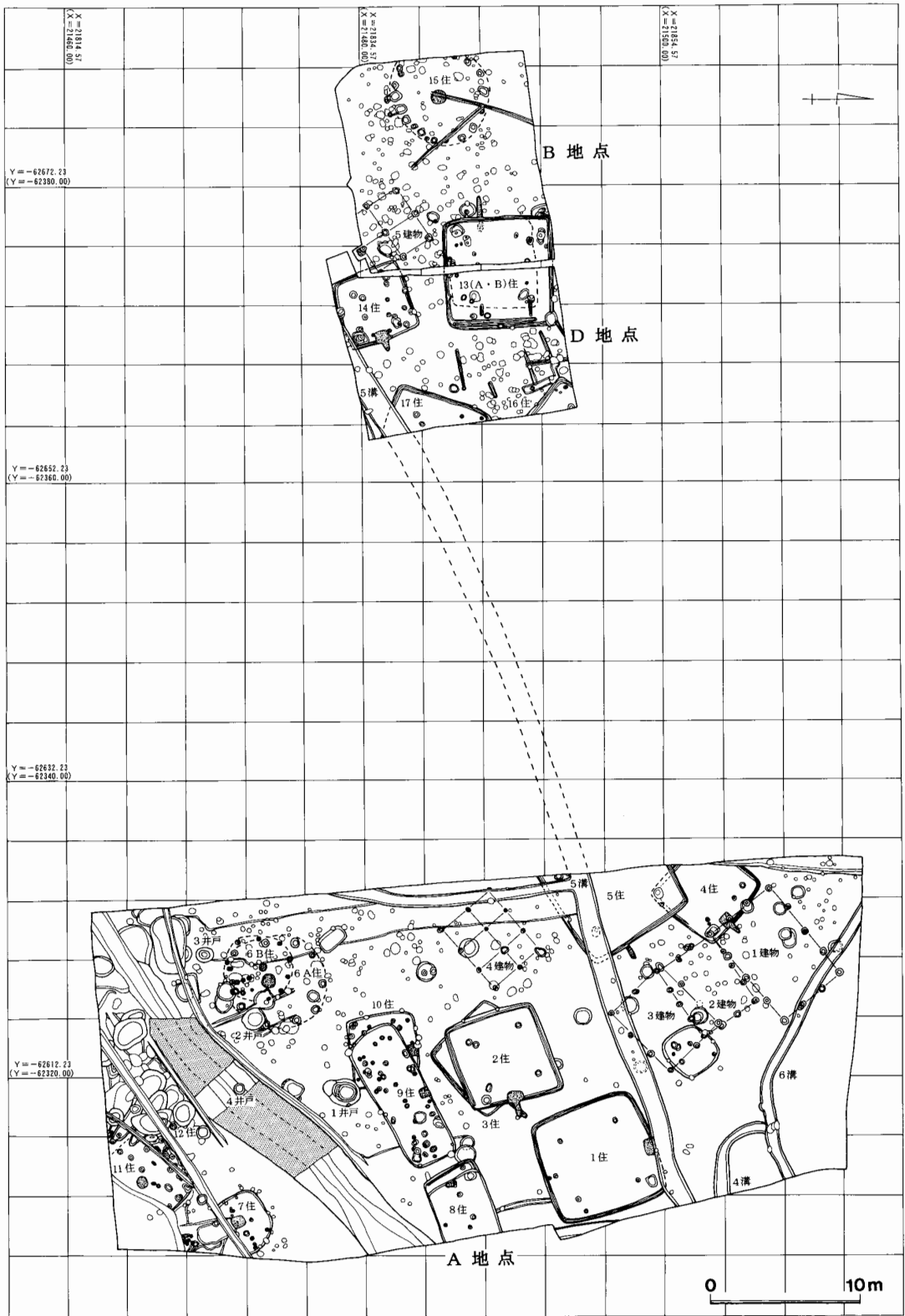
今回報告するA地点は、すでに報告されているB・D地点(恋河内2001)の東側約30mに位置し、低台地の東端部にあたる。東側は溜池の女池のある小支谷に接し、調査区内の南側付近は、谷に向かって傾斜している。A地点で検出された遺構は、竪穴式住居跡14軒・掘立柱建物跡4棟・竪穴状遺構1基・窯状遺構3基・井戸跡4基・土壇36基・溝跡12条である。

縄文時代の遺構は、竪穴式住居跡5軒と土壇16基である。時期は、後期の称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅱ式頃のもの为主体で、B・D地点で見られた中期末の遺構や遺物はあまり顕著ではない。住居跡は、調査区内の南側に集中している。いずれも遺存状態が悪く遺構の全容が分かるものは少ないが、第7号住居跡や第11号住居跡は、住居内の一部に敷石を施したいわゆる「敷石住居」である。土壇は、調査区のほぼ西側半分に分布している。円形のものが大半であるが、隅丸長方形を呈する第13号土壇からは注口土器や筒形土偶が出土しており注目される。

古墳時代の遺構は、竪穴式住居跡9軒・竪穴状遺構1基・窯状遺構3基・土壇17基・溝跡1条である。時期はいずれも後期であるが、住居跡等の多くの遺構同士に重複が見られることから、単一時期ではなくある程度の時間幅をもつ継続的な集落である。A地点の該期集落は、長さ10m弱の工房的形態の住居跡(第8・9号住居跡)や性格不明の窯状遺構と、特異な形態の小形環を主体とした土器の廃棄行為が行われた竪穴状遺構などが検出され、また住居跡の覆土中から少量ながら複数の羽口の破片や鉄滓が出土していることなどから、何だかの工人と関係する集落の一部であることが窺える。

中世の遺構は、掘立柱建物跡4棟・井戸跡4基・土壇1基・溝跡6条である。検出された遺構の割には全体的に遺物が少ないため、明確な時期は不明確ではあるが、15世紀以降の遺物が見られないことからすると、概ね13世紀～14世紀を中心とする時期の屋敷ではないかと思われる。このA地点の西側隣接地は、小字名が中世的地名の「堀之内」であり、在地有力者層の館か屋敷の存在が推測される場所であることから、それと関連する屋敷の可能性もあり注目されよう。





第6図 女池遺跡A・B・D地点位置関係図

## IV. 検出された遺構と遺物

### 1. 竪穴式住居跡

#### 第1号住居跡（第7・8図、図版2）

調査区中央部のやや北東側寄りに位置し、西側には第2号住居跡が、南側には第8号住居跡が近接している。住居跡の北側を第5号溝跡に、南側の一部を第12号溝跡に切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

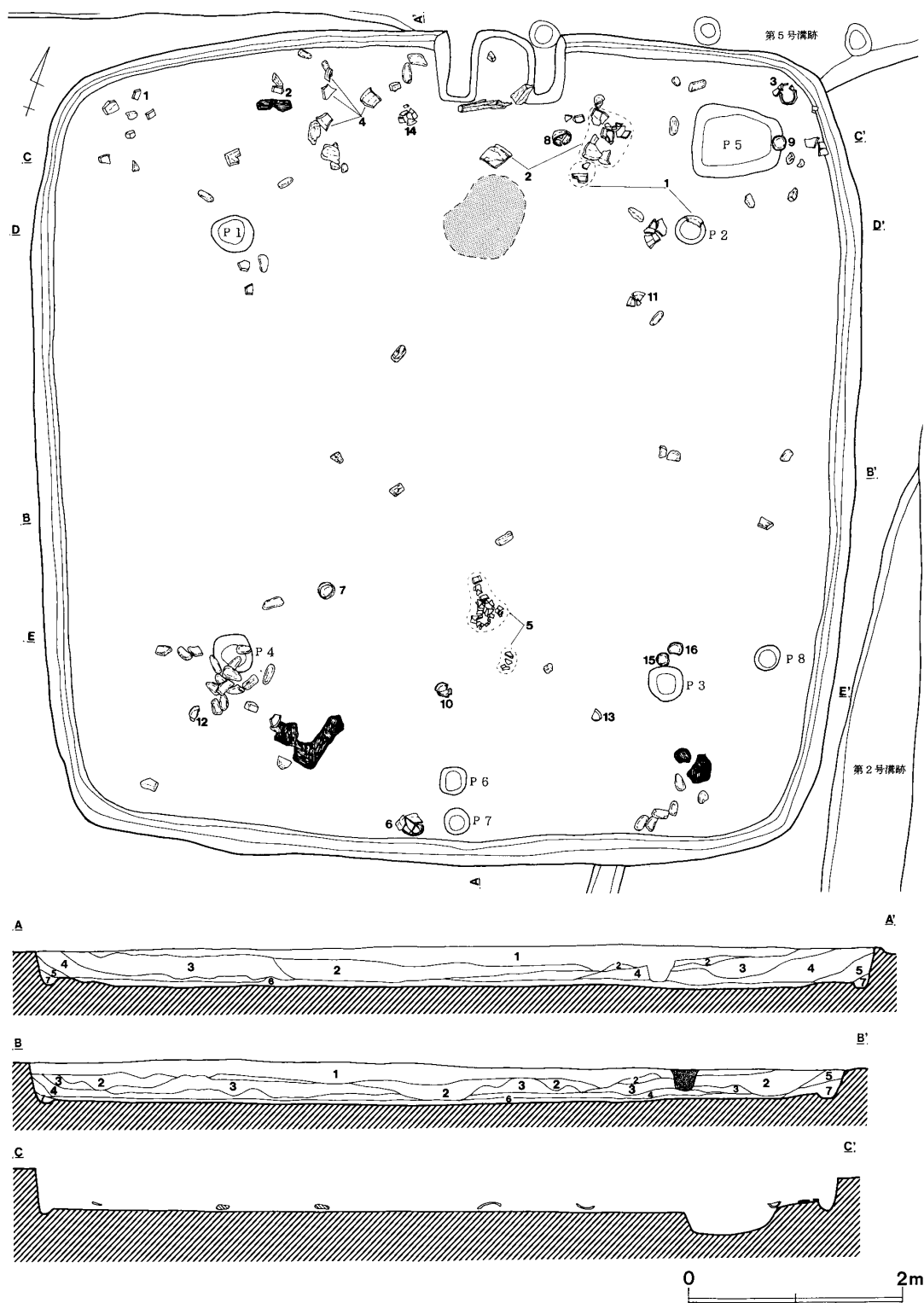
平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈している。規模は、南北方向が7.75m、東西方向は7.66mを測り、本遺跡では同じA地点の第5号住居跡に次ぐ規模で、B・D地点の第13A号住居跡とほぼ同規模である。住居の主軸方位は、N-18°-Wを向いている。

壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは西側壁で最高44cmある。各壁下には、幅10cm～20cm・深さ5cm程度の壁溝が途切れずに全周している。

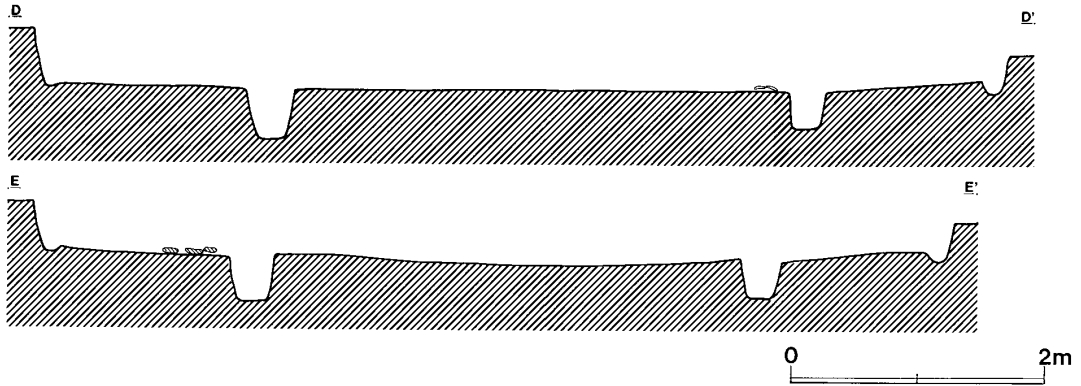
床は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。全体的にやや軟弱で、壁際の住居周辺部に比べて、住居の中央部が若干窪んでいる。また、住居中央部からカマドのある北側に寄った場所（支柱穴P1・P2間）には、火熱によって床面が赤色化した部分が見られる。

ピットは、住居内から8箇所検出されている。P1～P4は、その位置から支柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に配置されている。平面形は、いずれも直径30cm前後の円形を呈し、床面からの深さは30cm～40cmで比較的揃っている。P5は、カマド右側の北東側コーナー部付近に位置し、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。平面形は、やや不整で長方形ぎみの形態を呈し、規模は83cm×68cmある。床面からの深さは25cm程度で比較的浅く、底面は広くやや丸みをもっている。P6とP7は、カマドと反対側の南側壁際中央に縦に並んでおり、その位置からは、入口部の施設に関わるピットの可能性も考えられる。いずれも直径25cm程度の円形を呈し、床面からの深さはP6が5cm、P7が10cmで比較的浅い。P8は、住居南東側の壁際にある。形態は、直径25cm程度の円形を呈し、床面からの深さは13cmある。

カマドは、住居北側壁の中央やや東側寄りの位置に、壁に対して直角に構築されている。すでに天井部は崩壊し、煙道部は削平されており、燃烧部だけが残存している。残存する部分での規模は、全長66cm・最大幅120cmである。袖部は、右側袖が一部後世のピットによって切られているが、左右とも地山ローム土を掘り残して直接袖にしたもので、粘土等の被覆の痕跡は見られない。袖の幅は左右とも最下部で35cm～40cmあり、比較的厚く作られている。右袖の先端部内側には、長さ25cmでやや厚めの片岩が立ててあり、カマド焚口部の補強に使用されていたものと考えられる。また、その横にある長さ50cm・幅10cmの棒状の片岩も、恐らく焚口部の天井の補強に使われていたものと思われる。燃烧部は、全面良く焼けて赤色化しており、中央やや奥の左側寄りの位置に、支脚と考えられる小形の棒状の片岩が1個据えられている。燃烧面（火床）は、カマド構築当初は住居床面とほぼ同じ高さであったが、その後上面に第4層を堆積させて燃烧面を焚口部から煙道部に向かって傾斜させた第3層の2面が形成されている。



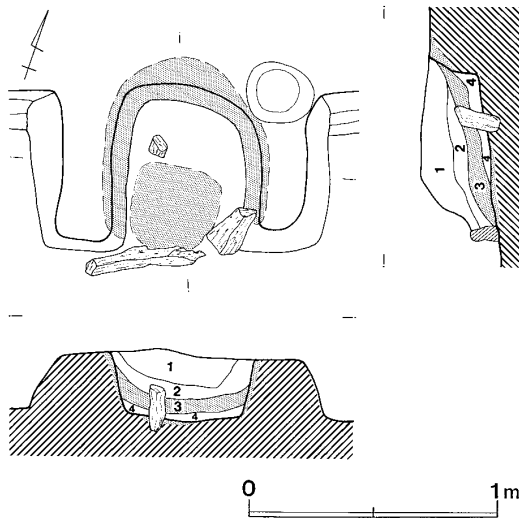
第7图 第1号住居跡(1)



第8図 第1号住居跡(2)

第1号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：淡灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗灰色土層（ロームブロック・ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第7層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第9図 第1号住居跡カマド

第1号住居跡カマド土層説明

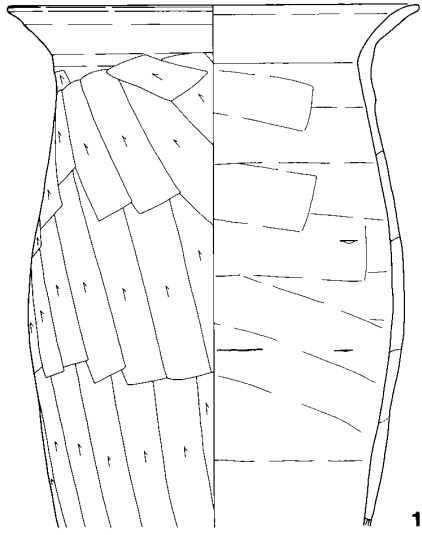
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第4層：黒灰色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

出土遺物は、長胴甕・小形甕・鉢・坏などの土器がある（第10・11図）。これらの土器のほとんどは、住居の周辺部から出土しているが、特に北側壁際のカマド周辺から貯蔵穴（P5）周辺に多い。土器以外では、長さ15cm前後の片岩を主体とした自然石が、覆土中や床面付近から比較的多く出土している。この自然石の中には、住居南側の支柱穴P4周辺の床面付近で一箇所まとまった分布が見ら

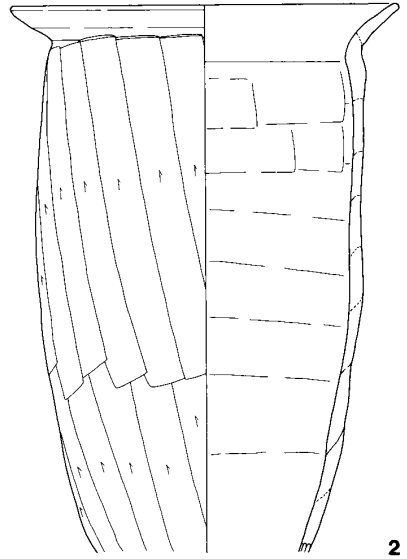
れ、住居内でいわゆる「編物石」として利用されていた石である可能性も考えられるが、その出土状態は人為的な集石の状態とは言いがたいため、明確ではない。また、本住居跡内の南北両側の壁際の床面付近や覆土中からは炭化材がいくつか出土しており、カマド焚口部前方の床面上には火熱により赤色化した部分も見られるが、炭化材の量が少なく、覆土中には焼土粒子や炭化粒子の混入も顕著に見られないため、住居の火災によるものかは不明である。

第1号住居跡出土遺物観察表

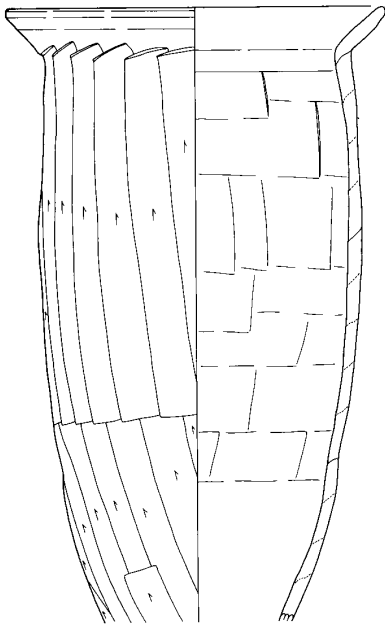
1	甕	A. 口縁部径21.8、残存高27.6。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 外-淡橙褐色、内-淡褐色。F. 胴部1/2。G. 床面付近、P2内。
2	甕	A. 口縁部径20.4、残存高28.9。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 4/5。G. 床面付近。H. 外面黒斑あり。
3	甕	A. 口縁部径20.1、残存高32.5。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 4/5。G. 床面直上。
4	甕	A. 口縁部径18.9、残存高15.4。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-淡褐色。F. 2/3。G. 床面直上。
5	甕	A. 口縁部径18.6、器高21.1、底部径3.8。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-暗褐色。F. 2/3。G. 床面直上。
6	小形甕	A. 口縁部径15.2、器高17.1。底部径8.3。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 外-茶褐色、内-暗褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。H. 底部外面黒斑あり。
7	鉢	A. 口縁部径12.7、器高10.5。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 完形。G. 床面直上。
8	坏	A. 口縁部径11.4、残存高8.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
9	坏	A. 口縁部径14.4、器高3.7。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 完形。G. P5上。H. 体部外面黒斑あり。
10	坏	A. 口縁部径14.0、器高4.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。H. 体部外面黒斑あり。
11	坏	A. 口縁部径13.7、器高3.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/2。G. 床面付近。
12	坏	A. 口縁部径(12.0)、器高(4.5)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 1/2。G. 床面付近。H. 器表面は荒れている。
13	坏	A. 口縁部径12.0、器高4.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡橙褐色、内-黒褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径12.0、器高4.1。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. ほぼ完形。G. 床面直上。
15	坏	A. 口縁部径11.4、器高4.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 完形。G. 床面直上。
16	坏	A. 口縁部径11.4、器高3.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明橙褐色。F. ほぼ完形。G. 床面直上。



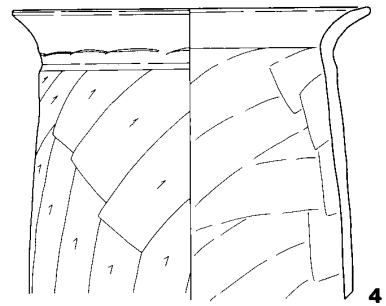
1



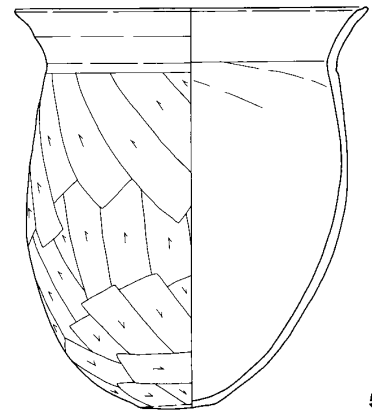
2



3



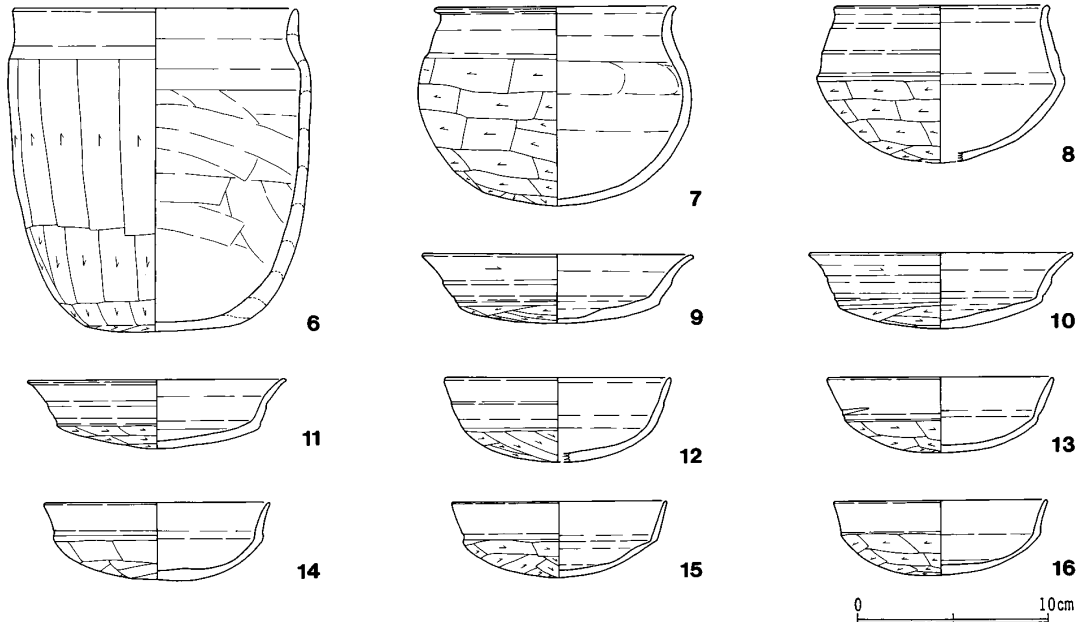
4



5

0 10cm

第10图 第1号住居跡出土遺物(1)



第11図 第1号住居跡出土遺物(2)

第2号住居跡(第12・13図、図版3)

調査区中央部に位置し、東側には第1号住居跡が、南側には第9号住居跡が近接している。本住居跡は、第3号住居跡と第11号土壌と重複し、それらの遺構を切っている。

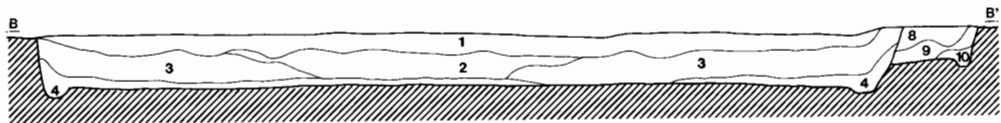
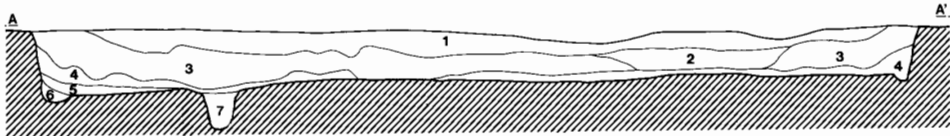
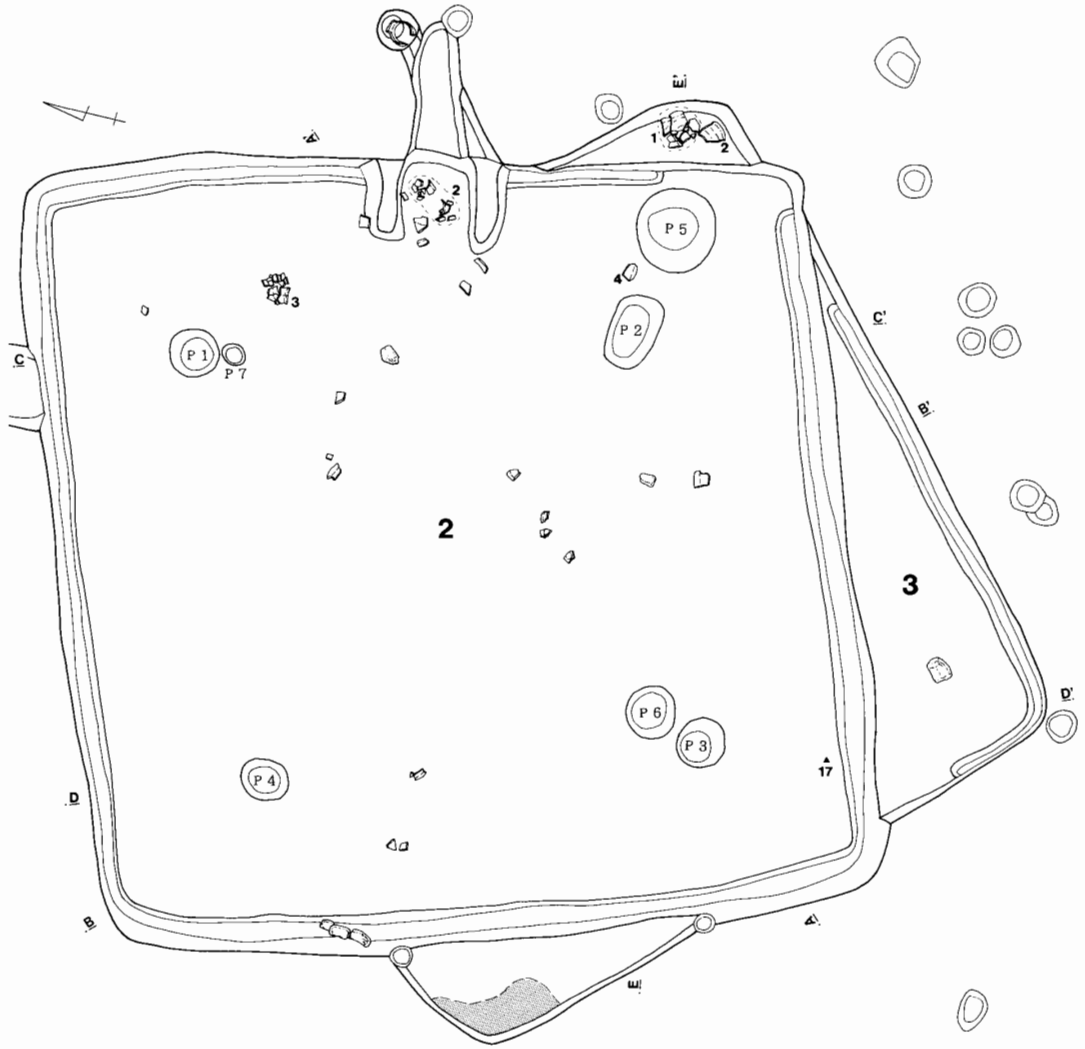
平面形は、方形を呈しているが、若干平行四辺形状に歪んでいる。規模は、東西方向が6.40m、南北方向が6.30mを測る。住居の主軸方位は、 $N-71^{\circ}-E$ を向いている。

壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、西側壁で最高53cmある。各壁下には、幅15cm~25cm・深さ5cm~10cmの壁溝が巡っているが、住居の南東側コーナー部の壁下は一部途切れている。

床は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、若干起伏が見られる。住居中央部は堅く締まっているが、周辺部はやや軟弱である。

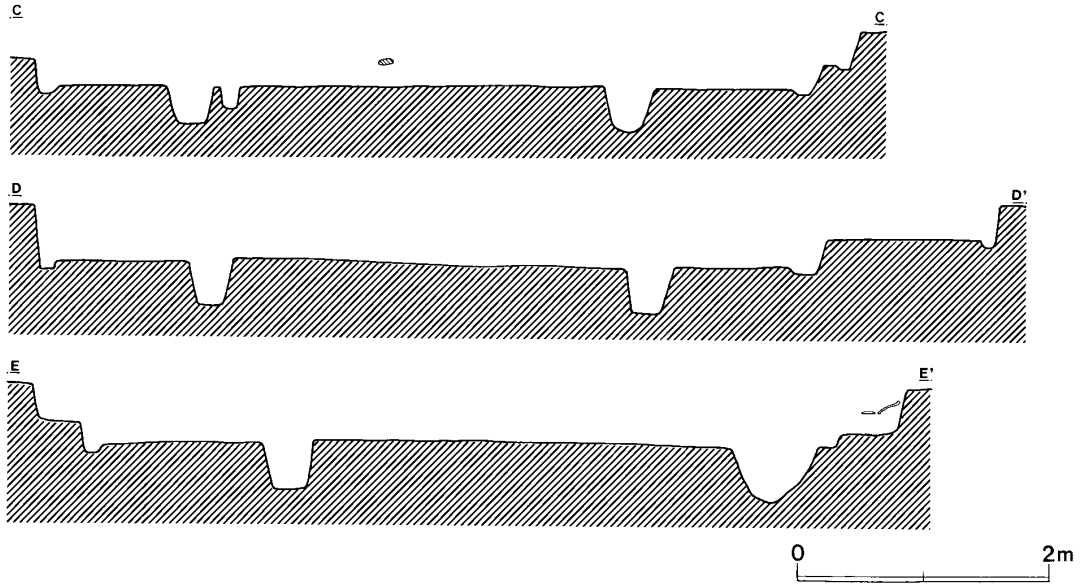
ピットは、P1~P7の7箇所が検出されている。P1~P4は、それぞれ住居のほぼ対角線上に位置し、その配置から支柱穴と考えられるものである。4本支柱穴であるが、その配置は若干平行四辺形状に歪んでおり、住居の平面形と相似している。形態は、P2が60cm×40cmの楕円形であるが、他はいずれも直径35cm程度の円形を呈している。確認面からの深さは、いずれも30cm~35cmで揃っている。P5は、住居の南東側コーナー部付近に位置し、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、比較的整った円形を呈し、規模は63cm×68cmある。床面からの深さは45cmあり、底面はやや狭く丸みをもっている。P6は、支柱穴P3の北側に近接しており、形態や規模はP3とほとんど同じである。P7は、支柱穴P1の南側に隣接している。直径16cmの円形を呈し、床面からの深さは17cmある。

カマドは、住居の東側壁のほぼ中央に位置し、壁に対して直角に構築されている。天井部はすで



第12図 第2・3号住居跡(1)





第13図 第2・3号住居跡(2)

#### 第2・3号住居跡土層説明

##### <第2号住居跡>

第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子・焼土粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗灰色土層（ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗黄灰色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7層：暗灰色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

##### <第3号住居跡>

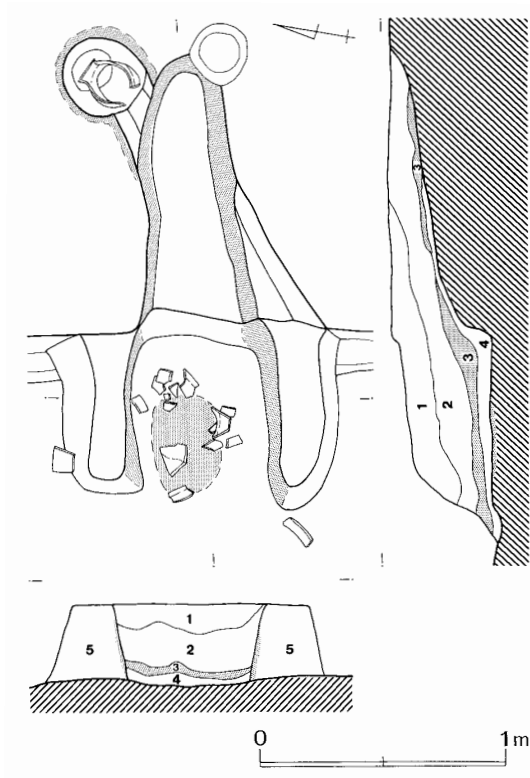
第8層：暗黄灰褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第9層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第10層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

に崩壊しており、燃烧部下半の袖部と煙道部の一部が残存している。残存する部分での規模は、全長180cm・最大幅118cmである。袖部は、粘質ロームのブロックを主体とする黄褐色土を、住居床面上に直接盛り上げて構築している。幅は、左右とも30cm程度である。燃烧部は、良く焼けて赤色化している。燃烧面（火床）は、カマド構築当初は床面をそのまま火床にしていたが、その後第4層の堆積後にもう一面（第3層）形成されている。燃烧部内には、支脚が据えられていたような痕跡は見られない。煙道部は、壁外に106cmほど残存している。燃烧部とは20cm程度の段差をもち、緩やかに傾斜しながら壁外に延びている。

出土遺物は、甕（No1）・小形甕（No2・3）・鉢（No4）・坏（No5～16）などの土器がある（第15図）。これら中で、No2とNo3小形甕はカマド内や床面付近から出土しているが、他の鉢や坏の多くは覆土中から出土した破片である。この他には、住居の南西側コーナー部分付近の壁際の覆土中から、やや歪な感じで太い鉄製の耳環（No17）が1個出土している。



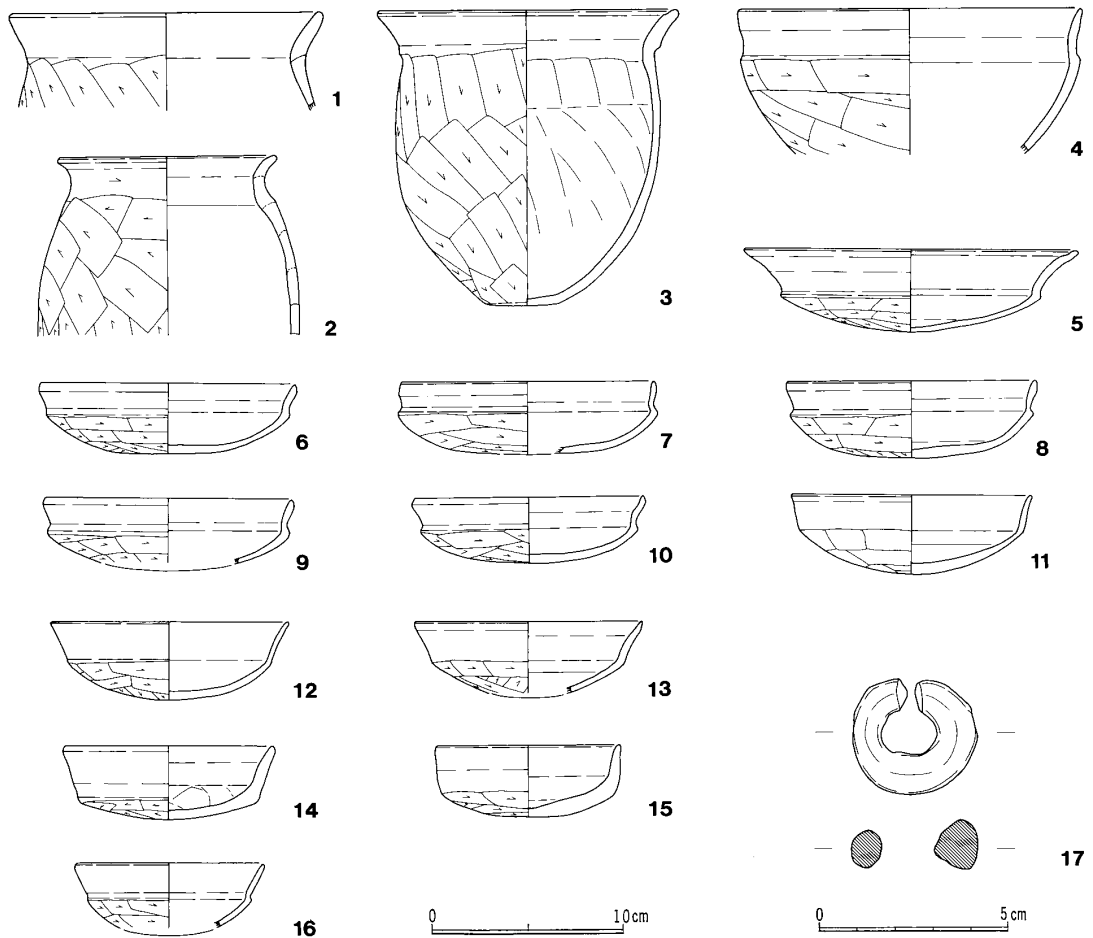
第2・3号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：黒灰色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第14図 第2・3号住居跡カマド

第2号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 (16.5)、残存高5.2。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡褐色、内-暗褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
2	小形甕	A. 口縁部径11.5、残存高9.4。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 2/3。G. カマド内。
3	小形甕	A. 口縁部径15.8、器高15.6、底部径3.8。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-暗褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。
4	鉢	A. 口縁部径 (18.1)、残存高7.7。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明橙褐色。F. 1/4。G. 床面付近。
5	坏	A. 口縁部径 (17.6)、器高4.4。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径 (13.4)、器高3.7。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径13.2、器高3.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明橙褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
8	坏	A. 口縁部径 (13.0)、器高4.1。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-明橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
9	坏	A. 口縁部径 (13.0)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-明橙褐色。F. 1/4。G. カマド内。



第15図 第2号住居跡出土遺物

10	坏	A. 口縁部径 (12.0)、器高3.5。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
11	坏	A. 口縁部径 (12.6)、器高4.2。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-明橙褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
12	坏	A. 口縁部径12.5、器高4.1。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 2/3。G. 覆土中。H. 器形は歪んでいる。
13	坏	A. 口縁部径 (12.0)。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径 (11.0)、器高3.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面笥ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
15	坏	A. 口縁部径 (9.8)、器高3.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/3。G. 覆土中。H. 底部外面黒斑あり。
16	坏	A. 口縁部径 (10.0)。C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
17	耳環	A. 長さ3.1×3.3、幅1.1、厚さ1.3、重さ13g。D. 鉄製。F. 完形。G. 覆土中。

第3号住居跡（第12・13図、図版3）

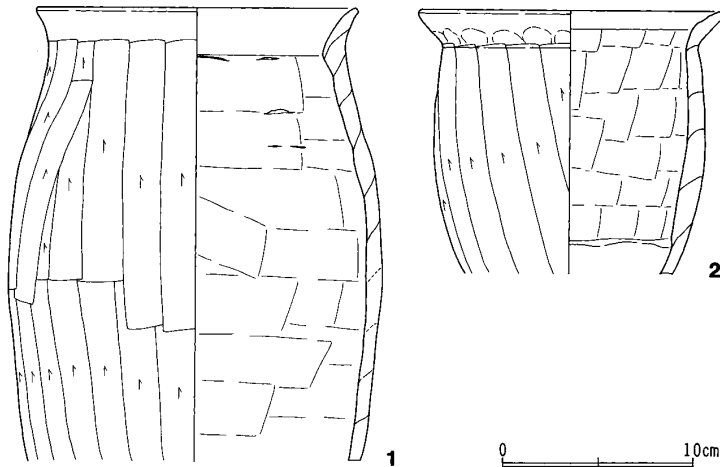
調査区中央部に位置する。第2号住居跡と重複しており、それによって住居跡の大半を切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、比較的整った方形を呈していたものと推測される。規模は、北西から南東方向が5.90m、北東から南西方向が5.64mを測る。住居の主軸方位は、N-45°-Eを向いている。

壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面かからの深さは残存する各壁とも25cm程度ある。壁溝は、残存する部分では住居の南東側壁下と南西側壁下の一部に見られるだけである。形態は、10cm~16cmの比較的均一な幅で、床面からの深さは5cm~10cmある。

床は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を主体とした貼床式で、比較的平坦に作られているようである。住居の中央部は残存していないため不明であるが、周辺部はやや軟弱である。残存する範囲内からは、本住居跡に伴うと考えられるようなピットは検出されていない。

カマドは、住居の北東側壁の中央やや南東側寄りの位置に構築されていたようであり、住居外に延びる煙道部の一部が残存している。煙道部は、壁に対してほぼ直角に160cmほど延びている。煙道部の先端は、ピット状に若干深くなっており、そこから甕が1個体出土している。この甕は、土器の上半が削平されており、その形態は不明であるが、底部がないことから煙道の開口部に据え置かれていたのが、煙道内に落ち込んだのではないかと推測される。



第16図 第3号住居跡出土遺物

出土遺物は非常に少なく、東側コーナー部からNo 1とNo 2の甕が出土している(第16図)。土器以外では、南側コーナー部付近の覆土中から、長さ20cmの片岩の自然石が1個出土しただけである。また、本住居跡の西側コーナー部の覆土中には、一部焼土の堆積が見られるが、本住居跡が焼失したような痕跡は残存する範囲内では認められない。

第3号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 (17.0)、残存高23.9。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒、チャート。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
2	小形甕	A. 口縁部径 (16.0)、残存高13.9。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-暗褐色。F. 1/3。G. 覆土中。

第4号住居跡（第17図、図版4）

調査区内の北西側に位置する。第5号住居跡・第1号掘立柱建物跡・第2号掘立柱建物跡・第3号土壇・第1号溝跡などの多くの遺構と重複し、それらによって切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。



第17図 第4号住居跡

第4号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、鉄斑・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

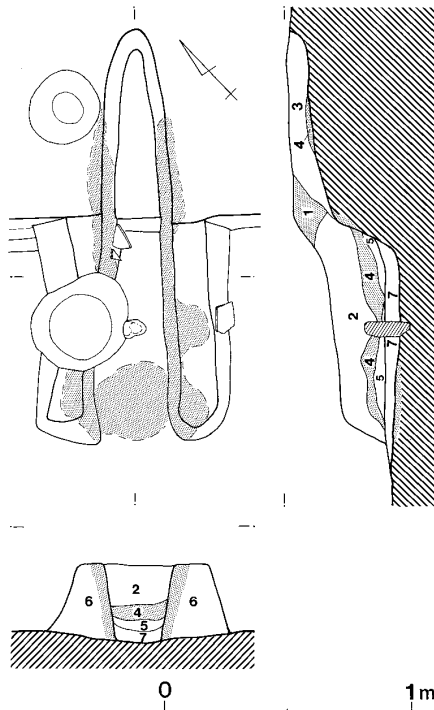
第5層：黒褐色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部分がやや丸みをもつ方形を呈するものと考えられる。規模は、北東から南西方向が5.53m、北西から南東方向が5.40mを測る。住居の主軸方位は、N-41°-Eを向いている。

壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、北東側壁で最高40cmある。各壁下には壁溝が巡っているが、カマド右側から住居の東側コーナー部付近にかけては見られない。形態は、20cm前後の比較的均一な幅で、床面からの深さは5cm程度である。

床は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、ほぼ平坦に作られている。住居の中央部は比較的堅く締まっているが、壁に近い周辺部はやや軟弱である。

ピットは、P1～P6の6箇所が検出されており、それ以外のピットは本住居跡に伴わないものである。P1とP2は、住居のほぼ対角線上に位置し、他の2本は不明であるが、恐らく4本支柱を構成する支柱穴と考えられる。形態は、いずれも円形を呈し、P1が直径36cm・P2が直径28cmある。床面からの深さは、P1が28cm・P2が14cmで、やや浅めである。P3は、住居の東側コーナー部に位置し、その規模や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。一部を掘立柱建物跡の柱穴に切られているが、形態は不整ながら長方形ぎみで、床面からの深さは36cmある。底面は広く平坦で、内部からは甕や坏などの土器が多く出土している。P4は、P1の南東側に位置する。直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは30cmある。P5は、住居の南側コーナー部に位置する。直径40cmの円形を呈し、断面は挿鉢状で床面からの深さは14cmある。P6は、P2とP3の間に位置する。直径15cm程度の楕円形で、深さ20cmの小規模なものであるが、覆土は炭化粒子を主体とす



第18図 第4号住居跡カマド

#### 第4号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：黒灰色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第6層：黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：黒褐色土層（ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

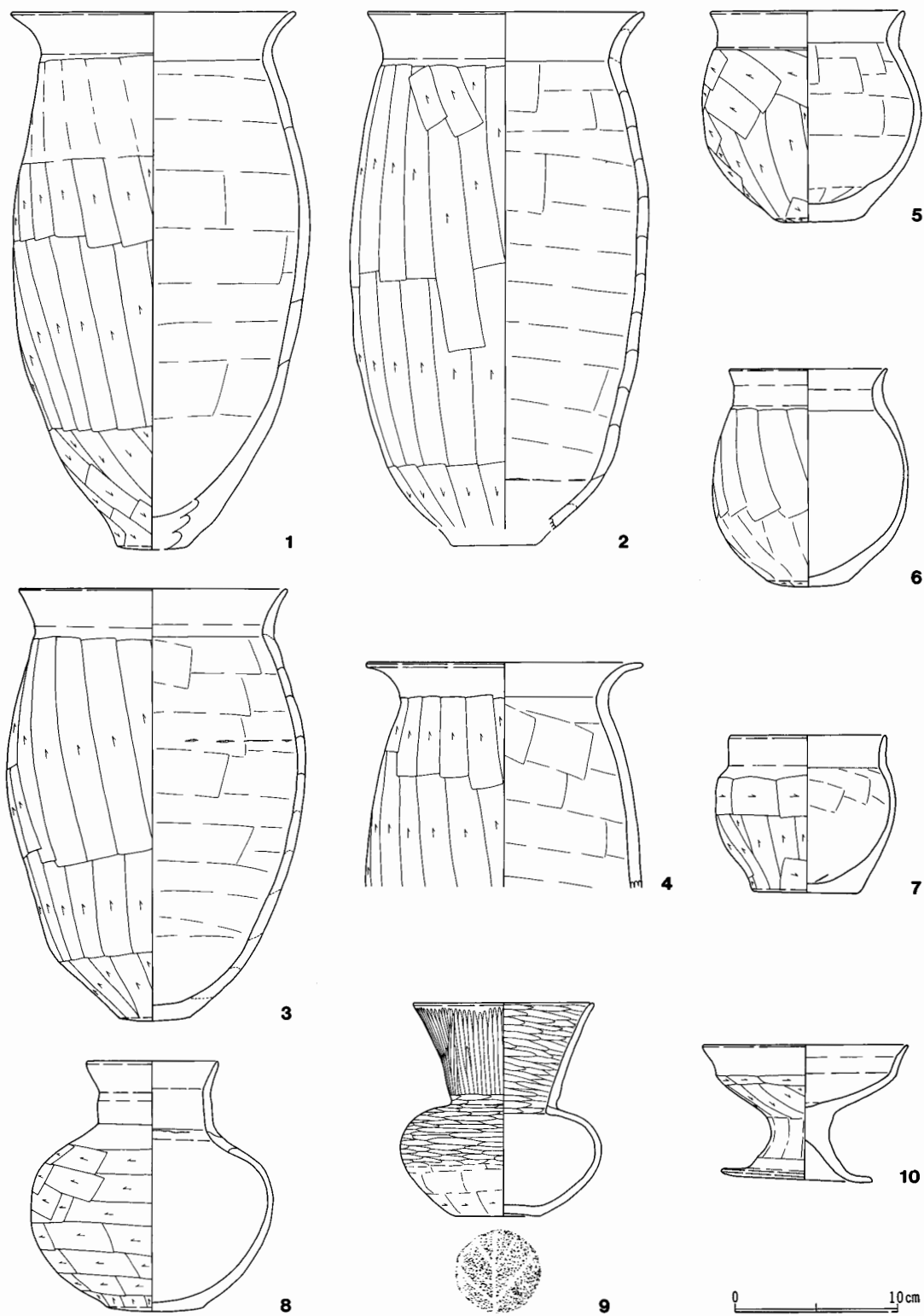
る黒色土が充満していた。

カマドは、住居の北東側壁の中央からやや南東側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に構築されている。天井部はすでに崩壊しており、燃烧部下半の両袖部と煙道部の一部が残存している。規模は、全長165cm・最大幅78cmを測る。袖部は、ロームブロックを主体とする黄褐色土を、壁に貼り付けて構築している。厚さは、左右いずれも25cm程度で比較的薄い。燃烧部は、全面良く焼けて赤色化している。燃烧部の幅は30cm～40cmで比較的狭いが、そのほぼ中央には支脚として棒状の片岩が1個据えられている。燃烧面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、平坦である。煙道部は、燃烧面とは25cmほどの段差をもち、若干傾斜しながら住居の壁外に約75cmほど延びて上方に立ち上がっている。

出土遺物は、甕・小形甕・小形壺・高坏・坏などの土器が、住居北東側壁付近のカマドや貯蔵穴（P3）周辺の床面上から、比較的多く出土している。これらの土器は、完形に近いものが多く、その出土状態からも、本住居で使用されていたものが、住居の廃絶に伴って、そのまま遺棄されたものと考えられる。土器以外では、長さ15cm～20cm位の片岩が覆土中や床面上から出土しており、中にはカマド左側やP3の貯蔵穴の手前で、複数の石が集中しているような箇所もあるが、人為的に集積されたような状態ではない。住居南西側の壁に近い周辺部の床面付近には、長さ30cm・幅15cmの比較的大きく扁平な石が床面上に置かれており、あるいは台石として利用されていたものかもしれない。また、その隣にも比較的大きな自然石を利用した縄文時代の凹石が床面上に置かれているが、これも本住居内で利用されていた可能性がある。

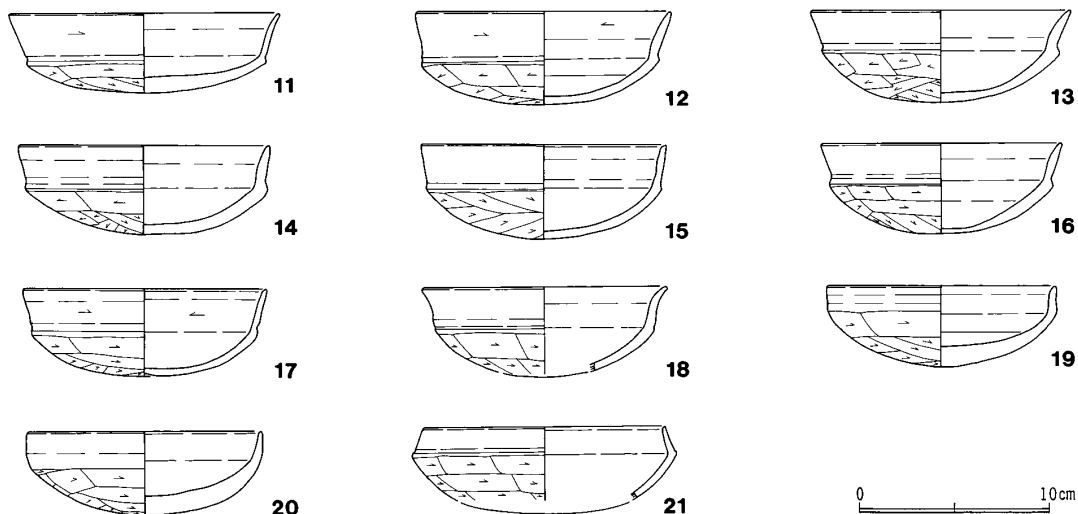
第4号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(17.6)、器高(33.3)、底部径(4.3)。B. 粘土紐積み上げ成形。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-茶褐色。F. 4/5。G. 床面直上。
2	甕	A. 口縁部径17.0、推定高31.9。B. 粘土紐積み上げ成形。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 外-暗褐色、内-淡茶褐色。F. 1/2。G. 床面付近。
3	甕	A. 口縁部径16.6、器高26.7、底部径4.3。B. 粘土紐積み上げ成形。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 外-茶褐色、内-淡茶褐色。F. ほぼ完形。G. P3内。H. 外面に黒斑あり。
4	甕	A. 口縁部径(17.0)、残存高13.9。B. 粘土紐積み上げ成形。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/2。G. 床面直上。
5	小形甕	A. 口縁部径12.0、器高13.0、底部径5.6。B. 粘土紐積み上げ成形。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-明茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面直上。
6	小形甕	A. 口縁部径9.8、器高13.5、底部径5.1。B. 粘土紐積み上げ成形。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ(不明瞭)、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-明茶褐色、内-暗茶褐色。F. 3/4。G. P3内。H. 外面は二次焼成を受けて荒れている。
7	小形甕	A. 口縁部径9.8、器高9.8、底部径6.6。B. 粘土紐積み上げ成形。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面直上。H. 胴部外面に黒斑あり。



第19图 第4号住居跡出土遺物(1)





第20図 第4号住居跡出土遺物(2)

8	小形壺	A. 口縁部径8.1、器高15.5、底部径6.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. ほぼ完形。G. P3内。H. 底部外面黒斑あり。
9	小形直口壺	A. 口縁部径11.0、器高13.2、底部径5.3。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面縦方向のミガキ、内面横方向のミガキ。胴部外面上半ミガキ、下半ケズリ。内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 完形。G. 床面直上。H. 底部外面に木葉痕あり。胴部外面下半は器面が荒れて不明瞭。
10	高 坏	A. 口縁部径12.6、器高8.5。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-明茶褐色。F. 3/4。G. 床面付近。H. 二次焼成を受けて荒れている。
11	坏	A. 口縁部径14.4、器高4.2。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. ほぼ完形。G. P3内。
12	坏	A. 口縁部径13.4、器高4.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面直上。H. 底部外面に黒斑あり。
13	坏	A. 口縁部径13.8、器高4.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-茶褐色。F. 完形。G. P3内。
14	坏	A. 口縁部径13.4、器高4.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 完形。G. P3内。
15	坏	A. 口縁部径(13.0)、器高(5.1)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 1/3。G. 床面直上。H. 底部外面黒斑あり。
16	坏	A. 口縁部径12.8、器高4.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-茶褐色。F. 完形。G. 床面直上。
17	坏	A. 口縁部径(13.0)、器高4.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/4。G. 床面付近。H. 底部外面に黒斑あり。
18	坏	A. 口縁部径(13.0)、器高4.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
19	坏	A. 口縁部径12.2、器高4.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 完形。G. 床面直上。

20	坏	A. 口縁部径12.5、器高4.5。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 完形。G. P 3内。H. 外面に黒斑あり。
21	坏	A. 口縁部径(12.8)、器高(3.9)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗褐色。F. 口縁部1/3。G. 覆土中。

### 第5号住居跡（第21図、図版5）

調査区内中央部のやや北西側寄りに位置し、北東側には第1～3号掘立柱建物跡が、南東側には第2号住居跡がある。本住居跡は、重複する第4号住居跡を切り、中世の第5号溝跡と第9号溝跡に遺構の上面を切られている。住居跡の西側半分は調査区外であるため、本住居跡の全容は不明であるが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、調査区内で検出された部分や支柱穴の位置から推測すると、方形に近い形態を呈していたものと思われる。本住居跡は、現在までに調査された本遺跡の住居跡の中では最大の規模を有し、北西から南東方向が8.05m、北東から南西方向は7.15mまで測れる。住居跡の南西側壁の向きは、N-57°-Eを向いている。

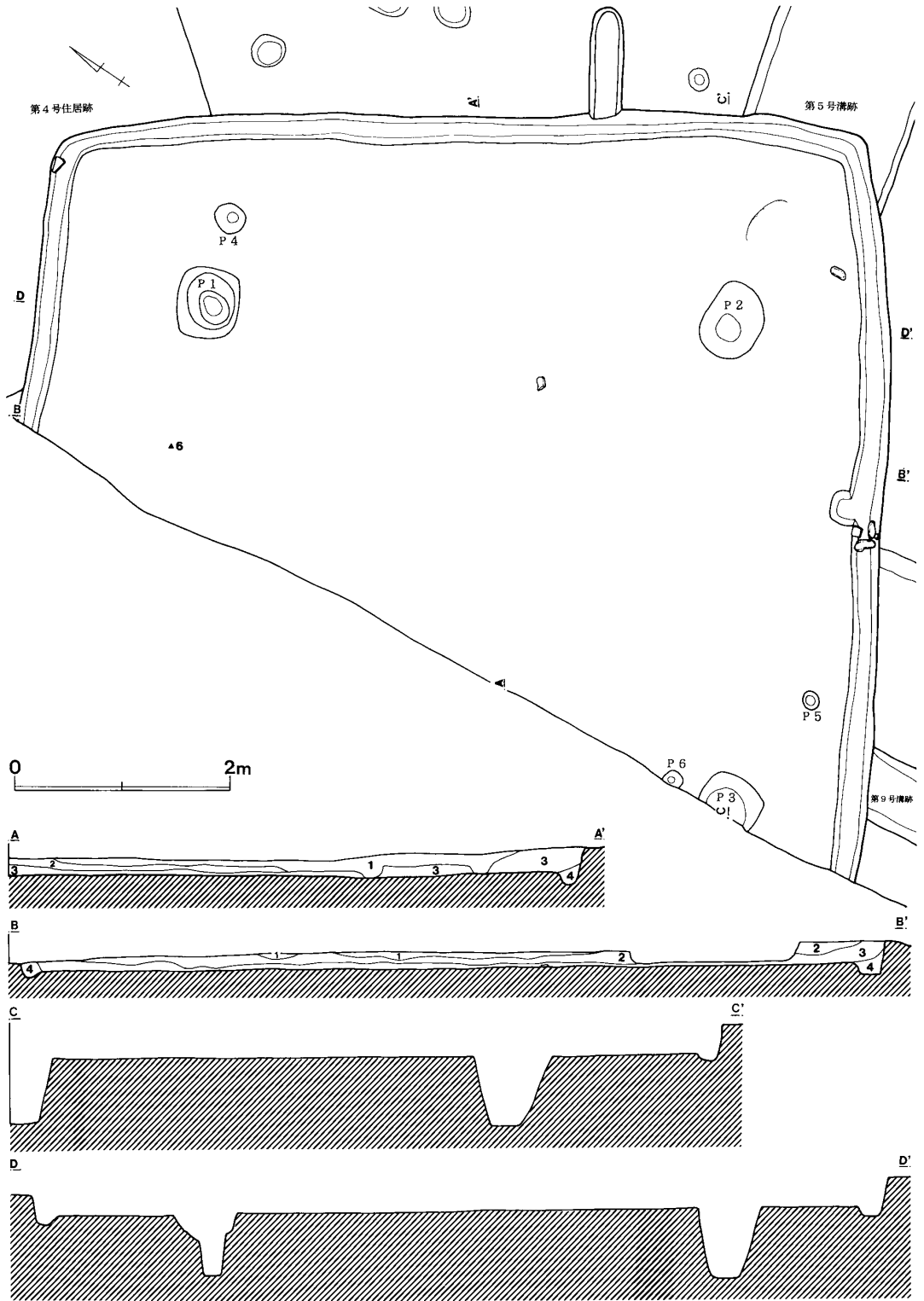
壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高28cmある。調査区内で検出された各壁下には、幅20cm～25cm、床面からの深さが5cm～10cm程度の均一な形態の壁溝が、途切れずに巡っている。また、南東側壁下の壁溝では、その中央付近にピット状の張り出しが見られる。

床は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、ほぼ平坦に作られている。住居の中央部は比較的締まっているが、壁に近い周辺部はやや軟弱である。

ピットは、調査区内で検出された部分では、P1～P6の6箇所が検出されている。P1～P3は、住居のほぼ対角線上に位置するものと思われ、4本支柱穴の一部と考えられる。いずれも長さ65cm前後のコーナー部の丸みが強い長方形か楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは55cm～64cmある。P4は、支柱穴P1の北東側に位置している。直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは25cmある。P5とP6は、住居の南側にある。いずれも直径15cm程度の円形で、床面からの深さが10cm～15cmと浅い小規模なものである。

カマドは、調査区内で検出された範囲内では、その痕跡は見られなかったが、住居の北東側壁の南東側寄りの位置で、住居外に伸びる煙道部の痕跡が検出されている。煙道部は、全長105cm・幅30cmで、若干傾斜をつけて延びており、壁面は良く焼けて赤色化している。この煙道部を伴うカマドは、住居内にカマド構築材の崩壊土の痕跡が見られないことから、本住居跡の構築当初のカマドであった可能性が高く、本住居跡が廃絶される時には、すでに調査区外の北西側壁か南西側壁に移築されていたものと思われる。

出土遺物は、覆土中を主体に土器の破片等が少量出土しただけであるが、これらとともに羽口の破片(No3～5)と椀形の鉄滓が1点出土していることは注目される。この他には、住居北側周辺部の床面上より銅製の耳環(No6)1個と、住居東側コーナー部付近の覆土中から滑石製の白玉(No7)が1個出土している。また、住居跡の南東側壁際の床面付近には、長さ15cm程度の片岩が3個見られる。



第21图 第5号住居跡

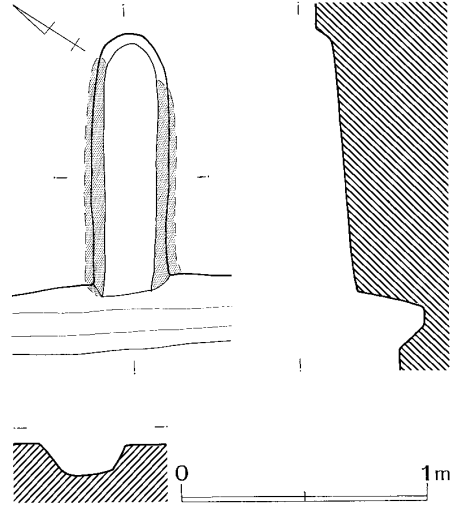
第5号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

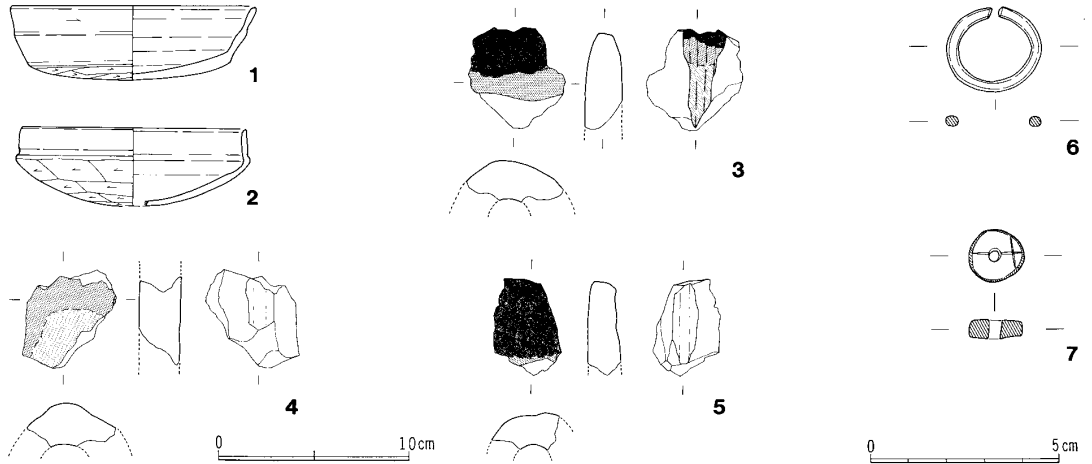
第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒灰色土層（炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗灰色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第22図 第5号住居跡カマド



第23図 第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口縁部径13.0、器高3.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径(11.8)、器高4.1。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
3	羽口	A. 残存長5.3、厚さ2.0。C. 外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—上部黒色・下部暗灰色。内—明茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 先端部外面に発泡あり。
4	羽口	A. 残存長5.1、幅4.8、厚さ2.2。C. 外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—上部暗灰色・下部茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
5	羽口	A. 残存長5.1、厚さ1.7。C. 外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—上部黒色・下部暗灰色。内—明橙褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 先端部外面に発泡あり。
6	耳環	A. 長さ2.5×2.2、幅0.3、厚さ0.25、重さ2.3g。D. 銅製。G. 床面直上。
7	石製品 白玉	A. 長さ1.4、厚さ0.5、重さ1.6g。C. 上下面未調整。側面研磨。D. 滑石製。E. 淡白褐色。F. 完形。G. 覆土中。

第6 A号住居跡（第25・26図、図版5・6）

調査区内の南西側に位置する。本住居跡は、すでに住居跡の床面下まで削平されており、かろうじて残存していたのは、炉と壁際を等間隔に巡っていたと推測される側柱穴だけである。第2号井戸跡や第19・20号土壇と重複し、それらによって切られている。また、第17号土壇や第6 B号住居跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

本住居跡の側柱穴と思われるピットは、P 1～P 10の10箇所と推測される。これらの側柱穴の配列から推測すると、本住居跡は直径6.20m前後の円形に近い形態であったと思われる。側柱穴は、住居南側のP 7とP 8が長さ35cm前後で他に比べて若干規模が小さい他は、長さ40cm～60cmの比較的規模の大きな円形か楕円形の形態のものが主体的で、確認面からの深さは30cm～47cmある。住居入口部の施設については、側柱穴の配列からは明確ではないが、南側のP 7の周辺には住居中央の炉に向かって列状に並んでいるような小ピットが多く見られ、あるいはその辺が入口であったかもしれない。

炉は、住居中央部のやや南側寄りの位置にある。平面形は、96cm×90cmの若干南北方向に長い円形である。炉壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、深さは35cmある。壁面は非常に良く焼けて赤色化している。底面は、広く若干丸みを持ち、中央部に直径30cm前後の浅い小ピットを伴っている。小ピットの縁は火熱によって赤色化している。

出土遺物はほとんどなく、炉や側柱穴の覆土中から縄文時代後期の称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式の土器片が少量出土しただけである。

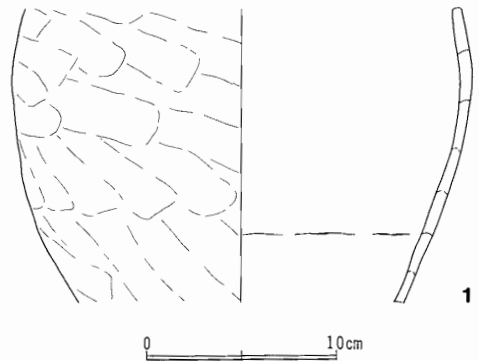
第6 B号住居跡（第25・26図、図版5・6）

調査区内の南西側に位置する。すでに住居跡の床面下まで削平されており、かろうじて残存していたのは、炉と壁際を等間隔に巡っていたと推測される側柱穴だけである。

本住居跡の側柱穴と思われるピットは、P 11～P 20の10箇所と推測される。これらの側柱穴の配列から推測すると、本住居跡は直径4.50m前後の円形に近い形態であったと思われる。側柱穴は、いずれも規模が小さく、直径25cm前後の円形を呈し、深さは30cm前後のものが大半である。

炉は、ほぼ住居跡の中央に位置している。平面形は、直径55cmの円形を呈している。炉壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、深さは25cmある。壁面は良く焼けて赤色化している。底面は、広く丸みをもつ。中央部に直径15cm程度の浅い小ピットを伴い、No 1の底部を欠く粗製の深鉢が1個体据えられている。

出土遺物は、炉内からNo 1の深鉢（第24図）が出土した他は、土器片が少量出土しただけである。



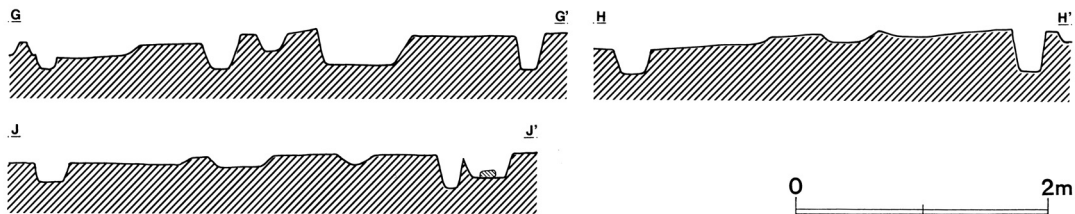
第24図 第6 B号住居跡出土遺物

第6 B号住居跡出土遺物観察表

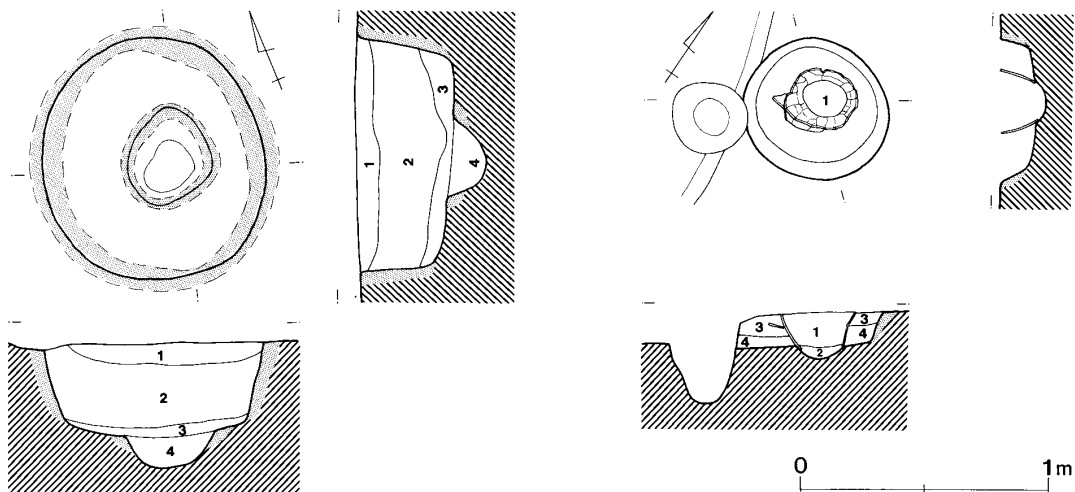
1	深鉢	A. 胴部最大径24.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外—淡褐色。F. 胴部のみ。G. 炉内。
---	----	--



第25图 第6A·6B号住居跡(1)



第26図 第6 A・6 B号住居跡(2)



第27図 第6 A・6 B号住居跡炉

**第6 A号住居跡炉土層説明**

- 第1層：暗茶褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗茶褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗茶褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：黒灰色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

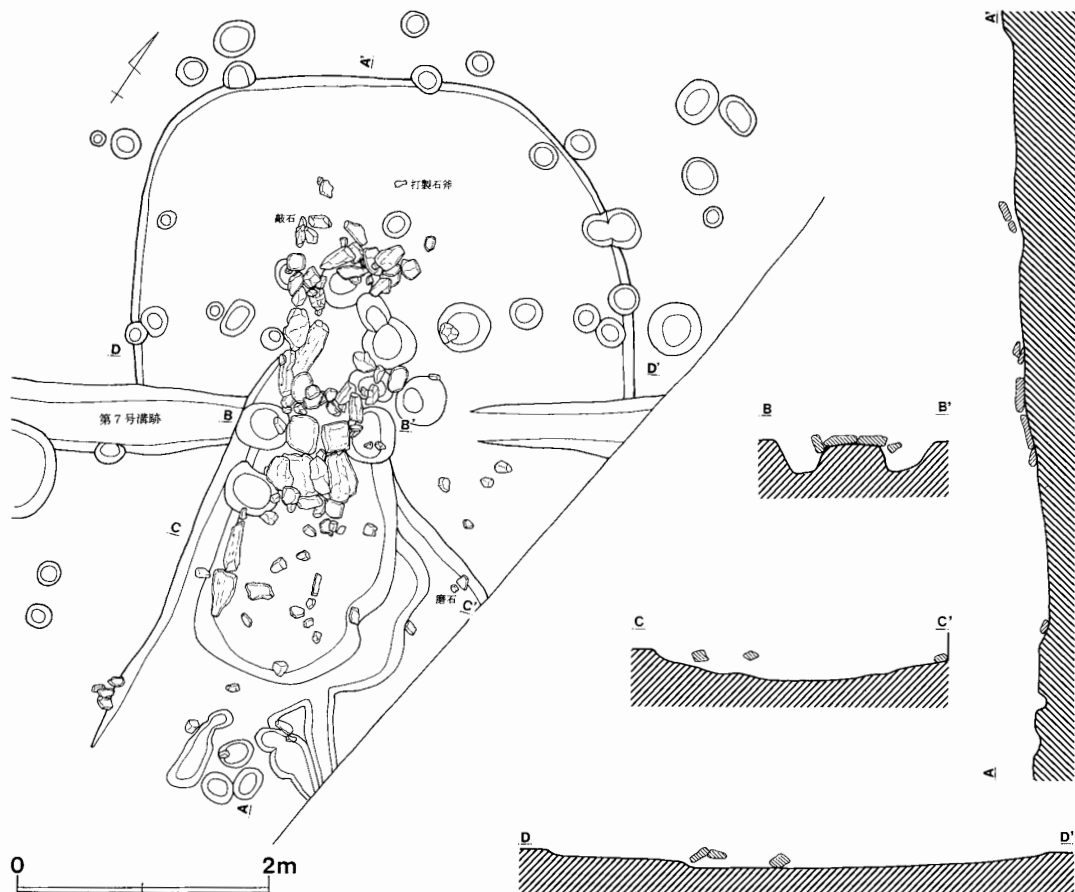
**第6 B号住居跡炉土層説明**

- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗茶褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗茶褐色土層（炭化粒子を均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

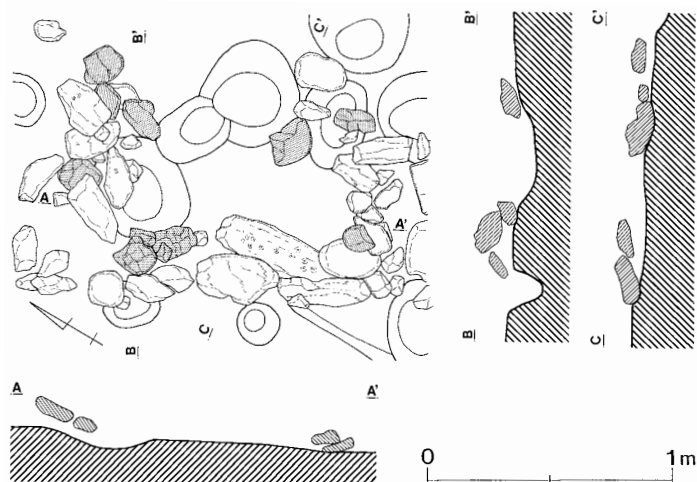
**第7号住居跡（第28図、図版7）**

調査区内の南東側に位置し、南西側には第11号住居跡が近接している。第7号溝跡と重複しており、それによって住居跡の中央部を切られている。本住居跡は、住居の北側はすでに床面付近まで削平され、また住居の南側は谷の湧水による開析作用によって流失しており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する掘り込みの形態から推測すると、コーナー部の丸みが非常に強い隅丸方形の形態か、あるいは不整形円形に近い形態であったと思われる。規模は、東西方向が4 m、南北方向はおそらく入口部の施設を含めて5 m程度であったものと推測される。住居の主軸方位は、N-



第28図 第7号住居跡



第29図 第7号住居跡炉

32°-Wを向いている。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは5cm程度である。残存する部分の壁下には壁溝は見られない。

床は、住居の中央部に向かって若干窪んでいる。炉の南側には住居の入口部に向かって敷石が施されていたようで、敷石の一部とその掘り方と思われる不整形の窪みが見られる。

ピットは、住居内やその周辺

から多数検出されているが、小規模で浅いものが主体で、支柱穴や側柱穴は明確ではない。

炉は、住居のほぼ中央に位置する。形態は、90cm×70cm位の長方形に石を並べた石囲炉であるが、

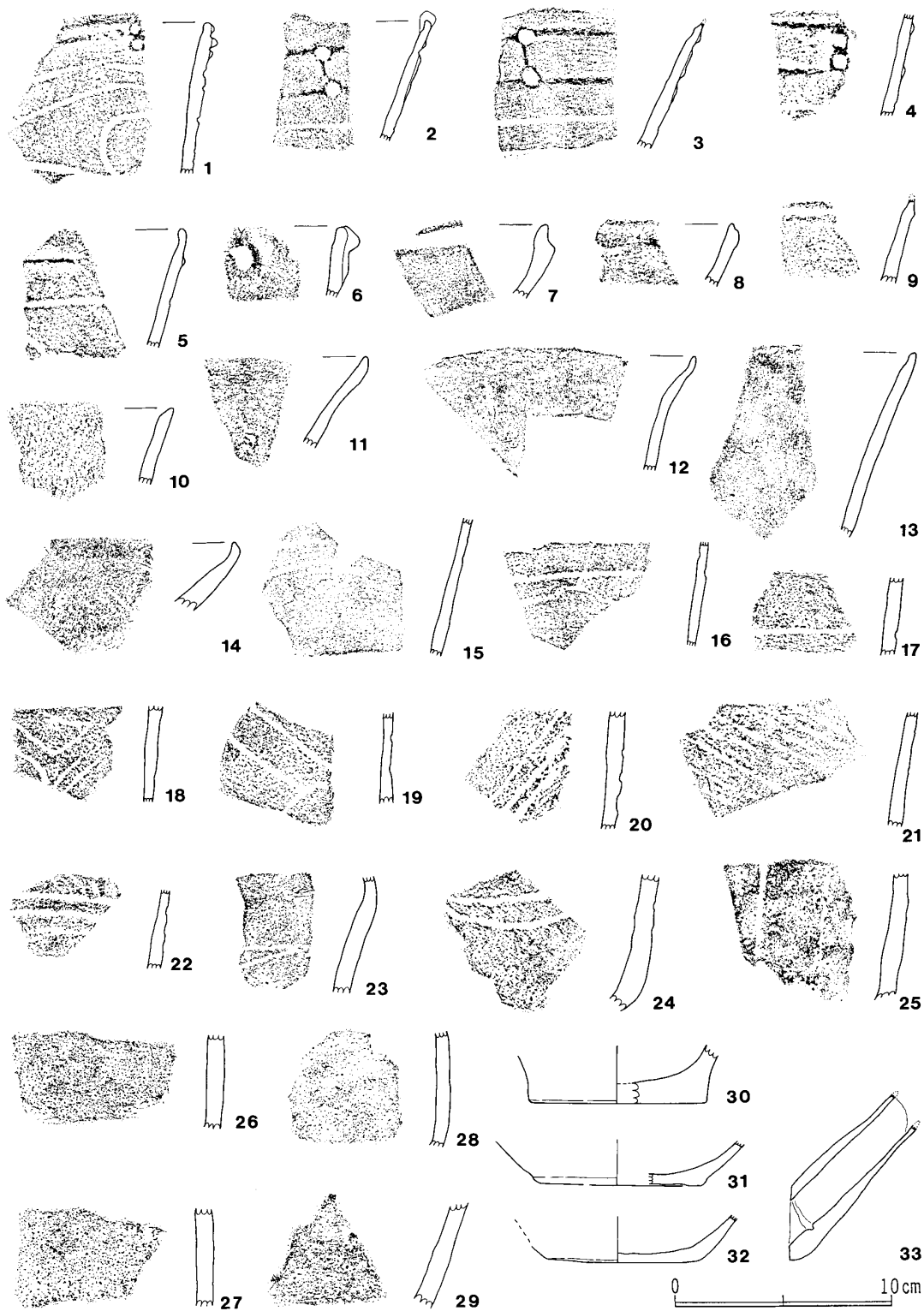


全体にかなり崩れており、東側の石組はすでに崩壊して存在しない。石組の石は、大きさや石材も様々で、中には凹石を利用しているものもいくつかある。炉の底面は、住居の床面を若干掘り窪めている。火床はあまり焼けていないが、周囲の石囲の石には焼けて内側が赤色化しているものが多く見られる。

出土遺物は、土器と石器がある。土器は、覆土中から堀之内2式の土器片が少量出土しただけである。石器は、打製石斧・磨石・敲石・凹石などがあり、打製石斧は住居北側の覆土中から、磨石は住居南側から、敲石は炉北側の床面上から、それぞれ1点ずつ出土している（図版41）。凹石は、炉の石組に利用されている石に複数見られ、不定形で比較的大きな自然石を用いたものが多く、窪み穴の個数も様々である（図版43）。

第7号住居跡出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面鎖状貼付文。胴部外面沈線文。D. 雲母粒、白色粒、赤色粒。E. 外-淡茶褐色、内-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 内面煤の付着あり。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口唇部小突起。口縁部外面鎖状貼付文。胴部外面沈線文。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-暗褐色、内-淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面鎖状貼付文。胴部外面沈線文。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-淡灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 口唇部欠損。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面鎖状貼付文。胴部外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒、赤色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
5	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面鎖状貼付文。胴部外面沈線文。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色、内-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
6	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面円形貼付文。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
7	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口唇部外面1条沈線。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-淡灰褐色、内-暗灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。
8	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口唇部外面凹線。内外面ナデ。D. 白色粒。E. 外-淡灰褐色、内-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
9	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口唇部外面凹線。内外面ナデ。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-淡灰茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
10	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口唇部内面に稜をもつ。内外面ナデ。D. 白色粒。E. 外-茶褐色、内-黒灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。
11	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒子、白色粒、赤色粒。E. 内外-茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
12	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
13	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-淡茶褐色、内-暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
14	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-淡茶褐色、内-暗褐色。F. 破片。G. 覆土中。
15	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-黒褐色、内-淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
16	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒。E. 内外-暗褐色。F. 破片。G. 覆土中。
17	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-暗褐色。F. 破片。G. 覆土中。



第30图 第7号住居跡出土遺物

18	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒、褐色粒。E. 内外-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
19	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒、褐色粒。E. 外-黒褐色、内-暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
20	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-淡茶褐色、内-暗灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。
21	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面斜方向の条線。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-淡褐色、内-黒灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。
22	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-淡褐色、内-明茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
23	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒、赤色粒。E. 外-淡茶褐色、内-淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
24	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
25	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面縦位沈線文。D. 片岩粒、白色粒、赤色粒。E. 内外-淡乳白色。F. 破片。G. 覆土中。
26	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒、赤色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
27	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒、赤色粒。E. 外-明茶褐色、内-暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
28	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
29	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
30	深鉢	A. 底部径 (8.2)。B. 粘土円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-淡褐色。F. 底部1/4破片。G. 覆土中。
31	深鉢	A. 底部径 (8.0)。B. 粘土円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒、赤色粒。E. 内外-淡灰褐色。F. 底部1/4破片。G. 覆土中。
32	深鉢	A. 底部径 (7.6)。B. 粘土円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、褐色粒。E. 内外-淡褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。
33	注口	B. 注口貼り付け。C. 内外面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外-黒褐色。F. 注口部のみ。G. 覆土中。

### 第8号住居跡 (第31図、図版8)

調査区内の中央部東端に位置する。北側には第1号住居跡が、西側には第9号住居跡が近接している。住居跡の北側上面を第12号溝跡に切られ、北西側コーナー部は第36号土壌を切っている。本住居跡の第8A号住居跡は、同一場所でほぼ同形態の第8B号住居跡と向きを同じくして若干東側にずれて重複しており、おそらく両者は同一住居の建替えと思われる。

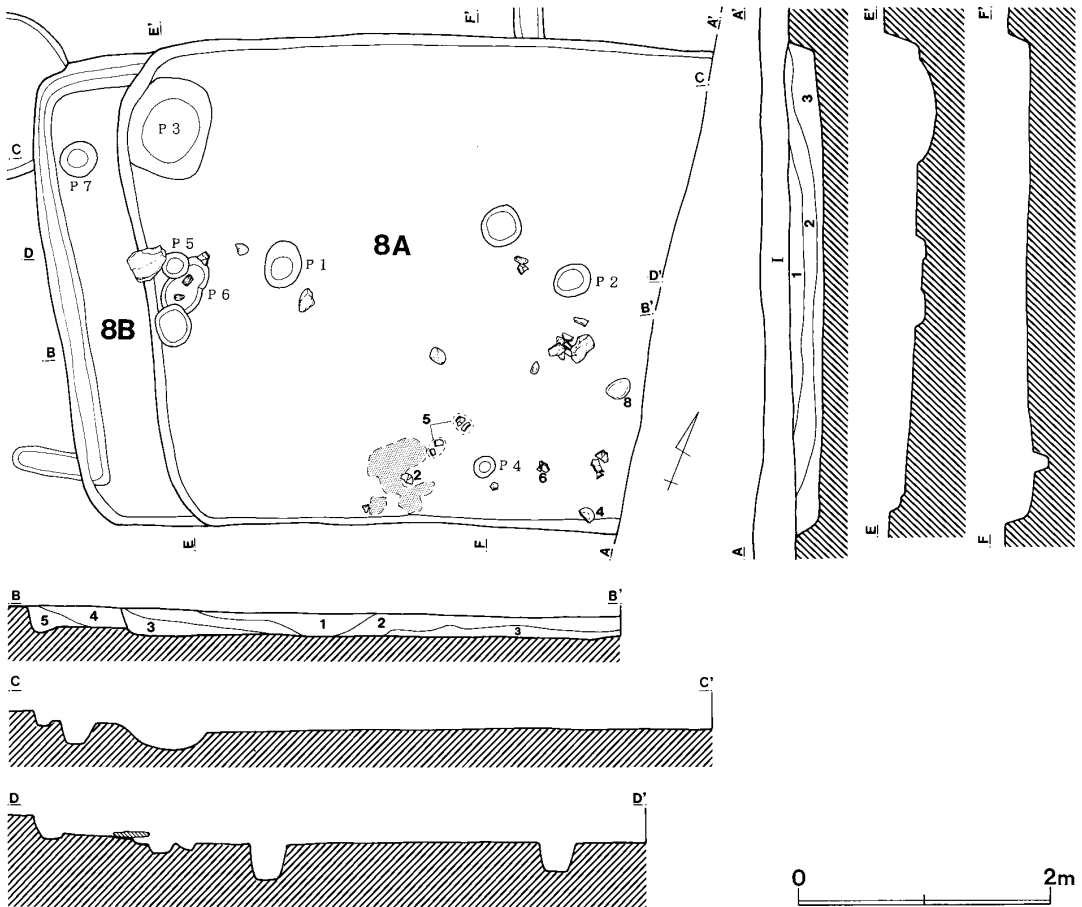
第8A号住居跡は、住居跡の東側半分は調査区外であるため、その全容は不明であるが、調査区内で検出された部分から推測すると、一般的な住居の形態とは異なり、西側に近接する第9号住居跡のような工房的形態の細長い長方形を呈するものと推測される。規模は、南北方向が3.88m、東西方向は4.70mまで測れる。住居の南北両側の壁の向きは、N-80°-Eを向いている。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは北側壁で最高26cmある。調査区内で検出された

各壁下には、壁溝は見られない。

床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。全体にやや軟弱で、ほぼ平坦に作られている。

ピットは、調査区内で検出された部分からは、P 1～P 6 の6箇所が検出されており、その他は覆土の状態から本住居跡に伴わないと考えられる。P 1 と P 2 は、住居の長軸線上に約 2m の間隔で配置されており、おそらく住居の棟持柱の柱穴と推測される。同様の支柱穴の配置は、類似した住居形態の第 9 号住居跡でも見られる。形態は、直径 30cm 前後の円形や楕円形を呈し、床面からの深さはいずれも 25cm 前後である。P 3 は、住居の北西側コーナー部にあり、その位置や形態から貯



第31図 第 8 A ・ 8 B 号住居跡

第 8 A ・ 8 B 号住居跡土層説明

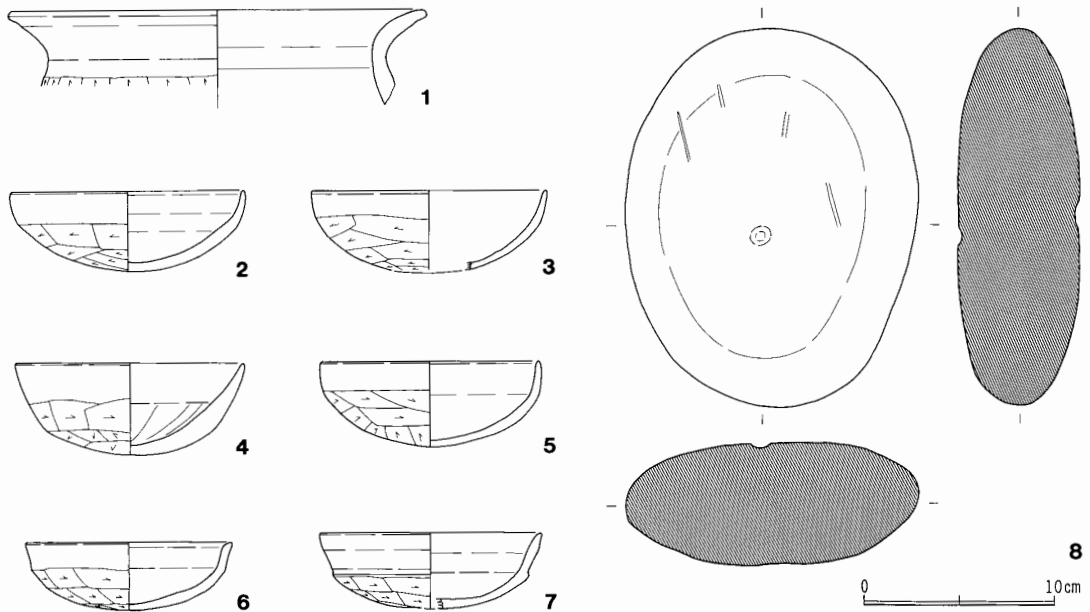
- 第 1 層：黒褐色土層（ローム粒子・焼度粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 2 層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 3 層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 4 層：暗灰褐色土層（炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 5 層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

蔵穴と考えられるものである。平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態で、規模は78cm×64cmを測る。壁は緩やかに湾曲しながら立ち上がり、床面からの深さは14cmで比較的浅い。底面は広く、丸みをもっている。P 4は、住居南側の壁際に位置する。直径16cm・深さ12cmの小規模なもので、その性格は不明である。P 5は、住居西側の壁際にある。直径20cm・深さ8cmの小規模で浅いものであるが、P 1やP 2と同じく住居の長軸線上にあり、あるいは棟持柱の支柱穴に付随する副柱的な役割のものかもしれない。P 6は、P 5と同じく住居西側の壁際にあり、P 5に切られている。ピットが2つ重複したような形態で、床面からの深さは7cm程度で浅い。P 6の上面からは、長さ10cm程度の片岩が2個出土している。

本住居跡の覆土は、ほぼ自然堆積と考えてよいが、覆土の下層（第3層）には焼土粒子の混入が顕著に見られ、一部南側の壁際の覆土中に焼土の堆積も見られるが、調査区内で検出された部分では、火災により焼失したような形跡は見られない。

出土遺物は、住居跡の床面付近から、土器の破片や片岩の石などが複数出土している。この中で大形の川原石を利用したNo 8の砥石・凹石は、床面上に置かれた状態で出土しており、本住居跡で使用されていたことが窺える。また、第8 A号住居跡の西側壁の上面からは、30cm×20cmの比較的大きく扁平な片岩が出土しているが、本住居跡で使用されていたものか不明である。

第8 B号住居跡は、重複する第8 A号住居跡の西側に一部検出されている。住居の形態や規模は第8 A号住居跡とほぼ同じであるが、第8 A号住居跡に比べて床面が5cm程度高く、また北側と西側の壁下には幅15cm～20cm・深さ5cm程度の整った壁溝が巡っている。残存する住居内では、北西側コーナー部付近に、P 7のピットが1箇所検出されている。形態は、直径30cm程度の円形を呈し、床面からの深さは15cmある。遺物は、何も出土しなかった。



第32図 第8 A号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(22.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒。E. 外-淡茶褐色、内-淡褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径12.4、器高4.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 3/4。G. 床面直上。H. 外面に黒斑あり。
3	坏	A. 口縁部径(12.4)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径(12.0)、器高4.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 2/3。G. 床面直上。H. 内面に黒斑あり。
5	坏	A. 口縁部径11.4、器高4.5。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 1/2。G. 床面直上。
6	坏	A. 口縁部径(11.0)、器高3.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/4。G. 床面直上。
7	坏	A. 口縁部径(11.8)、器高4.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。H. 体部外面に黒斑あり。
8	砥石 凹石	A. 長さ20.0、幅15.4、厚さ6.5。C. 表面は良く磨かれている。表裏面の中央には凹穴を1箇所ずつもつ。D. 安山岩。F. 完形。G. 床面直上。

第9号住居跡(第33図、図版8・9)

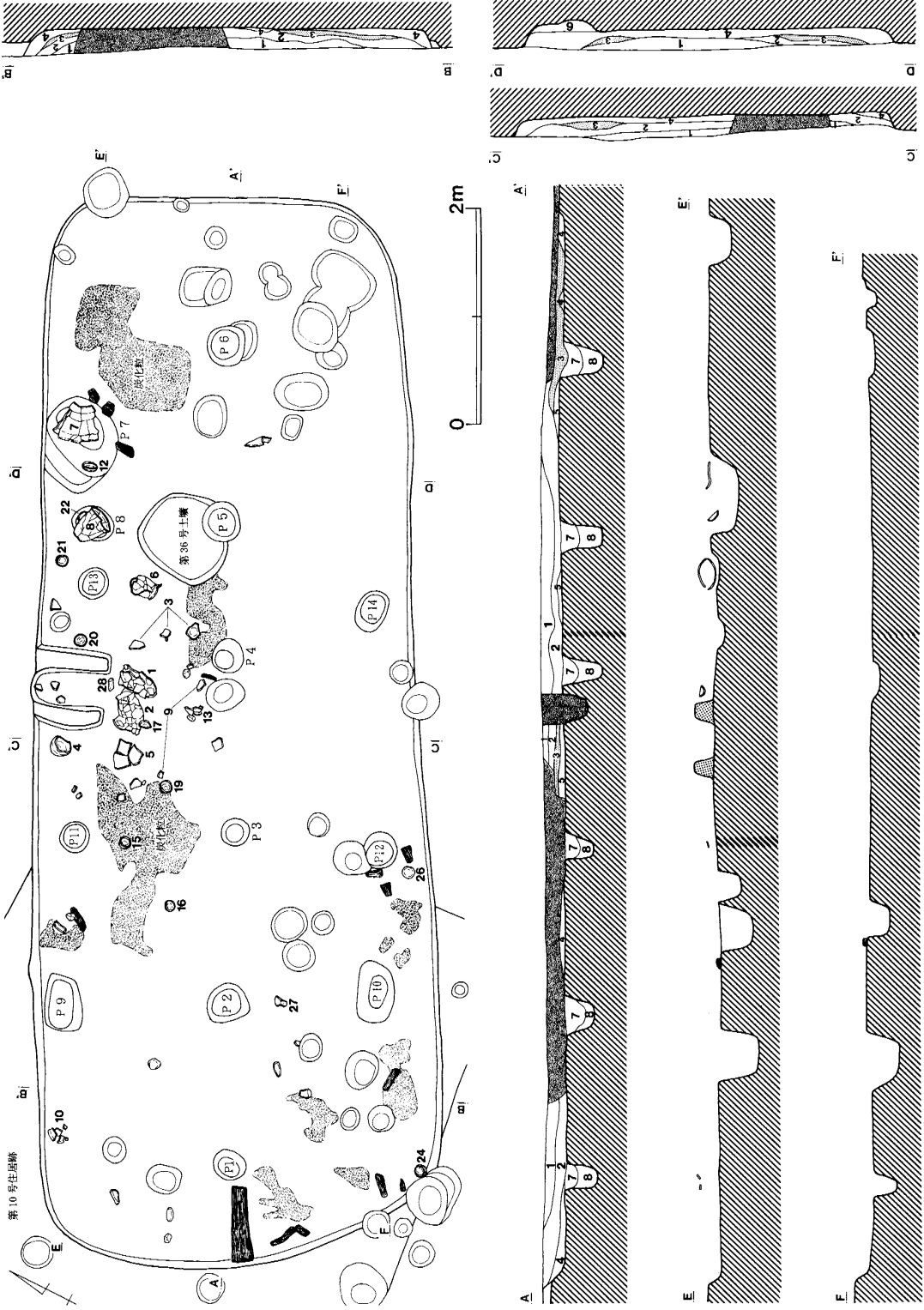
調査区内の中央部に位置し、東側には第8号住居跡が、北側には第2号住居跡と第3号住居跡が近接している。本住居跡は、古墳時代後期の第10号住居跡を切って構築され、住居跡の中央部付近を第36号土壇に切られている。

平面形は、一般的な該期の住居形態とは異なり、コーナー部の丸みが強い非常に細長い長方形の形態を呈している。規模は、東西方向が9.90m、南北方向は3.70mを測る。住居の主軸方位は、カマドの位置からN-26°-Wを示すが、住居跡の長軸方向はN-64°-Eを向いている。

壁は、比較的緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは西側壁で最高22cmある。本住居跡の各壁下には、壁溝は見られない。

床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を薄く埋め戻した貼床式である。ほぼ平坦に作られているが、全体にやや軟弱である。

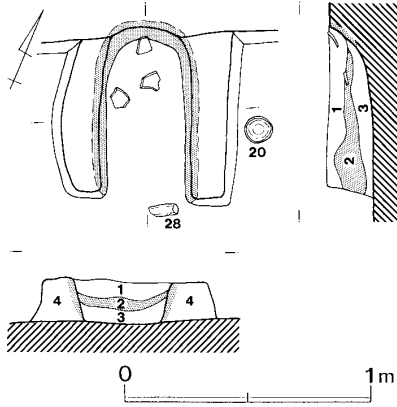
ピットは、住居跡内から多数検出されているが、本住居跡に伴うと考えられるものはP1~P14の14箇所、その他は明確ではない。P1~P6は、住居の長軸線上にほぼ150cmの間隔で等間隔に並んでおり、その位置や配列から本住居の棟持柱の柱穴と考えられる。形態は、直径30cm前後の円形を呈するものが主体で、床面からの深さは30cm~40cmで比較的揃っている。P7は、北側壁のカマド右側1.4mの壁際に位置し、その形態から一般住居の貯蔵穴と同様なものと考えられる。形態は、76cm×76cmの丸みの強い方形ぎみで、住居の壁と平行せずに約45°ずれて二段に掘り込まれている。床面からの深さは28cmあり、底面はやや狭く丸みをもっている。覆土は炭化粒子を均一に含む暗灰褐色土(第6層)で、その中やその上面からNo7の大形甕やNo12の坏が出土している。P8は、P7の西側約15cmの位置に近接している。形態は、40cm×30cmの楕円形を呈し、床面からの深さは5cm程度で非常に浅い。P8の中からはNo22の坏が、上面からはNo8の大形甕が出土しており、そ



第33图 第9号住居跡

### 第9号住居跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗灰褐色土層（炭化粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：黒褐色土層（マンガン塊・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富みしまりを有する。）



第34図 第9号住居跡カマド

### 第9号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

の据え穴であった可能性が考えられる。P 9とP 10は、主柱穴のP 2を中心にして、それと直交する住居の短軸方向の両壁際にそれぞれ左右対称に位置している。いずれも50cm×35cm程度の不整の長方形か楕円形ぎみの類似した形態で、床面からの深さはP 9が35cm、P 10が27cmある。P 11とP 12も、P 9とP 10と同様に、主柱穴のP 3を中心にして、それと直交する住居の短軸方向の両壁際にそれぞれ左右対称に位置している。いずれも直径30cm前後の円形を呈し、床面からの深さは17cm程度である。P 13とP 14も、住居の短軸方向の両壁際にほぼ対にあるが、先のP 9とP 10やP 11とP 12とは異なって、中心に主柱穴を介した位置ではない。形態はP 13が直径30cmの円形、P 14が長さ40cmの楕円形を呈し、床面からの深さはいずれも7cm程度で浅い。

カマドは、住居北側壁の中央から若干東側に寄った位置にあり、壁に対してほぼ直角に構築されている。上半部はすでに削平されており、燃烧部だけが残存している。残存する部分での規模は、全長73cm・最大幅76cmで、比較的小形である。袖は、ロームブロックを多量に含む黄褐色土（カマド第4層）を盛り上げて構築している。厚さは、左右とも20cm程度で比較的薄い。燃烧部の壁面は、良く焼けて赤色化しているが、燃烧面（火床）はあまり焼けていない。焚口部付近から土製支脚の破片（No28）が1点出土しているが、おそらく燃烧部内に立てられていたものであろう。

出土遺物は、住居周辺部の壁際やカマド及び貯蔵穴の周辺から、甕・大形甕・坏・高坏等の土器が比較的多く出土している（第35・36図）。これらの土器は、完形もしくはそれに近いものが多く、また床面付近から出土しているものが大半であることから、本住居内で使用されていたものが、住居の

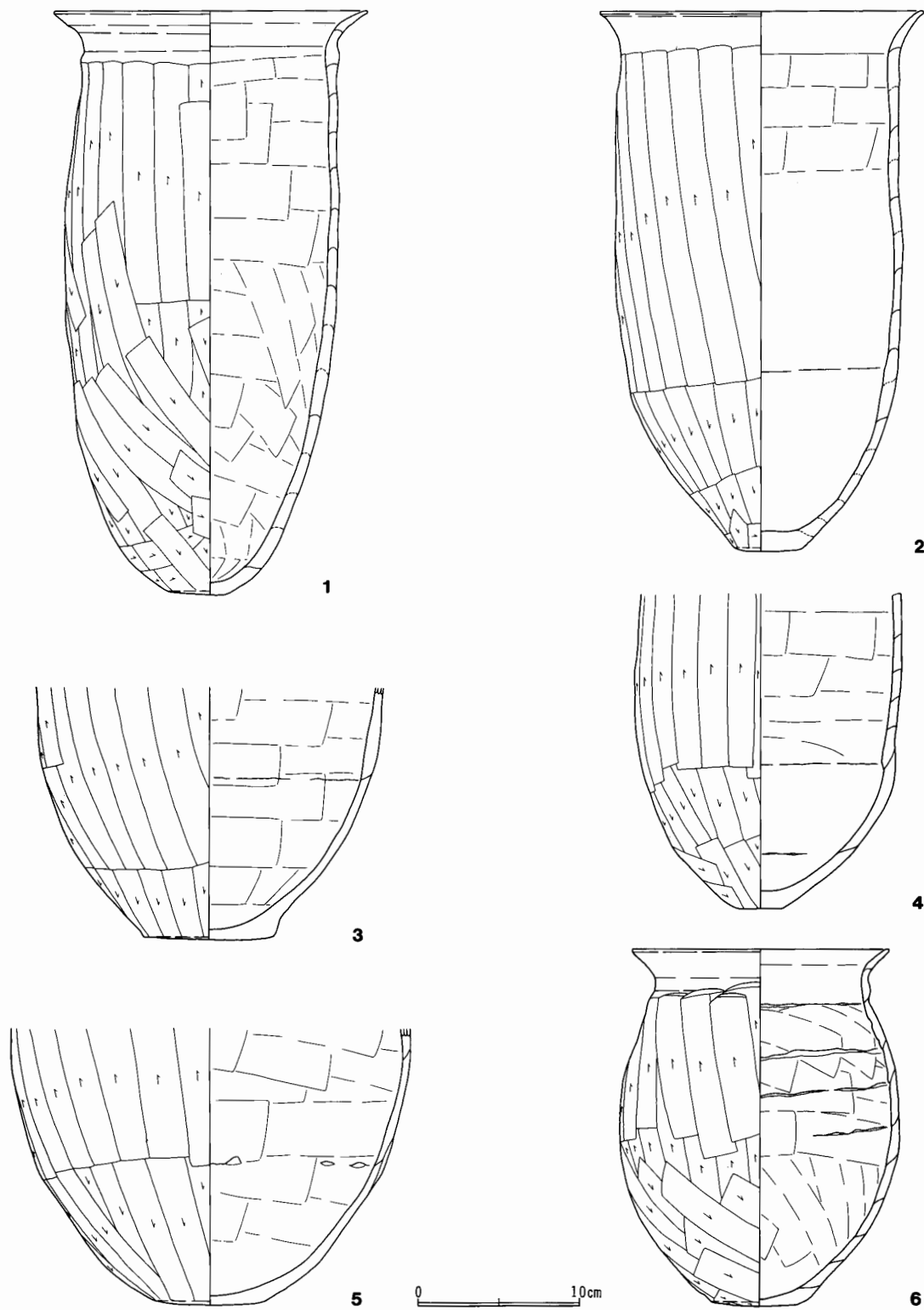


廃絶に伴って、そのまま遺棄されたと考えられる。これらの土器の中で、本住居跡からは他の一般的な住居跡ではあまり例を見ない法量が類似した小形の坏（No12～26）が多く見られ、住居形態の特異性ととも、本住居跡の性格を考えるうえで注目されよう。

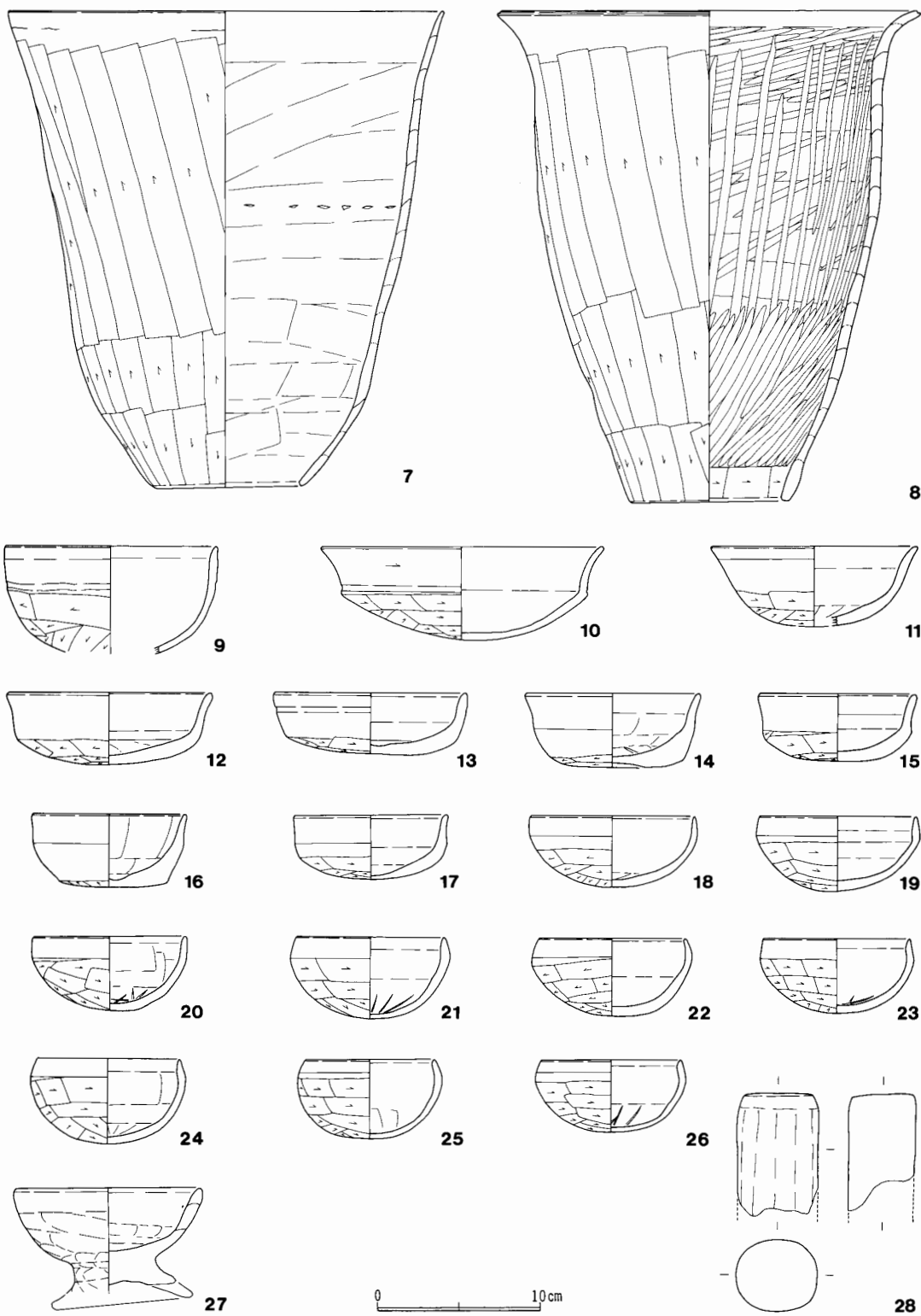
本住居跡は、床面上に炭化材や多量の炭化粒子の分布が見られ、また覆土中にも多量の焼土が顕著に見られることから、火災により焼失したものと推測される。

#### 第9号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径19.4、器高36.2、底部径3.5。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-暗褐色。F. ほぼ完形。G. 床面付近。H. 外面に黒斑あり。
2	甕	A. 口縁部径19.8、器高33.5、底部径4.1。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面付近。H. 外面に黒斑あり。
3	甕	A. 残存高15.7、底部径8.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-明茶褐色、内-黒褐色。F. 1/2。G. 床面直上。H. 底部外面に圧痕あり。
4	甕	A. 残存高19.5、底部径2.6。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面ケズリ、内面上部篋ナデ、下部ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 胴部下半のみ。G. 床面付近。H. 外面に黒斑あり。
5	甕	A. 残存高17.2、底部径7.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-暗褐色。F. 1/3。G. 床面付近。H. 二次焼成を受けている。
6	甕	A. 口縁部径15.8、器高22.2、底部径5.4。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-明茶褐色、内-暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面付近。H. 外面に黒斑あり。二次焼成を受けている。
7	大形甗	A. 口縁部径26.8、器高29.4、底部径8.9。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 貯蔵穴（P7）上面。
8	大形甗	A. 口縁部径25.4、器高30.3、底部径9.8。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後ミガキ、下端ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. P8内。H. 外面に黒斑あり。
9	甗	A. 口縁部径13.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-暗褐色。F. 2/3。G. 床面直上。H. 二次焼成を受けて荒れている。
10	坏	A. 口縁部径（17.4）、器高5.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
11	坏	A. 口縁部径12.8、器高5.0。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
12	坏	A. 口縁部径12.8、器高4.4。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 完形。G. 貯蔵穴（P7）内。H. 底部外面に黒斑あり。
13	坏	A. 口縁部径12.0、器高3.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-明茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面直上。
14	坏	A. 口縁部径（10.8）、器高4.6、底部径8.2。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-明茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。



第35图 第9号住居跡出土遺物(1)



第36图 第9号住居跡出土遺物(2)

15	坏	A. 口縁部径9.8、器高4.2。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 完形。G. 床面直上。H. 外面に黒斑あり。
16	坏	A. 口縁部径9.6、器高4.5、底部径6.6。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面篋ナデ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡褐色。F. 4/5。G. 床面直上。
17	坏	A. 口縁部径(9.6)、器高4.0。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明橙褐色。F. 1/2。G. 床面付近。
18	坏	A. 口縁部径10.2、器高4.4。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗褐色。F. 3/4。G. 覆土中。H. 底部外面に黒斑あり。
19	坏	A. 口縁部径9.6、器高4.7。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 完形。G. 床面直上。H. 内外面に黒斑あり。
20	坏	A. 口縁部径9.4、器高4.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。
21	坏	A. 口縁部径9.2、器高5.1。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。
22	坏	A. 口縁部径9.0、器高4.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 完形。G. P8内。H. 口縁部外面に黒斑あり。
23	坏	A. 口縁部径9.0、器高4.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。H. 二次焼成を受けて荒れている。器形はやや歪んでいる。
24	坏	A. 口縁部径8.8、器高5.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。
25	坏	A. 口縁部径(8.0)、器高4.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
26	坏	A. 口縁部径8.6、器高4.5。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面直上。H. 二次焼成を受けている。
27	高坏	A. 口縁部径(11.4)、残存高6.5。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部・体部・脚部内外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 1/3。G. 床面付近。
28	土製支脚	A. 残存長7.7、幅5.0。C. ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 茶褐色。F. 1/2。G. 床面付近。

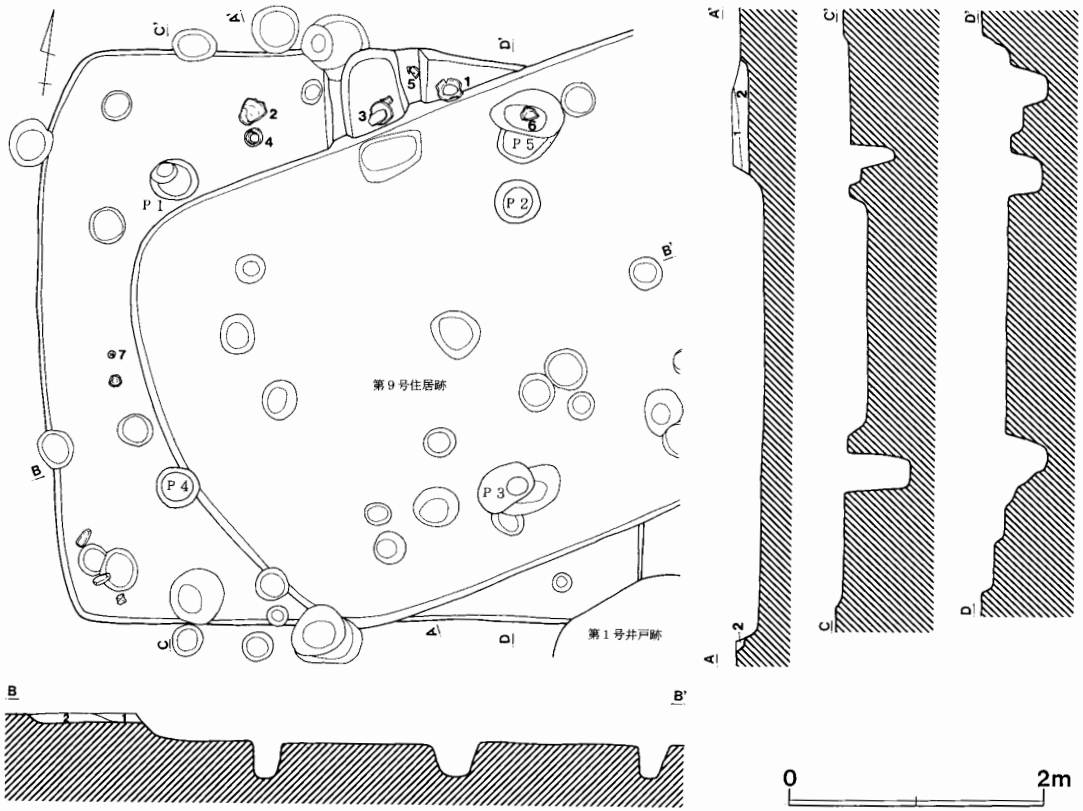
### 第10号住居跡(第37図、図版10)

調査区内の中央部に位置し、北側には第2号住居跡と第3号住居跡が近接している。本住居跡は、住居跡の大半を古墳時代後期の第9号住居跡に切られ、また南東側コーナー部を中世の第1号井戸跡に切られており、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

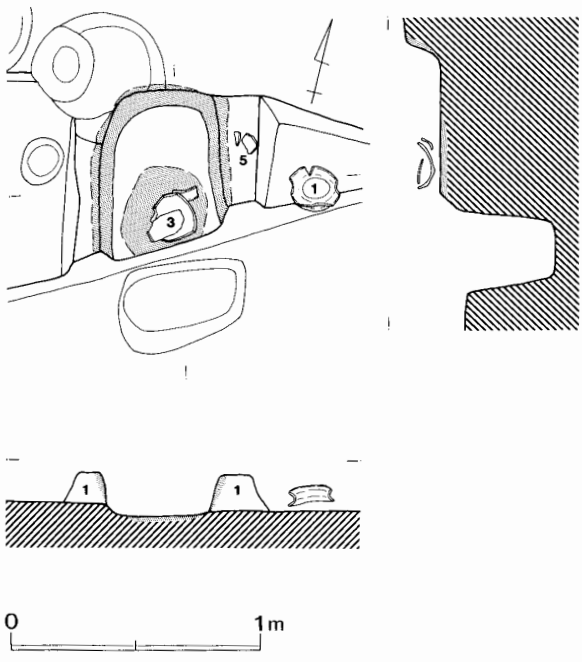
平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った方形を呈していたものと推測される。規模は、南北方向が4.52m、東西方向が4.63mを測り、本遺跡のA～D地点で検出された古墳時代後期の住居跡の中では、最も規模が小さい住居跡である。住居の主軸方位は、N-7°-Wを向いている。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは西側壁及び南側壁で最高8cmある。残存する各壁下には、壁溝は見られない。

床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、ほぼ平坦に作られている。住



第37図 第9号住居跡



第38図 第10号住居跡カマド

第10号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第10号住居跡カマド土層説明

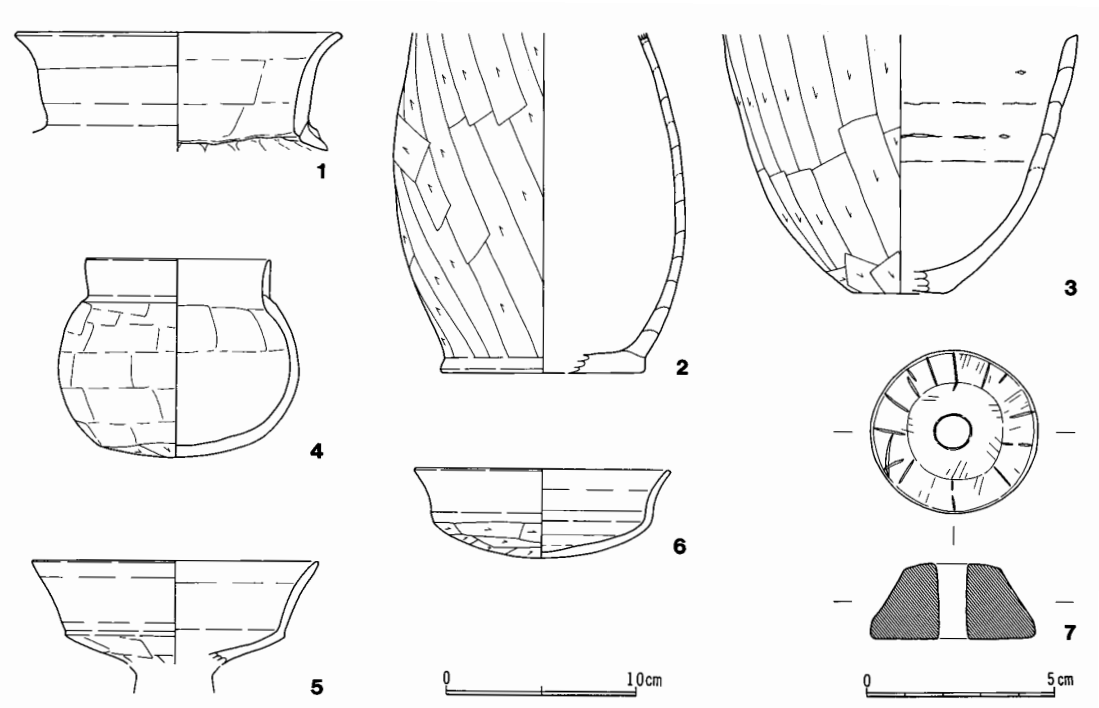
- 第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

居中央部の様相は不明であるが、周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居跡内から多数検出されているが、本住居跡に伴うと考えられるものは、P1～P5の5箇所である。P1～P4は、住居のほぼ対角線上に位置し、その配置から支柱穴と考えられるものである。形態は、長さ40cm前後の円形か楕円形を呈し、床面からの深さはいずれも40cm前後ある。P5は、住居の北東側コーナー部付近に位置し、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。形態は、60cm×35cmの楕円形を呈し、床面からの深さは40cmある。貯蔵穴内の覆土中からは、No6の坏が出土している。

カマドは、住居北側壁の中央付近に位置し、壁に対して若干斜めに向いて構築されている。上半部はすでに削平され、焚口部付近は第9号住居跡に切られており、燃烧部下半の一部だけが残存している。残存する部分での規模は、長さ72cm・最大幅83cmである。袖は、ロームブロックを多量に含む黄褐色土（カマド第1層）を住居の壁に直接貼り付けて構築している。厚さは、左側が20cm・28cmである。燃烧部は、非常に良く焼けて赤色化している。燃烧面（火床）は、住居の床を若干掘り窪めてほぼ平坦に作られている。

出土遺物は、カマド内からNo3の甕が、貯蔵穴内からNo6の坏が、住居周辺部の床面上からNo1の壺・No2の特異な形態の平底甕・No4の小形広口壺が出土している。これらの土器は、その出土状態から住居の廃絶に伴って、そのまま遺棄されたものと考えられる。土器以外では、No7の石製紡錘車が住居西側壁際の床面直上より1個出土しており、住居の南西側コーナー部付近の床面上には、長さ15cm程度の片岩が2個見られる。



第39図 第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A. 口縁部径17.4。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面ナデ、内面篋ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部のみ。G. 床面直上。
2	甕	A. 残存高18.0、底部径10.8。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/2。G. 床面直上。
3	甕	A. 底部径(5.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 3/4。G. カマド内。
4	小形 広口壺	A. 口縁部径9.7、器高10.5。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 3/4。G. 床面直上。H. 底部外面に黒斑あり。
5	高  坏	A. 口縁部径(15.2)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 坏部1/2。G. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径(13.6)、器高4.7。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/2。G. 貯蔵穴内。
7	石製 紡錘車	A. 直径4.4、高さ2.0、重さ49g。C. 表裏面研磨。側面は縦方向のケズリの後研磨。D. 滑石(片岩)。F. 完形。G. 床面直上。H. 側面に細い放射状の線刻を施す。

第11号住居跡 (第40図、図版11・12)

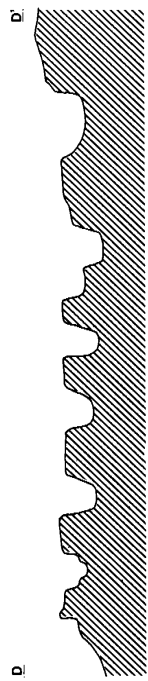
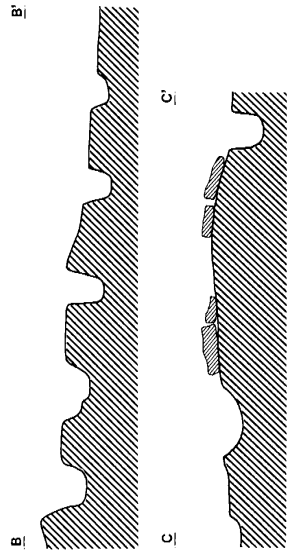
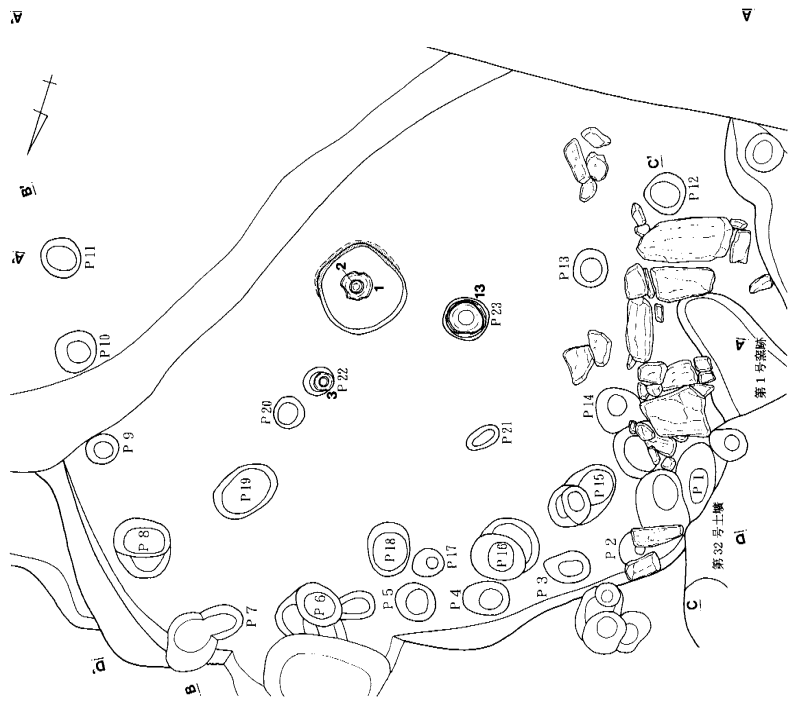
調査区南東端の谷に面する南側緩斜面に位置し、北東側には縄文時代後期の第7号住居跡が近接している。住居跡の上面と南側半分は谷によって削平されており、また北側上半は第7号溝跡や第8号溝跡に、東側は第32号土壇・第1号窯状遺構跡・第2号窯状遺構跡等によって切られており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、遺構の遺物存状態が悪いため明確ではないが、残存する壁の一部や側柱穴の配置から推測すると、コーナー部や壁がやや丸みをもつ隅丸方形ぎみの形態を呈していたものと思われる。規模は、東西方向が約5.40m、南北方向は4.40mまで測れる。

壁は、北側と東側の一部が残存している。いずれも緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは東側壁で最高20cmあるが、東側壁の上半は崩れている。

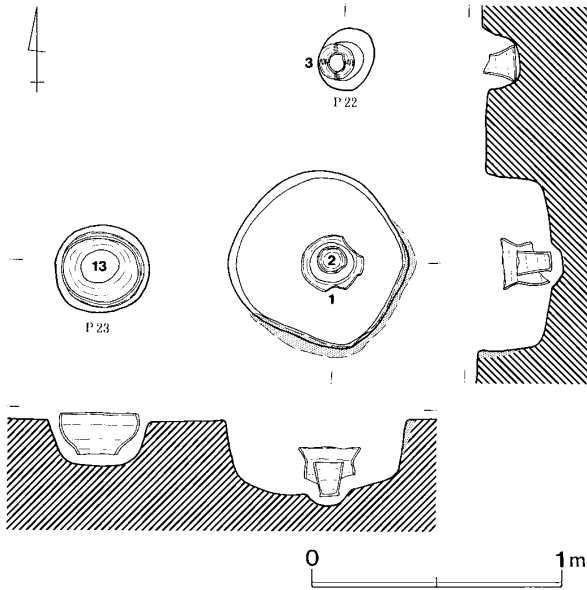
床は、ほぼ平坦に作られているが、全体的にやや軟弱である。住居の西側の床面上には、部分的に比較的大きな石を規則性をもって平坦に並べた敷石が施されており、その形態から住居の入口部と考えられる。

ピットは、住居跡内からP1～P23など計23箇所以上が検出されているが、これらのすべてが本住居跡と関係するかは不明である。これらの中で、住居の壁際を巡ると推測されるP1～P12は、その配列から側柱穴と考えられるものである。これらの側柱穴は、柱穴間の間隔が比較的狭く、平面形は直径30cm前後の円形を呈するものが主体で、床面からの深さは20cm～30cmある。P13とP14は、直径35cm前後の円形を呈し、床面からの深さが15cm～20cm程度のものである。入口部と考えられる敷石の両端にある大形の石のそれぞれ内側に近接して位置しており、入口部の施設と関係するピットである可能性が考えられる。炉の北側約70cmに位置するP22は、平面形が25cm×20cmの楕円形を呈し、床面からの深さが15cmの浅いもので、中からはNo3の小形の深鉢が伏せた状態で出土し



第40图 第11号住居跡





第41図 第11号住居跡炉

ている。土器は、堀之内1式と考えられるものであり、住居の床面に沿って割れていることから、本住居跡より古い可能性が高い。P23は、炉の西側30cmの炉と入口部を結んだ直線上に位置する。平面形は直径37cmの円形を呈し、床面からの深さは22cmある。中にはNo13の粗製深鉢の上半部が正位に埋設されており、おそらく土器の口縁部は住居の床面に接するかあるいは露出していたのではないと思われる。

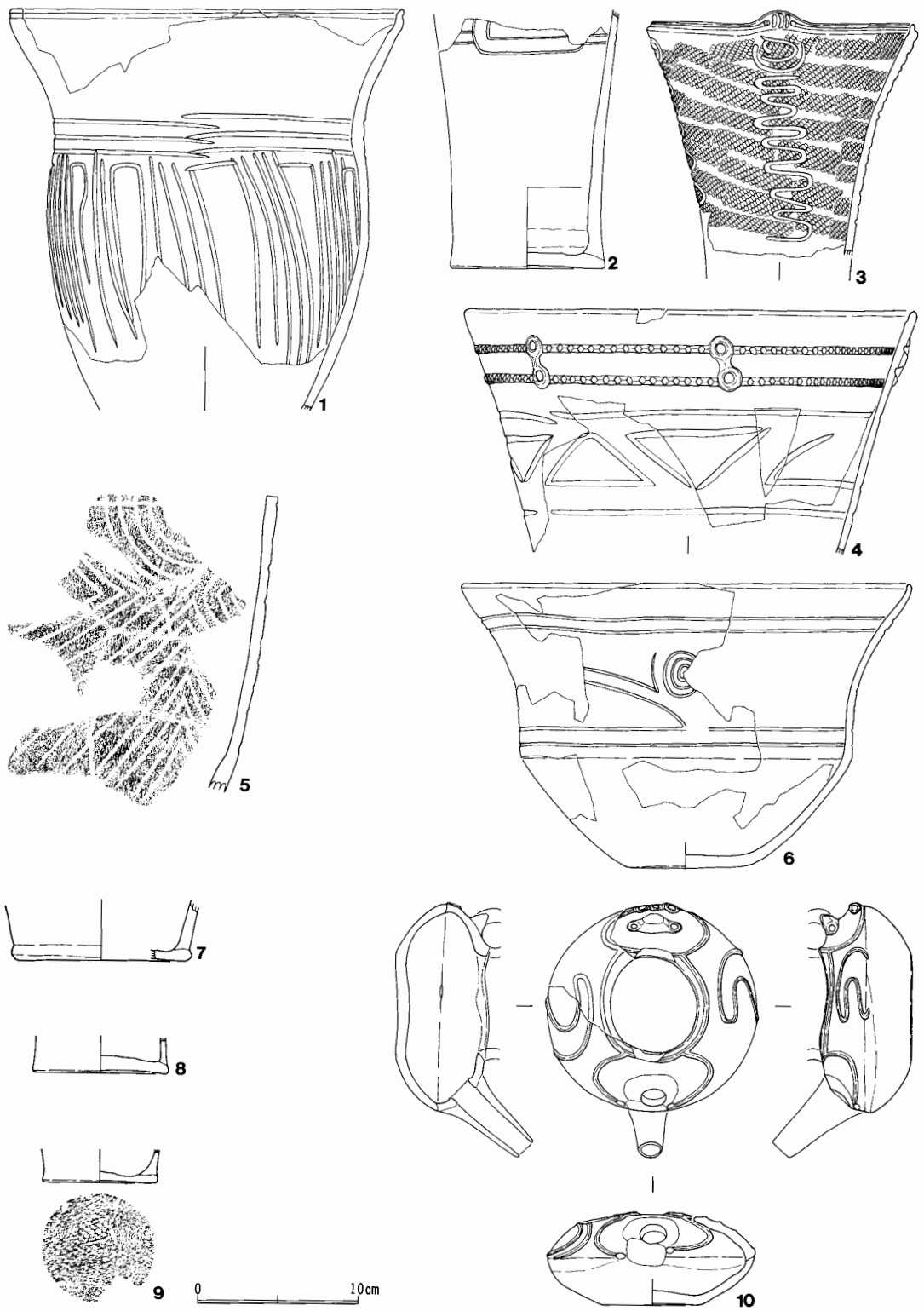
炉は、住居中央部のやや南側に寄った位置にある。平面形は、67cm×67cmのコーナー部の丸みが強い方形ぎみの形態である。壁は、直線的に立ち上がり、上半部は焼けて赤色化している。床面からの深さは34cmで、

底面は広くやや丸みをもっている。炉内の中央部には、炉体土器としてNo1の胴部の下半を欠失した深鉢の中にNo2の胴部の上半を欠失した深鉢を入れて、入れ子状に2個体の土器を埋設している。

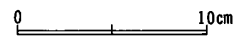
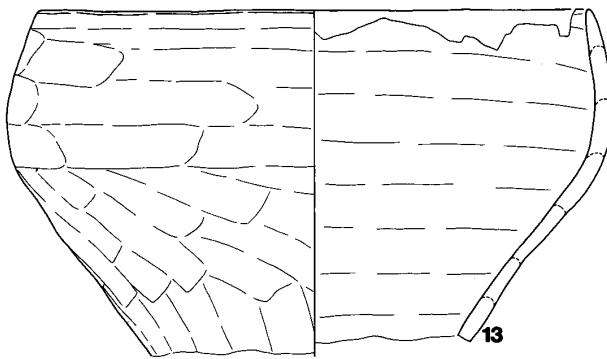
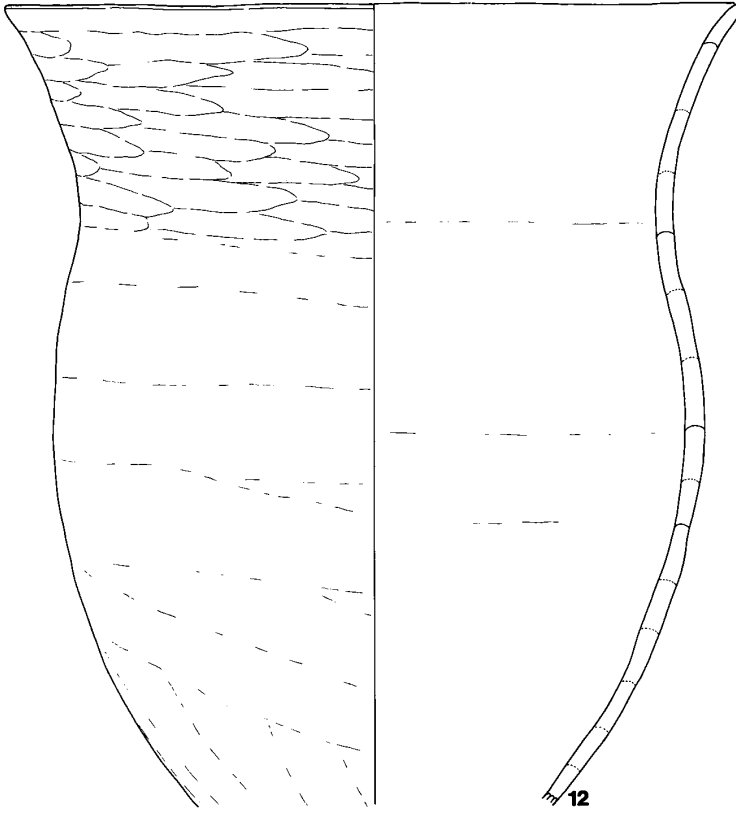
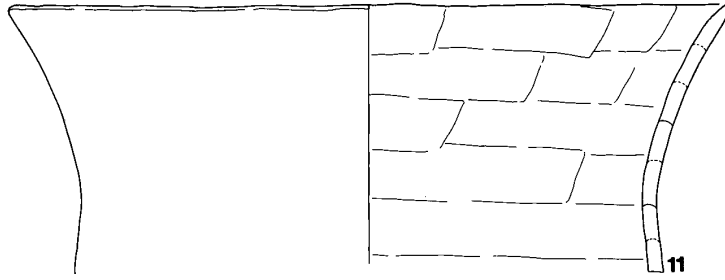
出土遺物は、住居内西側の床面付近から覆土中にかけて、多量の土器片と自然石が多く出土している。これらの多量の土器片は、原形を留めているものはなく、その出土層位は住居北側に向かって徐々に高くなっており、おそらく本住居の廃絶後に北側の斜面上方から人為的に投棄されたか、あるいは流れ込んだものであろう。土器片は、堀之内1式でも新しい様相のものが主体で、形式は深鉢が多いが、無紋の粗製土器の破片が大半を占めている。土器以外では、複数の大形の自然石を利用した不定形の凹石と、磨石や石皿の破片及び石鏃などの石器が出土している（図版42・43）。また、石皿の破片や覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

第11号住居跡出土遺物観察表

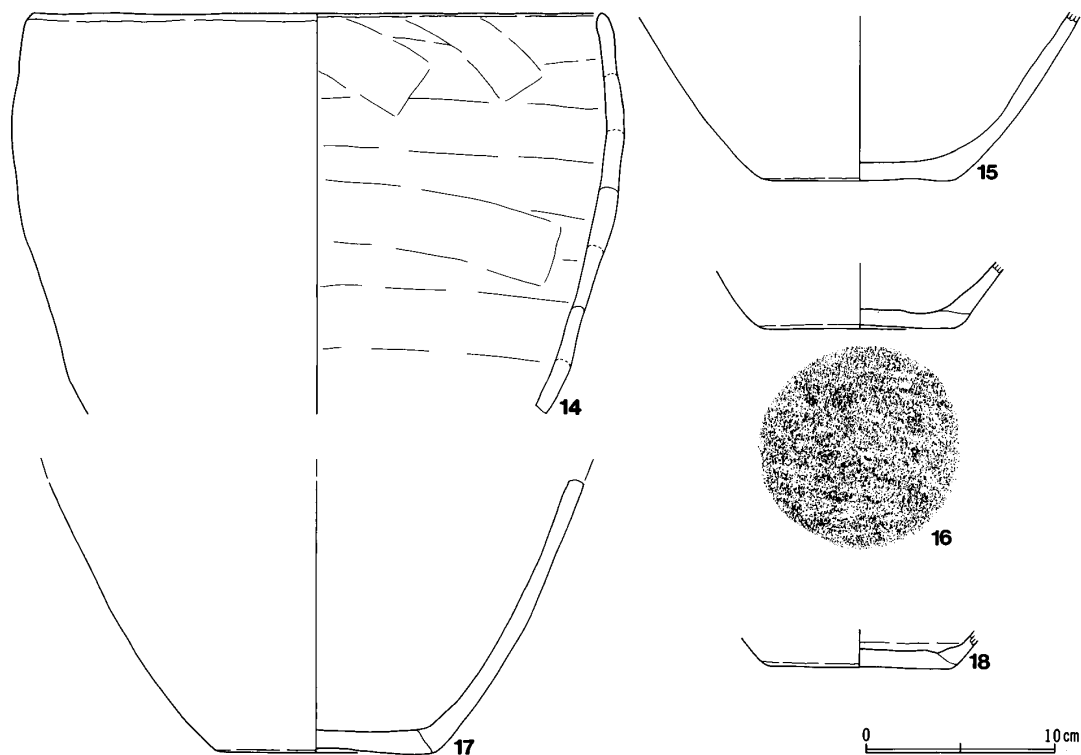
1	深鉢	A. 口縁部径24.4、残存高25.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともミガキ。口唇部外面1条沈線。胴部外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 胴部下半及び底部欠失。G. 炉内。H. 炉体土器（外側）。
2	深鉢	A. 残存高16.0、底部径9.6。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部内外面縦方向のミガキ。底部内外面ナデ。胴部外面上半沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-明茶褐色。F. 胴部上半欠失。G. 炉内。H. 炉体土器（内側）。
3	深鉢	A. 口縁部径16.8、残存高15.1。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面上半地文LR施文後、4単位の縦位蛇行沈線。内外面施文部外ミガキ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 胴部下半欠失。G. P22内（逆位）。H. 口縁部小把手は2単位。
4	深鉢	A. 口縁部径28.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面鎖状貼付文。胴部外面上半沈線文。内外ともナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 胴部上半3/4。G. 覆土中。H. 8の字状貼付文は5単位。
5	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面沈線文。内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色、肉-黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。



第42图 第11号住居跡出土遺物（1）



第43图 第11号住居跡出土遺物（2）



第44図 第11号住居跡出土遺物（3）

6	鉢	A. 口縁部径 (27.8)、器高17.6、底部径7.6。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。外面沈線文。D. 白色粒、赤色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 1/3。G. 炉内、炉上面。
7	深鉢	A. 底部径11.2。B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 底部1/2。G. 覆土中。
8	深鉢	A. 底部径8.4。B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 白色粒。E. 外-淡褐色、内-淡灰褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。H. 底部外縁は二次焼成を受けて赤色化している。
9	深鉢	A. 底部径7.2。B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 白色粒。E. 外-明茶褐色、内-暗褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。H. 底部外面網代痕あり。
10	注口	A. 口縁部径5.8、残存高5.8、底部径6.2。B. 粘土紐積み上げ成形。注口貼り付け。C. 外面隆線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-黒色。F. 3/4。注口部・把手部剥離。G. 床面付近。
11	深鉢	A. 口縁部径 (38.0)、B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 口縁部1/4。G. 覆土中。
12	深鉢	A. 口縁部径38.6、残存高42.4。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面指ナデ。胴部外面及び内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-暗灰褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
13	深鉢	A. 口縁部径29.0、残存高18.2。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面とも篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 上半部のみ。G. P23内。
14	深鉢	A. 口縁部径 (30.0)、残存高21.1。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 1/5。G. 床面付近。
15	深鉢	A. 底部径 (10.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。

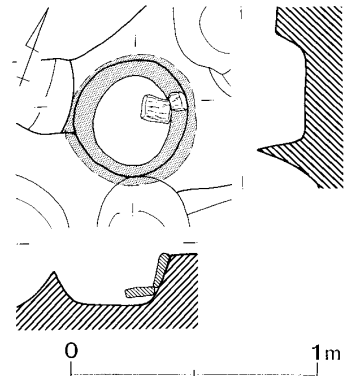
16	深鉢	A. 底部径(10.0)。B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-黒灰褐色。F. 底部のみ。G. 床面付近。
17	深鉢	A. 底部径11.5、残存高14.4。B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 胴部下半のみ。G. 覆土中。
18	深鉢	A. 底部径9.6。B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗灰褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。

### 第12号住居跡 (第45図、図版13)

調査区の南東側に位置する。本住居跡は、すでに削平されており、残存しているのは住居の炉だけである。炉の周囲は、土壙や溝跡や第11号住居跡などの多くの遺構によって切られているため、本住居跡の形態は不明である。屋外の単独炉という見方もあろうが、本遺跡では他に例がなく何とも判断できない。

炉は、本遺跡でこれまでに検出された縄文時代後期住居跡の炉の中では規模がやや小さく、直径45cm程度の円形を呈している。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、壁面は良く焼けて赤色化している。確認面からの深さは20cmあり、底面は広く平坦である。覆土は、ローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土であるが、炉のわりには焼土粒子の含有が少ない。

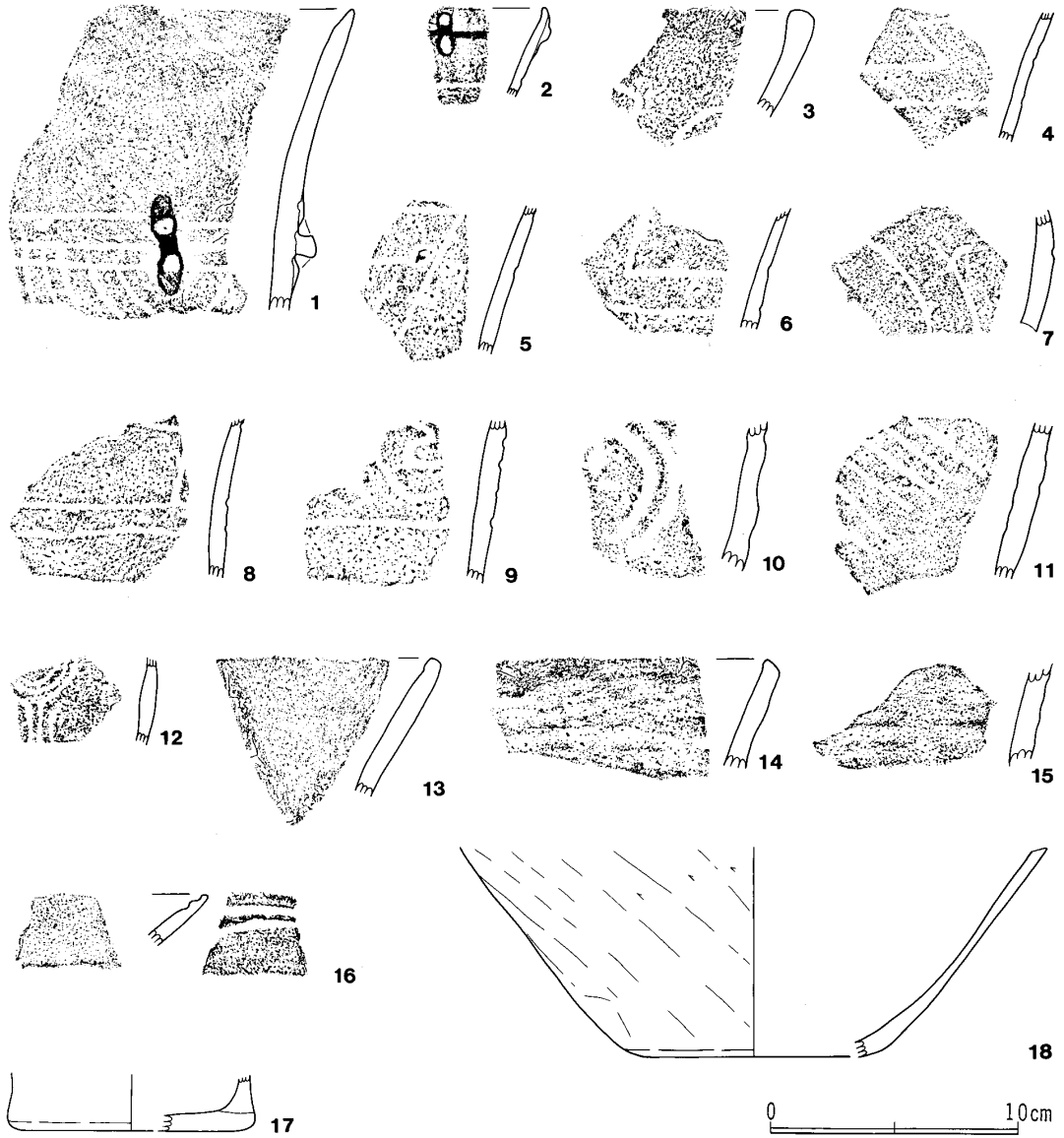
遺物は、炉の覆土中や炉の周辺から、縄文時代後期の堀之内2式を主体とする土器片が少量出土しただけである。また、土器以外では、自然石の片岩が2個外から落ち込んだような状態で出土している。



第45図 第12号住居跡炉

### 第12号住居跡出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。胴部外面貼付文と沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部外面鎖状貼付文。胴部外面沈線文。D. 白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 破片。G. 炉内。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-淡灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒。E. 内外-乳白色。F. 破片。G. 炉内。
5	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
6	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 外-黒褐色、内-暗茶褐色。F. 破片。G. 炉内。
7	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
8	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒、褐色粒。E. 外-黒褐色、内-淡褐色。F. 破片。G. 炉内。



第46図 第12号住居跡出土遺物

9	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 破片。G. 炉内。
10	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 破片。G. 炉内。
11	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 白色粒。E. 外-淡灰褐色、内-淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
12	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡灰褐色。F. 破片。G. 炉内。
13	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 破片。G. 炉内。

14	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-暗灰褐色。F. 破片。G. 炉内。
15	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒。E. 外-暗灰褐色、内-暗茶褐色。F. 破片。G. 炉内。
16	浅鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面沈線文。D. 白色粒、褐色粒。E. 内外-暗褐色、肉-黒褐色。F. 破片。G. 炉内。
17	深鉢	B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-暗茶褐色。F. 破片。G. 炉内。
18	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。

## 2. 掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡（第47図、図版14）

調査内区の北西側に位置する。重複する第4号住居跡・第2号掘立柱建物跡・第2号土壌・第3号土壌を切り、第3号溝跡に切られている。

建物跡の形態は、南西から北東方向が4間、北西から南東方向が3間の長方形を呈する側柱式である。規模は、南西から北東方向が7.60m、北西から南東方向が5.10mある。建物跡の長軸方位は、N-50°-Eを向いている。

柱通りは比較的良好で、各側柱の柱穴列ともほぼ直線上に並んでいる。柱心間は、南西から北東方向の側柱穴が1間1.90m、北西から南東方向の側柱穴が1間1.70mのほぼ等間隔である。

柱穴は、直径50cm前後の円形を呈するものが主体であるが、中にはP12のようにやや角が張り四角ばい形態のものもある。確認面からの深さは、P2の最低42cmからP7とP11の最高64cmあり、全体的に深く揃っている。

覆土は、上半がロームブロックを均一に含む暗黄灰色土（第5層）、下半が鉄斑を均一に含む黒灰色土（第6層）のものが主体である。多くの柱穴に柱痕（第4層）が見られるが、柱の根固めの痕跡や礎石は見られない。

遺物は、柱穴覆土中から縄文時代後期と古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

本建物跡の時期は、確実に遺構に伴うと考えられる遺物がないため明確ではないが、柱穴覆土中にB軽石を含むことから、B軽石降下以降の中世の所産と推測される。

#### 第1号掘立柱建物跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（B軽石・鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（B軽石・ローム粒子・鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗黄灰色土層（B軽石・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

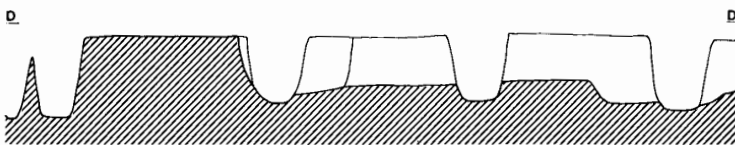
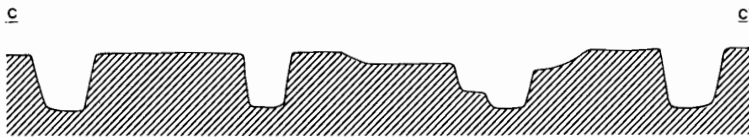
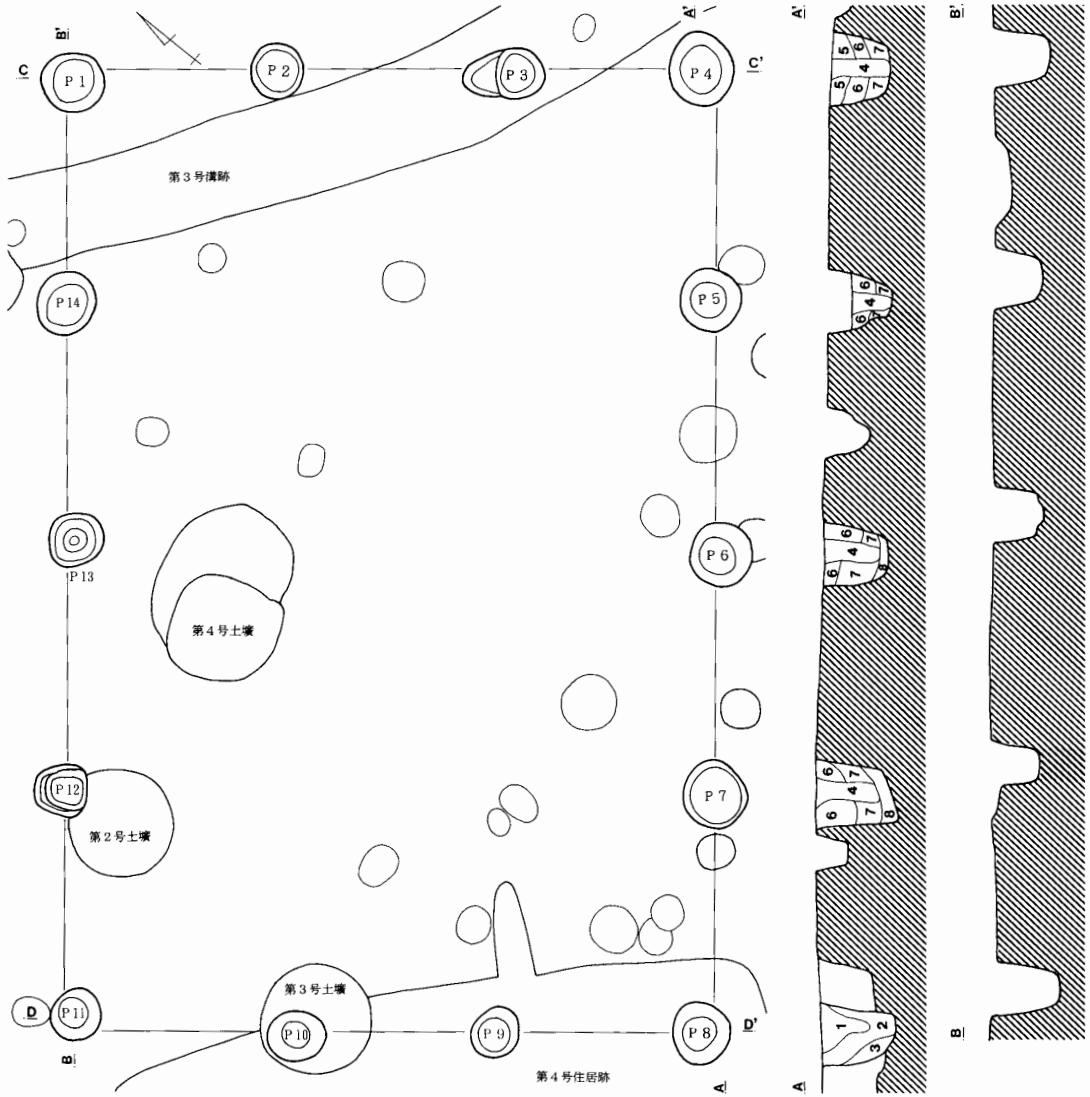
第4層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、B軽石・ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗黄灰色土層（B軽石・ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7層：黒灰色土層（鉄斑を均一に、B軽石・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8層：暗黄褐色土層（ロームブロック・砂利を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第47图 第1号掘立柱建物跡

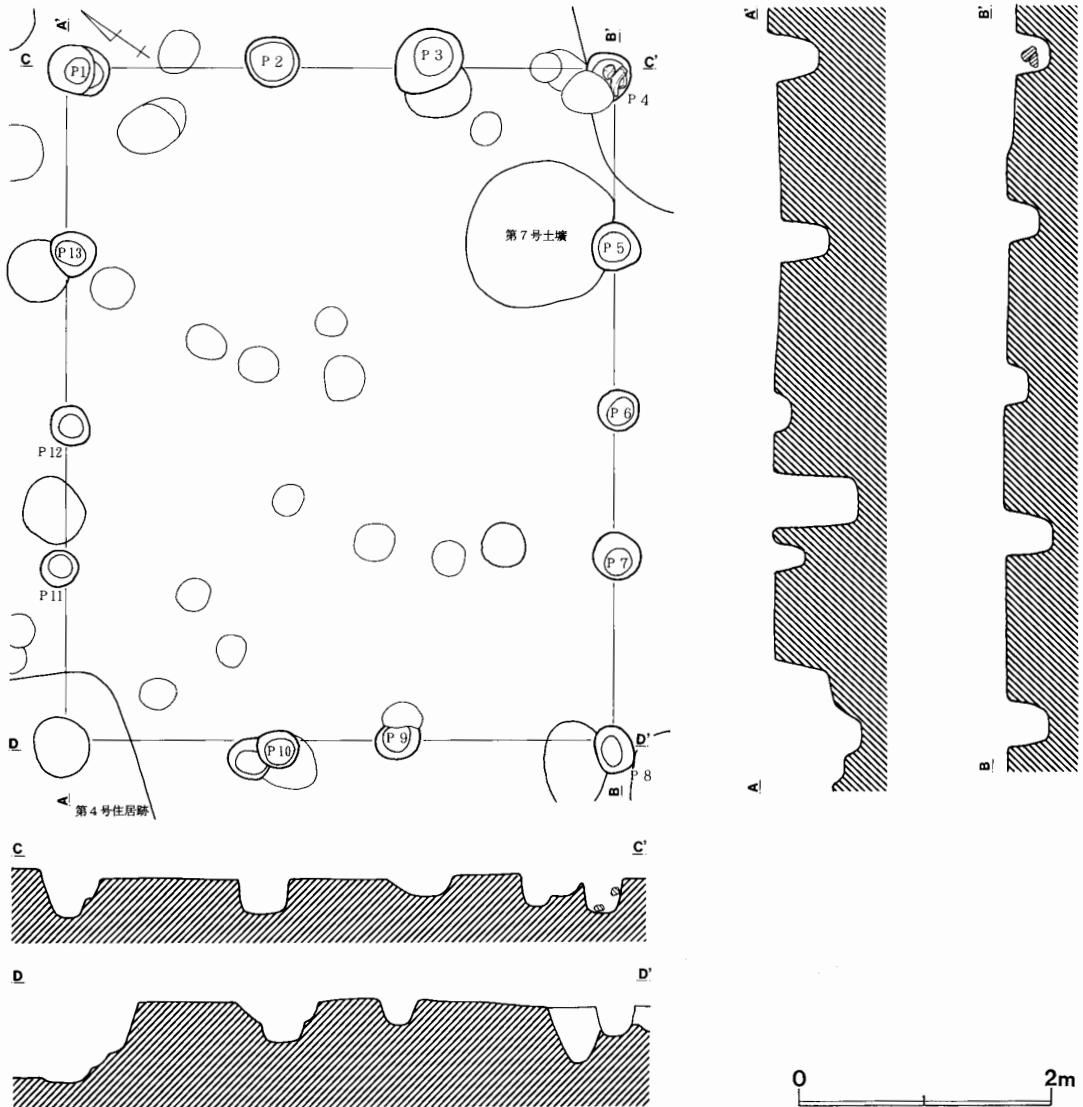


第2号掘立柱建物跡（第48図、図版14）

調査区内の北側に位置する。重複する第3号掘立柱建物跡・第4号住居跡・第1号竪穴状遺構・第7号土塼・第10号土塼などを切り、北側の第1号掘立柱建物跡に切られている。

建物跡の形態は、南西から北東方向が4間、北西から南東方向が3間の長方形を呈する側柱式である。規模は、南西から北東方向が5.30m、北西から南東方向が4.30mある。建物跡の長軸方位は、 $N-54^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りは、建物跡の北東側と南東側の柱穴列については比較的良いが、北西側と南西側の柱穴列はやや蛇行ぎみである。柱心間は、建物の長軸・短軸両方向とも1間の間隔が不揃いである。長軸方向の側柱穴の間隔は、4間の中で両端の1間がいずれも1.40mで、真ん中の2間はいずれも1間



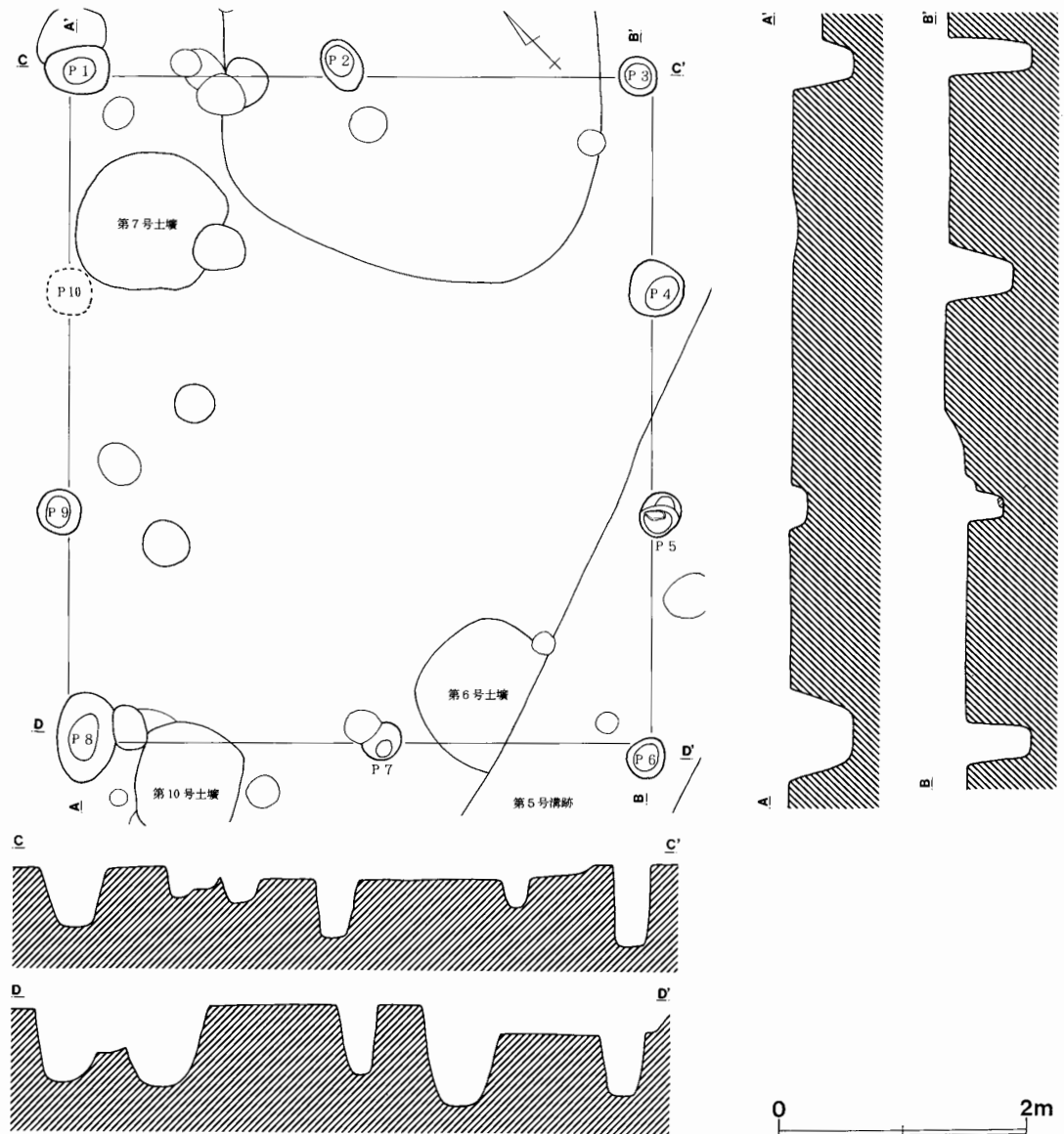
第48図 第2号掘立柱建物跡

1.25mで短くなっている。短軸方向の側柱穴の間隔は、長軸方向と同じく3間の中で両端の1間がいずれも1.60mであるのに対して、真ん中の1間は1.10mで他に比べて極端に狭くなっている。

柱穴は、直径35cm前後の円形を呈するものが主体である。確認面からの深さは、P12の最低12cmからP7の最高34cmまでややばらつきが見られる。P4の中からは自然石が数個出土しているが、その出土状況から柱の根固めや礎石として利用されたものではなく、おそらく周囲から混入したものであろう。柱穴の覆土は、B軽石含む暗灰褐色土を主体としており、柱痕は見られなかった。

出土遺物は、柱穴覆土中から縄文時代後期の土器片が数片出土しただけである。

本建物跡の時期は、本建物跡に伴う遺物がないため明確ではないが、遺構の重複関係や柱穴覆土



第49図 第3号掘立柱建物跡

の状態から、B軽石降下以降の中世の所産と推測される。

### 第3号掘立柱建物跡（第49図、図版15）

調査区の北側に位置し、西側には第5号住居跡が、南東側には第1号住居跡がある。重複する古墳時代後期の第1号竪穴状遺構を切り、中世の第2号掘立柱建物跡や第5号溝跡に切られている。

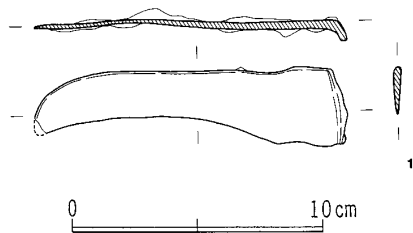
建物跡の形態は、南西から北東方向が3間、北西から南東方向が2間の長方形を呈する側柱式と考えられるが、建物の北西側側柱穴列のP10は確認できなかった。規模は、南西から北東方向が5.40m、北西から南東方向が4.70mある。建物跡の長軸方位は、 $N-44^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りは、あまり良くなく、各側柱の柱穴列ともやや蛇行ぎみの配列である。柱心間は、南西から北東方向の側柱穴が1間1.80m、北西から南東方向の側柱穴が1間2.35mのほぼ等間隔である。

柱穴の形態は様々で、長さ30cm～70cmの円形や楕円形を呈している。確認面からの深さは、P9の最低16cmからP3とP6の最高68cmまでであるが、P9以外はいずれも45cm～60cmで、比較的深いものが多い。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗灰褐色土で、柱痕は見られなかった。

出土遺物は、P6の覆土中より古墳時代後期と推測される鉄鎌（第50図 No1）が出土している。その他では、P5から拳大の片岩が1個出土し、柱穴の覆土中より縄文時代後期と古墳時代後期の土器片が数片出土しただけである。

本建物跡の時期は、遺構の重複関係や柱穴覆土の状態及びその形態から見て、B軽石降下以後の中世の所産と推測される。



第50図 第3号掘立柱建物跡出土遺物

#### 第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	鉄製鎌	A. 長さ12.5、幅3.2、厚さ0.25、重さ27g。G. P6内。H. 刃部はかなり磨り減って、幅が狭くなっている。
---	-----	--

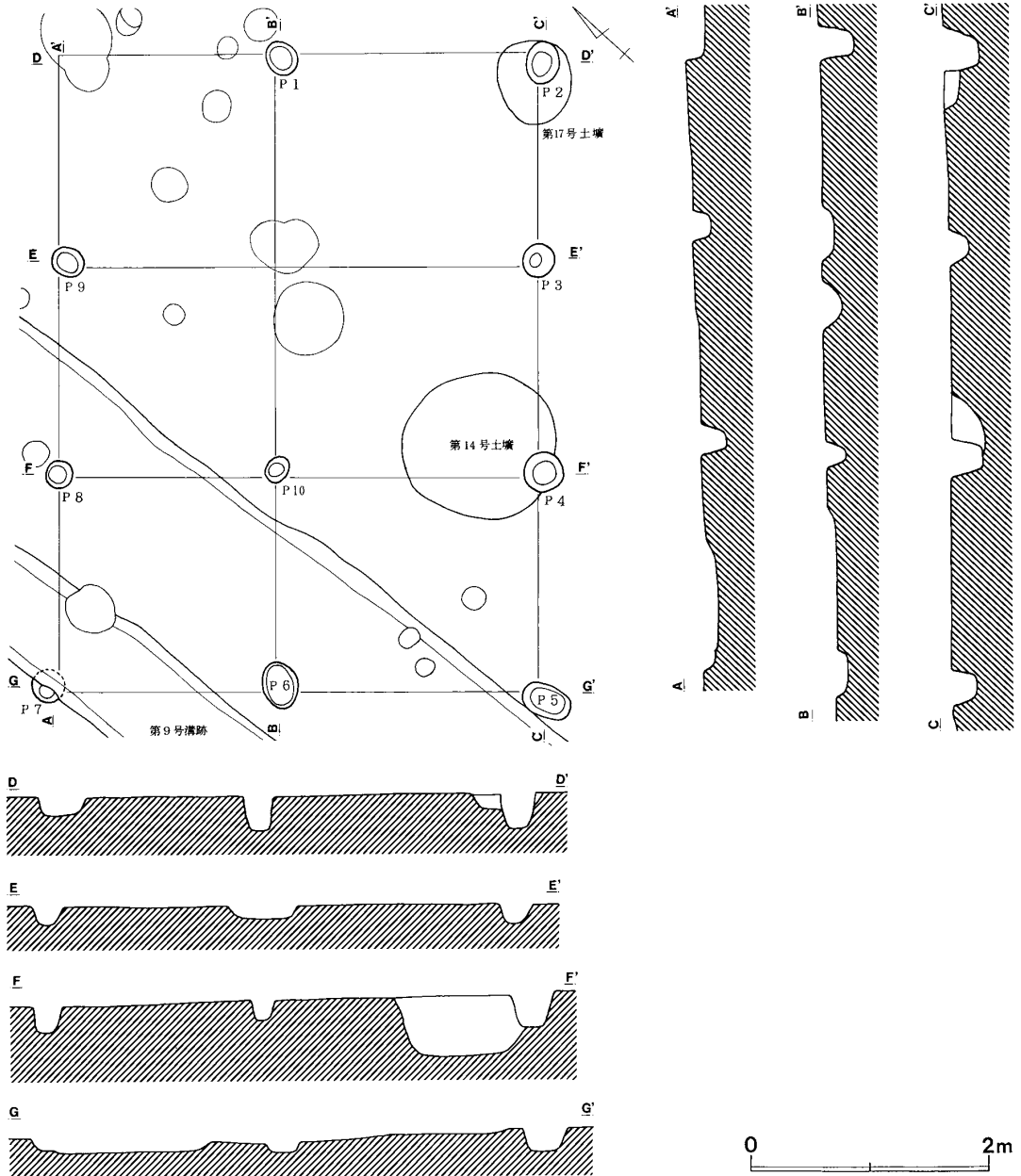
### 第4号掘立柱建物跡（第51図、図版15）

調査区中央部の西側寄りに位置し、北側には第5号住居跡と第5号溝跡が、東側には第2号住居跡と第3号住居跡が近接している。重複する第14号土壇を切り、第9号溝跡に切られている。本建物跡の西側半分は、後世の耕作により5cm程度段状に削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

建物跡の形態は、南西から北東方向が3間、北西から南東方向が2間の長方形を呈する総柱式である。規模は、南西から北東方向が5.40m、北西から南東方向が4.00mある。建物跡の長軸方位は、 $N-49^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りは、比較的良好で、側柱穴と束柱ともほぼ直線上に配列されている。柱心間は、建物の南西から北東の長軸方向の3間は、ほぼ1間1.80mの等間隔であるが、北西から南東の短軸方向の2間は、1.80mと2.20mで間隔が異なっている。

柱穴は、長さ20cm～40cmの円形や楕円形を呈している。確認面からの深さは、概ね20cm～30cm程



第51図 第4号掘立柱建物跡

度のものが主体である。覆土は、B軽石とローム粒子を均一に含む暗灰褐色土で、柱痕は見られなかった。

出土遺物は、柱穴覆土中から縄文時代後期の土器片が数片出土しただけである。

本建物跡の時期は、本建物跡に伴う遺物がないため明確ではないが、柱穴覆土の状態からB軽石降下以降の中世の所産と推測される。

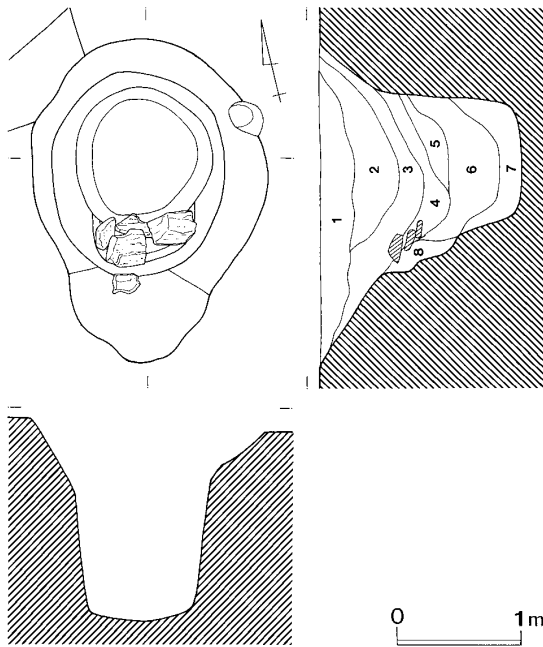
### 3. 井戸跡

#### 第1号井戸跡 (第52図、図版16)

調査区内の中央部に位置し、北側には第9号住居跡が、南側には第6号溝跡が近接している。古墳時代後期の第10号住居跡と重複し、それを切っている。

井戸掘り方の平面形は、南北方向に長い楕円形ぎみの形態であるが、井筒の南側に緩やかな張り出しを伴う形になっている。規模は、南北方向が2.60m、東西方向は1.90mある。確認面からの深さは1.62mある。断面は、いわゆる漏斗状の形態で、上半部は碗状に緩やかに落ち込み、下半部は直径1.10mの円柱状に深くなっている。

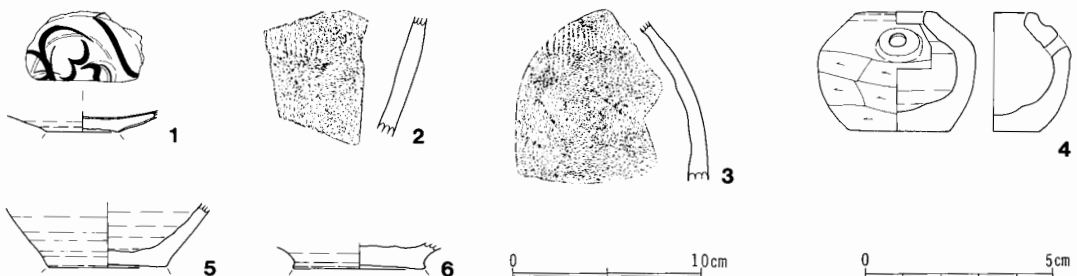
掘り方上半部の南側は、井筒に接して下が階段状に掘削され、その上は緩やかなスロープ状の張り出しがある。その階段状の掘り込み部分には、比較的大きな片岩の石が重なって出土している。この井戸上半部の階段状の張り出しは、当地域の中世以降の井戸によく見られるもので、おそらく



第52図 第1号井戸跡

#### 第1号井戸跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（B軽石・鉄斑を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（B軽石・鉄斑・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒灰褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：黒灰褐色土層（鉄斑・細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：茶灰色土層（鉄斑・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：黒灰色土層（小石・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：暗黄灰色土層（ローム粒子・砂利を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第53図 第1号井戸跡出土遺物

井戸掘削時の作業足場として利用された施設ではないかと思われる。井戸内には、石組みや木枠及び桶等の痕跡が見られないことから、井筒施設は井戸の廃棄に伴って抜き取られたか、あるいは素掘りの井戸であったと推測される。

出土遺物は、覆土中から中世の白磁皿（No 1）、常滑窯系の甕（No 2・3）と水滴（No 4）、在地の土師器皿（No 5・6）などが出土している。

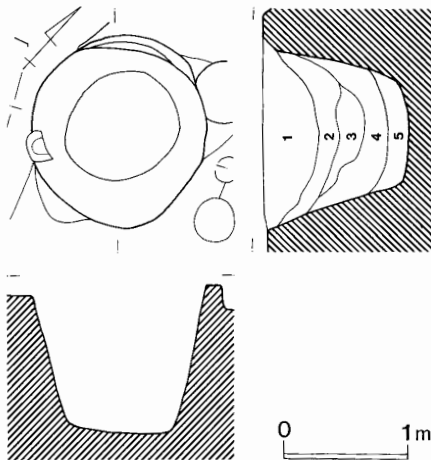
第 1 号井戸跡出土遺物観察表

1	白磁皿	A. 底部径3.8。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒。E. 内外一乳白色。F. 底部1/2。G. 覆土中。H. 内面に篋描の草花文風の文様を施す。
2	常滑系甕	C. 内外面ナデ。D. 白色粒、淡褐色粒。E. 外一暗茶褐色、内一淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に押印文を施す。
3	常滑系甕	B. 粘土紐積み上げ成形。C内外面ナデ。D. 白色粒、淡褐色粒。E. 外一暗灰色、内一暗褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に自然釉付着。外面に押印文を施す。
4	常滑系水滴	A. 口縁部径2.2、器高3.2、底部径2.7。B. ロクロ成形。C. 胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 完形。G. 覆土中。H. 内面に墨付着。
5	土師器皿	A. 底部径 (6.4)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
6	土師器皿	A. 底部径 (7.0)。B. ロクロ成形。C. 体部外面回転ナデ。底部回転糸切り、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/2。G. 覆土中。

第 2 号井戸跡（第54図、図版16）

調査区内の南西側に位置し、北東側約 6 mには第 1 号井戸跡が、東側約 3.5 mには第 4 号井戸跡が、南西側約 4 mには第 3 号井戸跡があり、南側は第 6 号溝跡が近接している。

井戸掘り方の形態は、ほぼ円形に近い形態である。規模は直径1.40mで、確認面からの深さは1.18 mある。断面の形態は、いわゆる筒状であるが、壁は直線的にやや傾斜している。底面は広く、やや丸みをもっている。石組みや木枠等がなく、また井筒施設が抜き取られたような痕跡が見られないことから、おそらく素掘りの井戸であったものと推測される。



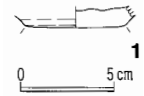
第54図 第 2 号井戸跡

第 2 号井戸跡土層説明

- 第 1 層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・B軽石・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 2 層：黒灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 3 層：黒灰色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 4 層：黒褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 5 層：暗黄褐色土層（ロームブロック・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

出土遺物は、覆土中から中世土師器皿等の土器片が少量と、縄文時代の分銅型打製石斧の破片が1点出土しただけである。

本井戸跡の時期は、出土遺物が少ないため明確ではないが、覆土の状態やNo 1の土師器皿の破片から、中世の所産と考えられる。



第55図 第2号井戸跡出土遺物

第2号井戸跡出土遺物観察表

1	土師器皿	A. 底部径5.4。B. ロクロ成形。C. 底部外面回転糸切り。内面未調整。D. 赤色粒、白色粒。 E. 内外-淡褐色。F. 底部1/2。G. 覆土中。
---	------	---

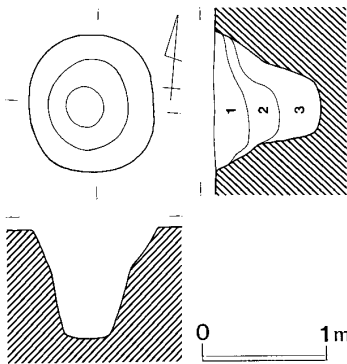
第3号井戸跡 (第566図、図版17)

調査区内の南西側に位置し、北東側約4mには第2号井戸跡がある。遺構上面は、耕作による段状の削平を受けている。

井戸掘り方の形態は、若干南北方向に長い円形ぎみである。規模は、南北方向が1.10m、東西方向が1.00mを測り、確認面からの深さは88cmある。断面の形態は、上半部はやや緩やかに傾斜し、下半部は上半部より角度を変えて筒状に落ち込んでいる。井戸内には、石組みや木枠及び桶等の痕跡が見られないことから、井筒施設は井戸の廃棄に伴って抜き取られたか、あるいは素掘りの井戸であったと推測される。

出土遺物は、覆土中より縄文時代後期と古墳時代後期の土器片が数片出土しただけである。

本井戸跡の時期は、出土遺物が少ないため明確ではないが、覆土の状態からは中世の所産と推測される。



第56図 第3号井戸跡

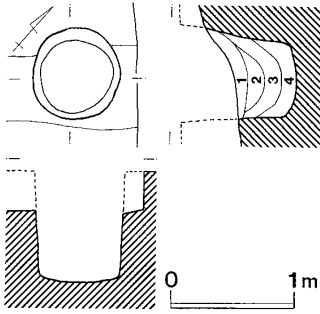
第3号井戸跡土層説明

- 第1層：暗灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：黒灰色土層（ローム粒子・炭化粒子・細砂ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4号井戸跡 (第57図、図版17)

調査区内の南側に位置する。北側約5mには第1号井戸跡が、西側約3.5mには第2号井戸跡がある。本井戸跡は、上半部を第6号溝跡に切られており、残存しているのは下半部だけである。

井戸下半部の形態は、ほぼ整った円形で、第6号溝跡底面からの深さは58cmで、溝上面の確認面からの深さは約90cmある。壁は垂直ぎみで、円筒状に深くなっている。底面は広く、平坦である。井筒内に、石組や木枠等の施設を伴っていたような形跡は見られない。



第57図 第4号井戸跡

#### 第4号井戸跡土層説明

- 第1層：黒灰色土層（B軽石・ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第3層：暗灰色土層（鉄斑・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する）  
 第4層：暗灰褐色土層（鉄斑・ローム粒子・細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは他の井戸と同じく中世の所産と推測される。

## 4. 窯状遺構

### 第1号窯状遺構（第58図、図版18）

調査区内の南端に位置し、第2号窯状遺構や第3号窯状遺構と方向を揃えて重複している。第11号住居跡と第2号窯状遺構を切り、遺構の中央部を第32号土壌に切られている。遺構の上半部は、谷の湧水によって削平され、残存しているのは窯状の底面付近だけであるため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。本窯状遺構は、粘土などを使用した痕跡が見られないため、あまり手をかけない素掘りのものであったようであるが、その性格は不明である。

形態は、北西から南東方向に向かって細長いいわゆる舟形を呈している。規模は、全長4.32m、幅は残存する部分では最高1.30mまで測れる。長軸方向は、ほぼN-122°-Eを向いている。

底面は、舟底状にやや丸みをもっている。確認面からの深さは20cm程度で、南東側に向かって緩やかに傾斜している。南東側の端部には、第2号窯状遺構や第3号窯状遺構と同様に、煙道部の煙出しを持っていたものと推測され、その部分は焼けて赤色化している。底面は全体的にあまり焼けた痕跡は見られないが、底面直上を薄く被覆する炭化物層（第3層）の上に、焼土粒子を多量に含む赤褐色土層（第2層）が全体に広がっており、おそらくその面が火床面であったものと推測される。

出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片と古墳時代後期末頃（7世紀前半頃）の土師器杯の破片が、少量出土しただけである。

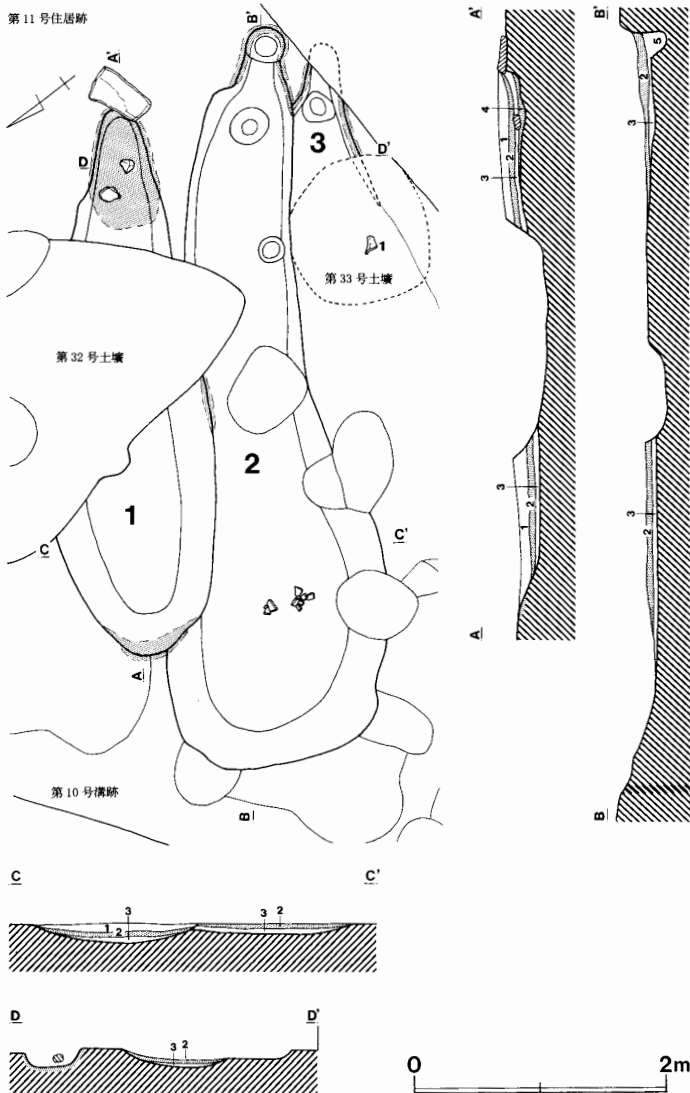
本窯状遺構の時期は、遺構の重複関係や出土土器からは、古墳時代後期末頃の可能性が推測されるが、明確ではない。

### 第2号窯状遺構（第58図、図版18）

調査区内の南端に位置し、第1号窯状遺構や第3号窯状遺構と方向を揃えて重複している。南西側の第3号窯状遺構を切り、北東側を第1号窯状遺構と第32号土壌に切られている。遺構の上半部は、谷の湧水によって削平され、かろうじて残存しているのは遺構の底面付近だけであるため、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。本窯状遺構も、粘土などを使用した痕跡が見られないため、第1号窯跡状遺構と同じくあまり手をかけない素掘りのものであったようである。



第11号住居跡



### 第1・2号窯状遺構土層説明

第1層：黒灰色土層（ローム粒子・マンガン塊・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：赤褐色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：赤褐色土層（焼土層。）

第5層：暗灰褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第58図 第1～3号窯状遺構

形態は、北西から南東方向に向かって細長い形であるが、北西側が広く南東側の煙道部に向かって徐々に幅が狭くなっている。規模は、全長5.86mで、幅は北西側で1.80mを測る。長軸方向は、ほぼN-124°-Eを向いている。

底面は、広くやや丸みをもっている。確認面からの深さは北西側で最高30cmあり、南東側に向かって若干傾斜している。南東側に向かって若干傾斜している。南東側の端部には、すでに天井部は崩壊しているが、直径30cmの円形を呈する掘り抜き式と考えられる煙道部があり、煙道部の壁は非常に良く焼けて赤色化している。底面自体は全体的にあまり焼けた痕跡は見られないが、第1号窯状遺構と同様に、底面直上を薄く被覆する炭化物層（第3層）の上の赤褐色土層（第2層）がおそらく火床面であったものと推測される。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期末頃（7世紀前半頃）の土師器甕の破片が少量出土しただけである。

本遺構の時期については、遺構の重複関係や出土土器から、古墳時代後期末頃の可能性が推測されるが明確ではない。

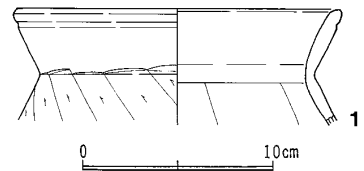
### 第3号窯状遺構（第58図、図版18）

調査区内の南端に位置し、第1号窯状遺構や第2号窯状遺構と方向を揃えて重複している。第33号土壌を切り、北東側を第2号窯状遺構に切られている。遺構の大半はすでに削平されており、残存しているのは南東側の煙道部付近だけであるため、本遺構の全容は不明である。

煙道部の形態は、第2号窯状遺構と同様に、直径30cm程度の円形を呈する掘り抜き式と考えられ、本体から約50cm程外側に延びてから上方に向かって開口している。確認面からの深さは、本体部分が10cm程度、煙道部は南東端で18cmある。煙道部の壁は、非常に良く焼けて赤色化している。

出土遺物は、本遺構と重複する縄文時代後期の第33号土壌の上面から、古墳時代後期の土師器甕（第59図 No1）の破片が少量出土しただけである。

本遺構の時期については、遺構の重複関係や出土土器から、古墳時代後期の可能性が推測されるが、第1号窯状遺構や第2号窯状遺構と同じく明確ではない。



第59図 第3号窯状遺構出土遺物

#### 第3号窯状遺構出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径 (17.5)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ。 D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-淡褐色。F. 口縁部1/3破片。G. 覆土中。
---	---	--

## 5. 竪穴状遺構

### 第1号竪穴状遺構（第60図、図版18）

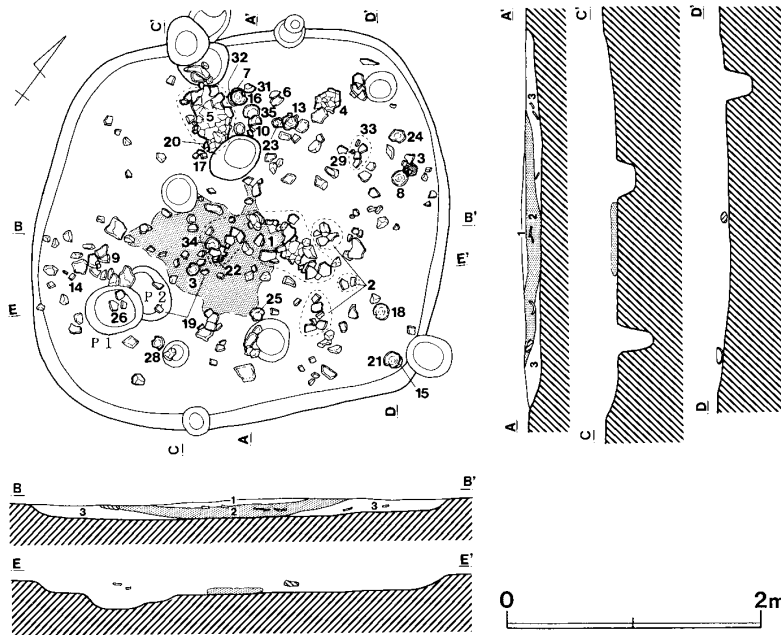
調査区内の北側に位置し、西側には第4号住居跡と第5号住居跡があり、南東側には第1号住居跡が近接している。本竪穴状遺構は、第2号掘立柱建物跡や第3号掘立柱建物跡と重複し、それらの柱穴によって遺構内の一部を切られている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸の不整四角形ばい形態であるが、各辺はやや張り、かなり歪んでいる。規模は、北西から南東方向が3.04m、北東から南西方向が3.30mを測る。

壁は、住居跡に比べるとかなり緩やかに丸みをもって立ち上がり、確認面からの深さは最高で12cmある。底面は、ほぼ平坦であるが、若干緩やかな起伏が見られる。貼床など床面の形成はされておらず、地山を掘り込んだ素掘りのままで、土間のように踏み固められた形跡も見られない。

ピットは、重複するP1とP2があるが、これらは本遺構に伴うか、あるいは本遺構よりも古い可能性があるものである。いずれも長さ45cm程度の楕円形を呈し、底面からの深さはP1が12cm、P2が6cmである。

出土遺物は、本遺構内のほぼ全域から、甕・小形甕・大形甕・坏などの土師器（第61・62図）や、石が多く出土している。これらの土器は、あまり破片が分散せず、原形を保っているものが比較的



第1号竖穴状遺構土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量に、焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、まりを有する。）

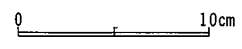
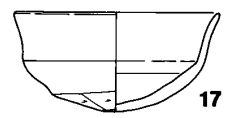
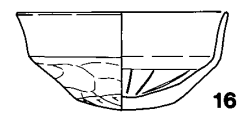
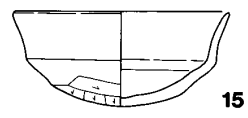
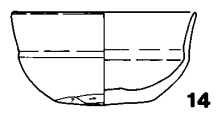
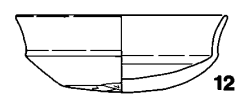
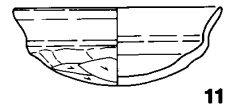
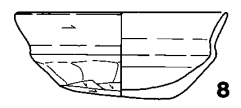
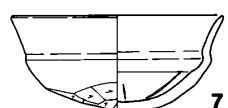
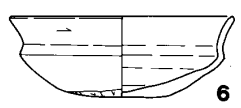
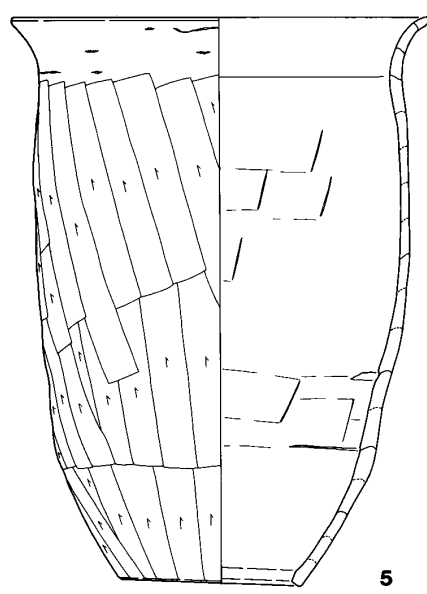
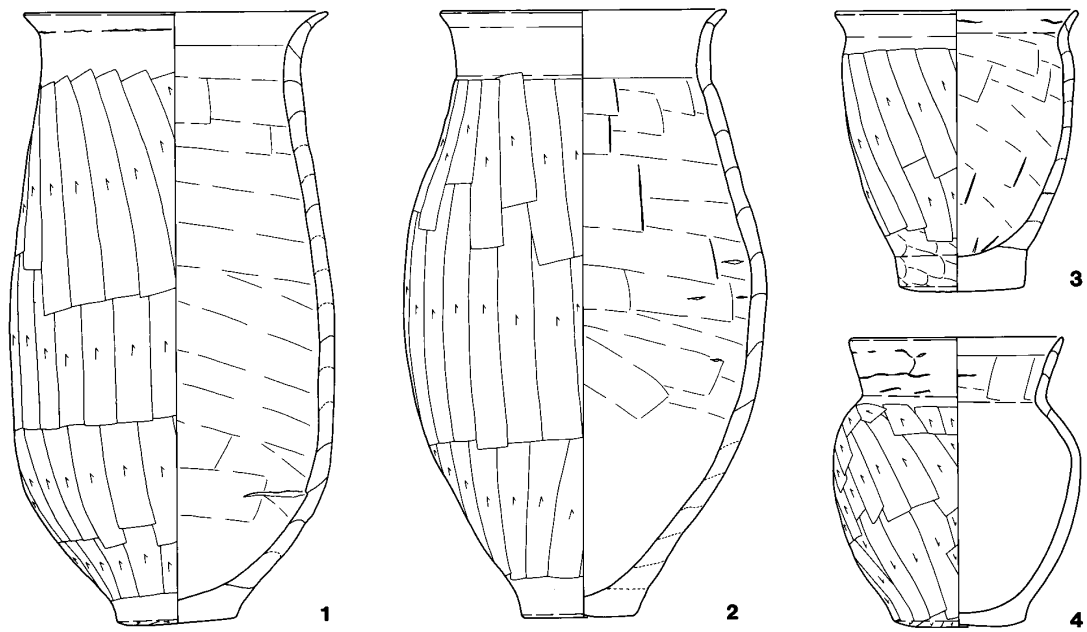
第60図 第1号竖穴状遺構

多く見られることから、時間をかけて累積したものではなく、短期間に一括廃棄されたものと推測されるが、小形の坏の中には重なって出土しているものもいくつかあり、本遺構内でこれらの土器を使って何だかの行為を行っていた可能性もある。これらの出土土器の中で主体を占める坏類は、当地域の住居跡から出土する一般的な坏とはやや異なり、口縁部径が10cm程度の小ぶりなものばかりである。本竖穴状遺構よりも時期がやや新しく、坏の形態も異なるが、工房的形態の第9号住居跡でも口縁部径が10cm前後の小ぶりな坏や碗が多く出土しており（第36図）、それらとの関連からも本遺跡の性格を考えるうえで、注目すべき土器と言えよう。

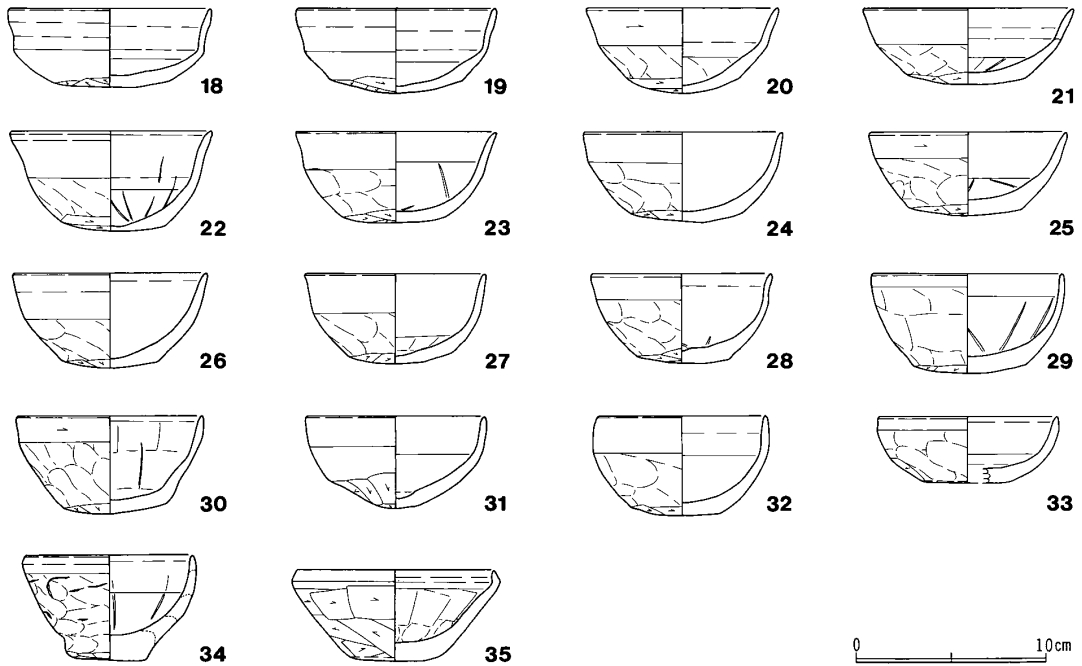
また、本竖穴状遺構の中央部の覆土中には、部分的に焼土の堆積が顕著に見られる。この焼土の堆積は、焼土中から出土した土器に二次焼成を受けた形跡がなく、またこの焼土の堆積層に関係なく土器が出土していることから見て、遺構内で火を焚いたものではなく、周囲から流れ込んだかあるいは投げ込まれたものと思われる。

第1号竖穴状遺構出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径16.0、器高32.4、底部径6.3。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-暗茶褐色、内-黒褐色。F. 2/3。G. 底面直上。
2	甕	A. 口縁部径15.0、器高32.2、底部径5.8。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。胴部と底部の接合部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
3	小形甕	A. 口縁部径(12.8)、器高14.9、底部径6.5。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。胴部と底部の接合部外面指ナデ。底部外面ナデ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-茶褐色、内-暗茶褐色。F. 1/2。G. 底面直上。
4	小形甕	A. 口縁部径11.4、器高15.3、底部径6.9。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗褐色。F. 2/3。G. 底面付近。H. 器表面は荒れている。



第61図 第1号竖穴状遺構出土遺物(1)



第62図 第1号竪穴状遺構出土遺物(2)

5	大形甑	A. 口縁部径22.1、器高29.9、底部径9.6。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 3/4。G. 底面直上。H. 外面に黒斑あり。
6	坏	A. 口縁部径11.8、器高4.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径11.2、器高5.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 3/4。G. 底部付近。H. No16・No32の坏と重なって出土。
8	坏	A. 口縁部径11.2、器高4.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 完形。G. 底面付近。H. 底部外面に黒斑あり。
9	坏	A. 口縁部径11.2、器高4.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ。内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 3/4。G. 底面付近。
10	坏	A. 口縁部径(11.0)、器高5.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 2/3。G. 底面付近。
11	坏	A. 口縁部径(11.4)、器高4.1。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
12	坏	A. 口縁部径(11.2)、器高4.1。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
13	坏	A. 口縁部径(10.8)、器高5.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
14	坏	A. 口縁部径(9.8)、器高4.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
15	坏	A. 口縁部径11.4、器高5.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 3/4。G. 底面直上。H. 底部外面黒斑あり。No21と重なって出土。

16	坏	A. 口縁部径 (11.2)、器高5.2。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面笠ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 3/4。G. 底面付近。H. No 7・32と重なって出土。
17	坏	A. 口縁部径10.8、器高5.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 2/3。G. 底面付近。
18	坏	A. 口縁部径10.8、器高4.2。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. ほぼ完形。G. 底面付近。H. 器表面は荒れている。
19	坏	A. 口縁部径 (10.6)、器高4.5。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
20	坏	A. 口縁部径 (10.0)、器高4.5。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/2。G. 底面付近。
21	坏	A. 口縁部径11.2、器高4.0、底部径6.4。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面笠ナデ。底部外面ケズリの後ナデ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 4/5。G. 底面直上。H. No15と重なって出土。
22	坏	A. 口縁部径10.8、器高5.3、底部径5.1。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E. 外-茶褐色、内-暗茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
23	坏	A. 口縁部径10.6、器高4.9、底部径5.4。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。
24	坏	A. 口縁部径 (10.6)、器高4.8、底部径5.9。C. 口縁部・体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 3/4。G. 底面付近。
25	坏	A. 口縁部径 (10.5)、器高4.5、底部径6.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 4/5。G. 覆土中。H. 底部外面に黒斑あり。
26	坏	A. 口縁部径10.4、器高5.0、底部径 (5.0)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
27	坏	A. 口縁部径9.6、器高4.7、底部径5.3。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面・内面上半ナデ、内面下半笠ナデ。底部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。H. 外面に黒斑あり。
28	坏	A. 口縁部径9.4、器高4.7、底部径4.8。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。H. 外面に黒斑あり。
29	坏	A. 口縁部径 (10.2)、器高5.3、底部径5.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/3。G. 床面付近。
30	坏	A. 口縁部径10.0、器高5.2、底部径5.5。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面笠ナデ。体部外面ナデ、内面笠ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 4/5。G. 覆土中。H. 内面に黒色付着物あり。
31	坏	A. 口縁部径 (9.5)、器高4.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/2。G. 床面付近。
32	坏	A. 口縁部径9.0、器高5.2、底部径4.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-茶褐色、内-暗茶褐色。F. 4/5。G. 底面付近。H. 底部外面に黒斑あり。No 7・No16と重なって出土。
33	坏	A. 口縁部径 (9.6)、器高3.5、底部径 (4.8)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-茶褐色。F. 1/3。G. 底面付近。

34	坏	A. 口縁部径8.8、器高5.6、底部径4.1。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。
35	坏	A. 口縁部径10.4、器高4.9、底部径(4.6)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後部分的にケズリ。内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 2/4。G. 底面付近。

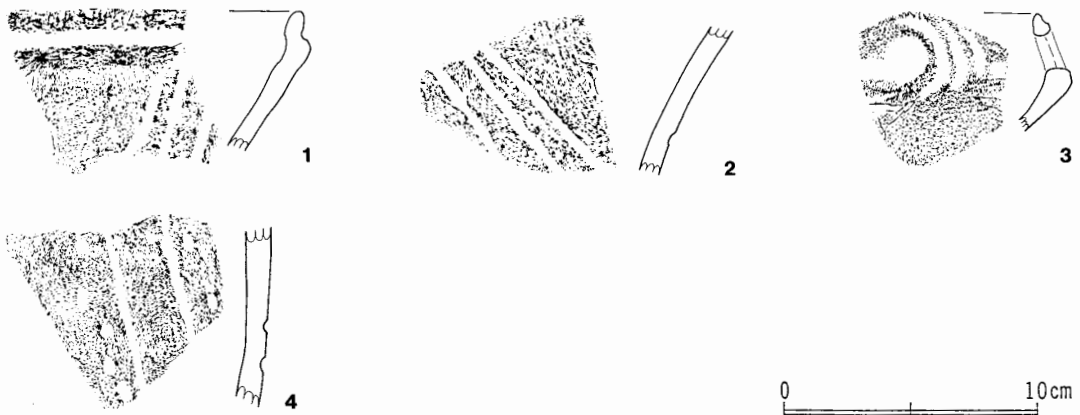
## 6. 土 壙

### 第1号土壙（第70図、図版20）

調査区内の北西側に位置し、東側には第4号土壙が、南東側には第2号土壙が近接している。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、直径93cmの比較整った円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは26cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。出土遺物は、覆土中より縄文時代後期の堀之内1式を主体とする土器片が4片出土しただけである（第63図）。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期堀之内1式後半頃と推測される。



第63図 第1号土壙出土遺物

### 第1号土壙出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。口縁部外面1条沈線、外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一黒褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。H. No2と同一個体。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. No1と同一個体。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。把手中央円孔。口縁部外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒、褐色粒。E. 外一淡灰褐色、内一淡白褐色。F. 把手破片。G. 覆土中。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び列点文。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡乳白色、内一黒灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。

### 第2号土壙（第70図、図版20）

調査区内の北西側に位置し、北東側には第1号土壙が、東側には第4号土壙が、南側には第3号土壙が近接している。土壙の北側壁の一部を、第1号掘立柱建物跡の柱穴によって切られている。

平面形は、直径85cm前後の比較的整った円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは12cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、縄文時代後期の土器片が数片と黒曜石の剥片1点が、覆土中から出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物より、縄文時代後期堀之内式期頃と推測される。

### 第3号土壙（第70図、図版20）

調査区内の北西側に位置し、北側には第2号土壙が、北東側には第4号土壙が近接している。重複する第4号住居跡を切り、第1号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。

平面形は、直径87cmの比較的整った円形を呈している。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さ42cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期と古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、古代の所産と推測される。

### 第4号土壙（第70図、図版20）

調査区内の北西側に位置し、北側には第5号土壙が、西側には第2号土壙が、南西側には第3号土壙が近接している。本土壙は2基が重複しており、西側の第4A号土壙が東側の第4B号土壙を切っている。

第4A号土壙は、直径90cm前後の円形を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。第4B号土壙は、132cm×96cmの楕円形を呈している。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の称名寺Ⅱ式を主体とする土器片が少量出土しただけである（第64図）。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期称名寺Ⅱ式期頃と推測される。



第64図 第4号土壙出土遺物

#### 第4号土壙出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び列点文。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡白褐色、内-淡茶褐色、肉-淡灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び列点文。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-淡白褐色、内-淡灰褐色、肉-暗灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 赤色粒、黒色粒。E. 外-暗褐色、内-暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面貼付隆帯文と沈線文。D. 片岩粒、赤色粒。E. 外-茶褐色、内-暗褐色。F. 破片。G. 覆土中。



### 第5号土壙（第70図、図版20）

調査区内の北西側に位置し、南側には第4号土壙が、南西側には第1号土壙が近接している。重複する第3号溝跡に、土壙の北側上半を切られている。

平面形は、96cm×81cmの楕円形を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器甕の破片が主体的に出土している。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期の可能性が高いと思われる。

### 第6号土壙（第70図、図版20）

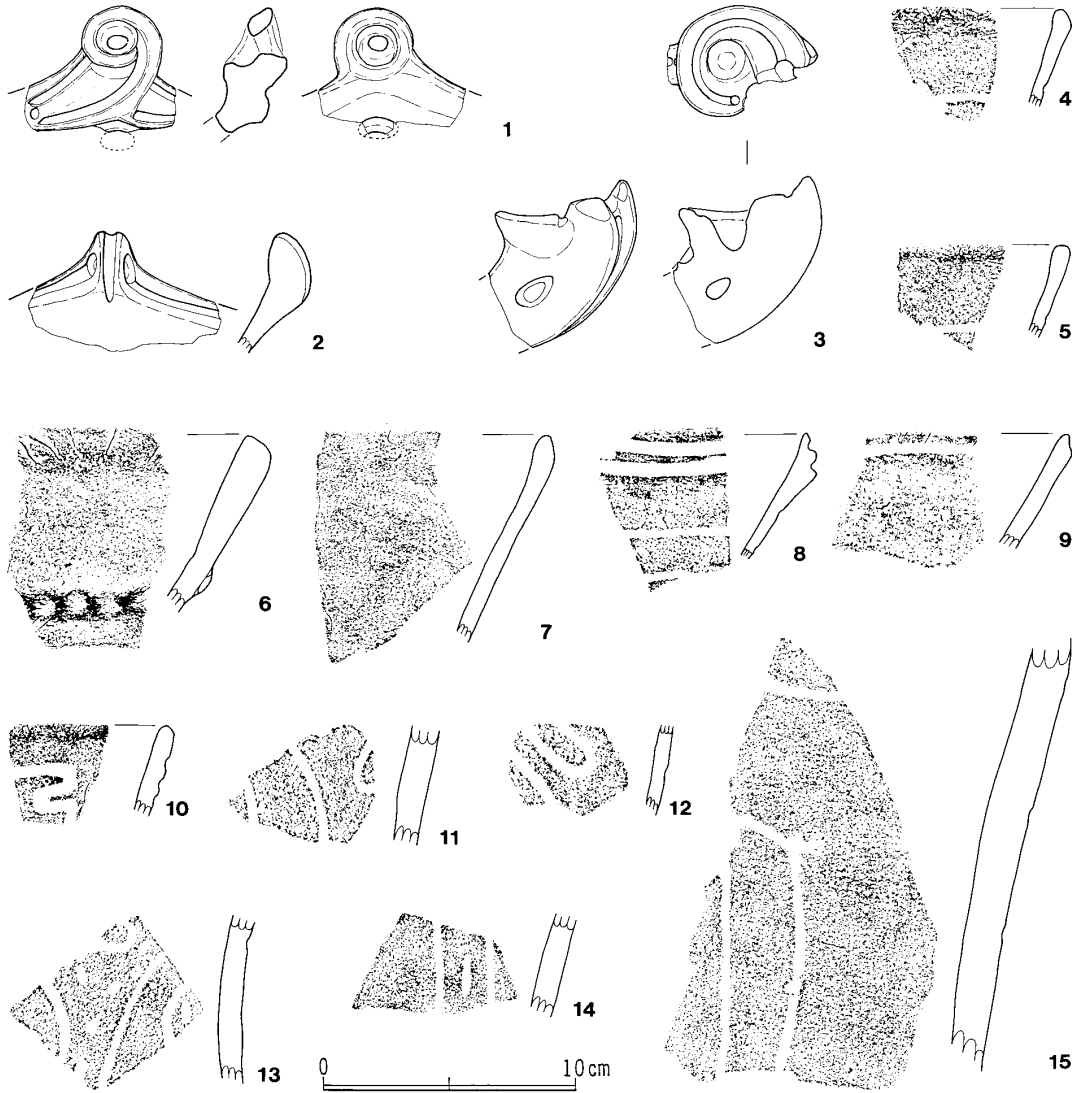
調査区内の北側に位置し、北側には第7号土壙が、北西側には第10号土壙が、東側には第8号土壙が、南側には第9号土壙がある。第3号掘立柱建物跡や第5号溝跡と重複し、第5号溝跡に土壙の南側上面の一部を切られているが、遺構の遺存状態は良好である。

平面形は、110cm×100cmの円形に近い形態を呈している。壁は、垂直ぎみに立ち上がるが、東側壁は中位から上半の傾斜が緩やかになっている。底面は、広くやや丸みをもち、確認面からの深さは84cmある。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の称名寺Ⅱ式を主体とする土器片が比較的多く出土している（第65図）。土器以外には、覆土中から分銅形打製石斧が1点出土している。本土壙の覆土は、南側の第9号土壙と類似しており、両者は同時期のものと考えられる。

本土壙の時期は、覆土の状態が第9号土壙に類似することや出土遺物から、縄文時代後期の称名寺Ⅱ式期の頃と推測される。

第6号土壙出土遺物観察表

1	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。把手中央円孔。口縁部外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—明橙褐色。F. 把手破片。G. 覆土中。
2	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。口縁部外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 把手破片。G. 覆土中。
3	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。透孔及び外面沈線文。D. 白色粒。E. 内外—淡褐色。F. 把手破片。G. 覆土中。
4	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 白色粒。E. 内外—淡褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
5	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
6	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面隆帯上指頭押圧文。D. 白色粒、褐色粒。E. 内外—暗乳褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
7	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
8	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。口縁部外面2条沈線、外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
9	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。口縁部外面1条沈線。D. 白色粒。E. 内外—淡褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
10	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 白色粒、褐色粒。E. 内外—黒褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。



第65図 第6号土壌出土遺物

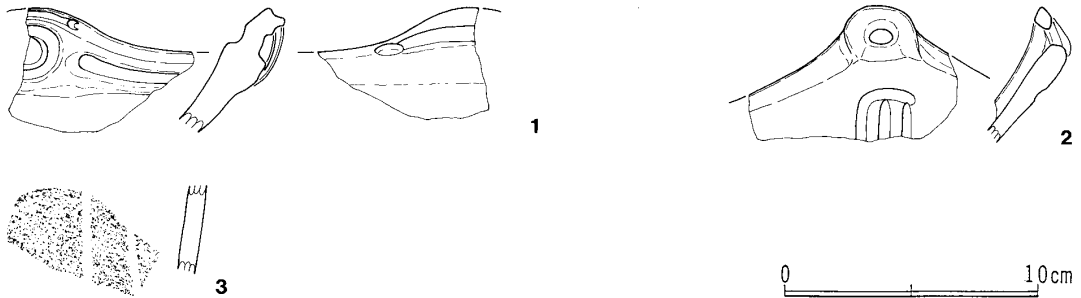
11	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 外-黒褐色、内-暗褐色。F. 破片。G. 覆土中。
12	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 外-灰褐色、内-淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
13	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び列点文。D. 白色粒。E. 外-暗褐色、内-暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
14	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び列点文。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-暗灰褐色。F. 破片。G. 覆土中。
15	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び列点文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。

第7号土壙（第70図、図版20）

調査区内の北側に位置し、南側には第6号土壙が、南西側には第10号土壙が、南東側には第8号土壙がある。第2号掘立柱建物跡や第3号掘立柱建物跡と重複しており、第2号掘立柱建物跡の柱穴に一部を切られている。

平面形は、118cm×116cmの不整円形を呈している。断面は、いわゆるフラスコ状の形態で、壁は上半部は緩やかに傾斜して立ち上がるが、下半部は丸みをもってオーバーハングしている。確認面からの深さは80cmあり、底面はやや狭く丸みをもっている。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の称名寺Ⅱ式を主体とする土器片が少量出土している（第66図）。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の称名寺Ⅱ式期の頃と推測される。



第66図 第7号土壙出土遺物

第7号土壙出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。口縁部外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 把手破片。G. 覆土中。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。把手中央円孔。口縁部外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 把手破片。G. 覆土中。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 破片。G. 覆土中。

第8号土壙（第70図、図版20）

調査区内の北側に位置し、西側には第6号土壙が、北西側には第7号土壙がある。第5号溝跡と重複し、土壙の上半部を切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

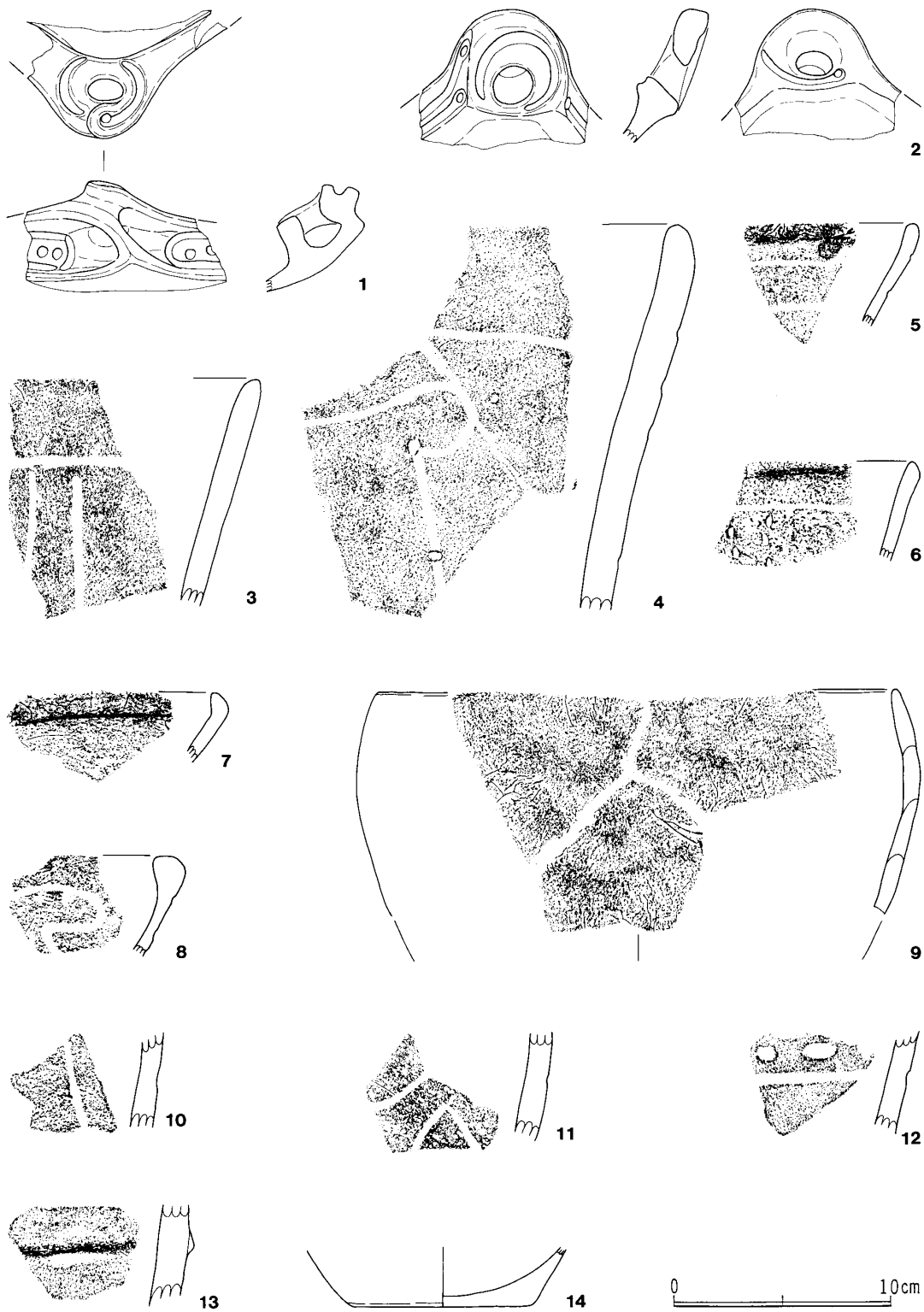
平面形は、91cm×80cmの南北方向に長い楕円形ぎみの形態である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは8cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態や遺構の重複関係から、B軽石降下以前の古代の所産と考えられる。

第9号土壙（第70図、図版21）

調査区内の中央部に位置し、北側には第6号土壙が、北東側には第8号土壙が、南東側には第11号土壙がある。

平面形は、116cm×110cmの円形に近い形態である。壁は、垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの



第67图 第9号土壤出土遺物

深さは86cmある。底面は、広く平坦であるが、その中央部には長さ25cm～30cmの比較的大きな自然石が2個重ねて置かれている。本土壤の覆土は、北側の第6号土壌の覆土と類似しており、両者は同時期のものと考えられる。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の称名寺Ⅱ式を主体とする土器片が比較的多く出土している（第67図）。

本土壤の時期は、覆土が第6号土壌と類似することや出土遺物から、縄文時代後期の称名寺Ⅱ式期の頃と考えられる。

第9号土壌出土遺物観察表

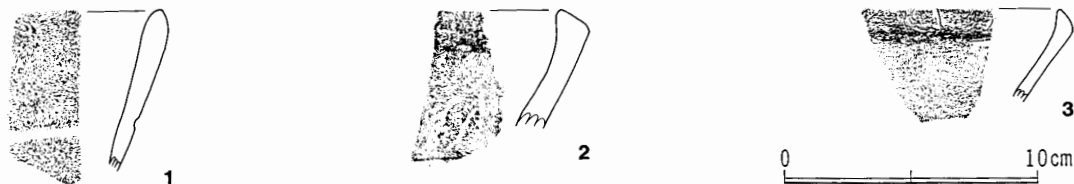
1	浅 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。把手中央円孔。口縁部外面沈線文及び刺突文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—淡褐色。F. 把手破片。G. 覆土中。
2	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。把手中央円孔。口縁部外面沈線文及び刺突文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 把手破片。G. 覆土中。
3	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—淡灰褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
4	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び刺突文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外—淡褐色、肉—黒灰色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
5	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
6	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 外—暗褐色、内—淡茶褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
7	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
8	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。口唇部突起。外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
9	深 鉢	A. 口縁部径(23.8)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 口縁部1/4破片。G. 覆土中。
10	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外—暗褐色。F. 破片。G. 覆土中。
11	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—淡灰褐色、内—淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
12	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び刺突文。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—淡灰褐色、内—淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
13	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面隆帯文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
14	深 鉢	A. 底部径8.2。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。

#### 第10号土壌（第70図、図版21）

調査区内の北側に位置し、北東側には第7号土壌が、南東側には第6号土壌がある。第2号掘立柱建物跡や第3号掘立柱建物跡と重複し、第2号掘立柱建物跡の柱穴に土壌の一部を切られている。

平面形は、98cm×82cmの不整円形を呈している。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは66cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中より縄文時代後期の称名寺式を主体とする土器片が少量出土しており、この他では石器の剥片が1片出土しただけである。

本土壤の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の称名寺式期の頃と考えられる。



第68図 第10号土壙出土遺物

第10号土壙出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-黒灰色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色、肉-暗灰褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、褐色粒。E. 内外-淡褐色、肉-黒褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。

第11号土壙（第70図）

調査区内の中央部に位置し、北西側には第9号土壙がある。古墳時代後期の第2号住居跡と重複し、それによって土壙の南側半分を切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、円形かコーナー部の丸みが強い隅丸方形のような形態であったものと思われる。規模は、東西方向が64cm、南北方向は59cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で22cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

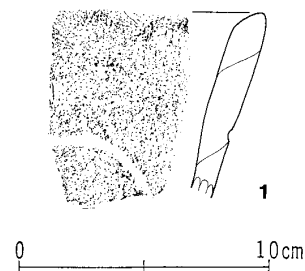
本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態や遺構の重複関係から、古墳時代後期以前の所産と考えられる。

第12号土壙（第70図、図版21）

調査区内の中央部やや西側寄りに位置し、北西側には第14号土壙が、南西側には第13号土壙がある。

平面形は、直径132cmの円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度ある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の称名寺式を主体とする土器片が数片出土しただけである。

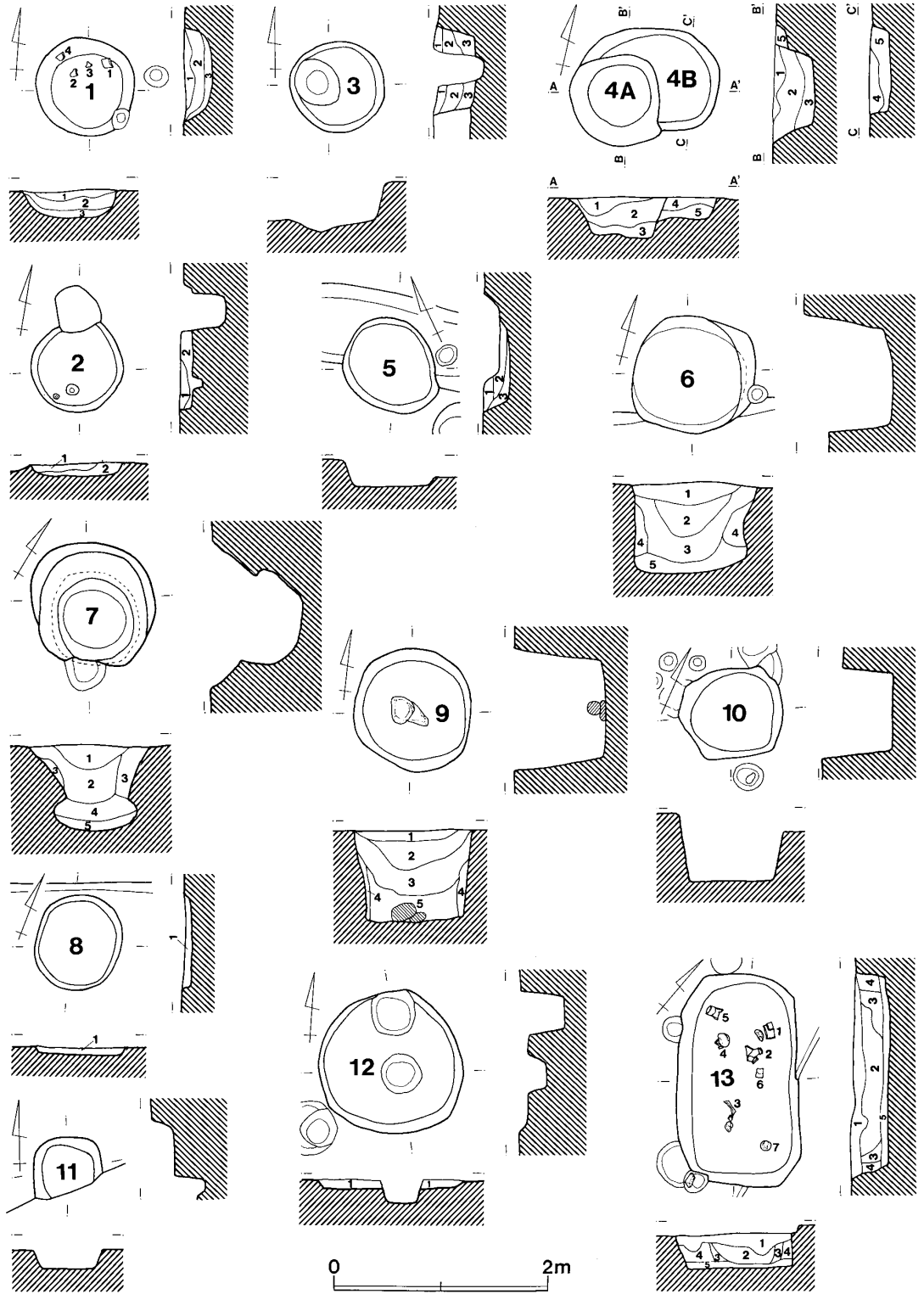
本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の称名寺式期の所産と考えられる。



第69図 第12号土壙出土遺物

第12号土壙出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
---	----	---



第70图 土 坑 (1)

#### 第1号土壌土層説明

第1層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒灰色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第2号土壌土層説明

第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第3号土壌土層説明

第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に、マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗黄灰色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第4A・4B号土壌土層説明

第1層：暗灰色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗黄灰色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒灰色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：淡灰色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：淡黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第5号土壌土層説明

第1層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒灰色土層（ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第6・9号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（鉄斑・白色粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第7号土壌土層説明

第1層：暗茶褐色土層（白色粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗茶褐色土層（鉄斑を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：茶褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗茶灰褐色土層（ローム粒子・砂利を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第8号土壌土層説明

第1層：暗黄灰色土層（ローム粒子を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第12号土壌土層説明

第1層：暗茶褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



### 第13号土壌土層説明

第1層：暗茶褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

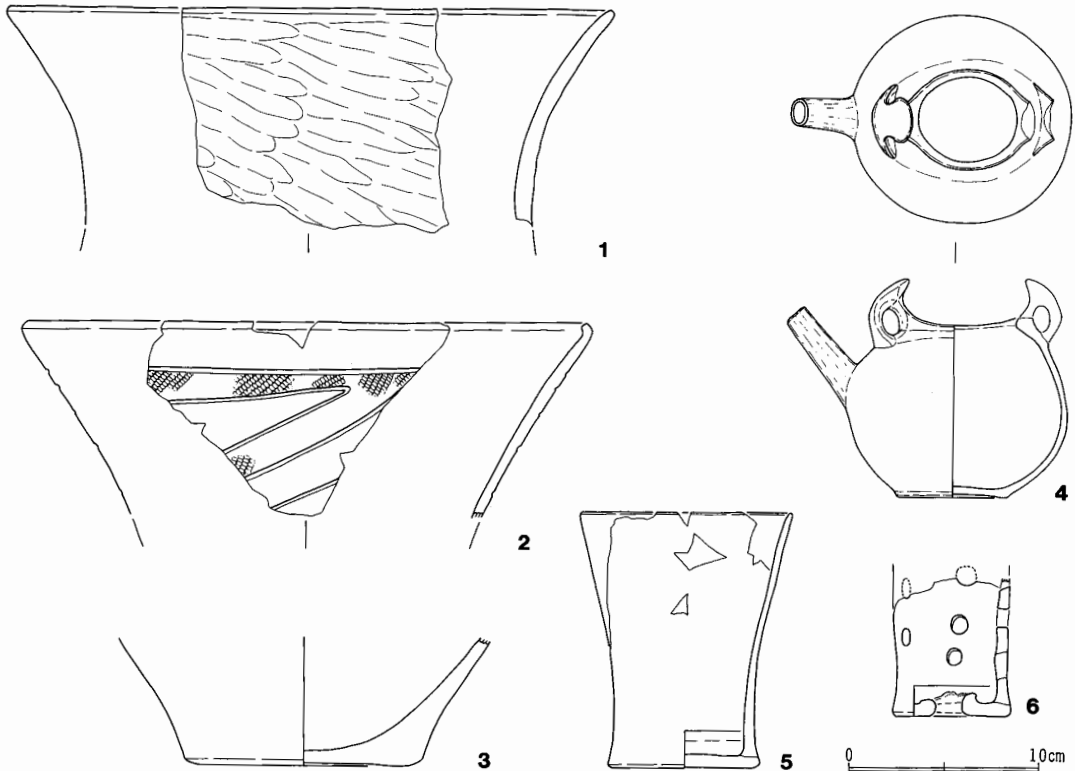
第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

### 第13号土壌（第70図、図版21）

調査区内の中央部西側寄りに位置し、北東側には第12号土壌が、西側には第17号土壌がある。土壌上面を後世の耕作によって削平されているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、コーナー部の丸みが強い比較的整った隅丸長方形を呈している。規模は、長さ198cm・幅112cmを測る。長軸の方位は、N-40°-Wを向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは東側で最高40cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の堀之内2式の土器や土偶（第71図）と石器などが出土している。土器は、深鉢と注口土器があり、土壌北西側の覆土中に比較的偏って出土している。大形の深鉢には、精製（No2）と粗製（No1）の両者があるが、いずれも破片である。小形の深鉢（No5）と注口土器（No4）は、いずれもある程度原形を留めた状態で出土している。土偶（No6）は、いわゆる「筒形土偶」で、上



第71図 第13号土壌出土遺物

半部を欠失している。石器 (No 7、図版41) は、長さ10cm程度の丸い転石の表裏両面の中央に、1箇所ずつ浅い皿状の窪みをもつ磨石で、土壌南東側の覆土中から出土している。

本土壌は、出土遺物より縄文時代後期の堀之内2式の時期と考えられるが、その形態や出土遺物から見て、埋葬施設の土壌墓の可能性が高いと思われる。土壌の内部には石などを使用した形跡は見られないが、底面直上の黒褐色土 (第5層) の上に、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土 (第4層) を10cm~30cmの幅で壁際に盛って、土壌中央部を取り囲むように圍繞させており、比較的手厚く埋葬されていたことが推測される。

第13号土壌出土遺物観察表

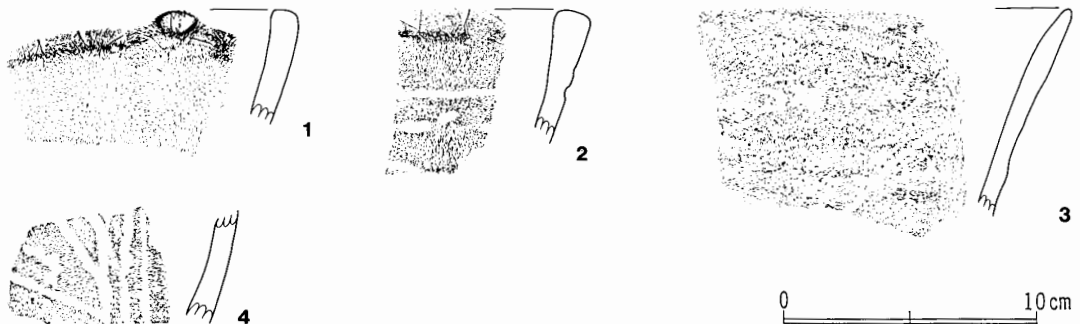
1	深鉢	A. 口縁部径 (32.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面指ナデ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外-暗褐色、内-淡褐色。F. 口縁部1/6破片。G. 覆土中。
2	深鉢	A. 口縁部径 (30.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともミガキ。外面沈線文内磨消縄文 (LR)。D. 白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 口縁部1/6破片。G. 覆土中。
3	深鉢	A. 底部径 (12.6)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外ともナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-明橙褐色。F. 底部1/2破片。G. 覆土中。H. 外面煤付着。
4	注口	A. 口径4.5~5.2、器高11.5、底部径5.6。B. 粘土紐積み上げ成形。注口貼り付け。C. 内外面ともナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。H. 外面黒斑あり。
5	深鉢	A. 口縁部径 (11.2)、器高13.5、底部径8.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外ともミガキ。無文。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-暗褐色。F. 1/2。G. 覆土中。H. 器表面は荒れている。
6	筒形土偶	A. 残存高7.3、底部径6.2。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面ナデ、内面指ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 下半のみ。G. 覆土中。H. 底部穿孔 (焼成前)。胴部円孔は4単位。

第14号土壌 (第75図、図版21)

調査区内の中央部西側寄りに位置し、北東側には第9号土壌が、南東側には第12号土壌がある。中世の第4号掘立柱建物跡と重複しており、その側柱穴P4によって土壌の一部を切られている。

平面形は、130cm×124cmの円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは54cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、縄文時代後期の称名寺Ⅱ式から堀之内2式の土器片が覆土中から比較的多く出土しているが、量的には堀之内2式頃の粗製土器の破片が主体を占めている。

本土壌の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の堀之内2式頃と推測される。



第72図 第14号土壌出土遺物

第14号土壌出土遺物観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。口唇部小突起。D. 片岩粒、白色粒。E. 外一明橙褐色、内一暗褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。外面沈線文及び刺突文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
3	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面指ナデ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一茶褐色、内一暗褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
4	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ、外面沈線文。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。

第15号土壌（第75図、図版21）

調査区内の南東側に位置し、西側には第16号土壌・第31号土壌・第32号土壌がある。土壌北側半分の上半を、第7号溝跡に切られている。

平面形は、76cm×68cmの不整円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片と古墳時代後期の土師器の破片が数片出土しただけである。

本土壌の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土遺物から、B軽石降下以前の古代の所産と推測される。

第16号土壌（第75図、図版21）

調査区内の南東側に位置し、東側には第15号土壌が、南西側には第31号土壌が、南側には第32号土壌がある。土壌の北西端を第10号溝跡に、東端をピットに切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、直径86cmの円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。底面は、広く平坦であるが、南東側に段をもつ。出土遺物は、土壌中央部の覆土中から長さ20cm程度の自然石が1個出土した他は、縄文時代後期の土器片が数片出土しただけである。

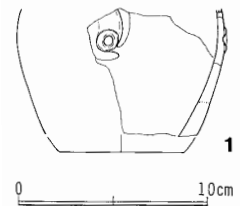
本土壌の時期は、出土遺物が少ないため明確ではないが、覆土の状態からは古代以前の所産と推測される。

第17号土壌（第75図、図版22）

調査区内の中央部西側寄りに位置し、西側には第13号土壌が、南側には第19号土壌が、東側には第18号土壌がある。第6A号住居跡と重複しているが、相互の直接的な新旧関係は不明である。

平面形は、84cm×78cmの不整円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは44cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期堀之内式頃の土器片が数片と、石器の剥片が1点出土しただけである。

本土壌の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の堀之内式



第73図 第17号土壌出土遺物

期と推測される。

#### 第17号土壙出土遺物観察表

1	注口？	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ、外面貼付文。D. 白色粒。E. 外—淡橙褐色、内—暗褐色。G. 覆土中。
---	-----	--

#### 第18号土壙（第75図、図版22）

調査区内の南側に位置し、北側には第1号井戸跡が、南側には第4号井戸跡が、西側には第17号土壙がある。第6号溝跡に沿う小規模な第11号溝跡と重複し、それによって土壙の南東側の一部を切られている。

平面形は、150cm×118cmの不整形を呈している。壁は、若干傾斜して立ち上がり、南西側壁には段をもつ。確認面からの深さは56cmある。底面は、広くやや丸みをもつ。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片が数片出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の可能性が高いと思われる。

#### 第19号土壙（第75図）

調査区内の南西側に位置し、北側には第17号土壙が、南側には第20号土壙と第21号土壙がある。土壙の中央部を小規模な溝に切られており、縄文時代後期の第6A・6B号住居跡を切っている。耕作による削平を強く受けており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、134cm×130cmの円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは、10cm程度である。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期と思われる土器片が2片出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の可能性が高いと思われる。

#### 第20号土壙（第75図、図版22）

調査区内の南西側に位置し、北側には第19号土壙が、南側には第22号土壙と第23号土壙が、南西側には第24号土壙・第25号土壙・第26号土壙がある。第6A号住居跡や第21号土壙と重複し、それらを切っている。

平面形は、128cm×124cmの不整円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。出土遺物は、古墳時代後期後半の土師器甕や坏の破片が、覆土中から比較的多く出土している。

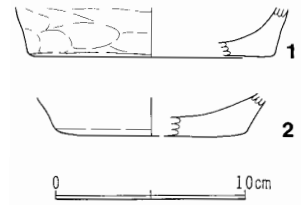
本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期の所産と考えられる。

#### 第21号土壙（第75図、図版22）

調査区内の南西側に位置し、北側には第19号土壙が、南側には第22号土壙と第23号土壙が、南西側には第24号土壙・第25号土壙・第26号土壙がある。第21号土壙と重複し、土壙の西側をそれによって切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、楕円形ぎみの形態を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が114cm、東西方向は110cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは16cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片が少量出土しただけである。

本土壌の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の可能性が高いと思われる。



第74図 第21号土壌出土遺物

第21号土壌出土遺物観察表

1	深鉢	A. 底部径 (13.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡褐色、肉-黒褐色。F. 底部1/4破片。G. 覆土中。
2	深鉢	A. 底部径 (10.2)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-黒褐色。F. 底部1/8破片。G. 覆土中。

第22号土壌 (第75図)

調査区内の南西側に位置し、北側には第20号土壌と第21号土壌が、西側には第24号土壌・第25号土壌・第26号土壌がある。重複する南側の第23号土壌を切り、第11号溝跡と第6号溝跡に土壌の南側半分を切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると比較的整った長方形を呈していたようである。規模は、東西方向が210cm、南北方向は66cmまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは13cmある。底面は、広く平坦のようである。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期と古墳時代後期の土器片が少量出土しただけである。

本土壌の時期は、遺構の重複関係や覆土中にB軽石を含むことから、中世の所産と推測される。

第23号土壌 (第75図、図版22)

調査区内の南西側に位置し、北側には第20号土壌と第21号土壌が、西側には第24号土壌・第25号土壌・第26号土壌がある。第22号土壌・第11号溝跡・第6号溝跡と重複し、それらによって土壌の上面を切られている。

平面形は、137cm×106cmの楕円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、遺構の重複関係や覆土の状態から、古代以前の所産と思われる。

第24号土壌 (第75図)

調査区内の南西端に位置し、東側には第22号土壌と第23号土壌が、南側には第27号土壌が、南東側には第28号土壌と第29号土壌がある。第26号土壌と重複し、それによって土壌南側の大半を切られている。遺構の遺存状態は劣悪で、本土壌の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、円形に近い形態であったものと思われる。規模は、南

北方向が118cmまで、東西方向が154cmまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは27cmある。底面は、広く平坦のようである。遺物は、何も出土しなかった。

本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、遺構の重複関係や覆土の状態から、古墳時代後期以前の所産と推測される。

#### 第25号土壙（第75図）

調査区内の南西端に位置し、東側には第22号土壙と第23号土壙が、南側には第27号土壙が、南東側には第28号土壙と第29号土壙がある。第26号土壙と重複し、それによって土壙の大半を切られている。遺構の遺存状態は劣悪で、本土壙の全容は不明である。

平面形は不明であり、規模は東西方向は123cmまで、南北方向は43cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは17cmある。底面は、広くやや丸みをもっていたようである。遺物は、何も出土しなかった。

本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、遺構の重複関係や覆土の状態から、古墳時代後期以前の所産と推測される。

#### 第26号土壙（第75図）

調査区内の南西端に位置し、東側には第22号土壙と第23号土壙が、南側には第27号土壙が、南東側には第28号土壙と第29号土壙がある。東側には第22号土壙と第23号土壙が、南側には第27号土壙が、南東側には第28号土壙と第29号土壙がある。土壙の上面を第6号溝跡と第11号溝跡に切られ、重複する第25号土壙と第26号土壙を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形ぎみの形態で、規模は東西方向が3.94m、南北方向が2.28mある。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは34cmある。底面は、広く丸みをもっている。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期末頃の土師器甕や坏の破片と須恵器甕の破片が比較的多く出土している。この他では、覆土中から長さ15cm～20cmの片岩がいくつか出土しており、その中には縄文時代の凹石も見られる。

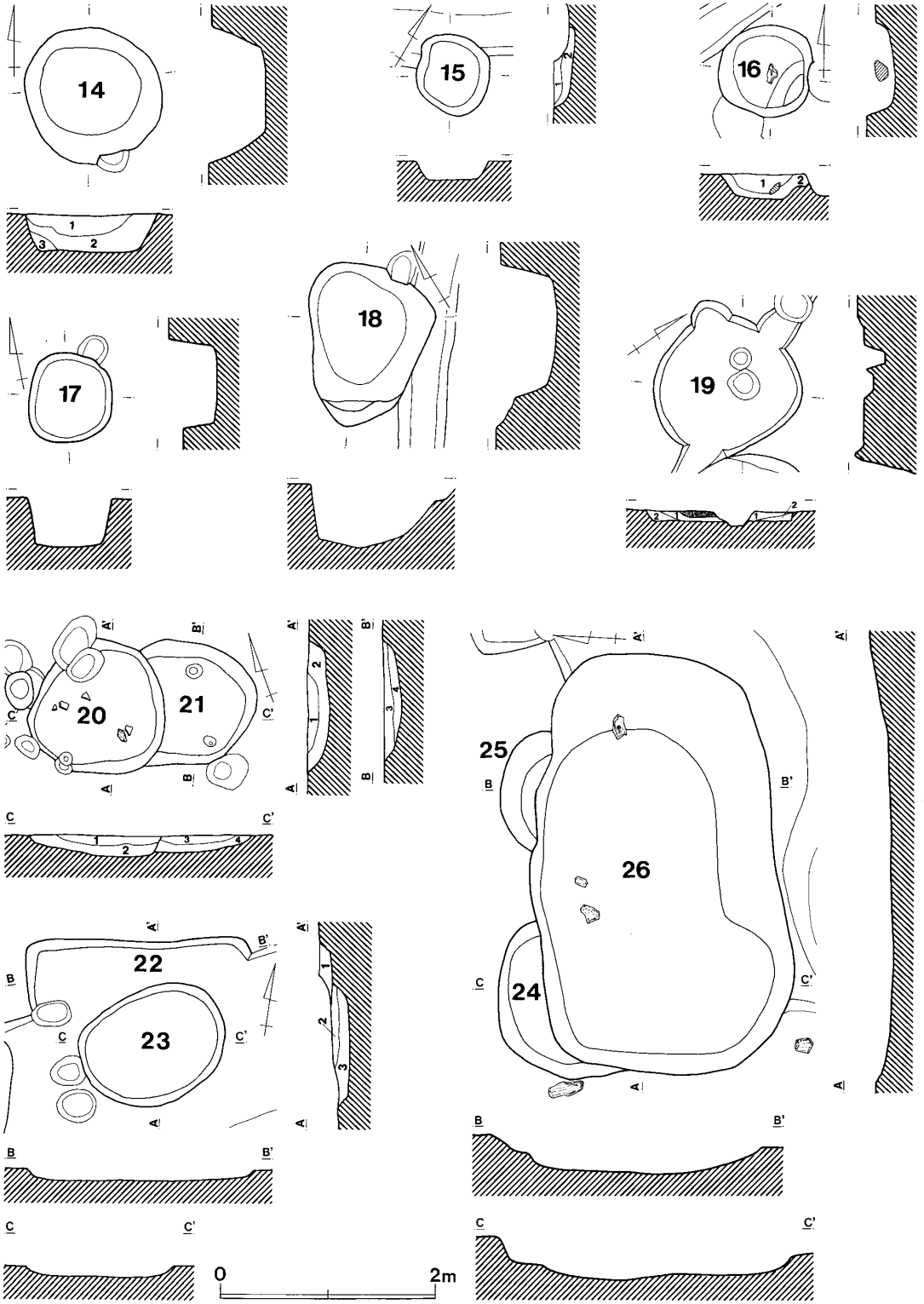
本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期末頃の所産と考えられる。

#### 第27号土壙（第77図）

調査区内の南西端に位置し、北側には第26号土壙や第23号土壙があり、東側には第28号土壙と第29号土壙がある。土壙の南側半分は調査区外に位置するため、本土壙の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、南北方向に長い楕円形ぎみの形態を呈するようである。規模は、東西方向が1.44m、南北方向は1.34mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度である。底面は、広く平坦であるが、やや傾斜している。遺物は、何も出土しなかった。

本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古墳時代後期の所産ではないかと推測される。



第75图 土 坑 (2)

#### 第14号土壌土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・小石・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第15号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第16号土壌土層説明

第1層：淡灰褐色土層（マンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：淡灰褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第19号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第20・21号土壌土層説明

第1層：暗茶褐色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第28号土壌（第77図）

調査区内の南端に位置し、東側には第31号土壌・第32号土壌・第33号土壌が、西側には第27号土壌が、北側には第22号土壌と第23号土壌が、南側には第30号土壌がある。第29号土壌と重複し、それを切っている。

平面形は、2.64m×1.80mの楕円形ぎみの形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期末頃の土師器甕と坏の破片が比較的多く出土している。

本土壌の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期末頃の所産と考えられる。

#### 第29号土壌（第77図）

調査区内の南端に位置し、東側には第31号土壌・第32号土壌・第33号土壌が、西側には第27号土壌が、北側には第22号土壌と第23号土壌が、南東側には第30号土壌がある。重複する第28号土壌によって、土壌の東側半分を切られているため、本土壌の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、楕円形ぎみの形態を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が1.82mまで、東西方向が1.13mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は、やや丸みをもつようである。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期と古墳時代後期の土師器坏の破片が数片出土しただけである。

本土壌の時期は、遺構の重複関係や出土遺物から、古墳時代後期の所産と考えられる。



### 第30号土壙（第77図）

調査区内の南端に位置し、北側には第28号土壙と第29号土壙が、西側には第27号土壙が、東側には第33号土壙がある。第7号溝跡と重複しており、それによって土壙上面の一部を切られている。土壙の南側半分は調査区外に位置するため、本土壙の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸の四角形か不整形円形のような形態であったものと思われる。規模は、東西方向が1.64m、南北方向は84cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。底面は、広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から古墳時代後期以前の所産と推測される。

### 第31号土壙（第77図、図版22）

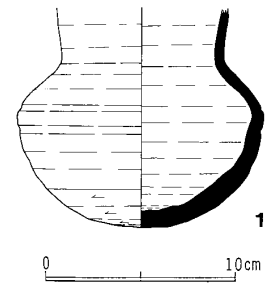
調査区内の南側に位置し、北東側には第16号土壙が、南側には第32号土壙が、南西側には第28号土壙と第29号土壙がある。土壙の北端部の上面を重複する第10号溝跡に切られているが、遺構の依存状態は比較的良好である。

平面形は、178cm×156cmの楕円形ぎみの形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは36cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、土壙西側の壁に寄った覆土中より、口縁部を欠失した須恵器の直口壺（第76図No1）が出土しており、また全体の覆土中からは、縄文時代後期堀之内式期の土器片と古墳時代後期の土師器の破片が、ある程度出土している。土器以外では、片岩を主体とする大小様々な自然石が、覆土中に投げ込まれたような状態で多く出土している。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期の所産と考えられる。

#### 第31号土壙出土遺物観察表

1	須恵器直口壺	A. 残存高11.6。B. 粘土紐積み上げ後ロクロ調整。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転篋ケズリ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外-淡灰色。F. 口縁部欠損。G. 覆土中。
---	--------	---



第76図 第31号土壙出土遺物

### 第32号土壙（第77図、図版22）

調査区内の南側に位置し、北側には第31号土壙がある。第7号溝跡に土壙上面を切られ、第1号窯状遺構・第2号窯状遺構・第11号住居跡を切っている。

平面形は、2.88m×1.72mの半月状の形態を呈している。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは41cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期堀之内式期の土器片と古墳時代後期の土師器の破片が出土している。また、土器以外には、比較的大きな片岩が、覆土中に投げ込まれた状態で複数出土している。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期の所産と考えられる。

### 第33号土壙（第77図、図版22）

調査区内の南端に位置し、北側には第32号土壙が、西側には第30号土壙がある。本土壙は、第8号溝跡や第3号窯状遺構と重複しており、それらによって切られている。また、遺構の上半を古墳時代後期以降の谷の湧水によって削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、114cm×110cmの不整円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは27cmある。底面は、やや狭く若干丸みをもっている。底面上の北西側寄りには、片岩が4個まとまって置かれており、その中には自然石を利用した凹石も見られるが、これらの石には被熱の痕跡は見られない。出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の堀之内1～2式の土器片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の堀之内式期と考えられる。

### 第34号土壙（第77図、図版22）

調査区内中央部の東側寄りに位置し、南西側には第36号土壙がある。重複する第8号住居跡に土壙東側の一部を切られ、第35号土壙を切っている。

平面形は、133cm×130cmの不整円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは21cmある。底面は、広く丸みをもっている。出土遺物は、覆土中より縄文時代後期の土器片と古墳時代後期の土師器の甕と坏の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古墳時代後期の所産と考えられる。

### 第35号土壙（第77図、図版22）

調査区内中央部の東側寄りに位置し、南西側には第36号土壙がある。重複する第34号土壙に、土壙の東側上面の一部を切られている。

平面形は、92cm×85cmの不整円形を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は、広く平坦である。土壙の底面上には、比較的大きな片岩が土壙の中心を取り囲むように複数置かれたような状態で出土している。遺物は、覆土中より縄文時代後期の土器片が2片出土しただけである。

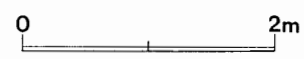
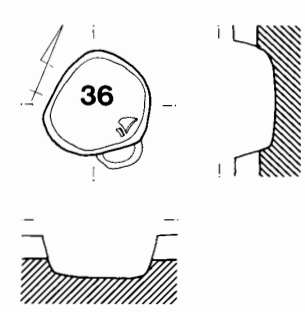
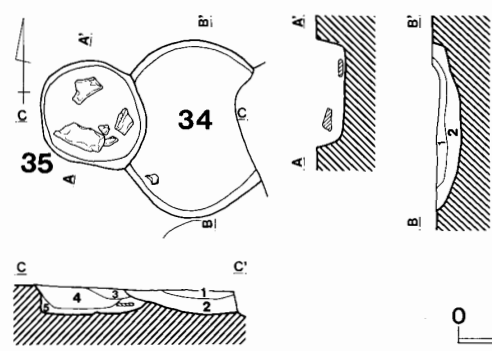
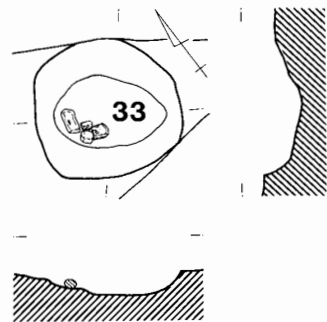
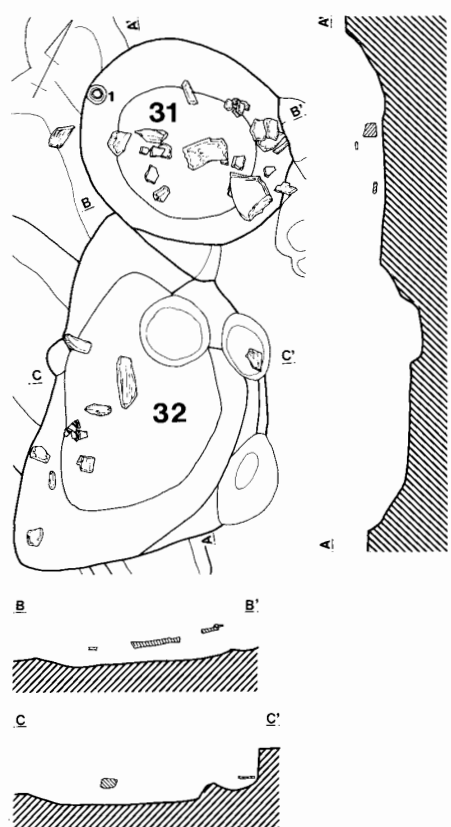
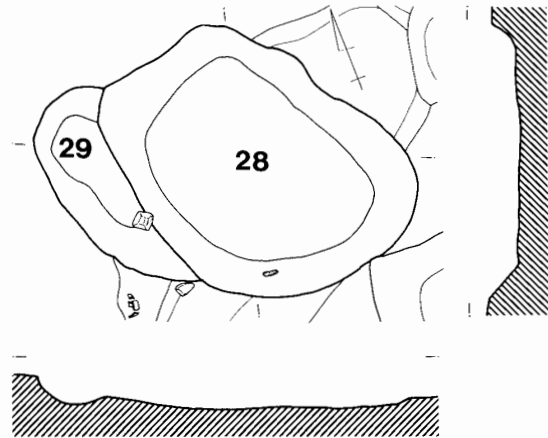
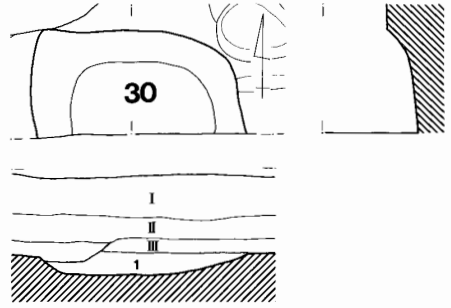
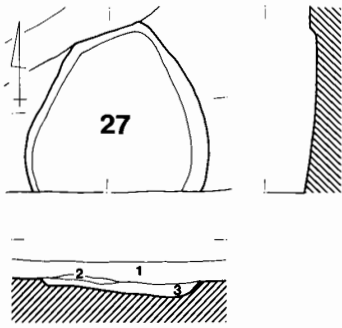
本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代後期の可能性が高いと推測される。

### 第36号土壙（第77図）

調査区内の中央部に位置し、北東側には第34号土壙と第35号土壙がある。第9号住居跡と重複し、それを切っている。

平面形は、87cm×80cmの不整円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器の破片が少量出土しただけである。

本土壙の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、古墳時代後期以降と推測される。



第77图 土 壙 (3)

#### 第27号土壌土層説明

第1層：暗灰褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（細砂を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：灰褐色度層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第30号土壌土層説明

第I層：現耕作土。

第II層：旧耕作土（A軽石混入。）

第III層：暗灰褐色土層（B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第1層：淡灰褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第34・35号土壌土層説明

<第34号土壌>

第1層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

<第35号土壌>

第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗茶褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

## 7. 溝 跡

### 第1号溝跡（第78図）

調査区内の北西端に位置し、重複する第4号溝跡を切っている。調査区内で検出されたのは溝の東側半分だけであるため、本溝跡の全容は不明であるが、溝跡の上幅が116cm以上ある比較的しっかりした溝のようである。調査区内では、ほぼ南北方向に向いて直線的な流路をとっている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。底面は、比較的広く平坦のようで、調査区内における南北両端の溝底面の高低差はあまり見られない。覆土は、B軽石を含む暗灰色土を主体にしている。小石や細砂などの堆積は見られず、鉄斑やマンガン塊などの凝集層もないことから、恒常的な流水や滞水状態はなかったものと推測され、排水と区画を目的とした溝であったことが窺われる。

出土遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器甕の破片が3片と、15世紀以降の土師器皿の底部破片が1片出土しただけである。

本溝跡の時期は、本溝跡に伴う遺物がないため明確ではないが、覆土の状態からはA軽石降下以前の中世後半～近世前半頃ではないかと推測される。

#### 第1号溝跡土層説明

第II層：旧耕作土（B軽石混入。）

第1層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

### 第2号溝跡（第78図）

調査区内の中央部東端に位置し、西側には小規模な第12号溝跡が並走している。調査区内で検出されたのは溝の一部だけであるため、本溝跡の全容は不明である。調査区内では、ほぼ南北方向に近い流路をとっている。

規模は、溝の上幅が74cm程度の比較的均一な幅のようである。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度ある。底面は、広く比較的平坦で、下幅は55cm前後を測り、調査区内における南北両端での溝底面の高低差はほとんどない。覆土は、A軽石やローム粒子を含む淡褐色土を主体にしている。恒常的な流水や滞水状態の形跡が見られないことから、耕作地の区画と排水を目的とした溝であったと推測される。遺物は、何も出土しなかった。

本溝跡の時期は、本溝跡に伴う遺物がないため明確ではないが、覆土の状態からはA軽石降下以降の近世後半以後と考えられる。

### 第3号溝跡（第78図）

調査区内の北側に位置し、重複する第1号掘立柱建物跡や第5号土壌を切っている。調査区内では、東西方向に向いて若干蛇行しながら弓状に湾曲した流路をとっており、溝の東側では類似した形態の第4号溝跡が南側に分岐している。

形態は、溝の上幅が75cm～85cmの比較的均一な幅である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で12cmある。底面は、広く平坦で、下幅は50cm～60cmある。調査区内における東西両端の溝底面の高低差は10cm程度あり、西に向かって徐々に深くなっている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器破片が多く出土し、古墳時代後期の土師器杯の破片や中世国産陶器（渥美窯系？）の甕の破片が少量出土している。この他には溝西側の覆土中から、馬歯が出土している。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土遺物から、中世の所産と推測される。

#### 第3号溝跡土層説明

第Ⅱ層：旧耕作土（B軽石混入）。

第1層：黒灰色土層（鉄斑・B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒灰褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

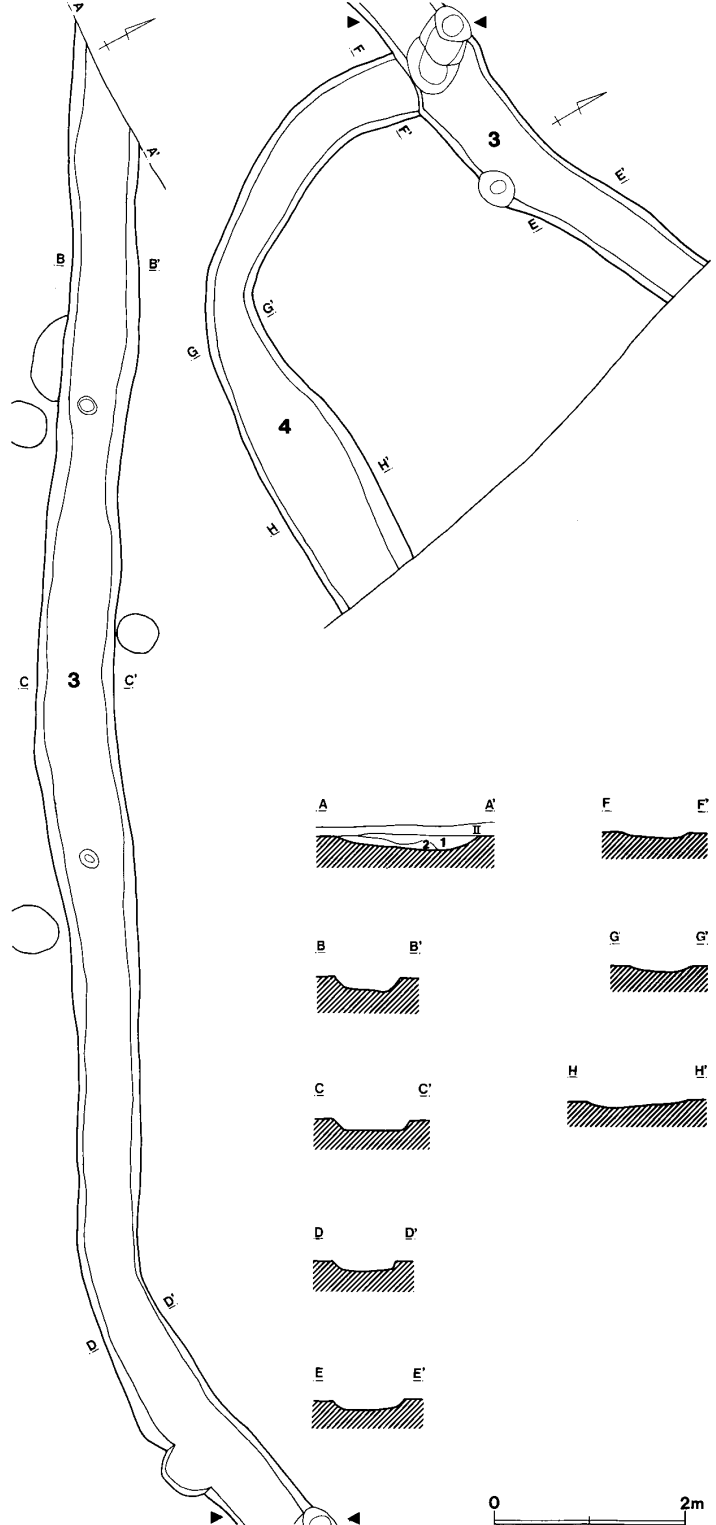
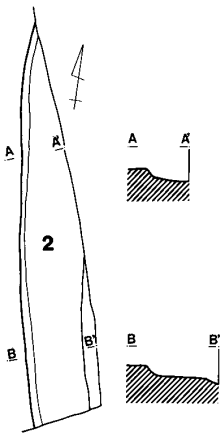
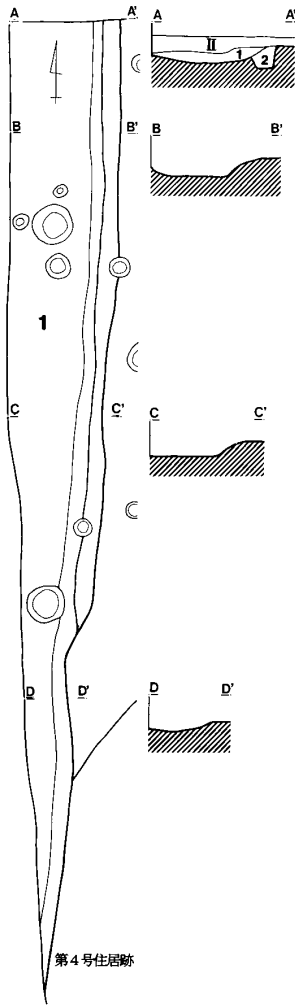
### 第4号溝跡（第78図）

調査区内の北東側に位置する。調査区内では、東から西に向かってほぼ東西方向に流路をとっているが、すぐに湾曲しながら北側に向きを変えて北側の第3号溝跡に合流している。溝の上面は後世の耕作による強い削平を受けており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

規模は、溝の上幅が西側で50cm～70cm、東側で100cm程度ある。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは、最高で5cmある。底面は、広く平坦である。調査区内における溝底面の高低差は、ほとんどない。覆土は、B軽石やロームブロックを含む暗灰色土を主体にしている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片が少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、覆土の状態から、中世以降の所産と推測される。



第78图 第1~4号沟迹

## 第5号溝跡（第80図）

調査区内の中央部やや北側寄りに位置する。第1号住居跡・第5号住居跡・第3号掘立柱建物跡・第6号土壇・第8号土壇などと重複し、それらをすべて切っている。調査区内では、ほぼ東西方向に向いて、地形の等高線と直交するほぼ直線的な流路をとっており、A地点の西側約30mにあるD地点（恋河内2001）でもその延長部分が調査されている。また、調査区内の西端付近では、本溝跡よりやや規模の小さい第9号溝跡が南側に向かって分岐している。

形態は、溝の上幅が確認面で150cm前後の比較的均一な幅である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で15cmある。底面は、広くほぼ平坦である。下幅は、130cm～140cmの比較的均一な幅で、調査区内における溝底面の高低差は、ほとんど見られない。覆土は、B軽石やローム粒子を含む暗灰色土と暗灰褐色土を主体としている。覆土中に恒常的な流水や滞水状態の痕跡が見られないことから、排水と敷地の区画を目的として掘削された溝であったと考えられる。

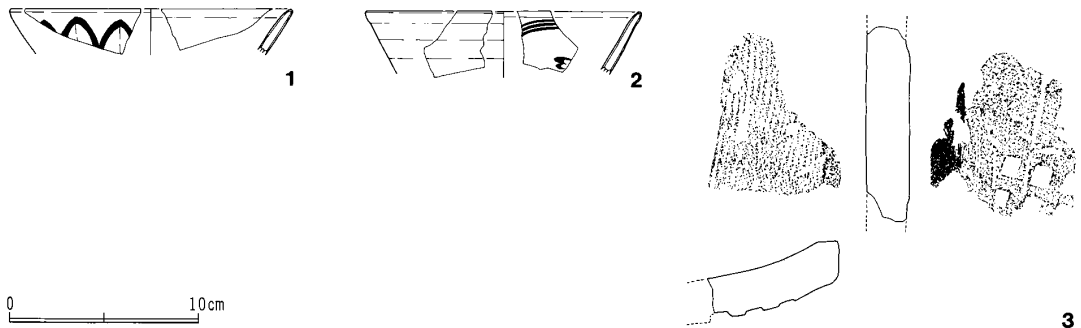
出土遺物は、覆土中から縄文時代後期や古墳時代後期の土器片が比較的多く出土しているが、本溝跡の時期に近いものとしては、中国製輸入陶磁器の龍泉窯系青磁碗と平瓦の破片が出土しただけである（第79図）。また、本溝跡の西側延長にあたるD地点でも、常滑窯系甕や中世土師器皿の破片などが出土している（恋河内2001）。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土遺物から、中世の所産と推測される。

### 第5号溝跡土層説明

第1層：暗灰色土層（鉄斑・B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

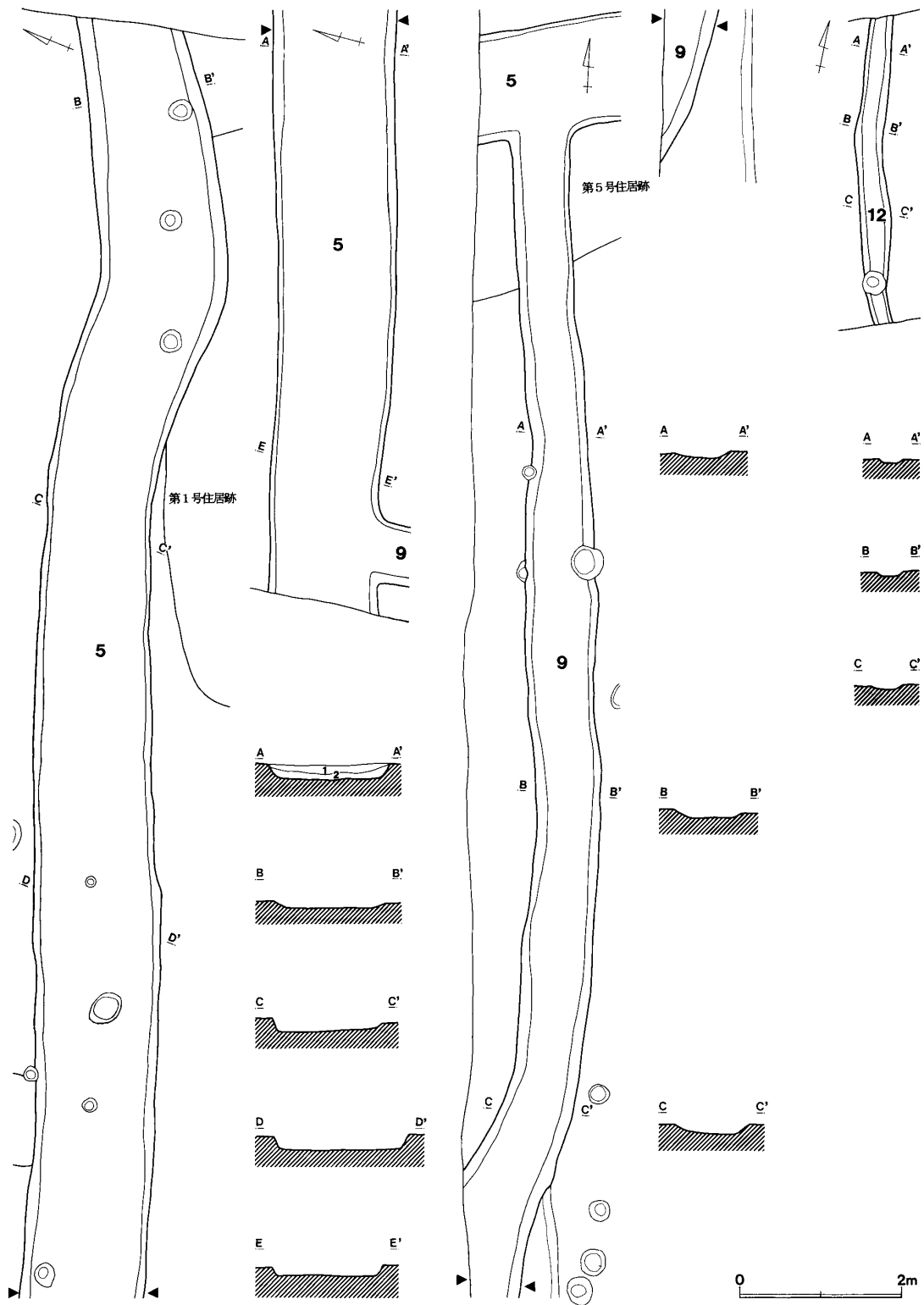
第2層：暗灰褐色土層（B軽石・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、まりを有する。）



第79図 第5号溝跡出土遺物

### 第5号溝跡出土遺物観察表

1	龍泉窯系青磁碗	A. 口縁部径(15.0)。B. ロクロ成形。C. 体部外面鑄連弁文、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外-淡緑色、肉-淡灰白色。F. 口縁部1/2。G. 覆土中。H. 内外面とも淡緑色釉を施す。
2	龍泉窯系青磁碗	B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。内面に文様を施す。D. 白色粒。E. 内外-暗緑色、肉-淡灰白色。F. 破片。G. 覆土中。H. 内外面とも暗緑色釉を施す。
3	平瓦	A. 残存長10.5、残存幅7.3、厚さ2.3。C. 凸面ナデの後文様叩き。凹面糸切り後未調整。D. 片岩粒、白色粒。E. 凸面-暗灰色、凹面-暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 凹面側は布目圧痕を残す。



第80图 第5·9·12号沟迹



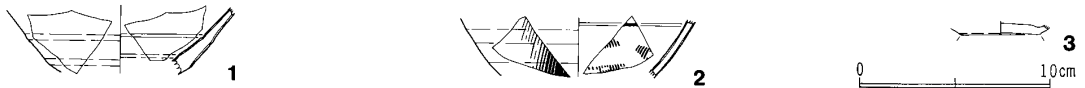
第6号溝跡（第82図、図版19）

調査区内の南側に位置し、重複する土壌や井戸跡をすべて切っている。調査区内では、地形の等高線に直交するように、南西から北東方向に向いてやや蛇行した流路をとっており、南東側の湧水による古い開析谷にほぼ並走している。

形態は、溝の上幅が確認面で概ね3.50m～4.50mの比較的整然とした幅である。壁は、上半が非常に緩やかに傾斜し、下半は中位から方向を変えて、傾斜がやや急になっている。確認面からの深さは、西側で最高54cmある。底面は、ほぼ平坦であるが、上幅の割には狭い。下幅は、概ね40cm～80cm程度であるが、東端部は急激に広がっている。調査区内での溝底面の高低差はあまり見られないが、南西から北東に向かって徐々に低くなっているようである。覆土中には、小石や細砂等が顕著に見られることから、恒常的にある程度水が流れていたものと考えられる。おそらく、谷奥の湧水かそれを貯えた溜池から、下流の水田に導水するために掘削されたものと推測されるが、溝を恒常的に維持するための掘り返しの痕跡が顕著に認められないことから、あまり長期には機能していなかったものと思われる。

出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片、古墳時代後期の土師器や須恵器の破片、中世の輸入陶磁器の白磁碗と同安窯系青磁碗の破片・土師器皿の破片（第81図）、近世国産陶器の破片などが出土している。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土遺物から、おそらく近世前半頃に掘削され、A軽石降下時の近世後半にはほぼ埋没していたものと推測される。



第81図 第6号溝跡出土遺物

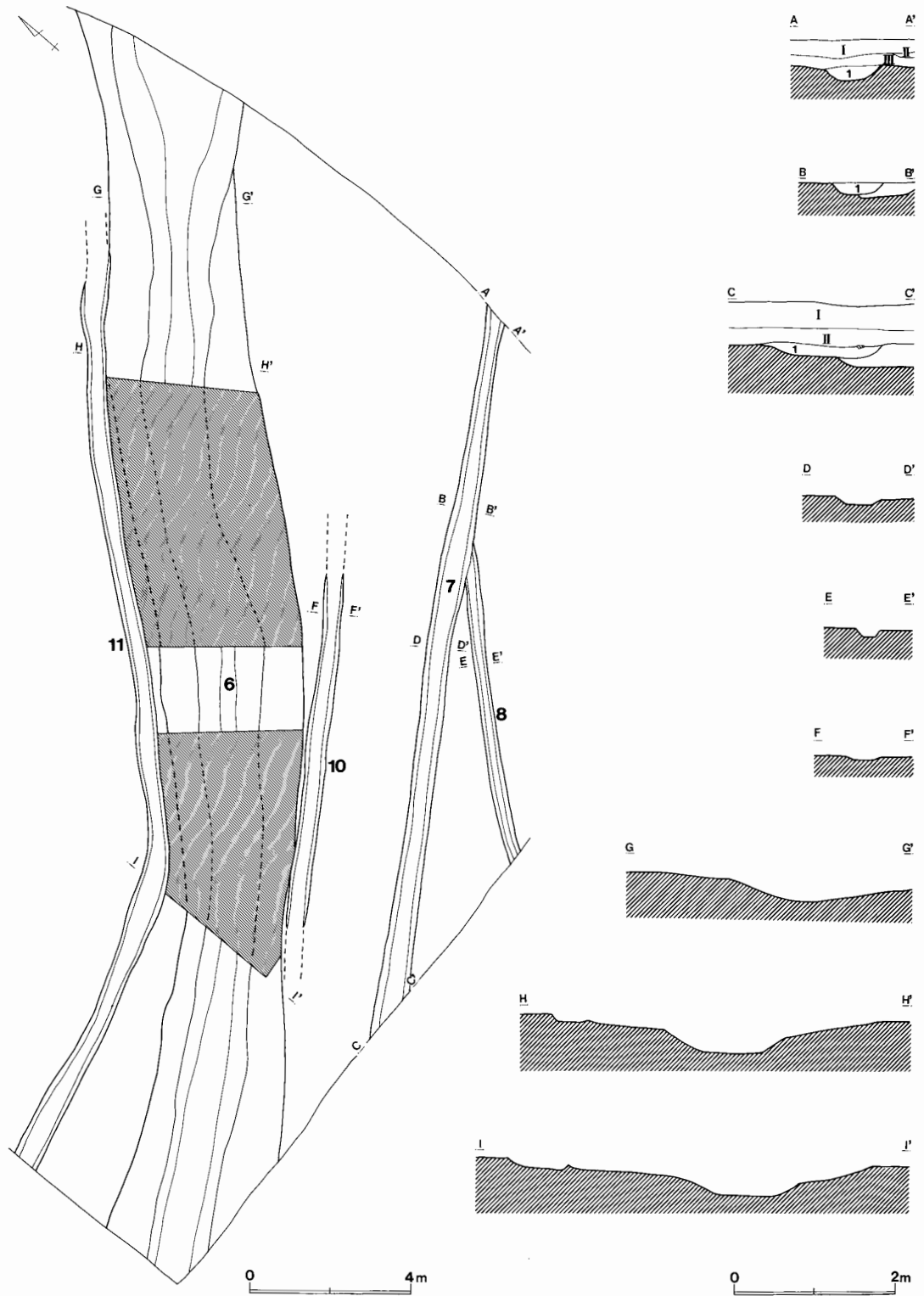
第6号溝跡出土遺物観察表

1	白磁碗	B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外—白色。F. 破片。G. 覆土中。H. 内外とも釉を施している。
2	同安窯系青磁碗	B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。体部内外面に櫛歯による文様を施す。D. 白色粒、淡褐色粒。E. 内外—淡緑褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 内外とも淡緑褐色釉を施している。
3	土師器皿	A. 底部径4.2。B. ロクロ成形。C. 底部外面回転糸切り、内面回転ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。

第7号溝跡（第82図）

調査区内の南東側に位置する。縄文時代後期や古墳時代後期の多くの遺構と重複し、それらのすべてを切って掘削されている。流路は、南西から北東方向にほぼ直線的に向かっている。

形態は、溝の上幅が50cm～70cmのほぼ均一な幅である。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。底面は、広く平坦である。下幅は、30cm～40cmの比較的均一な幅で、調査区内における溝底面の高低差は、北東側に向かって徐々に低くなっている。覆土は、B軽石を微量含む黒灰色土を主体にしている。覆土中に恒常的な流水や滞水状態の痕跡が見られないことか



第82图 第6·7·8·10·11号沟迹

ら、排水や土地の区画を目的として掘削された溝であったと推測される。

出土遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片と古墳時代後期の土師器片が、やや多く混入して出土しているだけである。

本溝跡の時期は、本溝跡に伴う遺物がないため明確ではないが、覆土の状態からは中世以降の所産と推測される。

#### 第7号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。

第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石混入。）

第Ⅲ層：暗灰褐色土層（B軽石・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第1層：黒灰色土層（B軽石・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第8号溝跡（第82図）

調査区内の南東側に位置する。重複する縄文時代の第11号住居跡と第33号土壙や古墳時代後期の第1～3号窯状遺構を切り、中世の第7号溝跡に切られている。本溝跡は、南西から北東方向に向いてほぼ直線的な流路をとっているが、北東側の端部はすでに削平されている。

形態は、溝の上幅が30cm前後のほぼ均一な幅である。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは5cmある。底面は、広く平坦である。調査区内における溝底面の高低差は、ほとんどない。覆土は、ロームブロックを含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。

本溝跡の時期は、遺物が何もないため明確ではないが、遺構の重複関係や覆土の状態から、古代のものと推測される。

#### 第9号溝跡（第80図）

調査区内の中央部西側に位置する。重複する古墳時代後期の第5号住居跡や中世の第4号掘立柱建物跡を切っている。流路は、調査区内ではほぼ南北方向に向いて、北側の第5号溝跡に合流している。

形態は、溝の上幅が80cm前後のほぼ均一な幅である。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度ある。底面は、広く平坦である。調査区内における溝底面の高低差は、ほとんどない。覆土は、北側の第5号溝跡と同じく、B軽石やローム粒子を含む暗灰色土と暗灰褐色土を主体にしている。覆土中に恒常的な流水や滞水状態の痕跡が見られないことから、排水と敷地の区画を目的として掘削された溝であったと考えられる。遺物は、何も出土しなかった。

本溝跡の時期は、遺物が何もないため明確ではないが、遺構の重複関係や覆土の状態から、第5号溝跡と同じく中世の所産と考えられる。

#### 第10号溝跡（第82図）

調査区内の南側に位置する。重複する古墳時代後期の第31号土壙を切っている。流路は、ほぼ直線的に南西から北東方向に向かっており、南東側に近接する第7号溝跡と並走している。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えず、溝の両端は耕作によってすでに削平されている。

形態は、溝の上幅が40cm～50cmの比較的均一な幅で、壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cm程度ある。底面は、ほぼ均一な幅で広くほぼ平坦である。覆土は、B軽石を含む黒褐色土で、遺物は何も出土しなかった。

本溝跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、遺構の重複関係や覆土の状態から、南東側に並走する第7号溝跡と同時期かそれに近い時期と考えられる。

### 第11号溝跡（第82図）

調査区内の中央部から南側にかけて位置する。第6号溝跡の北側の縁に沿って南西から北東方向に向かって湾曲した流路をとり、その北東端は後世の耕作により削平されている。縄文時代～中世の第18・22・23・26号土壌と重複し、それらの土壌をすべて切っている。

形態は、溝の上幅が40cm～50cmの比較的均一な幅で、壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で8cmある。底面は、ほぼ均一な幅で広くほぼ平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

本溝跡は、その位置や流路からみて、南側に隣接する第6号溝跡と密接な関係を持つ溝であることは明らかで、その時期は第6号溝跡が機能していた近世頃と思われる。

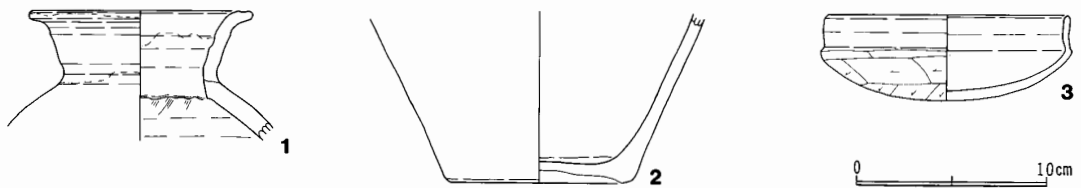
### 第12号溝跡（第80図）

調査区内の中央部東側に位置する。流路は、調査区内で残存する部分では、若干湾曲ぎみにほぼ南北方向に向いており、重複する第1号住居跡と第8号住居跡を切っている。

形態は、溝の上幅が30cm～40cmの比較的均一な幅で、壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で6cmある。底面は、ほぼ均一な幅でやや凹凸が見られる。覆土は、A軽石を含む淡灰褐色土で、水が流れていたような形跡は見られない。遺物は、何も出土しなかった。

本溝跡の時期は、覆土の状態から近世後半以降の所産と考えられる。

## 8. ピット出土遺物



第83図 ピット出土遺物

ピット出土遺物観察表

1	常滑系 壺	A. 口縁部径(11.8)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 白色粒、淡褐色粒。E. 内外-暗茶褐色、肉-暗灰色。F. 口縁部1/4。G. 第4号掘立柱建物跡付近ピット。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部内外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外-淡褐色。F. 胴部下半のみ。G. P 2内。H. 底部外面剥離。
3	坏	A. 口縁部径13.0、器高4.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 外-暗茶褐色、内-黒褐色。E. 片岩粒、赤色粒、白色粒。F. ほぼ完形。G. P 3内。



第84図 女池遺跡A地点時代別遺構配置図

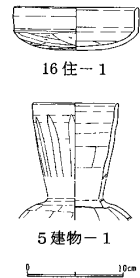
女池遺跡は、前述のように現在までのところA～Dの4地点で小規模ながら発掘調査が実施されており、縄文時代中・後期や古墳時代後期の集落跡と中世前半期の屋敷跡からなる複合遺跡であることが明らかになっている。検出されたこれら各時代の遺構や遺物には、それぞれに注目すべきものも多く見られるが、ここでは本遺跡の主体をなす古墳時代後期の遺物と遺構を中心に検討し、すでに報告書が刊行されている近隣のBD地点（恋河内2001）も含めて、現在までの本遺跡における古墳時代後期集落の様相を概観することで本書のまとめとしたい。

## 1. 出土土器の様相

A・B・Dの3地点から出土した古墳時代後期の土器は、遺構の配置や重複関係からも窺えるように、単一時期のものではなく時間幅が認められる。ここでは、これらの土器を便宜的に概ね以下のI～V期に分けて検討し、各時期の土器様相について概観する。

### 第I期（第85図）

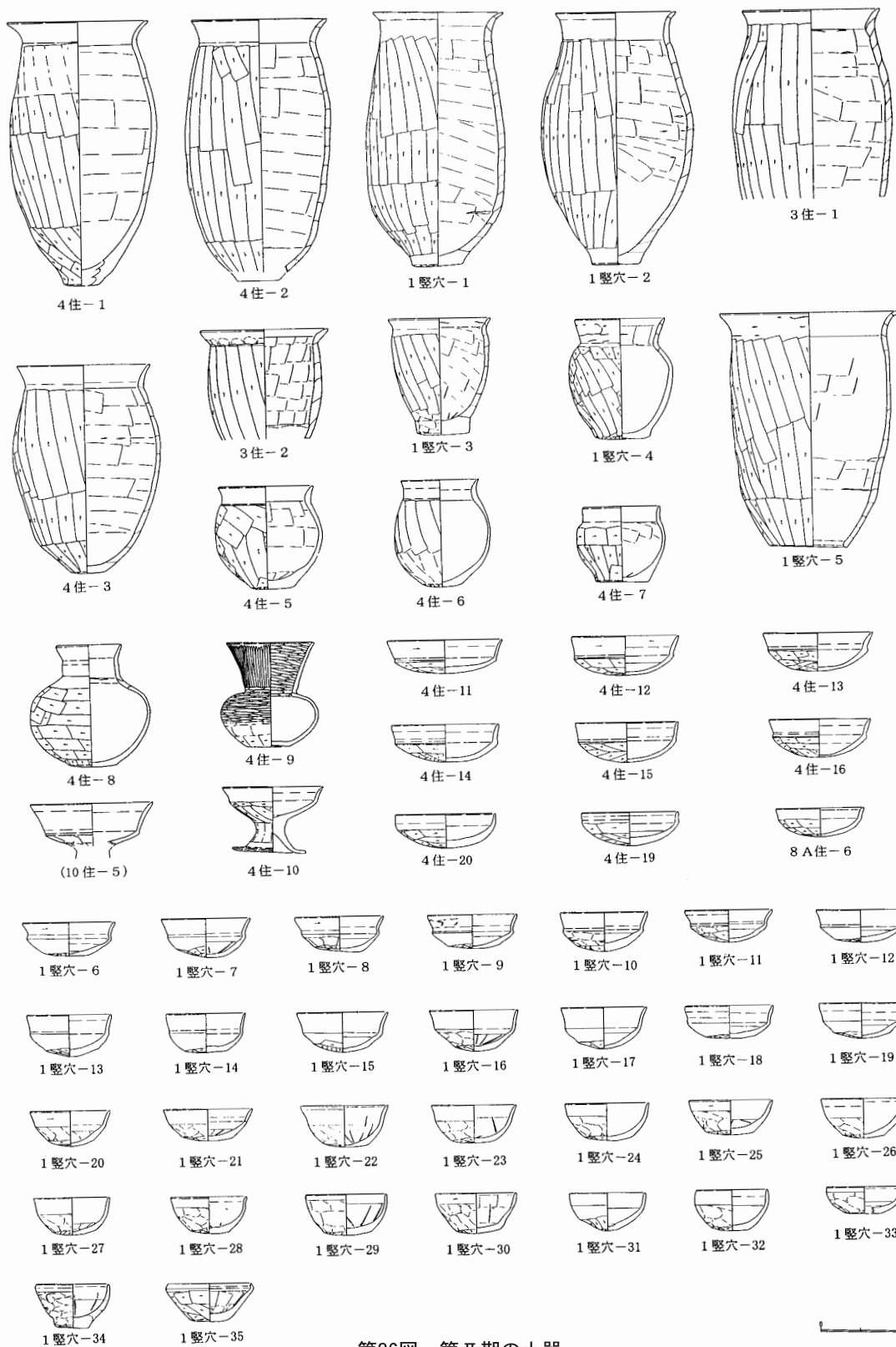
第I期の土器は、非常に少なく、D地点の第16号住居跡（恋河内2001）出土の坏と、同じく第5号掘立柱建物跡出土の小形直口壺が見られるだけである。第16号住居跡出土No1の坏は、口縁部が体部より直線的に直立し、口唇部に幅広の内傾斜する面を持つもので、本遺跡で出土した坏蓋型模倣坏の中では最も古相を示すものと思われる。第5号掘立柱建物跡出土No1の小形直口壺は、長頸で口縁部が直線的に立ち上がり、口唇部が尖る形態のものである。この長頸の小形直口壺は、当地域では該期から次期にかけてよく見られるものである。類似した形態のものは、前期末～中期前半頃にかけて散見されるが、中期後半にはあまり見られないため、その系譜については今後の検討が必要である。



第85図 第I期の土器

### 第II期（第86図）

第II期の土器は、A地点の第3号住居跡・第4号住居跡・第1号竪穴状遺構出土の土器が該当すると考えられる。また、第10号住居跡の覆土中から出土したNo5の高坏の破片も、おそらく該期のものと推測される。該期の出土土器は、すべて土師器で須恵器は見られない。器種は、甕・甑・壺・高坏・坏などが見られる。甕は、長胴甕と小形甕がある。当地方の該期の長胴甕には、法量差によって[大]・[中]・[小]の3タイプが見られるが、本遺跡ではそのうちの[大]と[中]に該当するものが出土している。[大]は、長胴甕の中では最も一般的なものである。形態は、口縁部の外反が緩やかで、胴部がやや張って最大径をその中位にもち、底部は突出した厚めの平底のものが主体である。また、この他に第1号竪穴状遺構出土No1のような口縁部の外反が弱く胴部が下膨らみの特徴的な形態のもの（増田1989）も小数ながら見られる。[中]は、第4号住居跡出土のNo3だけである。全体の形態は[大]と類似しているが、底部は[大]と異なって削り取りにより若干不安定な平底になっている。このような甕に見られる底部形態の不安定化は、[大]よりも[中][小]の長胴甕や小形甕などの一部に早く進行する傾向が見られる。小形甕は、第3号住居跡出土のNo2、第



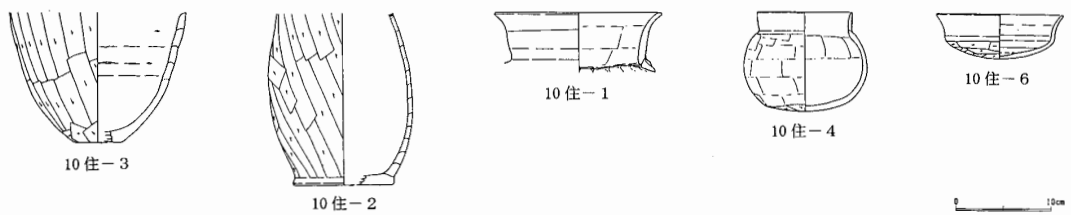
第86図 第Ⅱ期の土器

4号住居跡出土のNo5・6・7、第1号竪穴状遺構出土のNo3・4がある。形態は、甕形から鉢形に近いものまで様々であるが、いずれも口縁部の外反は長胴甕と同じく緩やかである。甕は、第1号竪穴状遺構出土No5の大型甕だけである。口縁部の外反は長胴甕と同様に緩やかで、胴部の張りがあまりなく、胴下半が丸みを持って窄まる形態である。壺は、第4号住居跡から小形壺（No8）と小形直口壺（No9）が出土している。小形壺は、口縁部外面の中位にやや弱い段を有するもので、辻堂遺跡第8号住居跡（恋河内1996b）出土No3のような小形の有段口縁壺の系譜を引くものである。この有段口縁壺の段は、須恵器の甕や壺の装飾技法を真似て、やや幅広の沈線を巡らすことによって段を描出するが、該期の第4号住居跡出土のNo8には明確な沈線や凹線状の窪みは見られず、段の形骸化が認められる。小形直口壺は、第I期の第5号掘立柱建物跡出土No1との直接的な系譜関係は不明であるが、該期のものは口縁部がやや外反ぎみの形態で新しい傾向が窺える。これらの壺類は、大形のものも含めてほぼこの時期頃をもって姿を消すものと思われ、新たに大小様々な大口短頸壺に類似した形態のものが多く見られるようになる。高坏は、第10号住居跡出土のNo5と、「鬼高型高坏」（中村1979）の第4号住居跡出土のNo10がある。前者は、一見鬼高型高坏のように見えるが、口縁部が長く坏部がやや大ぶりであることから、おそらく「和泉型高坏」（中村1979）と推察される。坏底部（体部）が広がっているのは、鬼高型高坏の影響によるものと思われ、和泉型高坏の末期的形態の一つと考えられる。なお、従来の鬼高型高坏と和泉型高坏もこの時期頃をもってほとんど姿を消すものと思われ、本遺跡では出土していないが、群馬県地方に多い「長脚型高坏」（中村1979）が当地方でも見られるようになる。坏は、須恵器坏蓋を模倣した前時期からの系譜を引く一般的な坏蓋型単純口縁坏（第4号住居跡No11～17）と、口縁部が立ちぎみで体部との境に明確な稜を持たない坏（第4号住居跡No19・20）が主に見られる。第4号住居跡からは、この他に須恵器坏身を模倣した坏身型単純口縁坏（第20図No21）も出土しているが、覆土中から出土した破片であり、明確な伴出関係は不明である。坏蓋型単純口縁坏は、口縁部径が13cm前後のものが主体で、口縁部の高さと同程度の深さがほぼ同じ位のものである。口縁部は外反しながら若干傾き、体部との境に突出した明確な稜を持っている。後者の坏は、口縁部径が12.5cm前後で、口縁部よりも体部の方が深い碗形の形態である。この他に、第1号竪穴状遺構からは小形の坏がまとまって出土している。この小形坏は、口縁部径が10cm前後のもので、幾つかのタイプが存在するが、いずれも体部外面の調整方法でナデの後に底部付近のみにケズリを施していることが特徴的である。当地方では、あまり多くはないが、いくつかの遺跡でこの小形坏群の類例が散見され、おそらく系統的に存在するようである。若干古い時期では、児玉町後張遺跡第29号住居跡（立石他1983）で小形坏が比較的多く出土している例があるが、一般的にはせいぜい1～2個体程度出土する例が普通である。

### 第Ⅲ期（第87図）

第Ⅲ期の土器は、A地点の第10号住居跡出土の土器が該当する。出土土器が少なく明確ではないが、住居跡の配置や重複関係から見ると、BD地点の第13B号住居跡の出土土器（恋河内2001）も該期に含めて考えることができるかもしれない。器種は、甕・壺・坏がある。甕は、一般的な長胴甕（No3）と、この在地の長胴甕とは系譜を異にする平底の甕（No2）がある。No3の長胴甕は、胴部上半以上を欠失しているが、おそらく[大]にあたる一般的な甕と思われ、底部形態は削り取





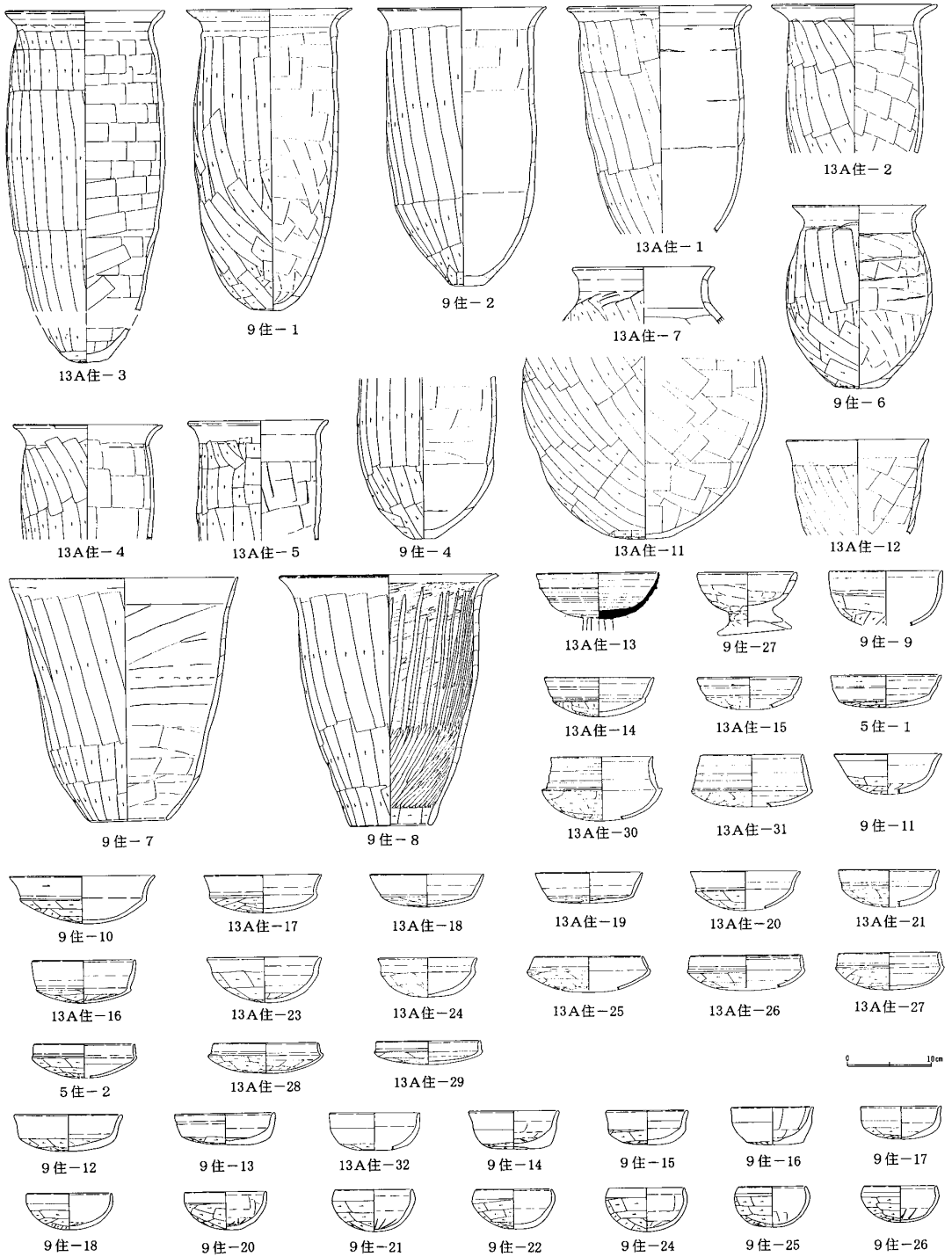
第87図 第Ⅲ期の土器

りにより突出しない小さな平底である。No 2は、底部が直径約10cmのやや突出した広い平底で、胴部は長胴ぎみの形態である。一応残存する部分の形態的特徴から見て甕としたが、何かを摸倣あるいは抽象したような特殊な異形土器の可能性もある。壺は、前時期からの系譜を引くNo 1の壺と、短頸壺に類似したNo 4の小形広口壺だけである。坏は、摸倣坏の坏蓋型単純口縁坏（No 6）だけである。形態は、前時期のものよりも口縁部の外反がやや強く、体部も若干扁平ぎみで浅くなっている。

#### 第Ⅳ期（第88図）

第Ⅳ期の土器は、A地点の第5号住居跡・第9号住居跡と、BD地点の第13A号住居跡（恋河内2001）の出土土器が該当する。また、遺構との帰属関係が明確ではないが、第8A号住居跡の覆土中から出土したNo 1の甕とNo 7の坏の破片（第32図）も、おそらく該期頃のものと思われる。該期の出土土器も土師器がほとんどで、須恵器は第13A号住居跡出土No 13の高坏の坏部だけである。器種は、甕・甑・高坏・碗・坏などが見られる。甕は、長胴甕・胴張甕と小形甕がある。長胴甕は、[大]・[中]・[小]のものが見られ、[大]と[中]は最大径を口縁部にもち、胴部があまり張らない形態のものが主体で、底部は削り取りにより突出しないやや不安定で小さな平底である。[小]は、第9号住居跡出土のNo 6だけである。胴部が張り最大径を胴中位に持つ形態であるが、口縁部の形状は伴出した[大]のNo 1と類似している。胴張甕は、第13A号住居跡No 7・11と第9号住居跡No 3・5があるが、全体の器形がわかるものはない。小形甕は、第13A号住居跡出土のNo 12だけである。形態は、頸部の括れが弱く、鉢形に近いものである。甑は、第9号住居跡出土No 7と8の大形甑だけである。No 7は、口縁部が外反せずに直線的に伸び、胴部の張りもなく把手でも付きそうな形態である。近時した時期では児玉町金佐奈遺跡B地点の第153号住居跡（徳山・大熊1999）に類似した形態の甑があるが、当地方では該期に一般的に見られるものではない。No 8は前時期からの系譜を引く一般的な大形甑で、前時期に比べると胴部の張りがなく、胴下半部が直線的に窄まっている。高坏は、第13A号住居跡出土No 13の長脚三方透の須恵器高坏と、第9号住居跡出土No 27の土師器高坏がある。前者の須恵器高坏は、脚部破損後おそらく坏として再利用されていたものと思われる。後者の土師器高坏は、定型化した高坏ではなく、碗形の坏に台が付いたような形態で粗雑な作りのものである。碗は、第9号住居跡出土のNo 9だけである。口縁部と体部の境に雑な凹線を施し、体部が深い形態であるが、あまり一般的な器種ではない。坏は、摸倣坏が主体であるが、「有段口縁坏」（田中1991）と単純口縁坏が見られる。また、第9号住居跡からは複数タイプの小形坏がまとまって出土している。有段口縁坏は、坏蓋型と坏身型がある。坏蓋型の有段口縁坏（第13A号住居跡No 14・15、第5号住居跡No 1）は、口縁部径が13cm程度の比較的小ぶりのもので、直線的に外傾する口縁部の外面中位に1条沈線を施しただけの形骸化したものである。坏身型の有段口縁坏は、

一般的な坏身型単純口縁坏よりも3倍程度高く伸長した口縁部の外面に2条沈線を施したもので、口縁部が外湾ぎみに内傾するもの（第13A号住居跡No30）と直線的に内傾するもの（第13A号住居

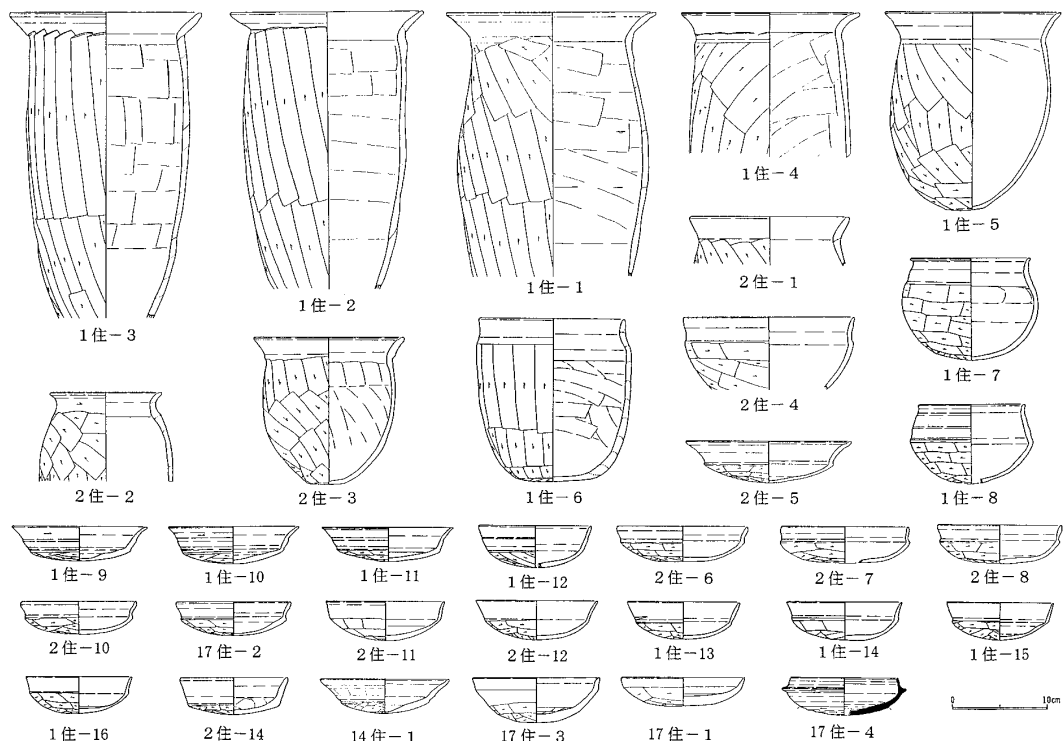


第88図 第IV期の土器

跡No31)がある。この坏身型有段口縁坏は、器種として定型化したものではあるが、坏蓋型有段口縁坏に比べて圧倒的に少ない。単純口縁坏も、坏蓋型と坏身型がある。坏蓋型の単純口縁坏は、口縁部径が17cm代の大形のもの(第9号住居跡No10)と12cm~13cm前後のものがある。前者の大形の坏は、その時期の一般的な坏の形態を大型化したもので、古い段階から系統的に見られる。住居跡から出土する場合は、たいがい1個体の例が多く、おそらく共用器として利用されていたものと思われる。後者の普通サイズの坏は、口縁部がやや短くなり、体部も口縁部より浅いものが主体になるが、第13A号住居跡No16・18・19のように、口縁部が長く直線的に外傾するやや古い段階の形態的特長を残すものも見られる。また、第13A号住居跡出土No23・24は、口縁部が短く外反し体部が深く、口縁部と体部の境に削り取りによる緩い稜を持ち、器肉がやや厚い形態で、一般的な摸倣坏とは系譜を異にする坏である。坏身型の単純口縁坏は、口縁部径が12cm代のものが主体で、大ぶりのものは見られない。第9号住居跡からまとまって出土した小形坏は、口縁部径が9cm前後のもので、平底ぎみの坏と碗形の坏の2形態がある。第Ⅱ期の第1号竪穴状遺構出土の小形坏群と同じく、当地方ではあまり多くはなく、第9号住居跡のようにある程度まとまって出土した例は、本庄市南大通り線内遺跡第48号住居跡(増田1989)くらいしか知らないが、おそらく系統的に存在するようである。

#### 第Ⅴ期(第89図)

第Ⅴ期の土器は、A地点の第1号住居跡と第2号住居跡出土土器、D地点の第14号住居跡と第17号住居跡出土土器が該当する。これらの住居跡は、相互に近接して位置しており、その配置から同時に存在することは困難と思われるため、さらに時期の分離が可能であろうが、それぞれの出土土器で直接対比できる資料が少ないため、ここではあえて一括して扱った。器種は、比較的少ないが、甕・鉢・坏などがある。甕は、長胴甕と小形甕がある。長胴甕は、[大]と[小]がある。[大]は、器形の全容がわかるものはないが、前段階の第Ⅳ期のものとあまり大差なく、口縁部が強く外傾して最大径を口縁部にもち、胴部はあまり張りを持たないものが主体である。[小]は、第1号住居跡出土のNo5だけである。形態は、胴部の張りが弱く口縁部に最大径をもち、底部は削りによる不安定な作りで座りが悪い。小形甕は、第2号住居跡No2・3と第1号住居跡No6がある。前者は一般的な形態のものであるが、後者は口縁部が短く直立し底部が広い平底で、鉢に近い形態のものである。鉢は、第2号住居跡No4と第1号住居跡No7がある。前者は、一般的な大形鉢で、口縁部は直立ぎみに外反し、胴部がやや深めのものである。後者は、口縁部が短く直立ぎみに外反する形態のもので、第Ⅲ期の第10号住居跡No4の小形広口壺の系譜を引くものかもしれない。坏は、土師器坏と須恵器坏身がある。土師器坏は、第Ⅳ期と同じく摸倣坏が主体で、有段口縁坏と単純口縁坏が見られる。有段口縁坏は、第1号住居跡から出土しており、坏蓋型と坏身型がある。坏蓋型有段口縁坏は、いずれも口縁部外面に1条沈線を施しただけのものであるが、口縁部径が14cm前後で口縁部が強く外反するもの(No9~11)と、口縁部径が12cm程度で口縁部が直線ぎみに外傾するもの(No12)がある。前者は前段階のものが出土していないが、後者は第Ⅳ期の第13A号住居跡No14の系譜を引くもので、口縁部径が小さくなり、体部と境の稜は削り取りにより突出せず緩やかになっている。坏身型有段口縁坏は、第1号住居跡出土のNo8だけである。第Ⅳ期の第13A号住居跡出土No30の系



第89図 第V期の土器

譜を引くもので、それと同様の高く伸ばした口縁部外面に2条沈線を施したものであるが、口縁部と体部の境の稜は突出せず退化ぎみで、体部は口縁部の高さよりも深く、鉢形の影響を受けたような形態になっている。単純口縁坏は、坏蓋型だけが出土しており、坏身型のものは見られない。坏蓋型単純口縁坏は、幾つかの系譜を異にする形態のものが見られる。前時期からの系譜を引く一般的な単純口縁坏は、前時期と同じく、口縁部径が17cm代の大形のもの（第2号住居跡No5）と、口縁部径が12cm前後のもの（第1号住居跡No13~16、第2号住居跡No11~13）がある。いずれも前時期のものに比べて、口縁部の外反が強くなり、口縁部がやや短く体部が偏平化して器高が低くなる傾向が見られ、後者の普通サイズの坏では、口縁部と体部の境の稜が突出しないものが主体である。第2号住居跡出土のNo6~10と第17号住居跡出土のNo2は、該期の一般的な坏蓋型単純口縁坏に比べて口縁部が短く、口縁部の上半が肥厚あるいは屈曲ぎみにやや強く外傾する特異な形態の坏である。当地域ではあまり見かけないもので、系統的に存在するものか不明である。第14号住居跡出土のNo1は、口縁部がかなり強く外反ぎみに外傾し、体部が皿状に浅い形態のもので、形態的にはいわゆる「小針型坏」（田中1991）の系譜を引くものかもしれない。この他、摸倣坏か明確ではないが、第17号住居跡出土のNo3は、前時期の第13A号住居跡No23・24の系譜を引くと考えられるもので、それに比べると口縁部がやや短くなっている。須恵器坏身は、口縁部径が推定で11cm代とやや小ぶりのもので、口縁部の内屈は弱く、体部もまだ丸みをもって立ち上がる形態であるが、覆土中から出土した破片であるため、該期に伴うものか明確ではない。

## 2. 小形坏について

A地点の第1号竪穴状遺構と第9号住居跡からは、当地域で一般的に見られる模倣坏とは異なった、口縁部径が9cm～11cm程度の小形の坏が比較的まとまって出土している。これらの小形坏は、当地域の一般集落でも類似したものが散見されるが（第92・93図）、これまでほとんど注目されたことがないものである。しかしながら、本遺跡では一般的な竪穴式住居跡ではなく、やや性格を異にした遺構からまとまって出土しており、本遺跡の性格を知るうえで重要な土器であると考えられる。そのため、ここでは本遺跡で出土した特徴的な小形坏について少し検討し、当地域におけるそれらの様相について概観したい。

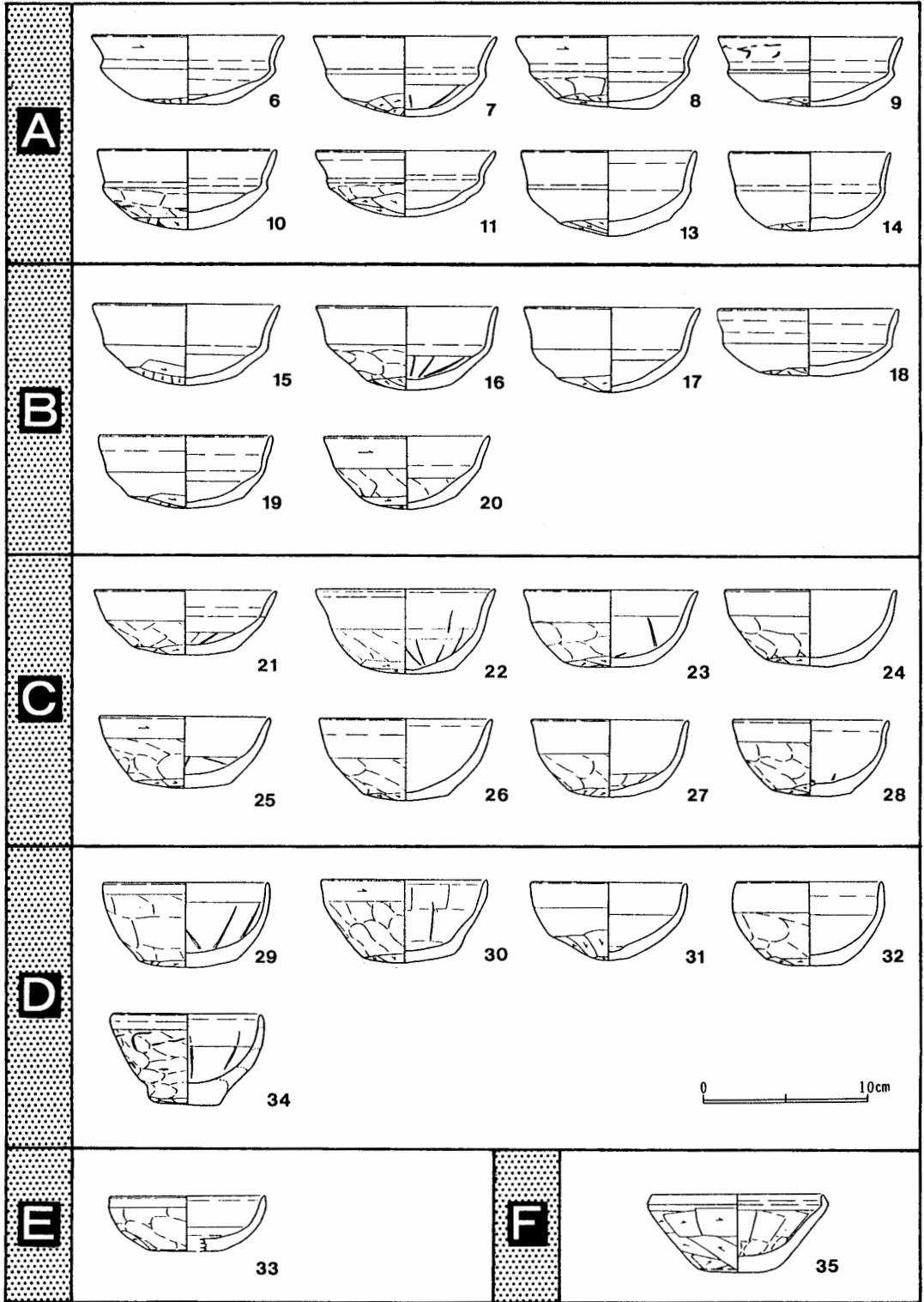
### 第1号竪穴状遺構出土の小形坏

第1号竪穴状遺構出土の小形坏には形態差がいくつか見られ、その特徴により以下のA類～F類の6つに分類する（第90図）。

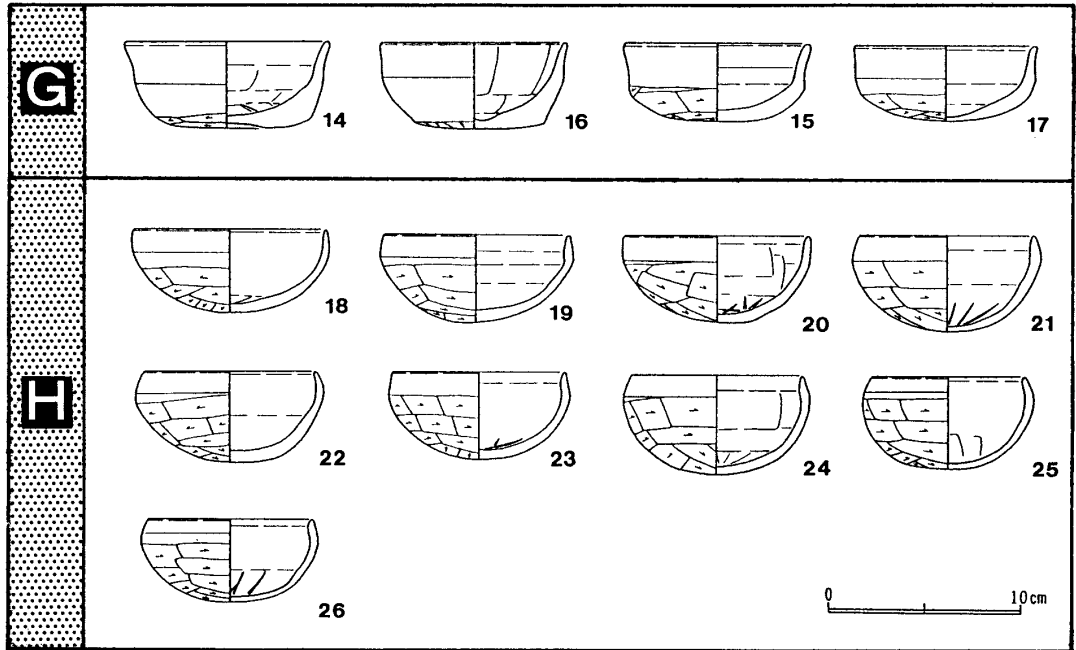
- A類—口縁部は緩やかに外反し、口縁部と体部の境に突出した明確な稜をもつもので、体部は外面ナデの後に下半もしくは底部付近のみにケズリを施して丸底にしている（No6～14）。
- B類—口縁部は緩やかに外反し、口縁部と体部の境に屈曲した明瞭な稜をもつもので、体部は外面ナデの後に下半もしくは底部付近のみにケズリを施して丸底にしている（No15～20）。
- C類—口縁部はやや外反ぎみに開き、口縁部と体部の境にやや不明瞭な緩い稜をもつもので、底部はケズリにより不安定な丸底ぎみの形態にしている（No21～28）。
- D類—口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部と体部の境に明瞭な稜をもたないもので、底部はケズリにより不安定な丸底ぎみの形態にしている（No29～32）。No34は、底部が突出した平底形態のものであるが、これはD類の整形段階に近いもので、底部を削り取る外面の調整段階を省略したものと推測される。
- E類—形態はD類に類似するが、他に比べて口縁部が短く器高も低く扁平ぎみで、底部はケズリにより平底ぎみの形態にしている（No33）。
- F類—口縁部は短く内屈し、体部は直線的に開き、底部は平底である（No35）。

これらの小形坏の中で、主体をなすのはA～D類である。E類とF類については、いずれも1個体しか出土しておらず、周辺地域においても類例があまり見られないため、現段階では具体的な検討は困難である。このA～D類は、いずれも法量が近似しており、製作技法も口縁部はヨコナデ、体部外面はナデの後に下半から底部付近のみに雑なケズリを施すといった共通した技法が認められる。この体部下半に見られる特徴的なケズリは、その施された範囲から見て、体部の器肉を薄くするためのものではなく、成形～整形段階において土器を作業台の上に据えるために必要であった突出した平底の底部を削り落とすために行われたものと考えられ、その底部調整段階を省略して厚い突出底を付けたままで流通したと推測される例も幾つか見られる（第90図D類—No34、第92図B類—後張29住・C類—後張28住など）。

これらの小形坏の祖形や系譜については、資料的制約から明確でないものもあるが、その中でA



第90图 第1号竖穴状遺構出土小形坏分類圖



第91図 第9号住居跡出土小形坏分類図

類とB類に関してはその形態的特徴から見て、いわゆる模倣坏の系譜を引くものであることは間違いないであろう。しかしながら、一般的な土師器の坏蓋型単純口縁模倣坏に比べて細部の模倣性が低く、またやや調整が雑で技法も異なることから、単純に坏蓋型単純口縁模倣坏の小型化したものと見ることはできない。おそらくは、須恵器を直接的に模倣したものではなく、土師器の坏蓋型単純口縁模倣坏をモデルとして二次的に真似たものではないかと推測され、A類とB類あるいはC類とD類も含まれるかもしれないが、それらの形態差はそのモデル（模倣坏）の多様性による個体差かまたは模倣度や抽象度の差異として、系統的に分岐してきたものではないかと思われる。

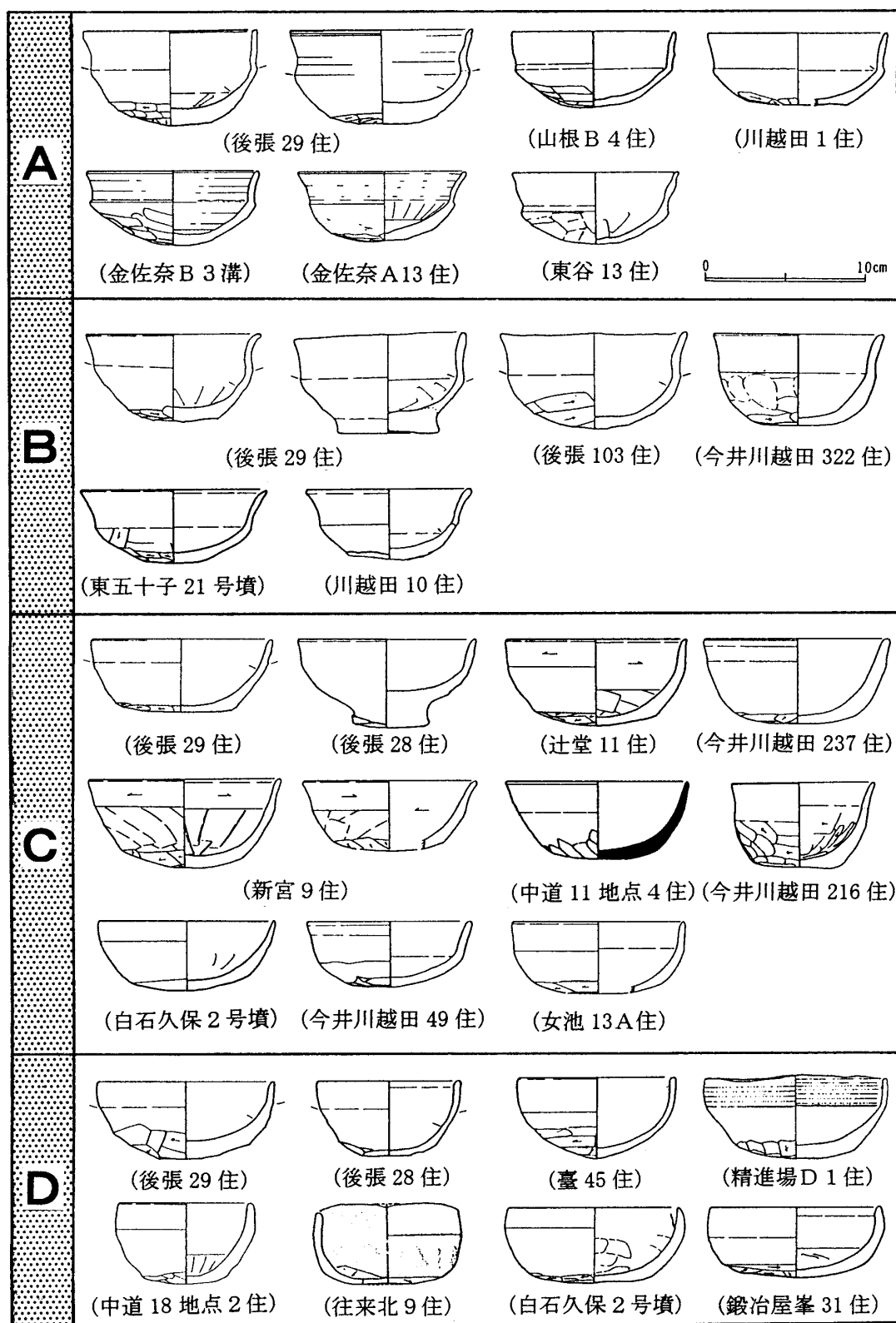
#### 第9号住居跡出土の小形坏

第9号住居跡から出土した小形坏は、その形態的特徴の差異により、以下のG類とH類の2つに分類する（第91図）。

**G類**—口縁部は外反ぎみに立ち上がり、体部はやや浅めである。底部は体部ナデの後に施すケズリの範囲と度合いにより、平底ぎみの形態（No14・16）と丸底ぎみの形態（No15・17）がある。

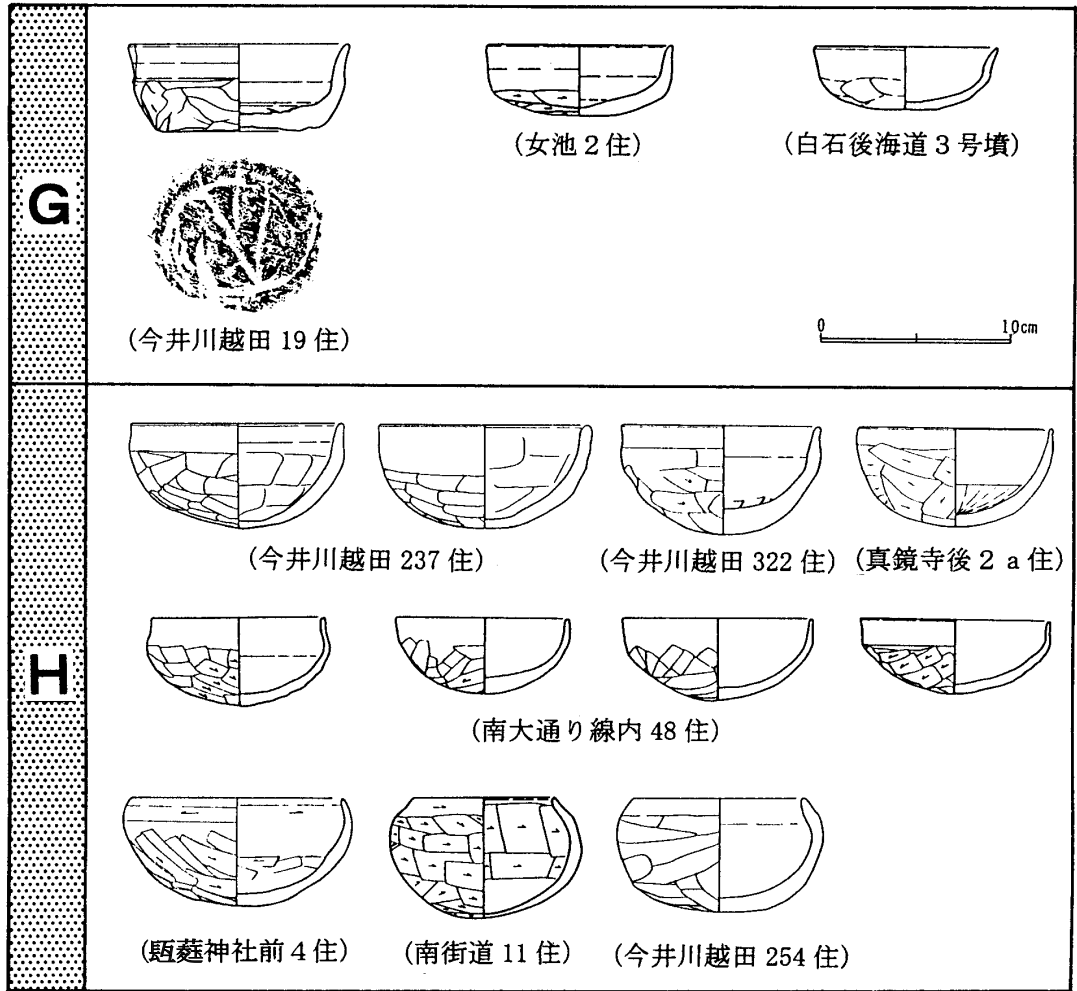
**H類**—口縁部は短く内傾もしくは内湾し、体部は深めで丁寧なケズリにより器肉がほぼ均一な丸底の形態にしている（No18～26）。

第9号住居跡から出土した小形坏の主体をなすのはH類である。このH類は、第1号竪穴状遺構から出土したA類～F類の小形坏とは形態や製作技法に類縁性があまりなく、それらとは異なった系譜の土器と推測される。G類は、その製作技法の特徴が第1号竪穴状遺構から出土した小形坏の主体をなすA類～D類と同一で、形態的にはC類と類縁性も見られることから、その系譜を引くものである可能性も考えられる。



第92図 児玉地方における小形坏A～D類の類例



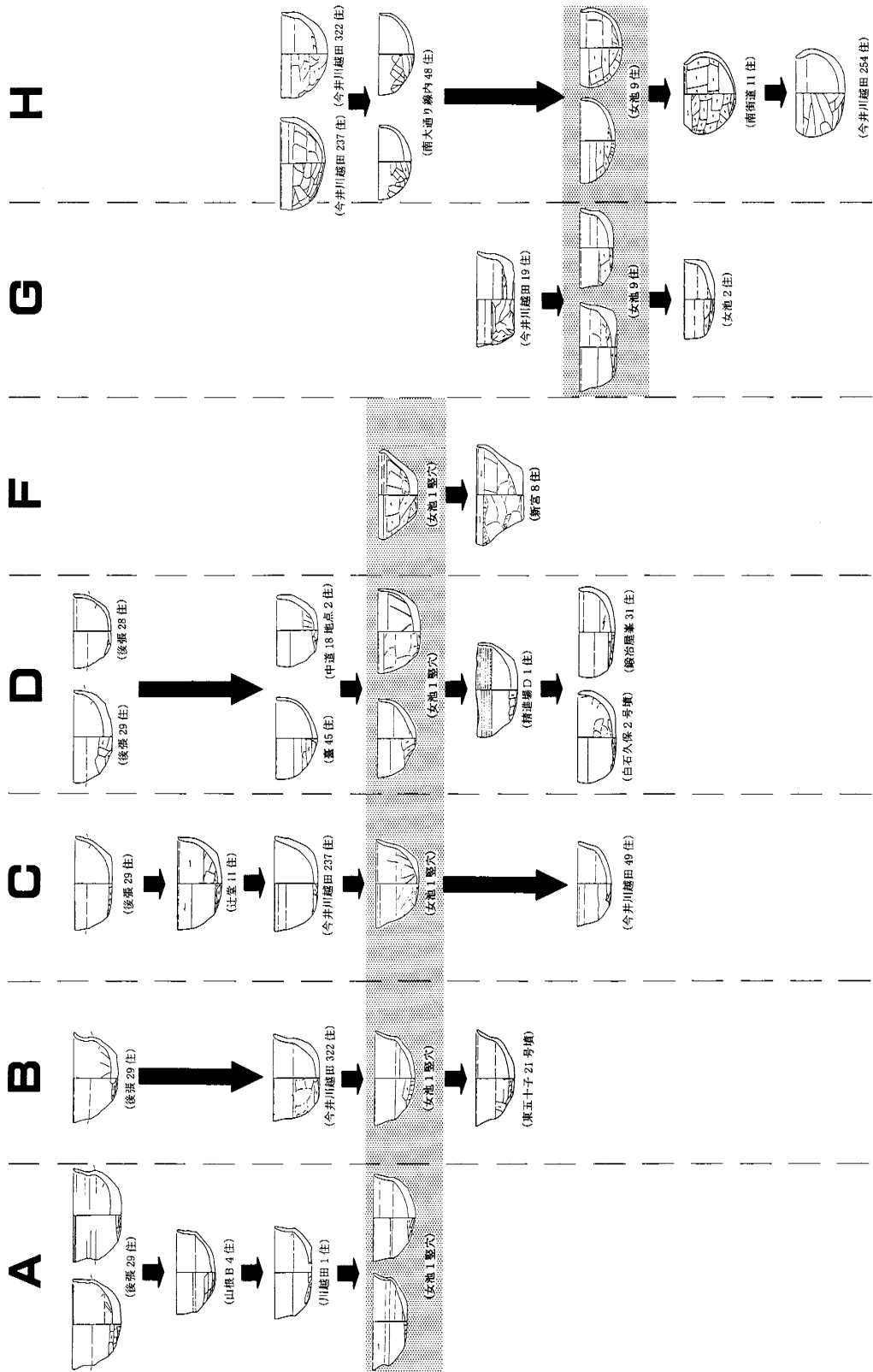


第93図 児玉地方における小形杯G・H類の類例

小形杯A～H類の変遷とその様相

本遺跡の第1号竪穴状遺構から出土した小形杯A～D類や、第9号住居跡から出土した小形杯G・H類と類縁性をもつと思われる土器は、先にも述べたように、その出土量は少ないながらも本遺跡周辺の古墳時代後期の遺跡で、比較的多く散見することができる(第92・93図)。これらの類例については、そのほとんどを実見していないため、中には似て非なるものもあるかと思われるが、その分布については本遺跡が立地する女堀川流域を中心とした児玉地方に多い傾向が窺え、他地域の該期遺跡をすべて精査したわけではないが、児玉地方以外の地域ではあまり見られないようである。

児玉地方に分布するこれらの小形杯は、その伴出した土器に時間差が認められるものが多く、当地方では後期の早い段階より複数系統の土器として存在したようである(第94図)。現在のところ、古いものでは5世紀末～6世紀初頭頃の後張遺跡第29号住居跡(立石他1983)で、A類～D類と類縁性のある小形杯がまとめて出土している例が確認でき、最も新しいと思われるものでは7世紀前半頃と推測される今井川越田遺跡第254号住居跡(瀧瀬1997)で、H類と類縁性のある土器が見ら



第94図 小形環A～H類の変遷想定図

れる。当地方では、7世紀後半以降になるとこのような特異な形態の小形杯はほとんど見られなくなるため、おそらくこの段階でこれらの小形杯は姿を消すものと推測されるが、A～H類が一律に姿を消すのか、個々に時間差があるのかは、今後の資料の増加をまって検討する必要がある。

この小形杯A～H類の変化の様相については、現在までの資料ではその法量や製作技法はほとんど変化がなく、その形態上の差異に変化の特徴と傾向を見ることができる(第94図)。すなわち各類毎に見ると、A類は、口縁部が長く直立ぎみで体部が深い形態から、徐々に口縁部が短くなって緩やかに外反し、体部も浅い形態に移行する。B類とC類も、口縁部が立ちぎみで緩やかに外反し体部が深い形態から、徐々に口縁部の外反が強くなり体部が浅い形態に移行する。D類は、口縁部が直立ぎみで体部が深い形態から、口縁部の内湾がやや強くなり体部が浅い形態に移行する。E～G類については、資料が少なくその様相は不明である。H類は、口縁部が短く直立する形態から、徐々に口縁部の内傾・内湾が強くなる形態に移行するようである。このA～D類に見られる口縁部の湾曲化と体部の扁平化という形態変化の傾向は、A・B類とそれに伴う杯蓋型単純口縁摸倣杯との相関関係が端的に示すように、古墳時代後期の一般的な土師器杯碗類の形態変化の指向性とほぼ同一であり、それらとの有機的な関係が窺える。H類については、前述のように他の小形杯とは異なる系譜の土器と推測されるが、新しい段階の類似した形態の土器の中には、内傾した口縁部に一對の小孔をもち合子状になると思われるものもあり、それらとの関係も注意される。

これらの小形杯の性格や用途については明確ではなく、その使用痕跡や出土状態などから推測できるものも少ないが、本遺跡の第1号竪穴状遺構や本庄市南大通り線内遺跡第48号住居跡覆土中一括出土土器(増田1987・89)のように、一箇所から量的にある程度まとまって出土している例が見られる。これらは、完形かそれに近い一般的な土師器の甕・大形甑・鉢・杯などの土器とともに、比較的丁寧に集積された状態で廃棄されている。そのため、おそらく何だかの集落内祭祀で使用した土器類を、祭祀終了後に一箇所に集積して廃棄したものではないかと推測されるが、これらの小形杯が特定の祭祀行為の場に多用される傾向が窺えることは注目されよう。

また、これらの小形杯は、前述のように本遺跡の立地する女堀川流域を中心とした児玉地方に多く分布する傾向が見られ、それらの出土状況は一般的な竪穴式住居跡から他の日常雑器の土器類とともに単体で出土している例が大半である。本遺跡のように一般的な竪穴式住居跡とは異なった竪穴状の不確定な遺構(第1号竪穴状遺構)や工房的形態に類似した特定遺構(第9号住居跡)から、形態及び製作技法が同一の小形杯が量的にまとまって出土しているのは特異であり、逆に現状では本遺跡がこれらの小形杯の当地域における分布の中心である様相も窺える。つまり、本遺跡で出土した小形杯は、土師器焼成窯や製作工房跡などの直接的な証拠は確認されていないものの、本遺跡で生産されていたのではないかと推測され、本遺跡で検出された該期の遺構の様相から見ても、その可能性は十分にあると思われる。また、第1号竪穴状遺構から出土した小形杯A～D類と第9号住居跡から出土した小形杯G・H類には明確な時期差が認められることから、その間本遺跡で特定の小形杯が継続的か断続的に生産されていたものと思われるが、その生産形態が本遺跡において一元的に行われていたのか、当地域で多元的に行われていたのかは、今後の資料の増加を見ながら検討していく必要がある。

### 3. 集落の様相

本遺跡のA・B・Dの3地点から検出された古墳時代後期の遺構は、竪穴式住居跡14軒・掘立柱建物跡1棟・竪穴状遺構1基・窯状遺構3基・土壙17基・溝跡1条である。これらの遺構は、先の出土土器による第Ⅰ～Ⅴ期の時期区分に対比させると、第Ⅱ期以降の6世紀後半のものが大半を占めている。第Ⅰ期は、5世紀末～6世紀初頭頃の土器であるが、その出土量はごく少量でいずれも西側のB・D地点（恋河内2001）の遺構の覆土中から出土した破片である。そのため、現状ではこれらの土器破片と遺構との帰属関係が明確ではなく、現段階では第Ⅰ期をもって本遺跡における古墳時代後期集落の出現期とするのは躊躇される。第Ⅱ期以降の集落の変遷については、各地点とも該期遺構の分布密度が高く、特に竪穴式住居跡の分布や相互の位置関係を考慮すると、第Ⅳ期と第Ⅴ期についてはさらに細別が必要であるが、本遺跡における現在までの資料ではそれらの分離はやや困難である。

本遺跡における第Ⅱ期以降の6世紀後半の集落で特に注目されるのは、A地点の集落南側縁辺部付近から検出された第8号住居跡と第9号住居跡の長方形竪穴住居と第1～3号窯状遺構である。この長方形竪穴住居と窯状遺構は、古墳時代後期の遺構としてはあまり類例を見ないため、本遺跡の性格を考える上でも極めて重要と思われるが、今回の調査ではこれらの遺構の性格について、今ひとつ明確にすることができなかった。

近接する長方形竪穴住居の第8号住居跡と第9号住居跡は、出土土器に一般的な土器が少なくまた直接比較できるものもないため、相互の新旧関係は明確ではないが、その形態や構造及び建物配置の類似性からすると、おそらく同時期かあるいは近時した時期のものと推測される。このような長方形竪穴住居は、当地方の一般集落ではほとんど見られないことからその特殊性が窺えるが、これと類似した形態のものは、田中広明氏が官衙や郡家遺跡に多く見られる特殊な工房跡として集成し検討された「長方形竪穴」の類例の中に認められる（田中1992）。この「長方形竪穴」は、本遺跡の長方形竪穴住居に比べて時期的にやや新しいため、同じように対比して扱えるかはその系統性を含めて慎重に検討すべきであろうが、仮に本遺跡の長方形竪穴住居をその形態的類似性から「長方形竪穴」と同様に工房的性格の建物と見ることができるとすれば、そこで製作あるいは集積されていたものは、先にも述べたように第9号住居跡ではそこからまとまって出土している小形坏GH類を主体とする土器類の可能性が高いのではないと思われる。そして、さらに第9号住居跡よりも古い第1号竪穴状遺構から出土した小形坏A～D類を主体とした土器類を製作した工房跡も、おそらく近くに存在することが予想されよう。

第1～3号窯状遺構は、いずれも遺存状態が悪く、その性格や時期についてはあまり明確ではないが、残存する部分や他遺構との重複関係から、本遺跡における6世紀後半の集落と同時期の焼成遺構と推測されるものである。いずれも、遺構の長軸方向を北西から南東方向に揃え、床の傾斜はあまりなく、南東側に煙道部をもつ形態で、その形状や焼土層と炭化層が互層になる覆土の堆積状況は、いわゆる炭焼窯に類似している。これらの窯状遺構が炭焼窯であれば、県内でも最古級のものとなり（水口2002）、第5号住居跡の覆土中から少量ながら出土した羽口の破片や鉄滓との関係か

ら、製鉄・鍛冶集団との関連も窺えることになるが、現段階では推測の域を出るものではなく、今後の調査の進展をまって考えていかなければならないであろう。

いずれにしても本遺跡の古墳時代後期集落は、これらの特殊性の高い遺構の検出から窺えるように、何だかの手工業生産に携わっていた集団と推測される。その内容については、それを示す直接的な遺構や遺物が検出されていないため現段階では明確にしがたいが、前述したように一応本遺跡で出土した特徴的な土器の小形坏群の存在から、それらの土器生産も一つの候補として挙げられよう。しかしながら、本遺跡のA・B・D地点の調査で検出された他の遺構や出土した遺物の様相は、当地域に多く分布する一般的な集落と大差なく、その集落間における物質的な優位性は認められない。そのため、本遺跡の集落で行われていたと推測される手工業生産は、本業として独自にその集落経営を維持拡大できるような専門的なものではなく、地域内分業の一部を担うような小規模で隷属性の高い生産形態ではなかったかと思われる。

## 参 考 文 献

- 磯崎 一 (1995) 『今井川越田遺跡Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集
- 太田 博之 (2002) 『東五十子・川原町』 東五十子遺跡調査会
- 大屋 道則 (1988) 『真鏡寺後遺跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書第8集
- 柿沼幹夫他 (1978) 『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告第16集
- 金子 章他 (1975) 『いぶき ―児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究―』 8・9合併号  
埼玉県立本庄高等学校考古学部
- 金子 彰男 (1991) 『中道遺跡第18地点』 神川町遺跡調査会発掘調査報告第3集  
(1995) 『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡』 神川町教育委員会文化財調査報告第12集
- 恋河内昭彦 (1995 a) 『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』  
児玉町文化財調査報告書第17集  
(1995 b) 『南共和・新宮遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第6・7集  
(1996 a) 『辻堂遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第19集  
(1996 b) 『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第20集  
(1997) 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』 児玉町文化財調査報告書第23集  
(2001) 『女池遺跡 ―B・D地点の調査―』 児玉町文化財調査報告書第35集  
(2003) 『大久保遺跡 (B地点の調査)』 児玉町遺跡調査会報告書第14集
- 駒宮 史朗 (1977) 『御林下遺跡』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第13集
- 坂本 和俊 (1986) 『鷲山古墳』 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室

- 佐藤 好司 (1986) 「金鑽神社古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室
- 高橋一夫他 (1978) 『精進場遺跡』 神川村教育委員会
- 瀧瀬 芳之 (1997) 『今井川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- 立石盛詞他 (1982) 『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集  
(1983) 『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 田中 広明 (1991) 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
(1992) 「郡家造営事始め」『研究紀要』 第9号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田村 誠 (1986) 『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅴ』 神川村教育委員会
- 徳山 寿樹 (1997) 『金佐奈遺跡 —A 1 地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第24集  
(1998) 『金佐奈遺跡 —A 2 地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第29集
- 徳山寿樹・大熊季広 (1998) 『金佐奈遺跡Ⅰ —B 地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第30集  
(1999) 『金佐奈遺跡Ⅱ —B 地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第33集
- 利根川章彦 (1998) 『御林下遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第223集
- 富田和夫・赤熊浩一 (1985) 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 中沢良一他 (1999) 『鍛冶屋峯遺跡・川向遺跡・森後遺跡』 美里町遺跡発掘調査報告書第10集
- 中村 倉司 (1979) 「児玉地方における鬼高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告第38集  
(1980 a) 『鬲薙神社前遺跡・一本松古墳』 埼玉県遺跡調査会報告第39集  
(1980 b) 『臺遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告第41集
- 長滝 歳康 (2003) 『白石古墳群Ⅱ』 美里町遺跡発掘調査報告書第14集
- 伴瀬 宗一 (1996) 『今井川越田遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
- 増田 一裕 (1987) 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第1分冊  
(1989) 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第2分冊  
(1990) 『山根遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第18集
- 丸山 修 (1991) 『往来北遺跡発掘調査報告書』 上里町教育委員会
- 水口由紀子 (2002) 「発掘された埼玉県内の炭焼窯」『研究紀要』 第24号 埼玉県立歴史資料館

An aerial black and white photograph of a rural village. The landscape is a dense grid of rectangular fields, interspersed with clusters of small buildings and houses. A network of roads and paths crisscrosses the area. In the lower right, there is a larger, more irregularly shaped area that appears to be a wooded or forested hillside. The overall scene depicts a typical agricultural settlement.

# 写真図版

1984(昭和59)年頃撮影



女池遺跡A地点（北から）



女池遺跡A地点（南から）

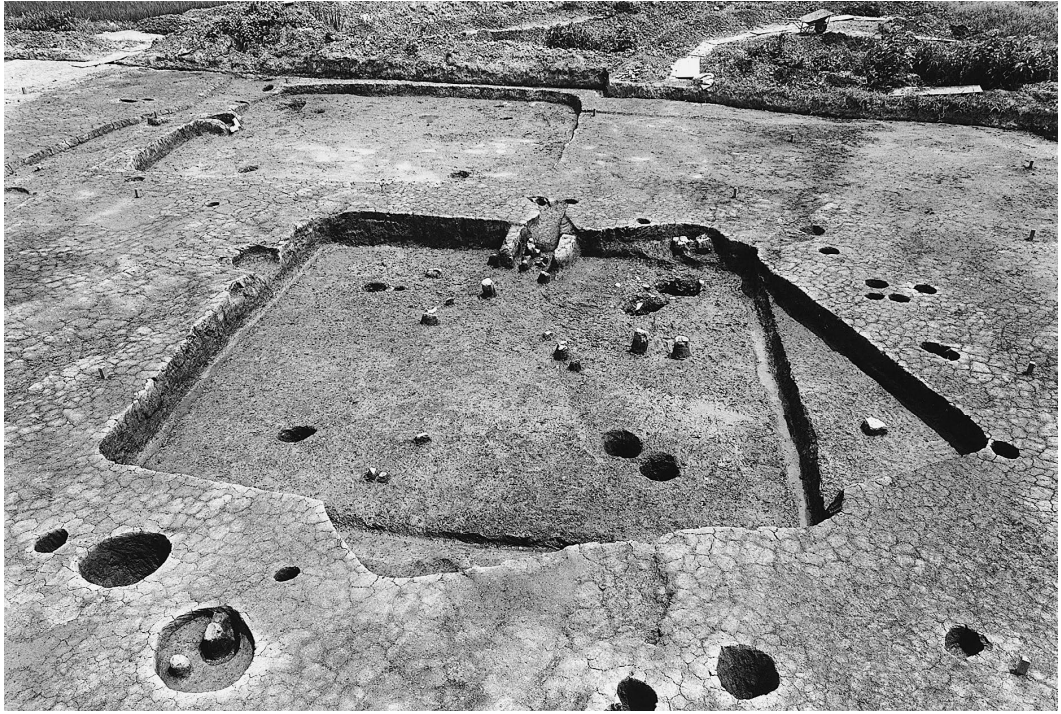




第1号住居跡



第1号住居跡カマド



第2・3号住居跡



第2・3号住居跡カマド



第4号住居跡



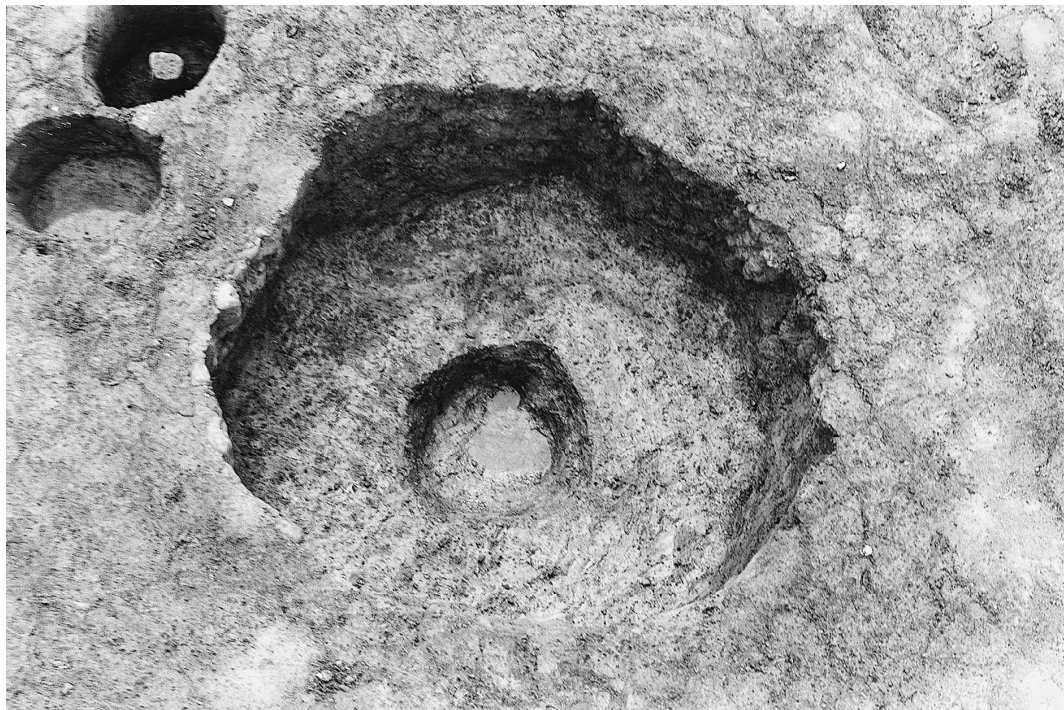
第4号住居跡カマド



第5号住居跡



第6A・6B号住居跡



第6 A号住居跡炉



第6 B号住居跡炉



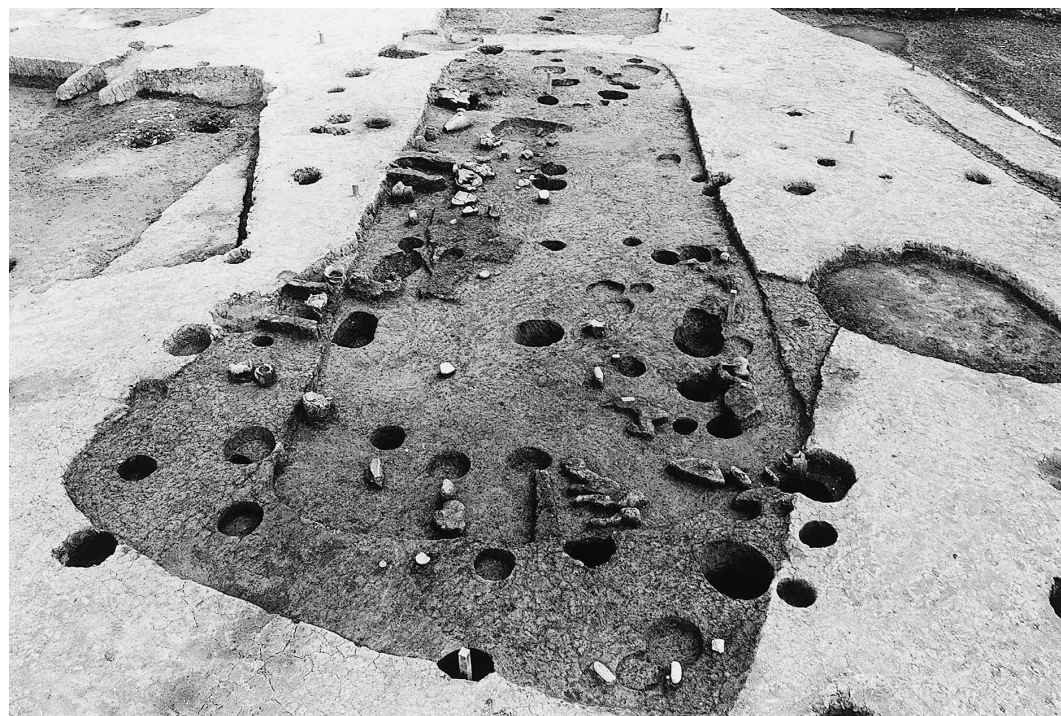
第7号住居跡



第7号住居跡炉



第8号住居跡



第9号住居跡（西から）

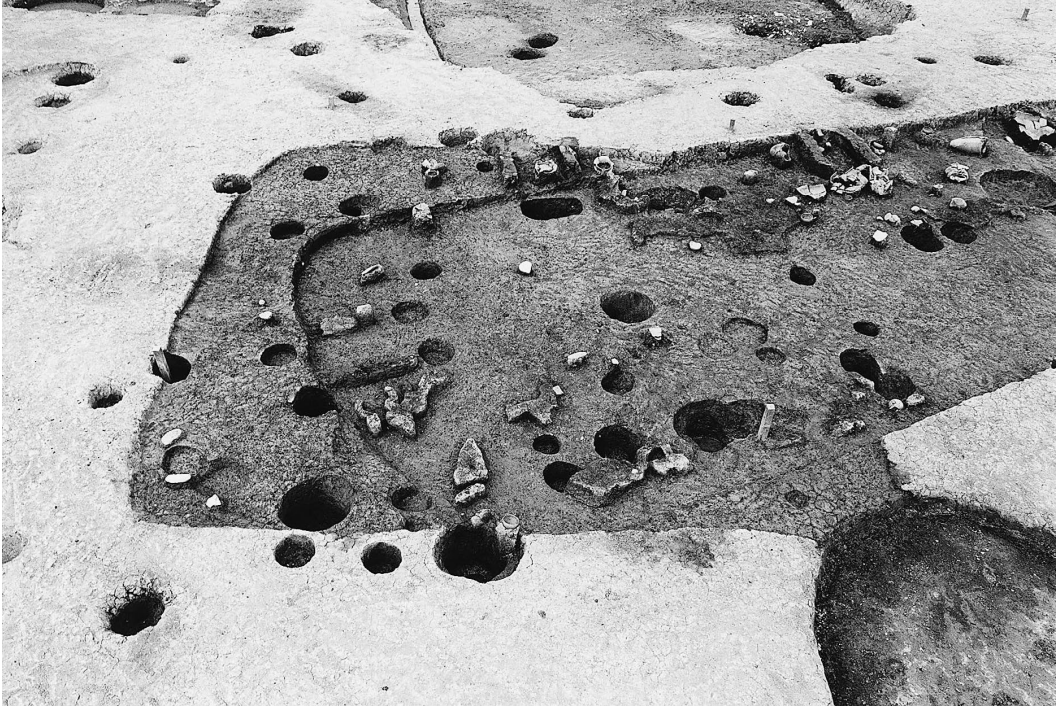


第9号住居跡（南から）



第9号住居跡カマド

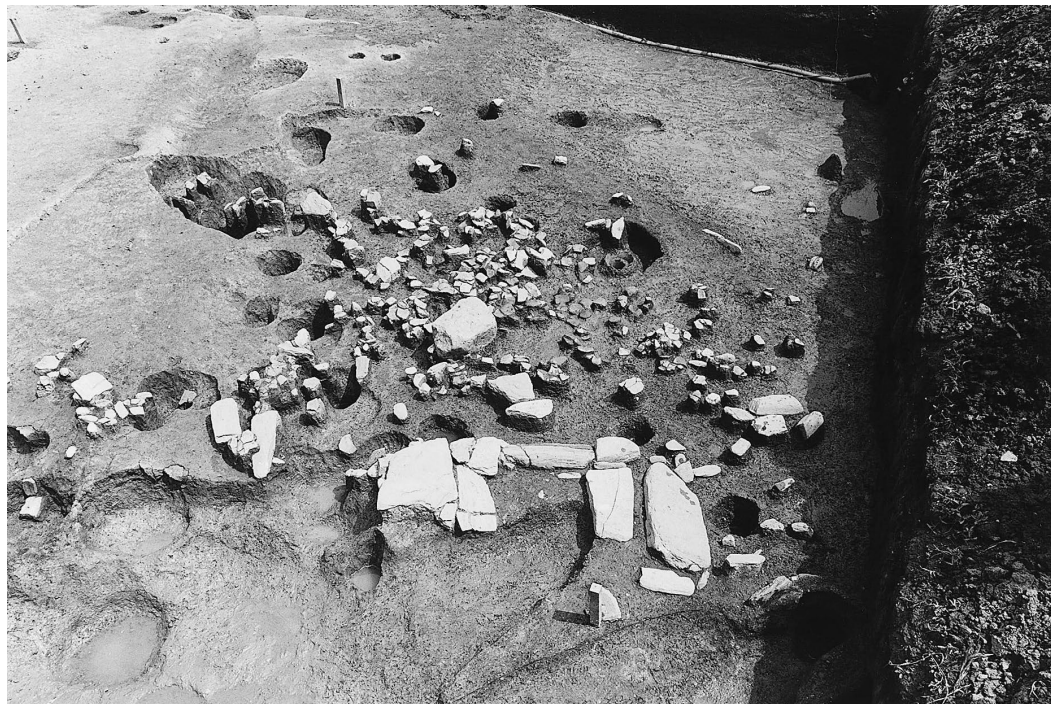




第10号住居跡



第10号住居跡カマド



第11号住居跡



第11号住居跡炉



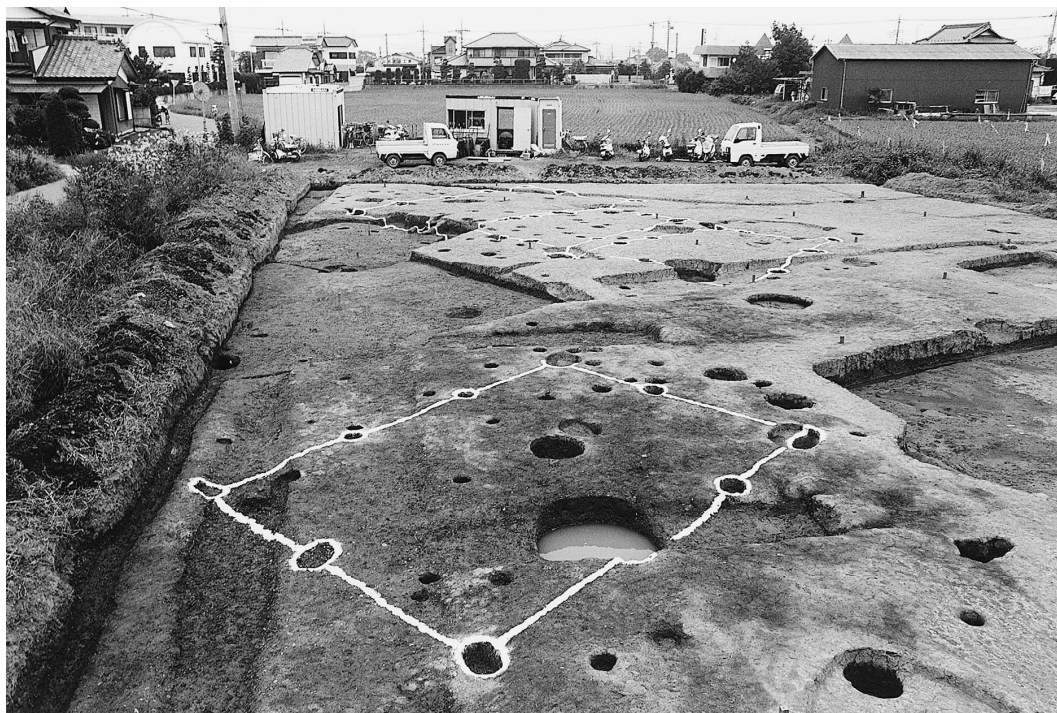
第11号住居跡P 22



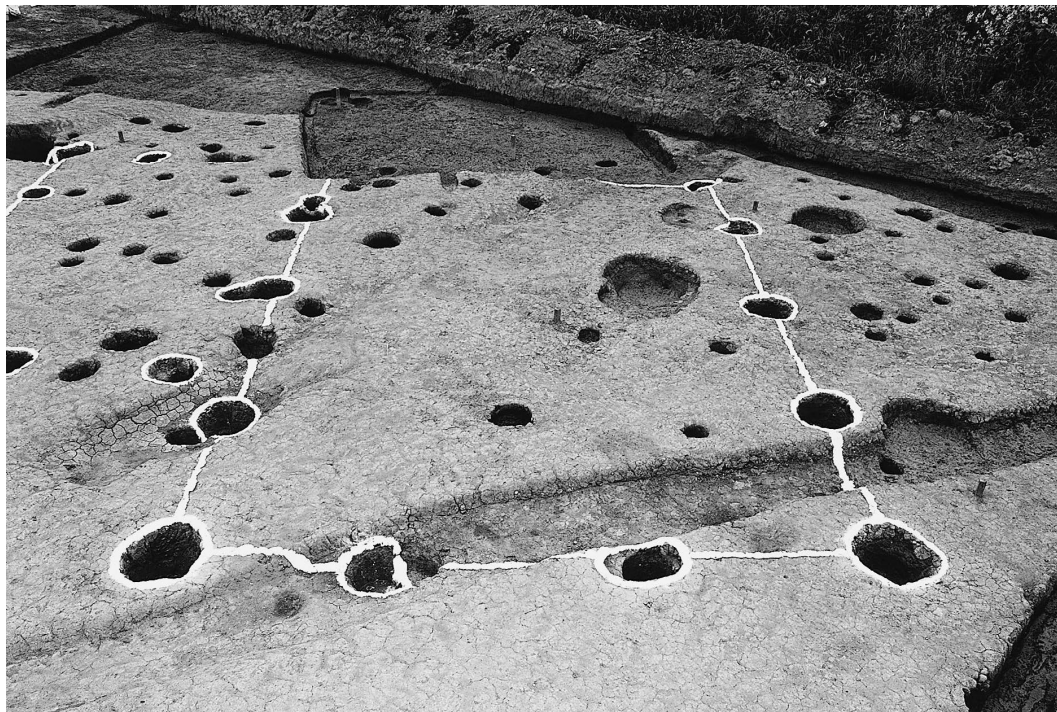
第11号住居跡P 23



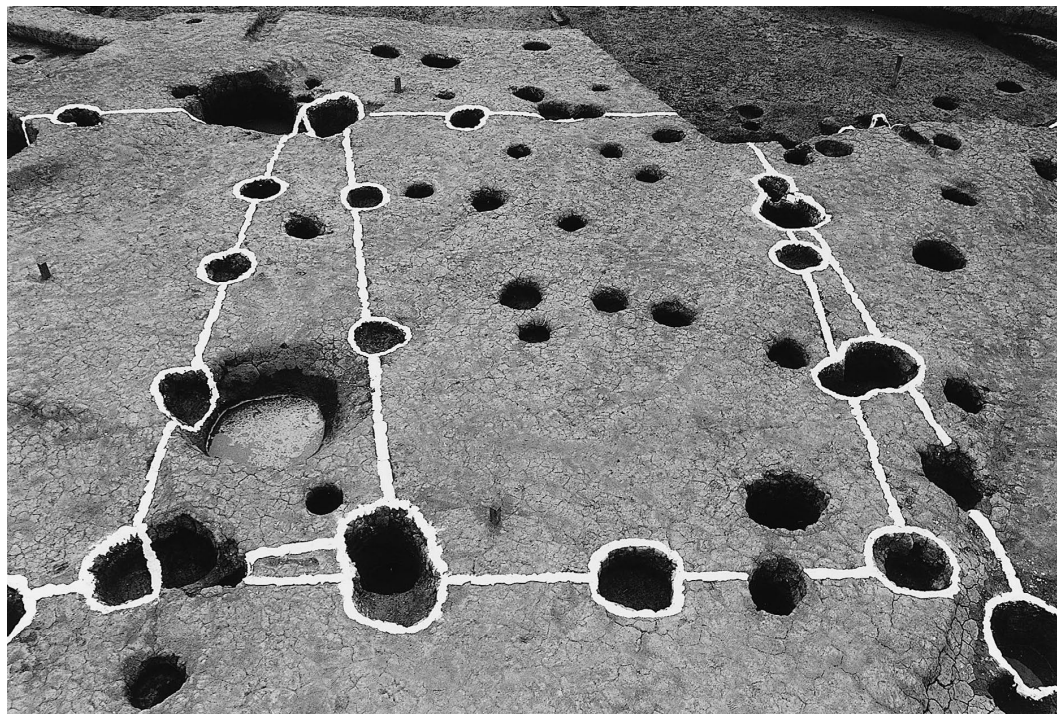
第12号住居跡炉



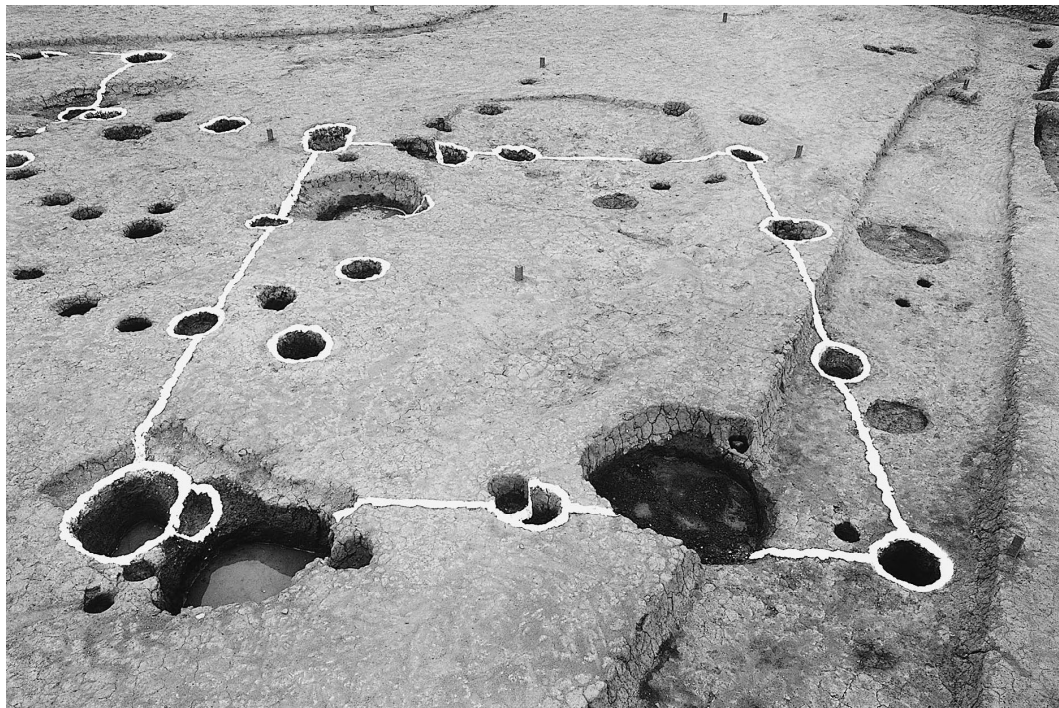
第1～4号掘立柱建物跡



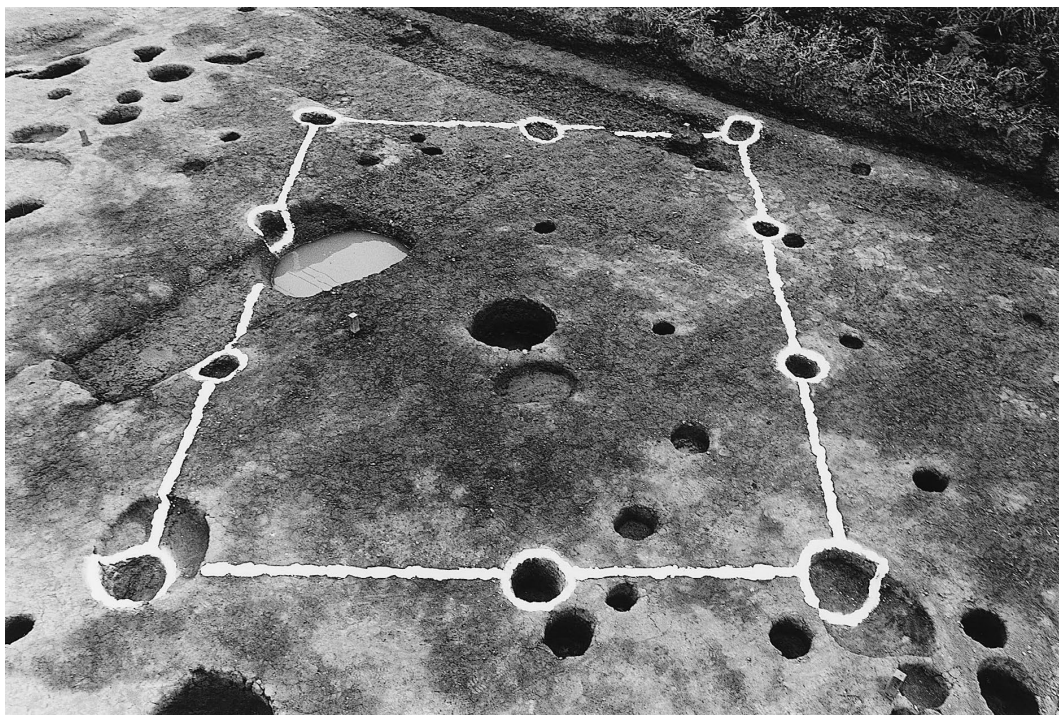
第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡



第4号掘立柱建物跡



第1号井戸跡



第2号井戸跡

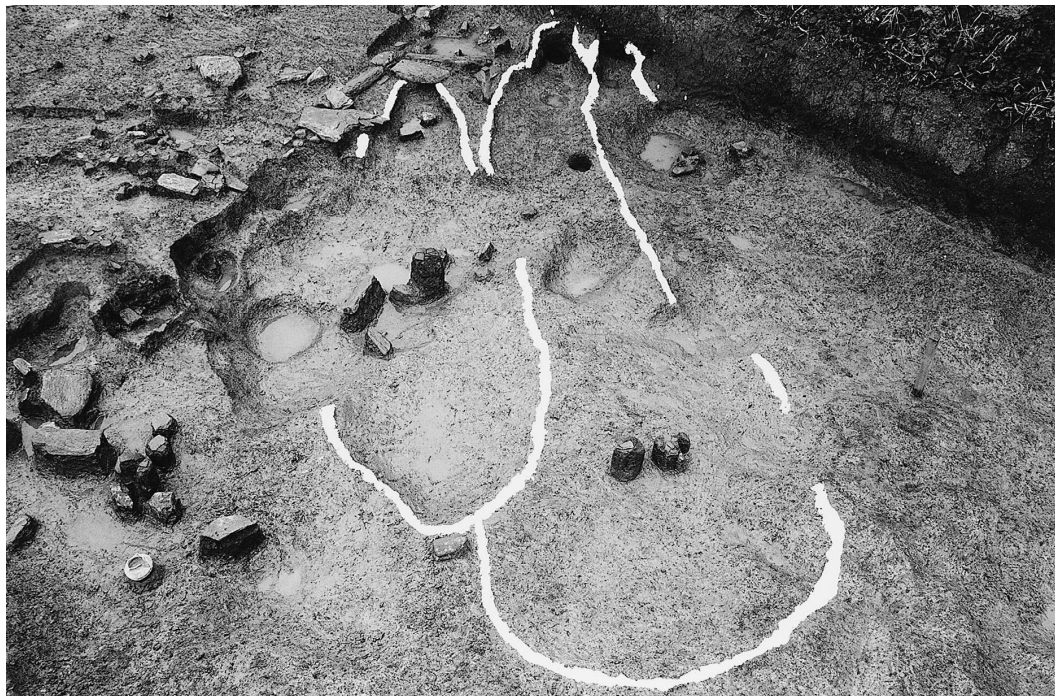


第3号井戸跡



第4号井戸跡





第1～3号窯状遺構



第1号竖穴状遺構



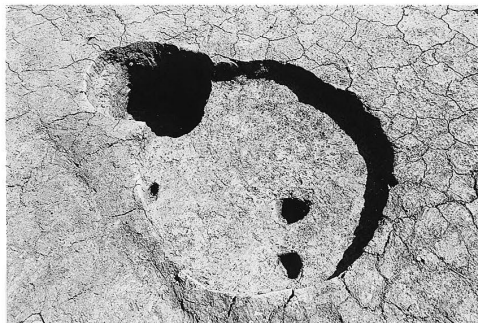
第6号溝跡



A地点調査区南東側



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



第4号土坑



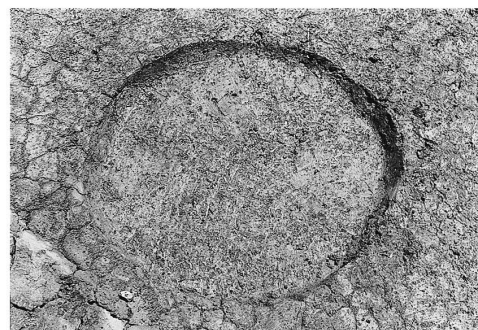
第5号土坑



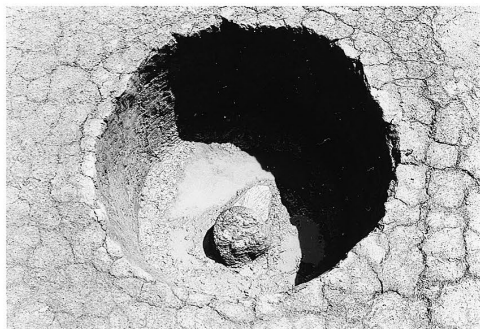
第6号土坑



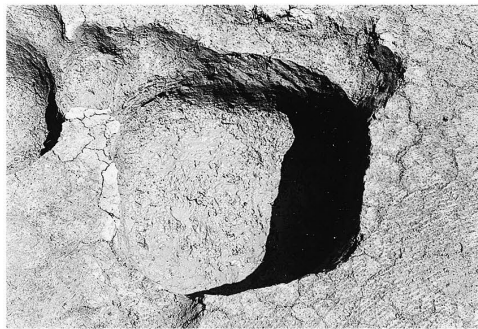
第7号土坑



第8号土坑



第9号土坑



第10号土坑



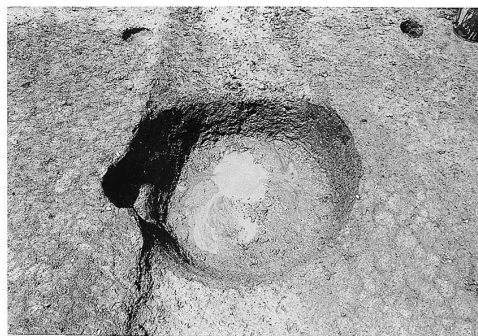
第12号土坑



第13号土坑



第13号土坑遺物出土状态



第14号土坑



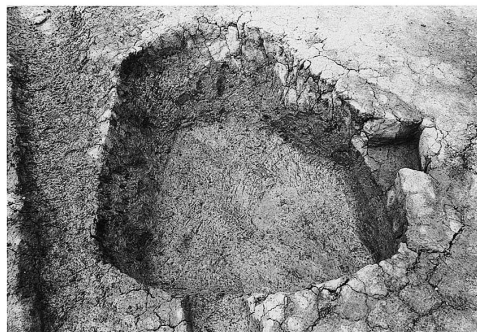
第15号土坑



第16号土坑



第17号土坑



第18号土坑



第20·21号土坑



第23号土坑



第31·32号土坑



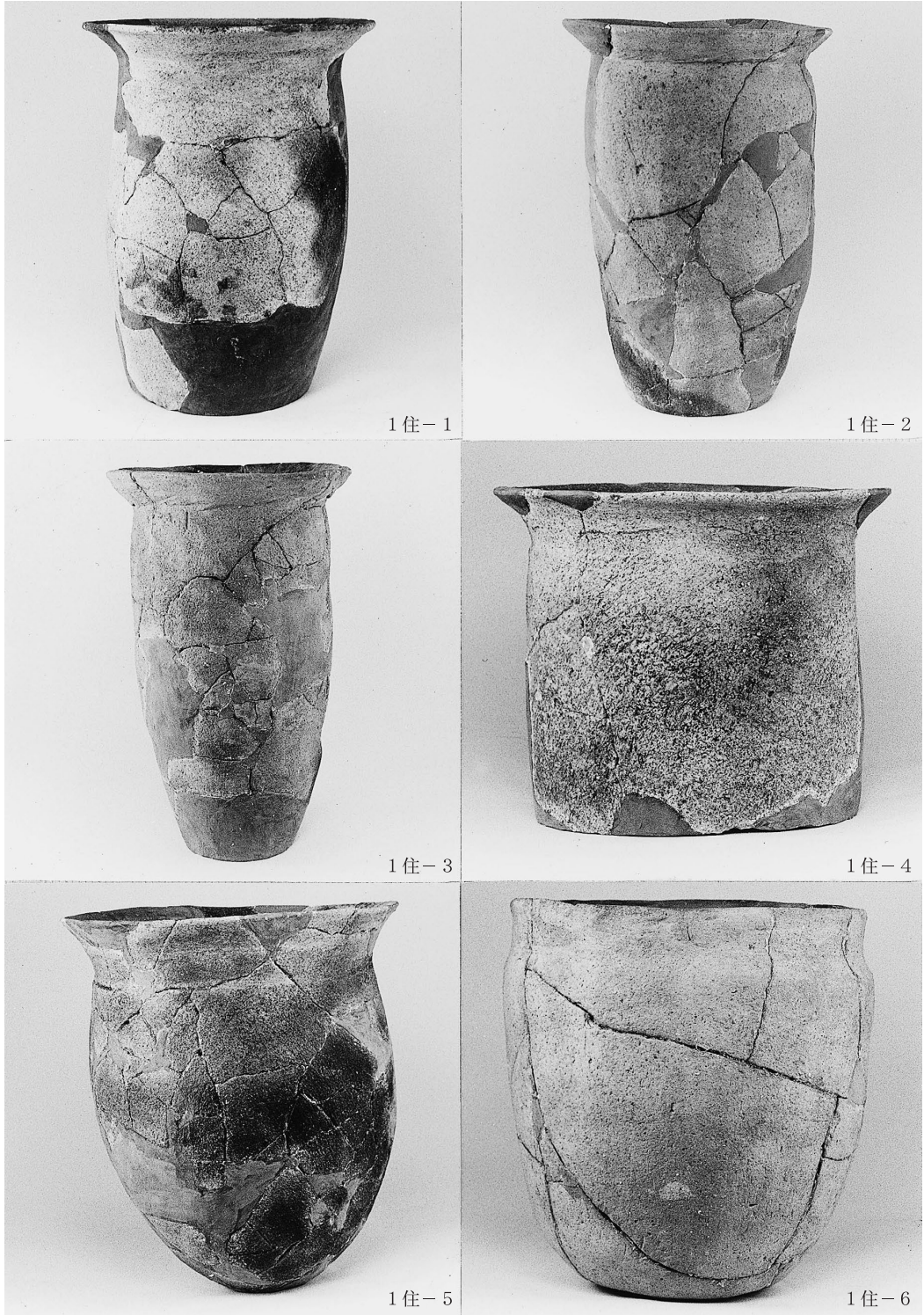
第33号土坑



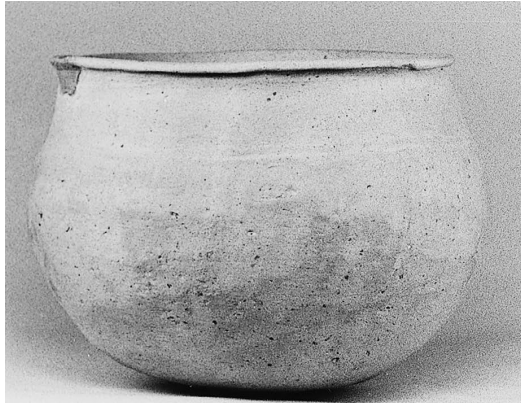
第34号土坑



第35号土坑



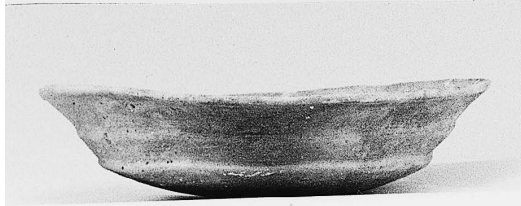
A地点出土遺物（1）



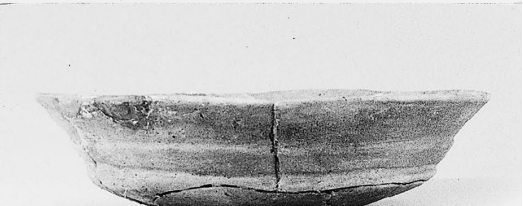
1住-7



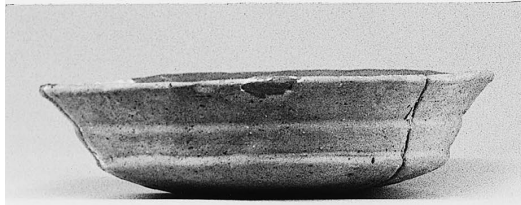
1住-8



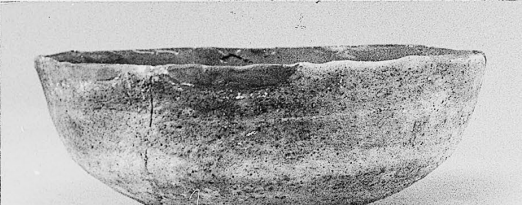
1住-9



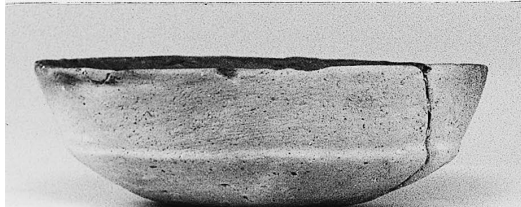
1住-10



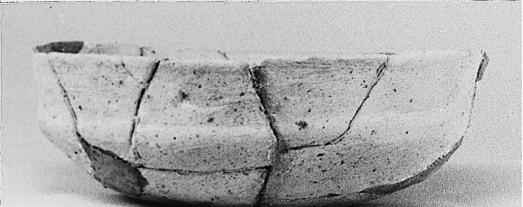
1住-11



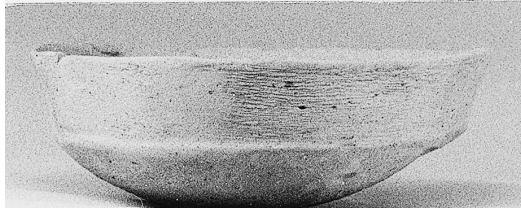
1住-12



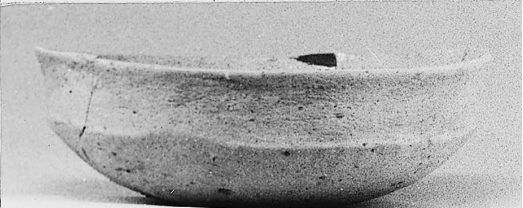
1住-13



1住-14

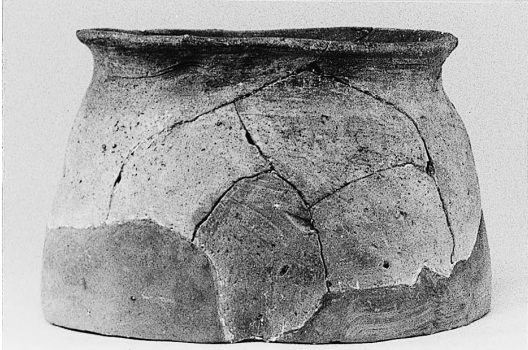


1住-15



1住-16

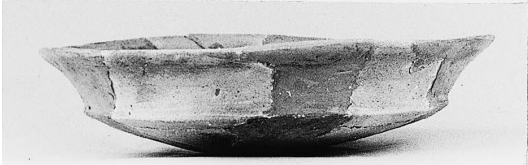
A地点出土遺物(2)



2住-2



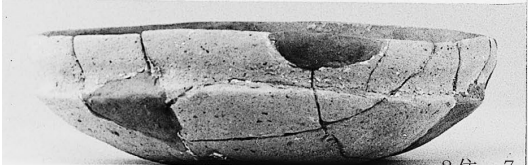
2住-3



2住-5



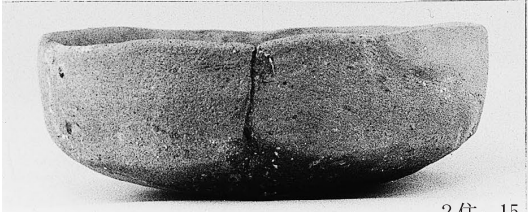
2住-12



2住-7



2住-16



2住-15

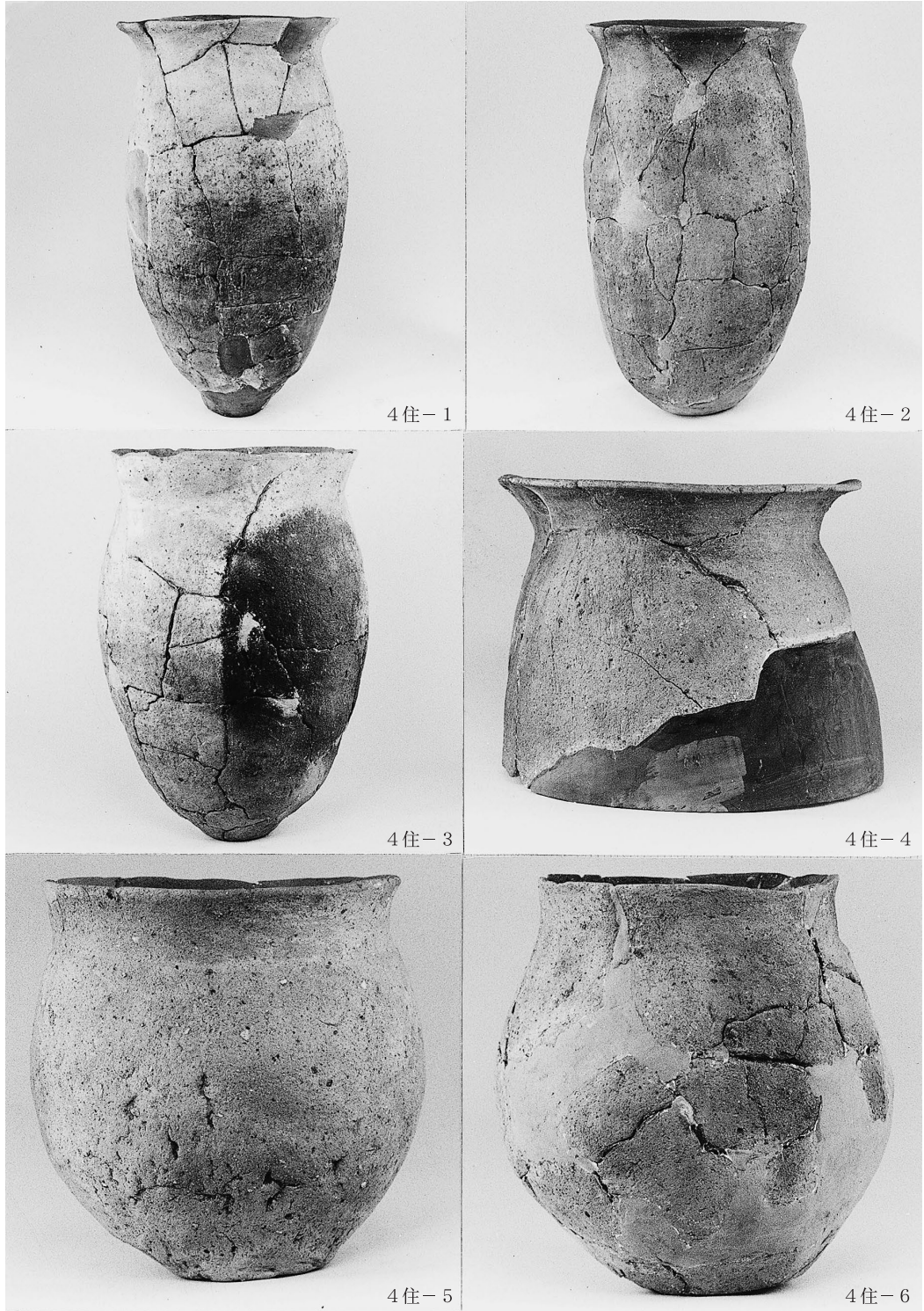


3住-1

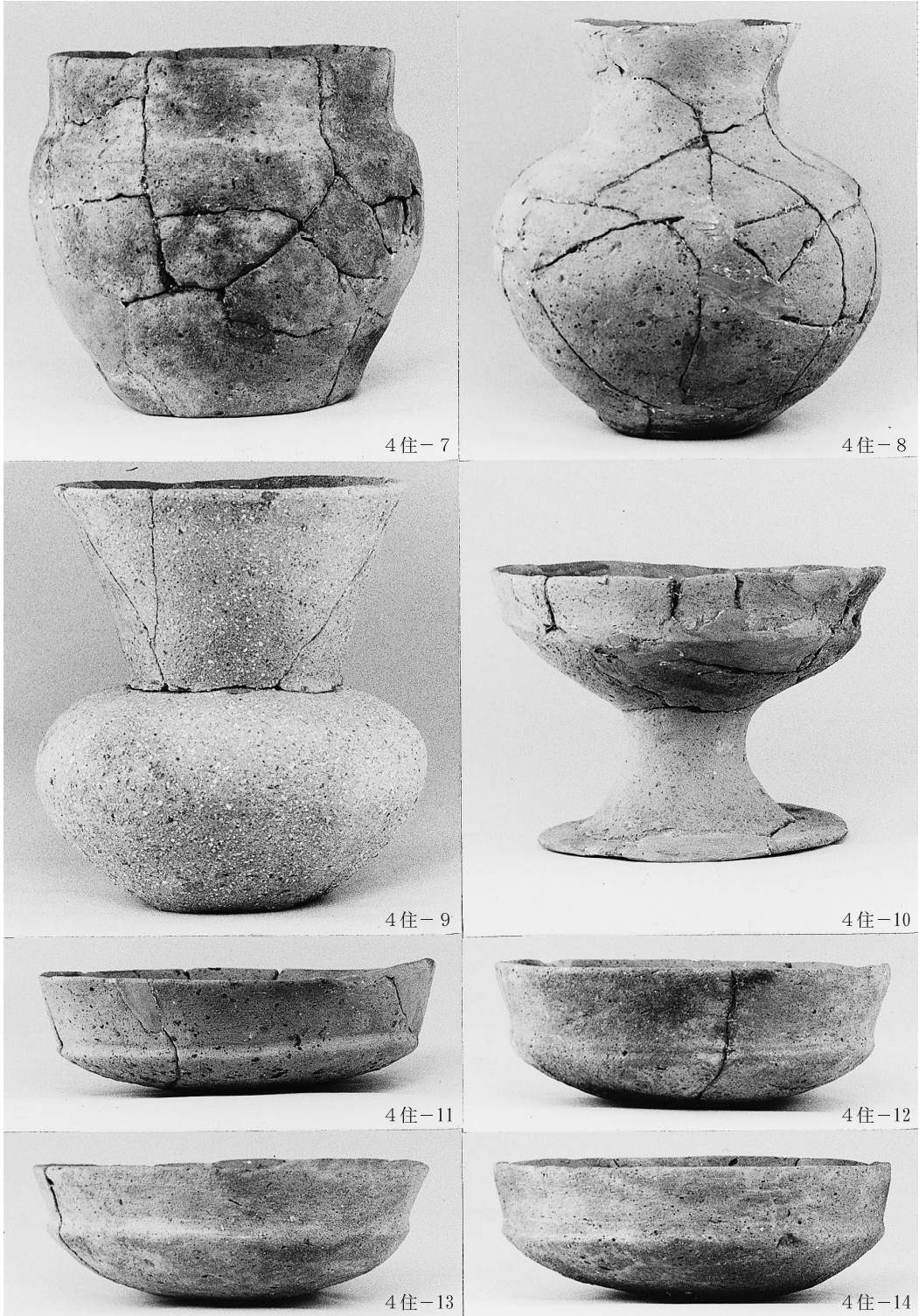


3住-2

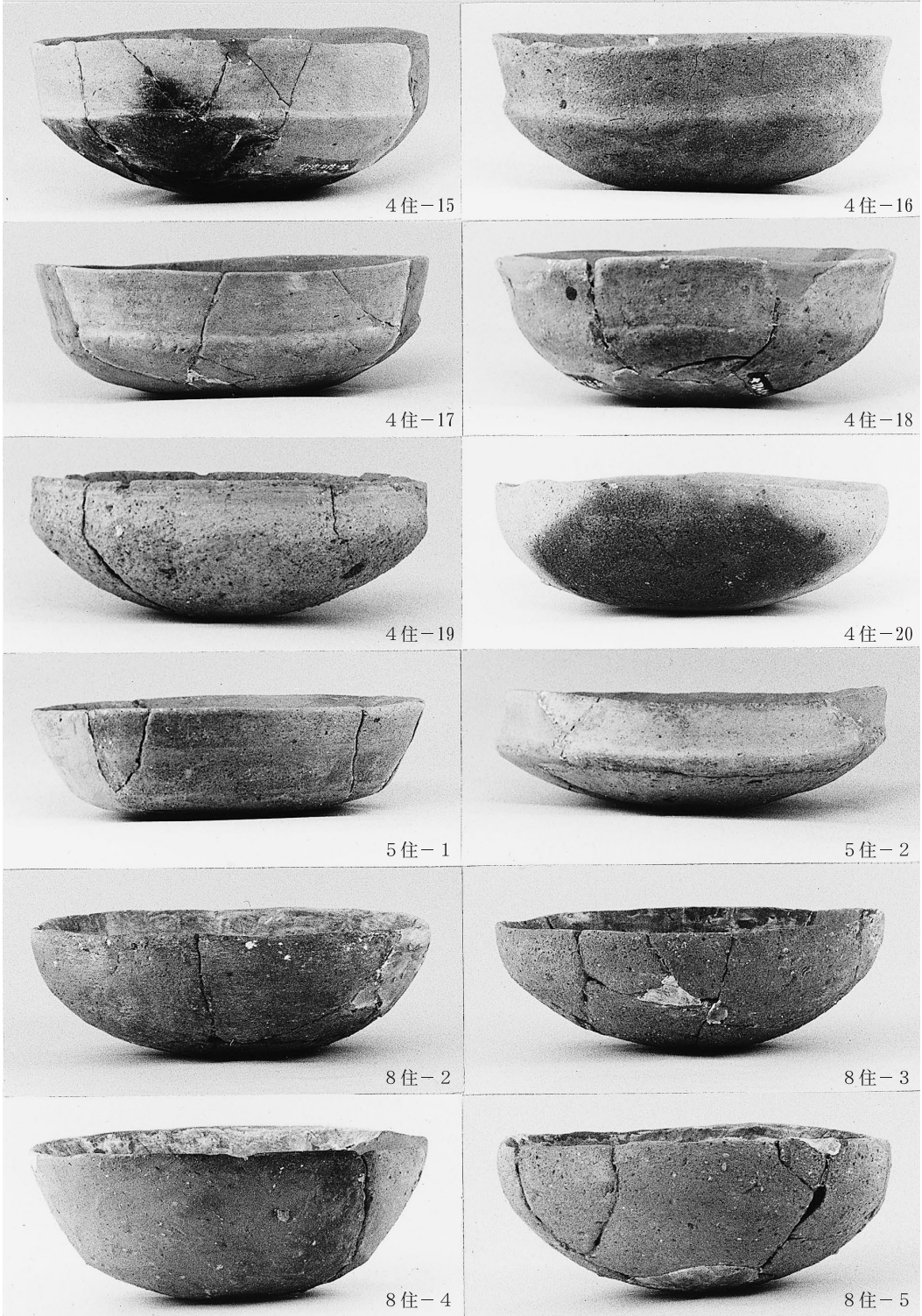




A地点出土遺物（4）



A地点出土遺物 (5)



A地点出土遺物（6）



6 B 住-1



9 住-1



9 住-2



9 住-3



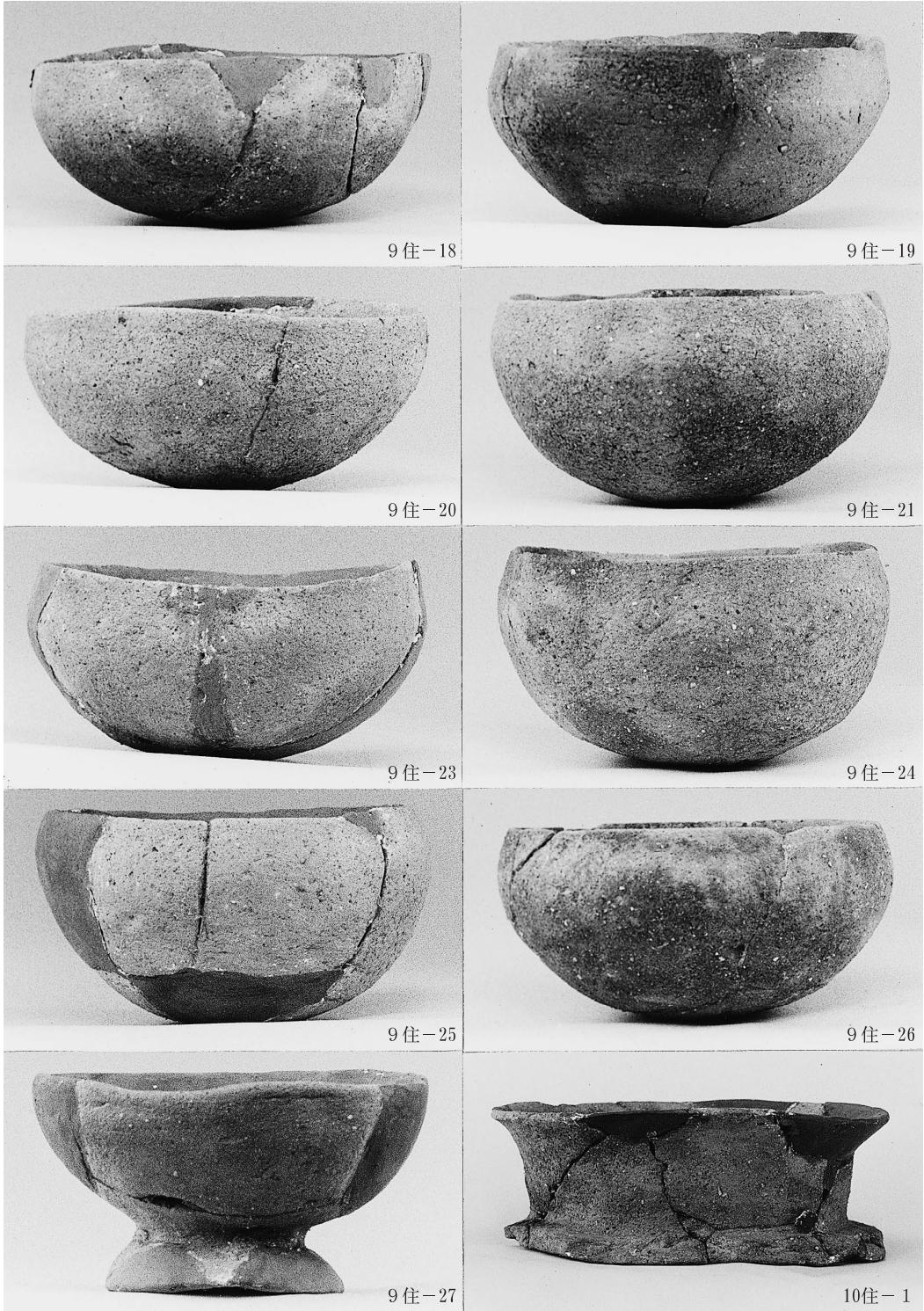
9 住-6



9 住-5



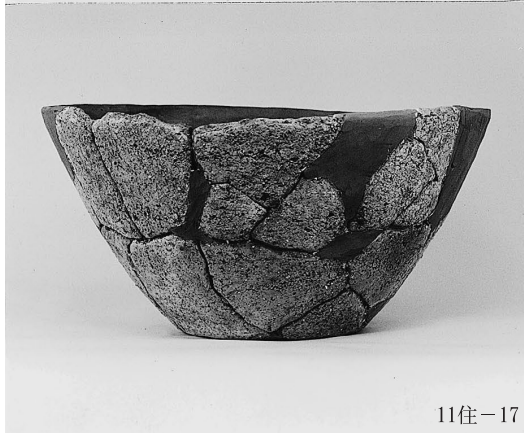
A地点出土遺物（8）



A地点出土遺物（9）



A地点出土遺物 (10)

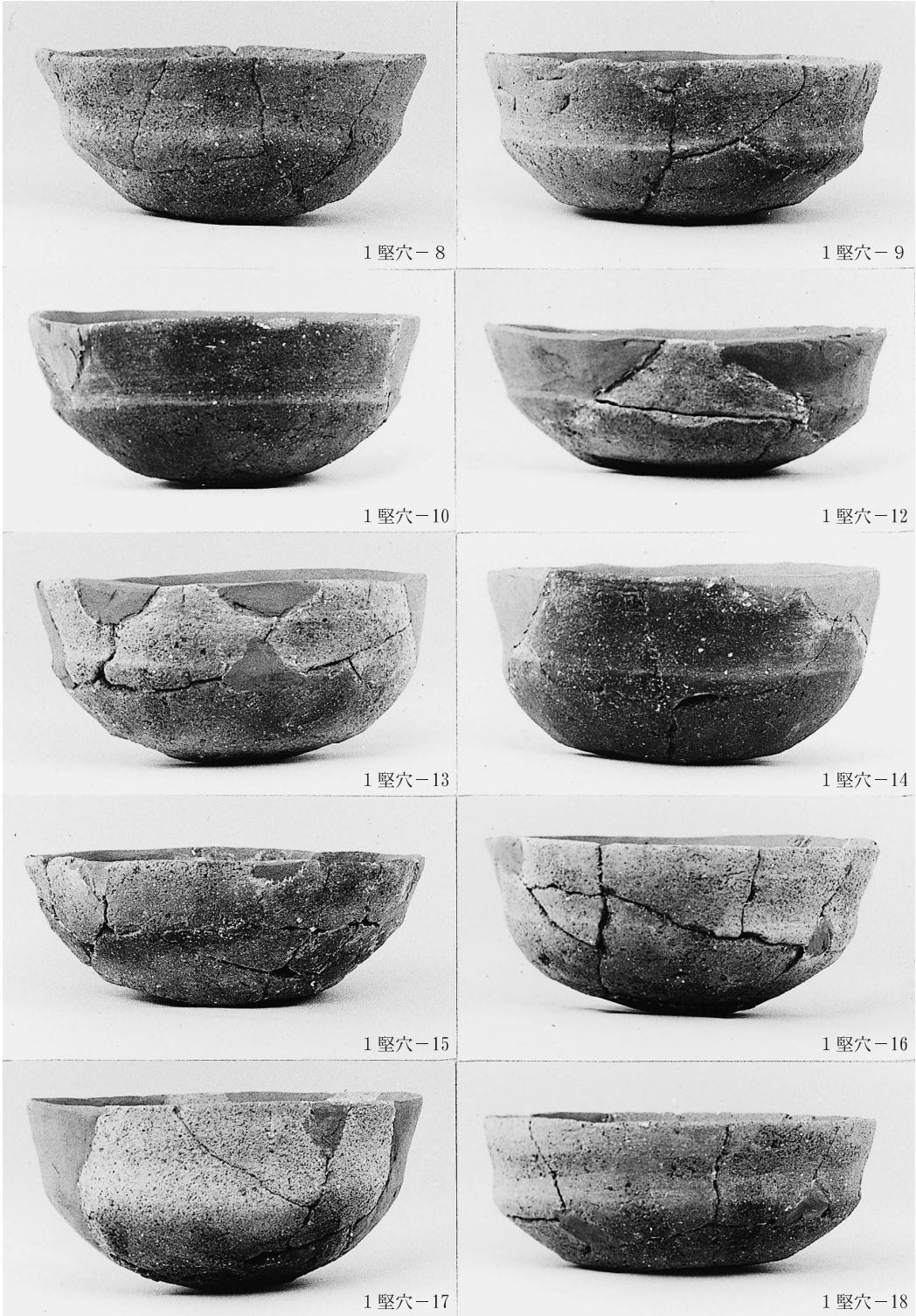


A地点出土遺物 (11)

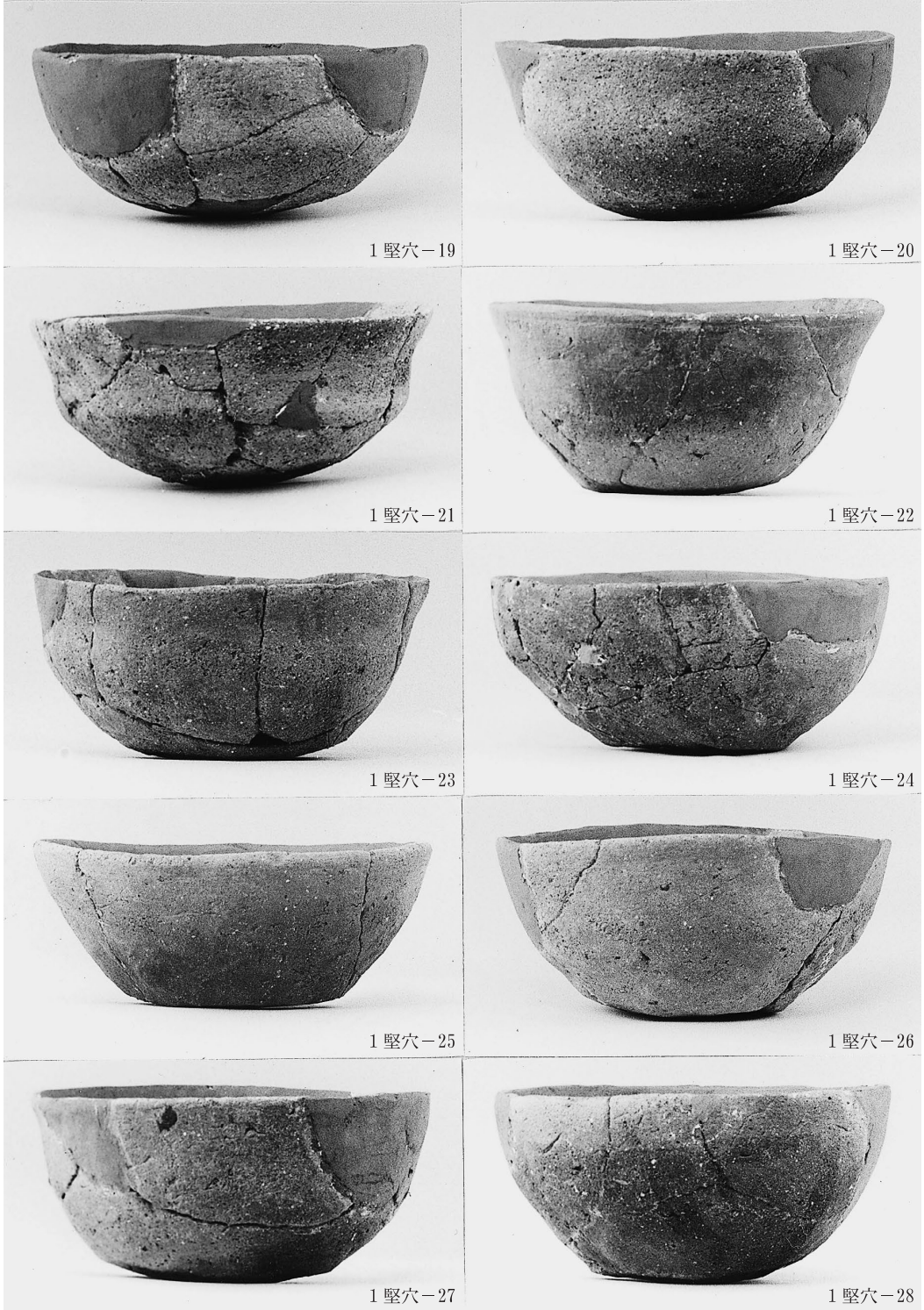




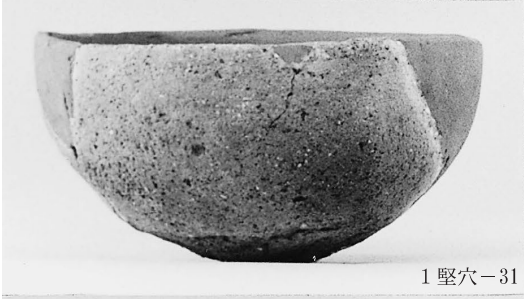
A地点出土遺物 (12)



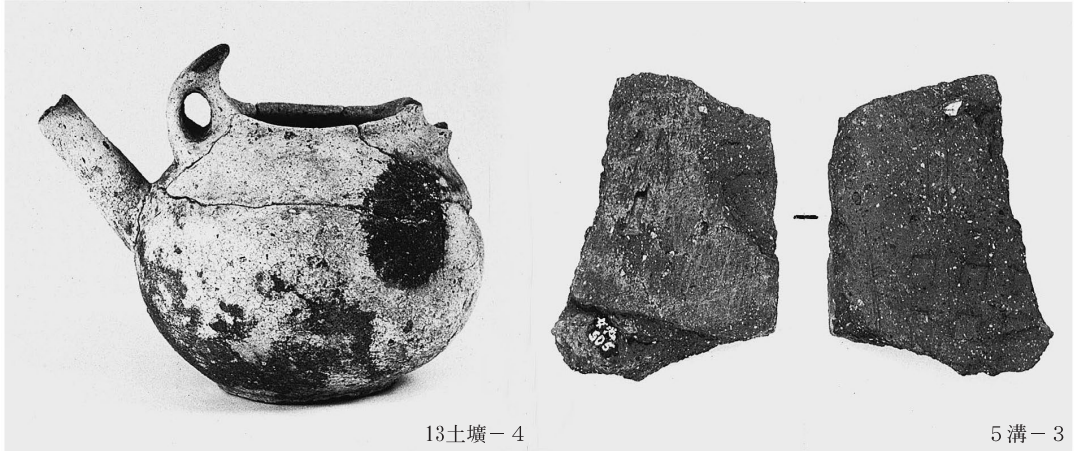
A地点出土遺物 (13)



A地点出土遺物 (14)



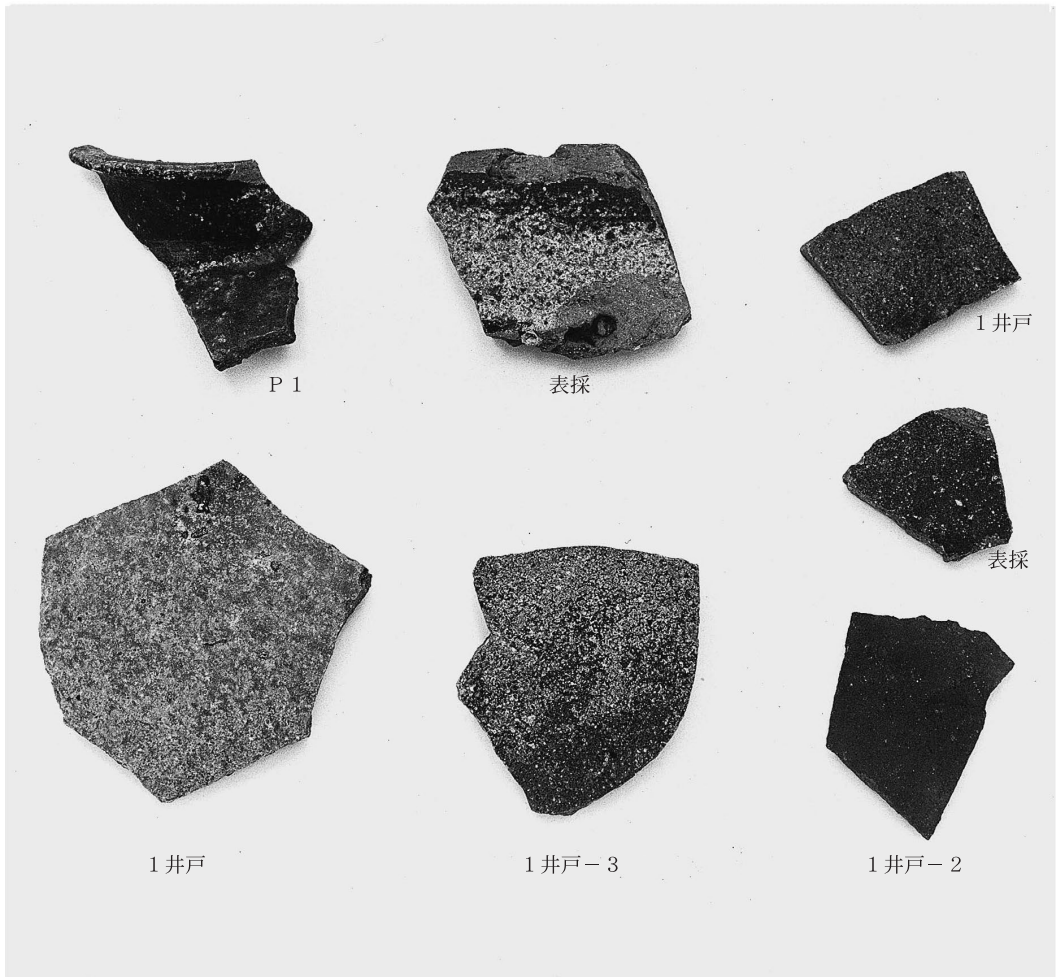
A地点出土遺物 (15)



13土壙-4

5溝-3

A地点出土遺物 (16)



P 1

表採

1井戸

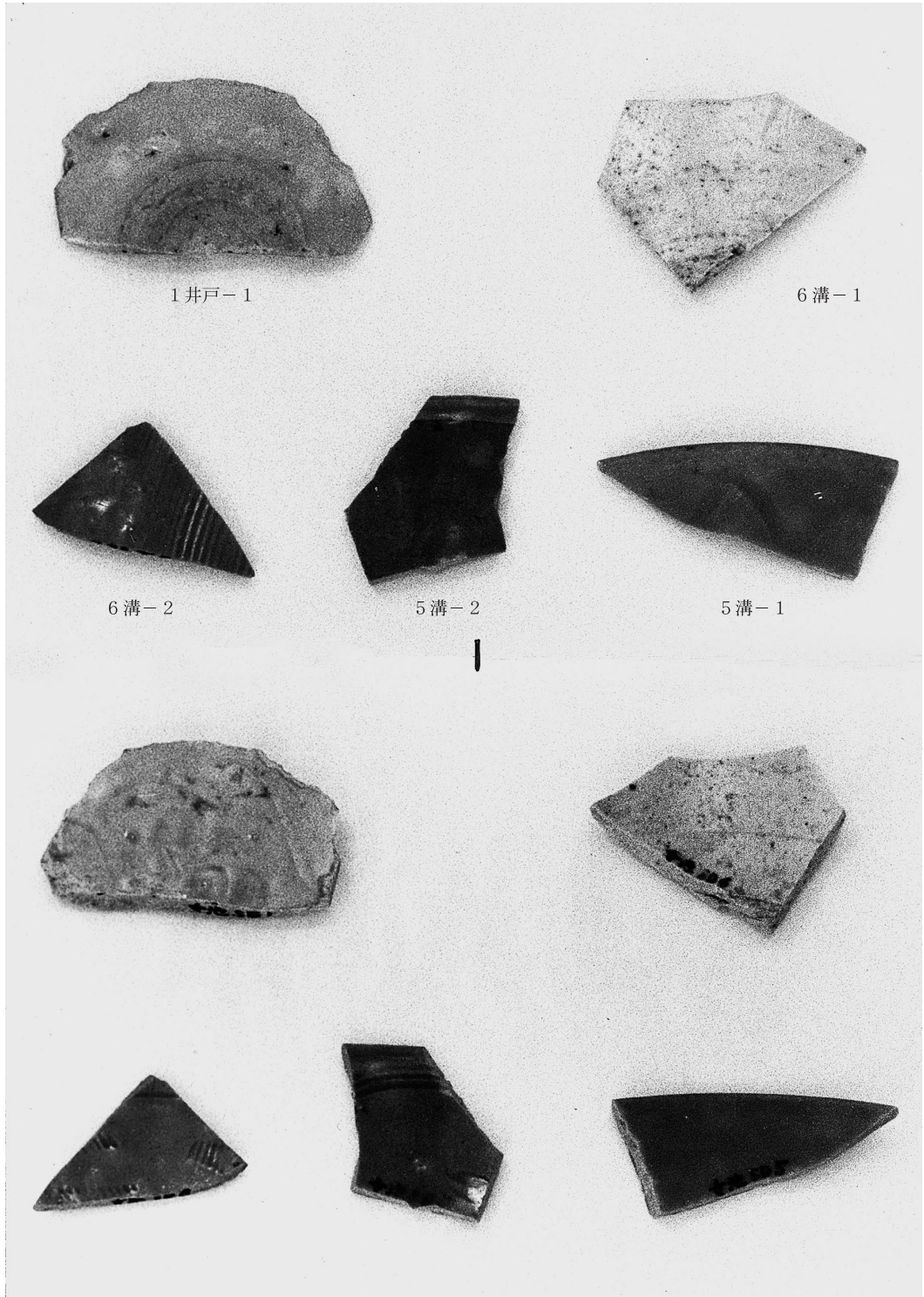
表採

1井戸

1井戸-3

1井戸-2

A地点出土遺物 (常滑窯系製品)



1 井戸-1

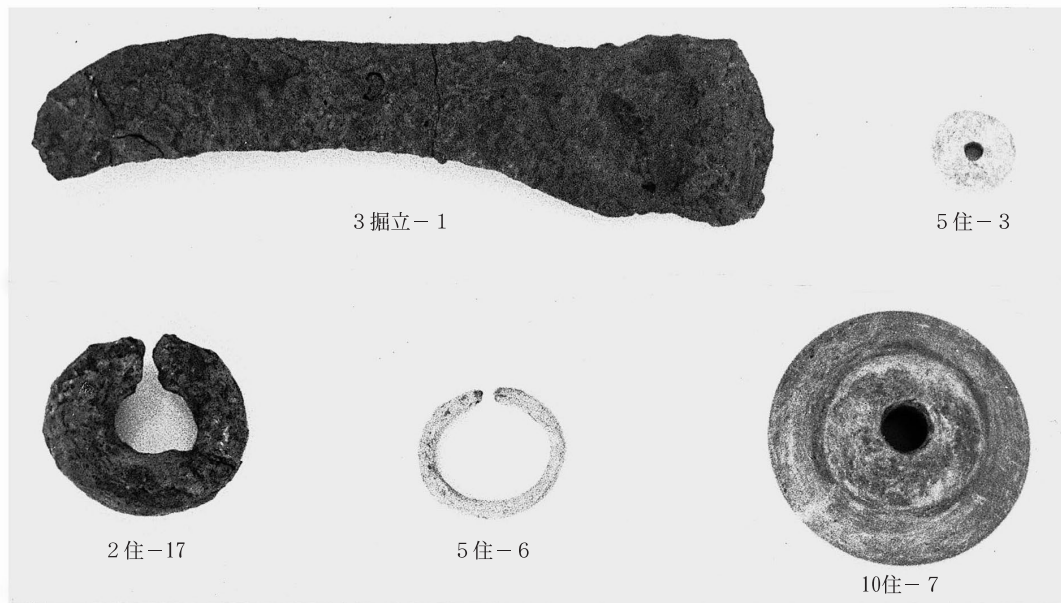
6 溝-1

6 溝-2

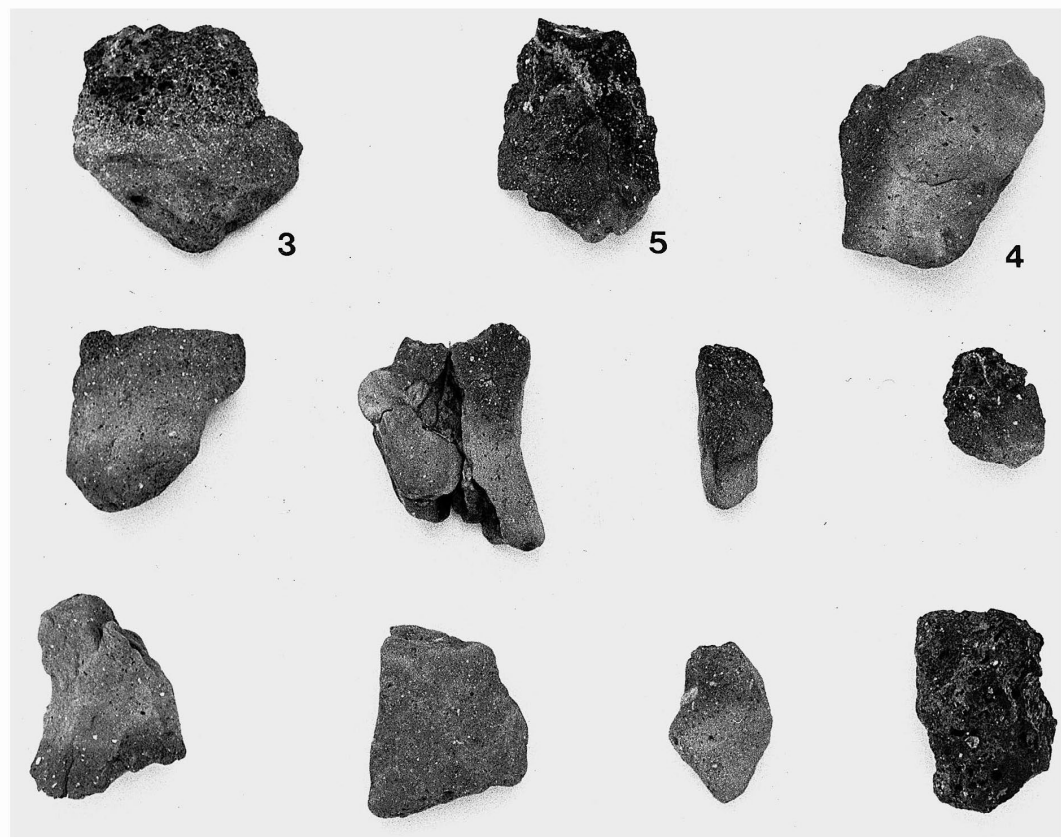
5 溝-2

5 溝-1

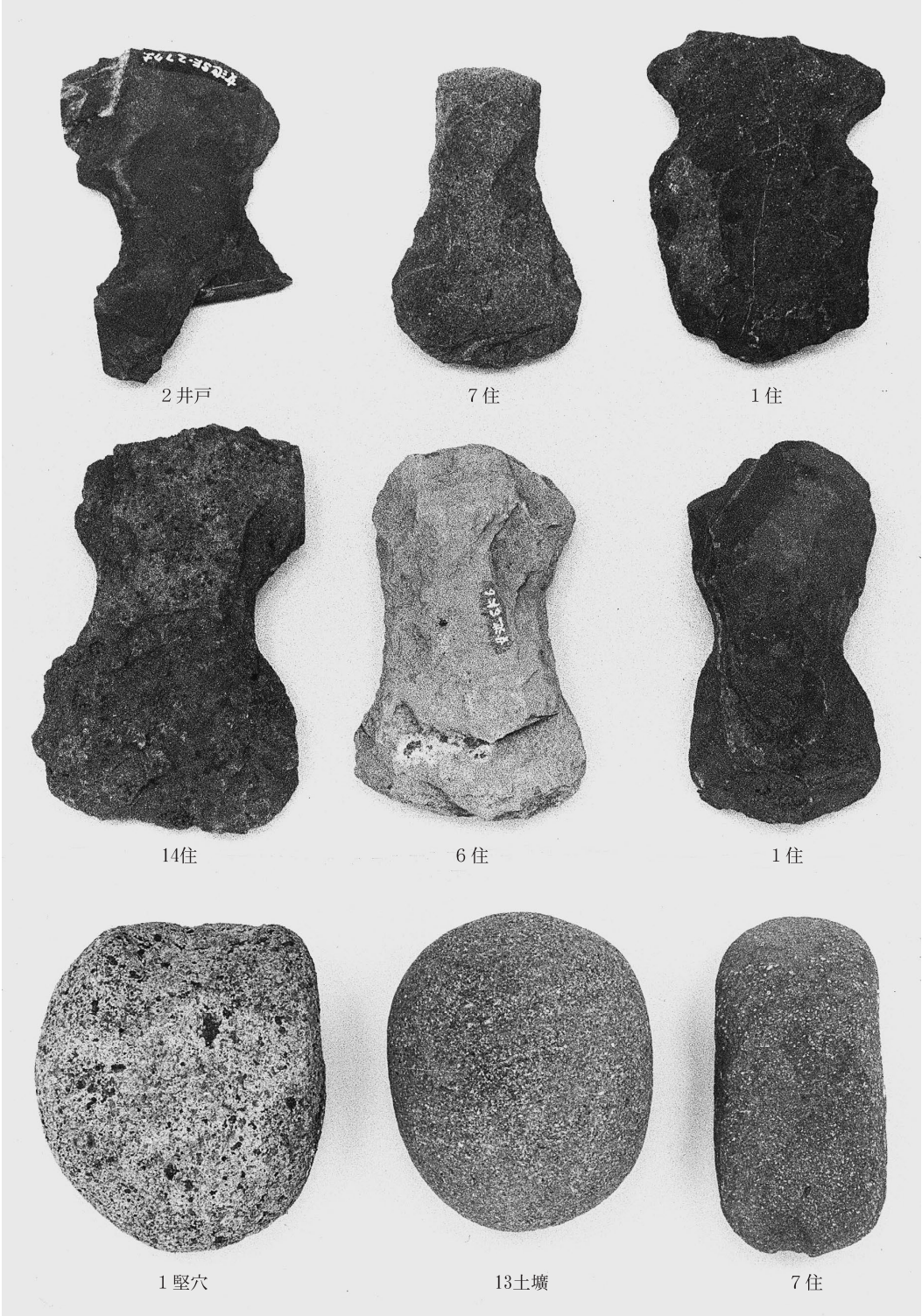
A地点出土遺物（白磁・青磁、上一外面・下一内面）



A地点出土遺物（鉄・石製品）

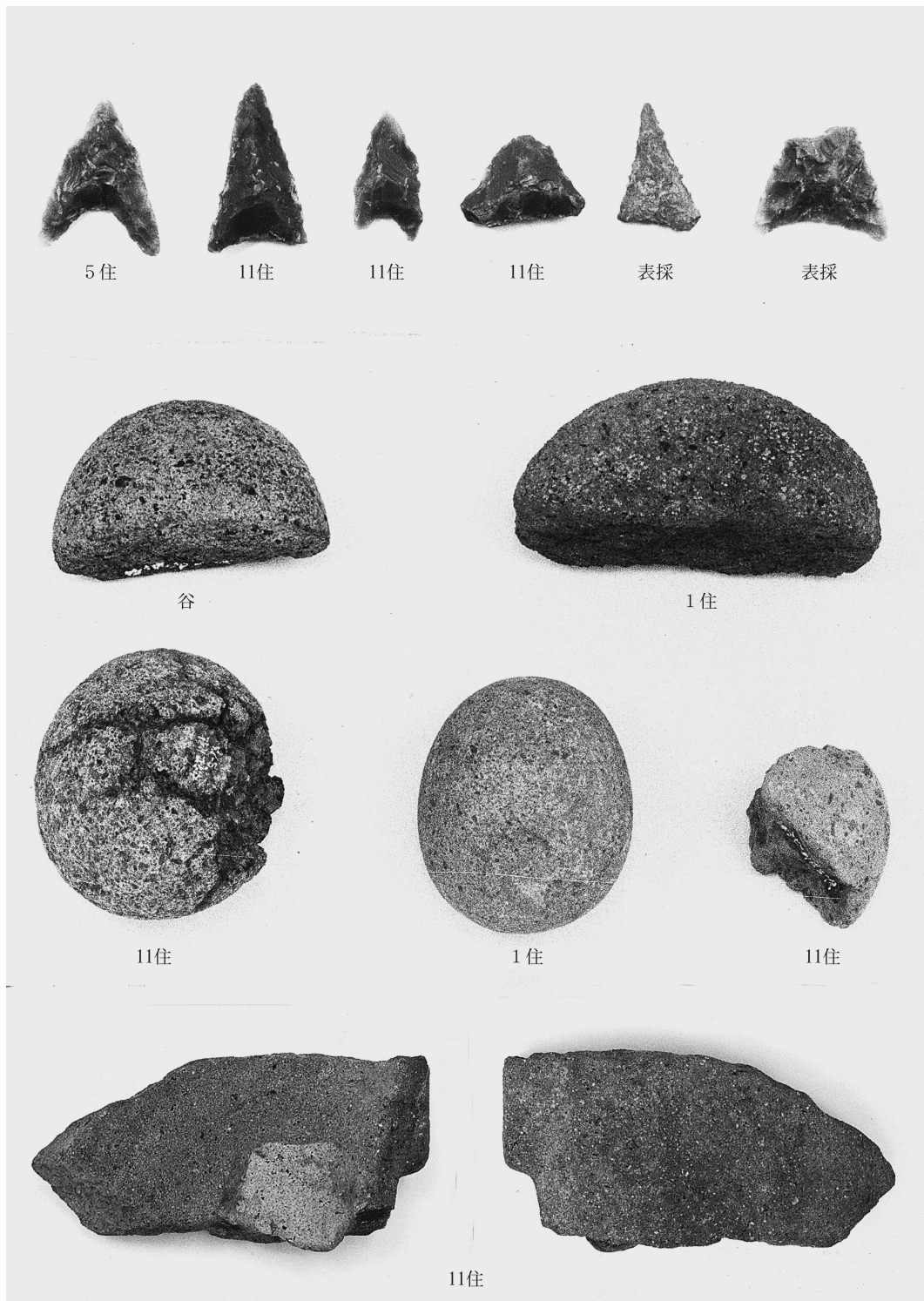


A地点出土遺物（5 住出土羽口・鉄滓）

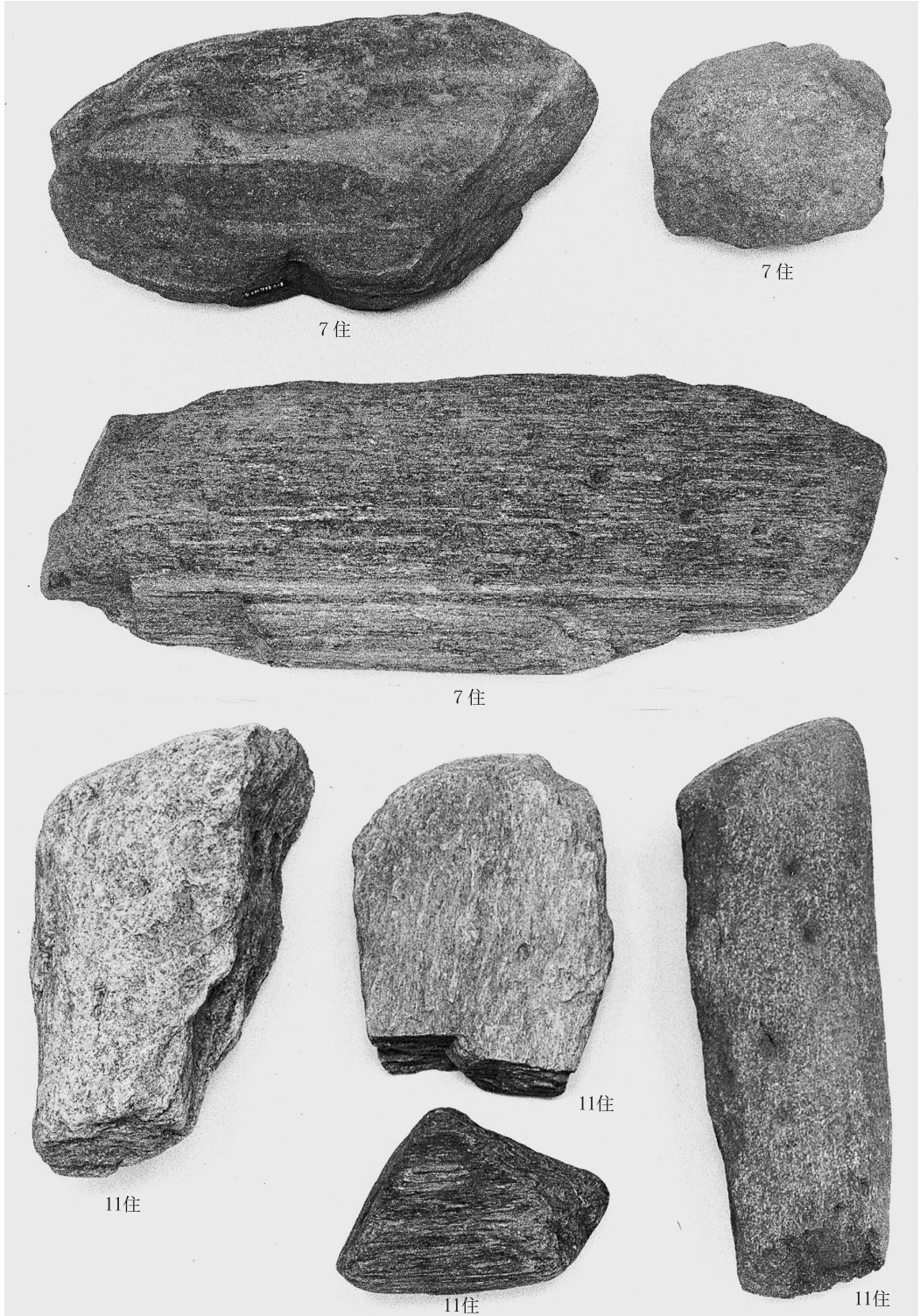


A地点出土石器（石斧・磨石凹石）





A地点出土石器（石鏃・磨石・石皿）



A地点出土石器（凹石）

# 報 告 書 抄 録

フリガナ	メイケイセキⅡ (Aチテンノチョウサ)							
書 名	女池遺跡Ⅱ (A地点の調査)							
シリーズ	児玉町遺跡調査会報告書	巻 次	第 16 集					
編 著 者	恋河内昭彦							
編集機関	児玉町遺跡調査会							
所 在 地	〒367-0298 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地 TEL 0495 (72) 1331							
発 行 日	2004年 (平成16年) 3月31日							
所収遺跡	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺 跡					
女池遺跡 (A地点)	児玉郡児玉町 大字吉田林字 女池97番地1	113824	3 0 5	36°11'41"	139°8'13"	19950612 ? 19950914	1,600	アパート 建 設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
女池遺跡 (A地点)	集落	縄文時代後期	竪穴住居 5、土壇16		土器、石器、筒形土偶		敷石住居 2軒。	
	集落	古墳時代後期	竪穴住居 9、竪穴状遺構 1、窯状遺構 3、土壇 17、溝 1		土師器、須恵器、鉄製品 (鎌・耳環)、鉄滓、石製 品 (白玉・砥石・紡錘車)、 土製品 (支脚・羽口)		長方形の 工房的住 居 2軒。	
	屋敷	中世以降	掘立柱建物 4、井戸 4、 土壇 3、溝11		白磁、青磁、常滑、在地 産土師器皿、平瓦			

## 児玉町遺跡調査会組織

会 長	雉岡 茂	(児玉町教育委員会 教育長)
理 事	田島 三郎	(児玉町文化財保護審議会 委員長)
"	清水 守雄	(児玉町文化財保護審議会 副委員長)
"	間正 明彦	(児玉町文化財保護審議会 委員)
"	荒井 一夫	( " )
"	桜井 豊	( " )
"	杉村 義昭	(児玉町役場 総務課長)
"	出牛 博	( " 総合政策課長)
"	前川 由雄	( " 農林商工課長)
"	鈴木幸比古	( " 土木課長)
"	立花 勲	( " 都市計画課長)
"	清水 満	(児玉町教育委員会 社会教育課長)
幹 事	永尾 清一	( " 社会教育課長補佐)
"	鈴木 徳雄	( " 文化財係長)
"	恋河内昭彦	( " 文化財係主任)
"	徳山 寿樹	( " 文化財係主事)
"	大熊 季広	( " 文化財係主事)
"	松澤 浩一	( " 文化財係主事)

児玉町遺跡調査会報告書 第16集

### 女 池 遺 跡 II

(A地点の調査)

平成16年3月29日 印刷

平成16年3月31日 発行

発行者 児玉町遺跡調査会  
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地

印刷所 たつみ印刷株式会社  
埼玉県深谷市東大沼356番地